

第99図 遺構検出及び遺物出土状況 (81) B・A-35区

代前半のものと思われる焼土遺構18 (SF194), 古代末期～中世初頭のものと思われる溝状遺構11及び溝状遺構12 (SD23) を検出した。土坑の埋土はⅢ層と同じで、掘立柱建物跡の埋土は暗茶褐色の粘質土であり、焼土遺構の埋土はⅢ層とほとんど同じでわずかに炭化物を含むものである。西側には段落ちがあり、これより西側は高柳川の流域となっていたのではないかと考えられる。

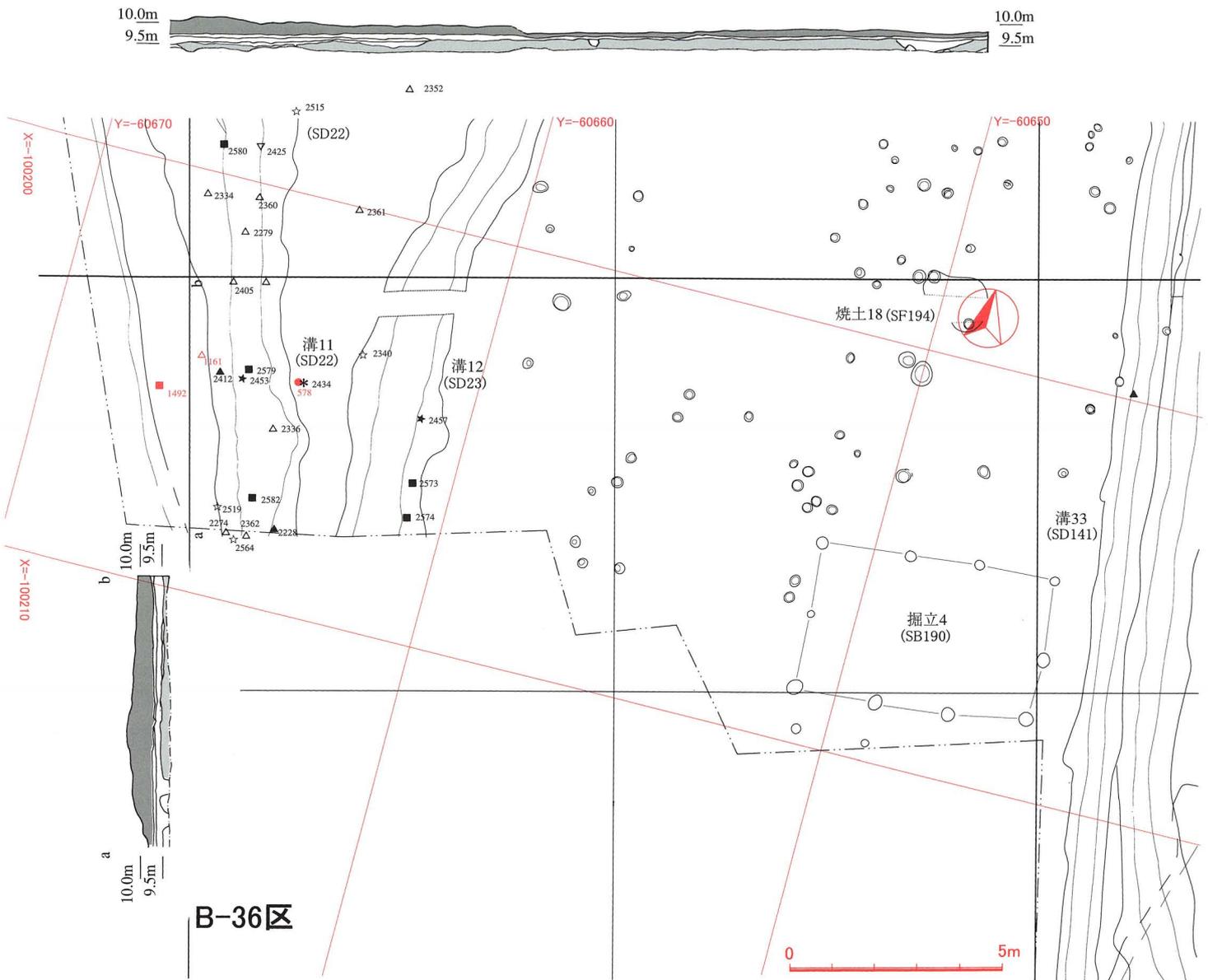
遺物の出土状況は、西側の方が非常に濃密であり、ここから集中して出土している。

#### A-35区

北側壁面・西側壁面のⅢ層上面の標高は、高い所で

9.7m, 低い所で9.5mである。北側壁面の2.8m～4.56mの地点に確認トレンチが入っていたため、この部分の調査はできなかった。この範囲の北側壁面のⅡ層には、古代の耕作土と思われる層が確認され、Ⅱd層とした。

この範囲からは、縄文時代の凹地 (SF193), 古代末から中世初頭のものと思われる四面底の掘立柱建物跡6 (SB189) を1棟検出した。凹地は、Ⅲ層を掘り下げている段階で検出され、8cm程度の焼土塊が検出された。入佐式土器に該当するものであり、この区よりも南側では縄文時代の遺構はみられなくなる。また、掘立柱建物跡6はⅢ層上面で検出された。この周辺には他にもピットが検出されたが、並べることができなかった。溝状遺構は3条並行しながら、公共座標の南北に沿って延びて



第100図 遺構検出及び遺物出土状況 (82) B-36区

いる。波板状凹凸面20 (SR162)・21 (SR163)・22 (SR164) は北東隅にあり、東側の谷に向いている。

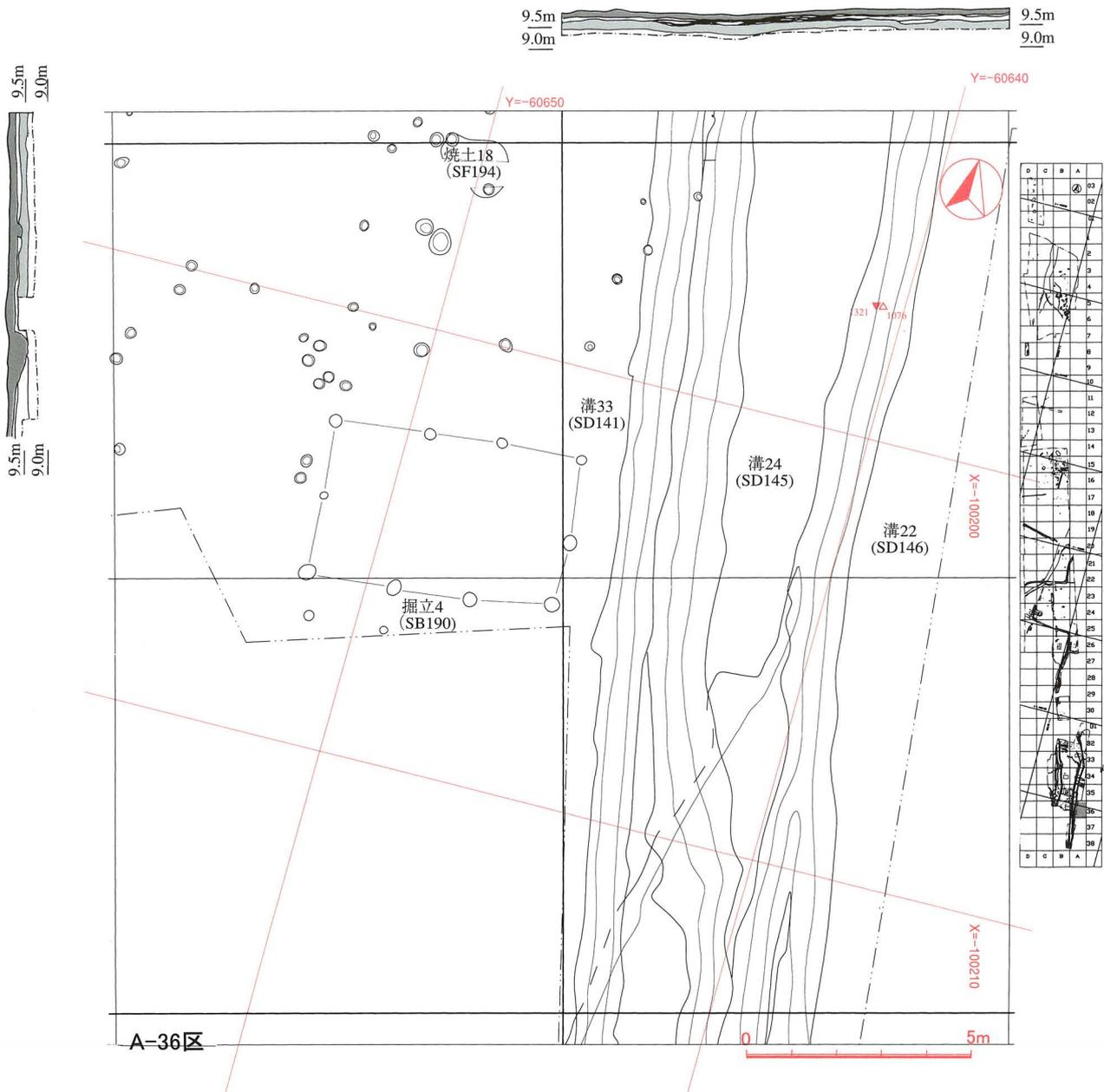
遺物の出土状況はこの範囲の中心部より、南西の方向にかけて出土している。

#### B-36区

北側壁面・西側壁面のⅢ層上面の標高は、高い所で9.68m、低い所で9.27mである。Ⅱ層はその堆積状況から、Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc層と分類した。北側壁面の10.1m～10.4mの地点でⅢ層上面の中に幅30cm、深さ約18cm程度のピットが認められた。北側壁面の17.7m～17.9mの地点の中に幅20cm、厚さ約10cm程

度の炭化物を含む焼土の層が認められた。

西側には溝状遺構11 (SD22)・12 (SD23) があり、中央から東寄りにはピット群がある。建物として認定できたのは、中世初頭のものと思われる掘立柱建物跡4 (SB190) のみである。西側は礫が多くなってきて、溝状遺構も次第にはっきりしなくなる。これより南側へも追跡調査しなかったのであるが、工事用の資材置場になっていたこともあり、断念せざるを得なかった。この区域から土師器や白磁類の出土も多かったため、南側に条里型地割が施行される以前の建物等があったと想定される。しかし、その有無の確認も今となってはかなわず、反省する次第である。なお、縄文時代の



第101図 遺構検出及び遺物出土状況 (83) A-36区

遺物もわずかながら出土している。

遺物の出土状況は、北東の方が濃密であり、ここから集中して出土している。

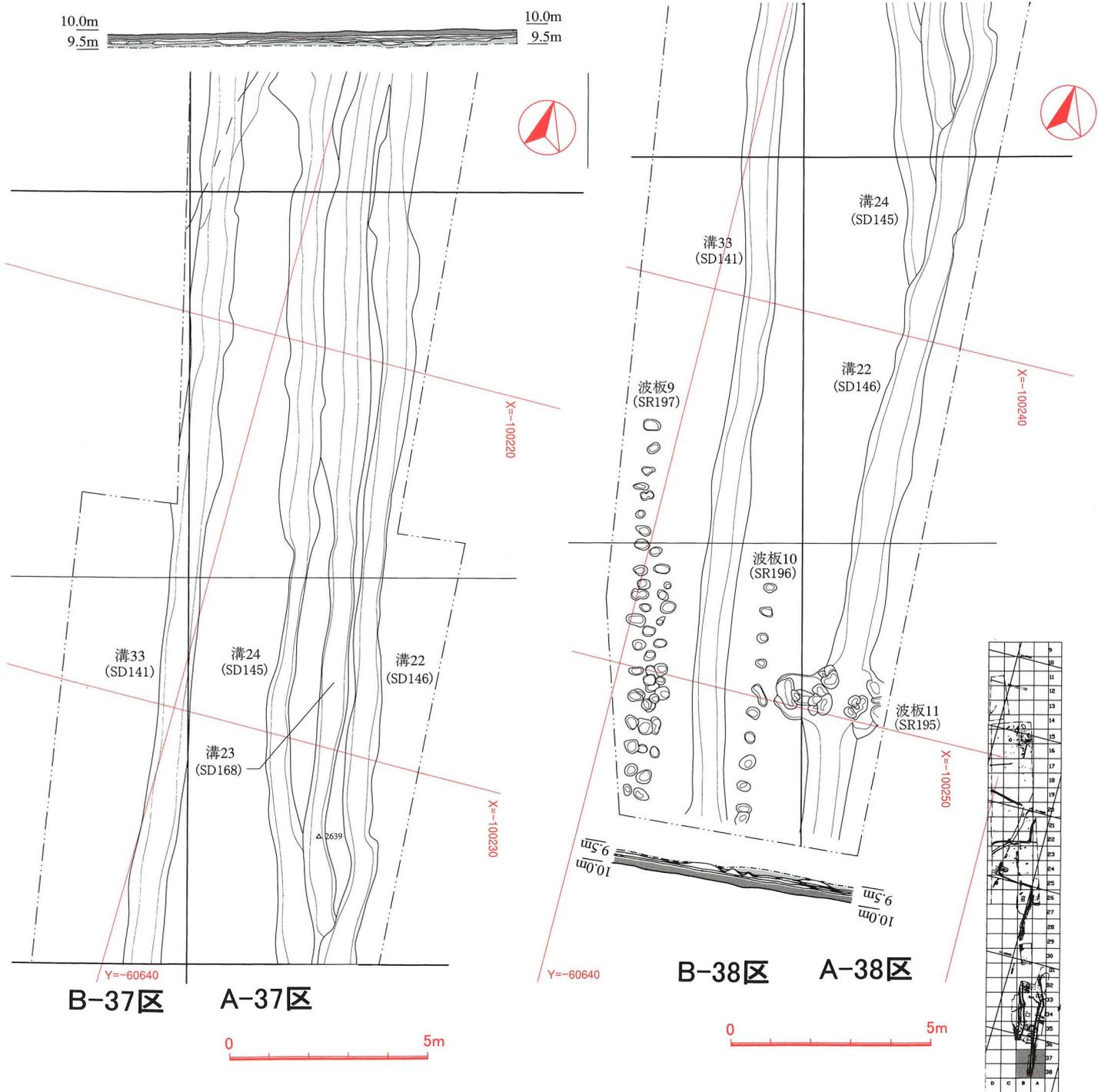
#### A-36区

北側壁面・西側壁面のⅢ層上面の標高は、高い所で9.7m、低い所で9.56mである。確認調査の結果、示された調査範囲の南限はこの区の中ほどまでであった。調査時点で人家が残っていた場所で区切っていたが、溝状遺構が南側へ延びていくので、協議の上人家が立ちのいた後調査した。南側で溝状遺構22(SD146)と溝状遺構24(SD145)は複雑に分岐しているのでもし当初の範囲で調査を打ち切っていたら溝状遺構同士の関係はつかめないところだった。この部分で東側へ下がった段落ちが認められたが、

溝状遺構との関係や性格は把握できなかった。Ⅱ層の中に古代の耕作土と思われる層があり、Ⅱd層とした。中世のものと思われる溝状遺構23(SD168)を検出した。遺物の出土状況は、中心より西側から出土しており、東側からは出土していない。

#### A・B-37区

4条の溝状遺構が同一方向に延びている。公共座標に沿った方向であり、JR鹿兒島本線(肥薩おれんじ鉄道)にも沿っている。溝状遺構22(SD146)はこの区域で溝状遺構23(SD168)・24(SD145)に分岐している。北側断面図で確認すると、溝状遺構22が最も深く、溝状遺構23、溝状遺構24がこれに次ぐ。同じ条件での溝状遺構の深さは使用頻度を示していると考えられ、深いほど永く使われたと想定される。



第102図 遺構検出及び遺物出土状況 (84) A・B-37・38区

溝状遺構33 (SD141) は溝状遺構24よりも新しいという点については層位から明らかであるが、深さは溝状遺構33の方が深い。この点については、溝状遺構24は使用中で廃絶され、溝状遺構33に取って代わられたと考えられる。

**A・B-38区**

今回の調査範囲で最も南側に位置するグリッドである。南側壁面の標高は、高い所で9.68m、低い所で9.64mである。溝状遺構33 (SD141)・22 (SD146)

及び波板状凹凸面9 (SR197)・10 (SR196) はさらに南側へ延びていくのであるが、それ以上の追究はかなわなかった。波板状凹凸面が南側へ続きそうなことから、こちら側の方が低くなってジメジメしていたのではないかと考えられる。溝状遺構22はこの区の北側で溝状遺構24へ分岐している。

この範囲からは、中世のものと思われる波板状凹凸面11 (SR195) を検出した。遺物は数点出土した。縄文時代の遺構・遺物は全く確認されなかった。

## 第IV章 発掘調査の成果

### 第1節 縄文時代の成果

#### 1. 縄文時代の検出遺構

##### (1) 埋設土器

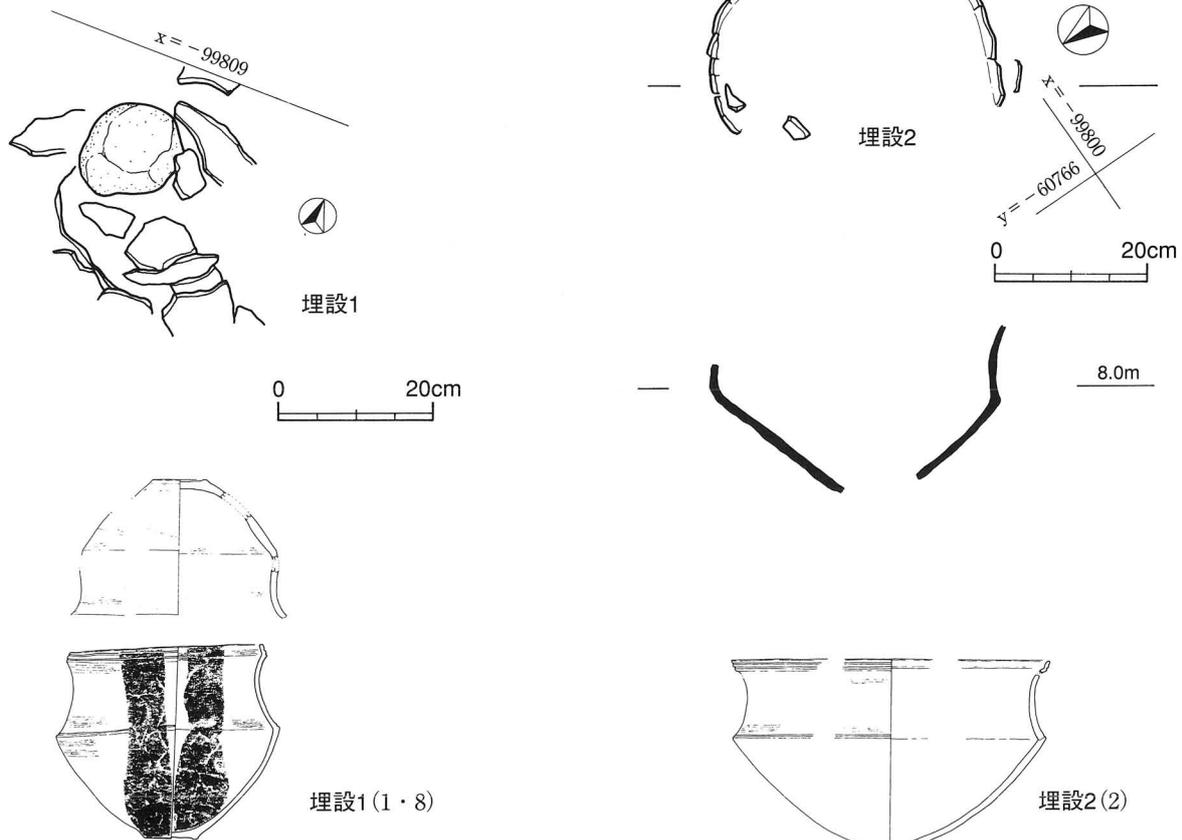
**埋設土器1** (SJ124. 1・8) : B-15区の東側壁面で検出した。検出した時点では、全体の形状がわからず、平面形だけ図化して断面図は作成しなかった。上蓋が存在することも室内整理において初めてわかった。埋設土器はほぼ正位に埋設されていた。ちょうど中位に拳大の礫がみられるが、内部に崩れた頸部付近よりも上についているので、蓋を被せた後置かれた礫であると考えられる。

下部の土器(1)は、頸部以上が削平されていたものの、内側に落ち込んでいた口縁部他の接合から、全形を復元することができた。口径24.5cm、器高25.8cm、底径6.6cmを測る。最大径は胴部にあり29cmである。胴部最大径で「く」の字状に強く屈曲し、この部分に1条の凹線を巡らす。頸部は大きく外反しながら立ち上がり、口縁部で再び「く」の字状に屈曲する。口縁部文様帯には2条の凹線を巡らす。口唇部は平に面取りしてある。胴部下半は丸く内湾しながら、すぼまる底部へ至る。底部は上げ底であり、穿孔等はみられなかった。胴部に凹線を巡らすことから、本遺跡出土土器の上加世田式土器の

中でも、最も古い部類に位置付けられる。

上蓋となる土器(8)は、復元を試みたのであるが、直に接合できる部分が少なく、図上での復元であるため多少無理があるかもしれない。底径は6.8cmを測り、上げ底である。胴部下半は大きく開き、中央付近で弱く屈曲する。胴部上半は内傾気味に立ち上がり、口縁部付近で大きく外反している。器面調整はミガキによるものである。上加世田式土器に該当する。

**埋設土器2** (SJ119. 2) : B-15区のⅢ層で検出された。底部は欠損していたものの、ほぼ正位に埋設されていた。検出時点では肩部以上はすでに削平された状態であったが、接合した結果、口縁部付近まで復元することができた。口縁部は確実に接合できる部分はなかったもので、図上復元によるものである。底部は故意に欠いており、底部付近から胴部最大径までは内湾しながら開く。胴部最大径で強く屈曲し、1条の凹線を巡らす。頸部は大きく外反しながら立ち上がり、口縁部は屈曲して外側に広がる。外側に2条の凹線を巡らす。低い頂部もみられ、中央に切れ目を入れてある。器面調整はミガキによるものであり、器壁は比較的薄い。



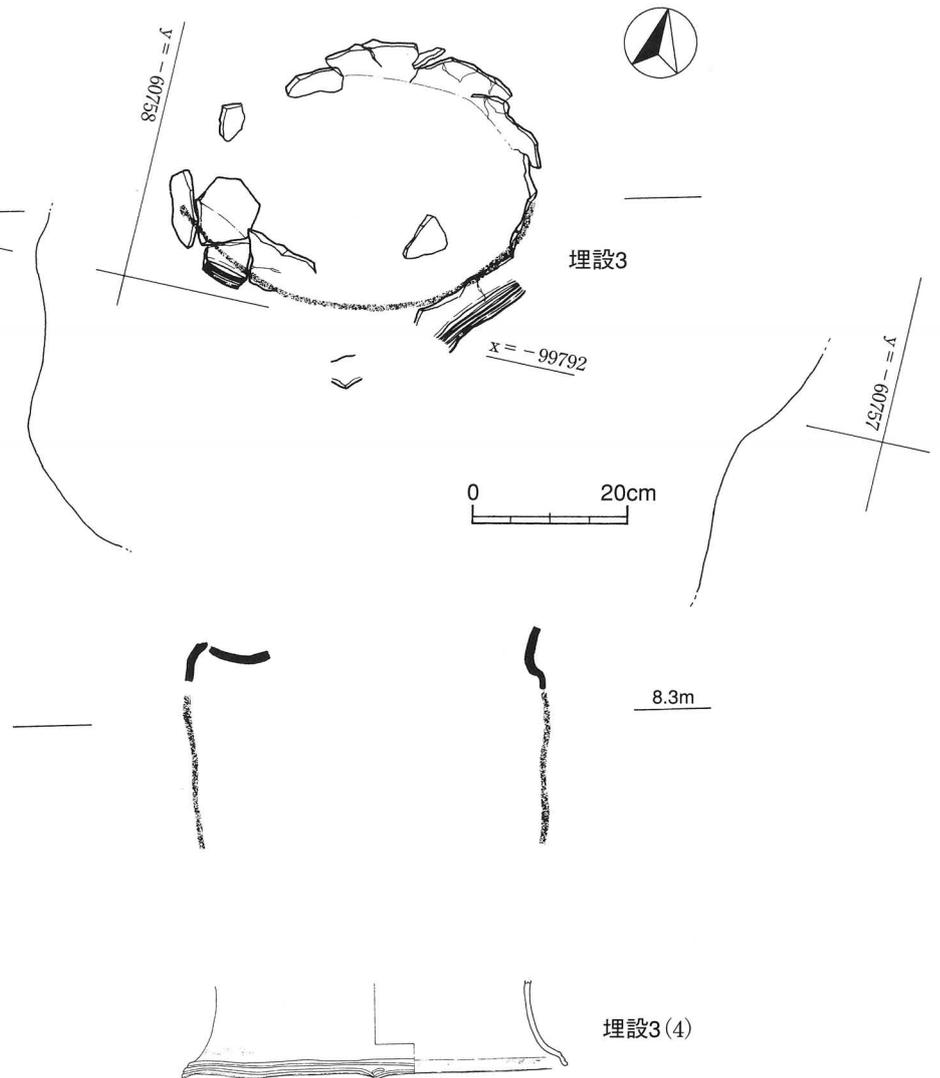
第103図 埋設土器検出状況(1) 埋設土器1(SJ124)・2(SJ119)

深鉢形土器と浅鉢形土器の中間的な器形であり、上加世田式土器の古い段階に位置付けられると考えられる。

**埋設土器 3 (SJ79. 4) :** B-14区のⅢ層上面で検出された。口縁部を下向きにしているが、ほぼ水平に埋設されている。頸部の途中で削平されているため、当初から完形の鉢形土器を被せてあったかどうかは不明である。下部から土器は検出されなかったが、半截した時点で水平方向にスライス状に掘り下げていくと、平面形が円形の痕跡が見えてきた。何らかの有機質の容器があったものと考えられる。輪郭がはっきりしたのはこの部分のみであり、断面等で底の部分までは明らかにできなかった。内部の埋土は外側のV層よりもわずかに暗く、辛うじて灰色の筋で確認することができた。深く掘り下げた時点で土器よりも外側に土質の変った部分もみられたが、断面では土質の違いはわからなかった。掘り方のラインとは考えられず、どのような影響によるものかはわからない。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

上部の土器は復元口径49.5cmの大型の鉢形土器である。頸部から下しか検出されず、器高は不明であり、深鉢になるのか中鉢になるのかもわからない。頸部は大きく外反し、屈曲して外開き気味に立ち上がり、口縁部へ至る。口縁部文様帯には2条の凹線を巡らす。おそらく頂部が4か所あったと考えられ、この部分には、短い弧状の凹線を加えている。器面調整は内外面ともミガキである。以上のような特徴から、上加世田式土器の範疇に含まれるものと考えられる。

**埋設土器 4 (SJ38. 6) :** C-15区から検出されたもので、Ⅲ層の途中で口縁部を確認することができた。口縁部は全体的に南側へずれており、土器内部にも落ち込んでいたことから、当時は土が充填されていたものではないことがわかる。掘り込み面および断面のラインは確認できなかった。口径30cm、器高33cmで、胴部屈曲部はほぼ中位に位置する。頸部は緩く外反しながら



第104図 埋設土器検出状況(2) 埋設土器3(SJ79)

立ち上がり、屈曲してやや内傾気味の口縁部をもつ。ほぼ正位に置かれている。口縁部は幅が狭く、2条の凹線が巡るタイプのものである。凹線の幅は0.1cmである。胴下半部はストレート気味に平底の底部へ至る。器面調整は胴部最大径の上下でしか確認することができなかったが、ミガキによるものである。以上のような特徴から、上加世田式土器に該当する。

**埋設土器 5 (SJ115. 7・386) :** C-16区Ⅲ層で頸部付近を検出した。ほぼ正位に埋設されていた。検出した時点で、ほとんどは後世の攪乱のため削平されていたが、接合してみると全形がわかるほど復元することができた。上蓋となった浅鉢形土器(386)は、口径30.8cm、器高10.2cmを測る。底部の断面形は半径18.2cm程度の円周になるような丸底であり、肩部で稜が残るほど強く内側に屈曲する。頸部は大きく外反しながら口縁部に至る。その上に端部を丸くおさめる口唇部をもう一段外開きのせることによって、内外面に1条ずつの凹線が入って

いるように見える。口唇部の1か所を内側に押し出すことによってアクセントをつけている。

下部の土器は浅鉢形土器と深鉢形土器の中間的な形態である。口径35cm、底径8.8cm、器高は18.2cmを測る。薄手で上げ底の底部は3mmほどの立ち上がりをもち、内側へ湾曲しながら開く胴下半部に至る。胴部中央付近で「く」の字に屈曲し、外反気味に立ち上がって頸部は大きく開く。さらに1.5cmほどの口縁部を外傾させ、口唇部を丸くおさめる。口縁部の接合点の内外面は、凹線が巡っているように見える。器面調整は内外面ともミガキによるものである。上加世田式土器に該当する。

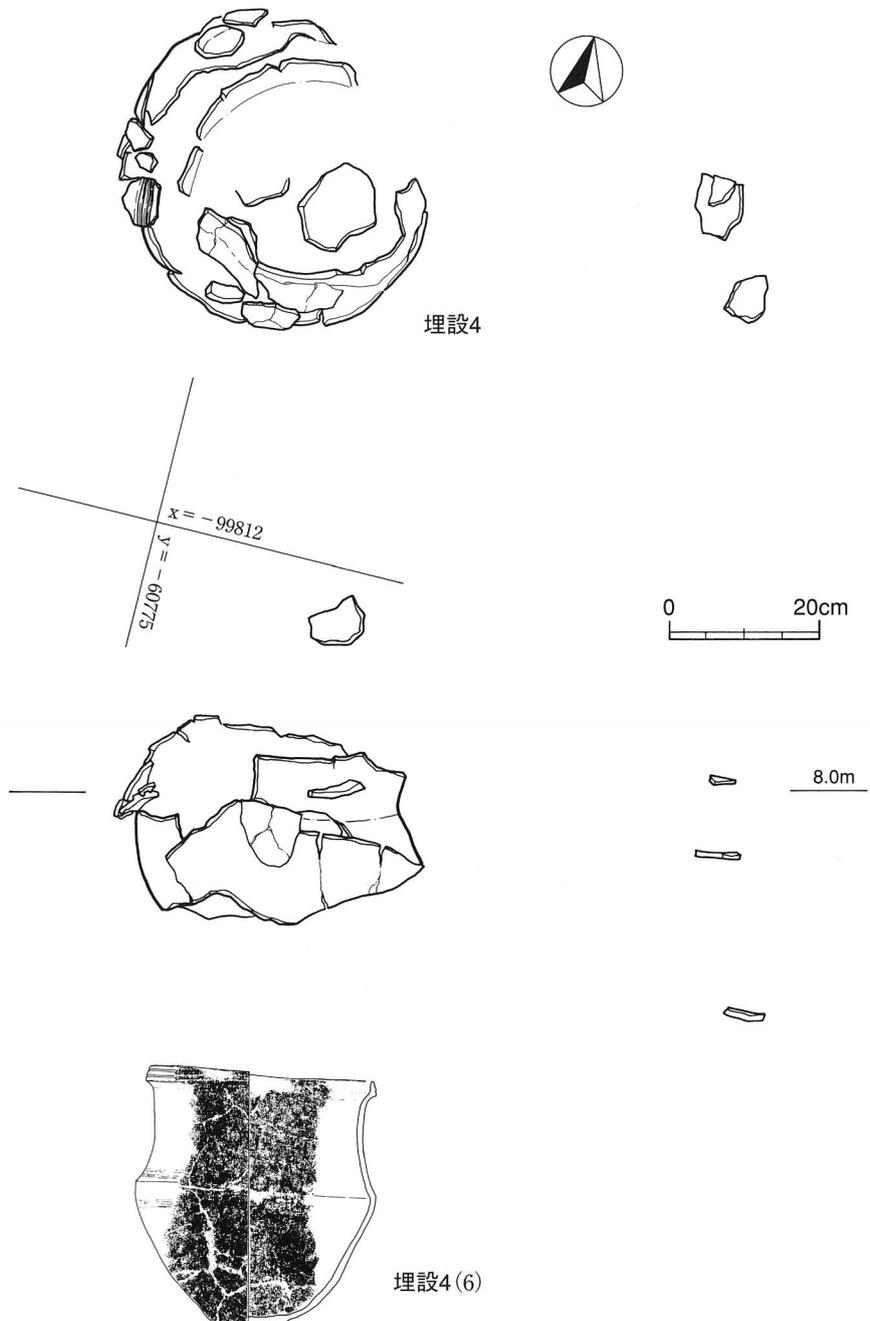
上下の土器とも胎土がきわめて類似しており、色調及び器面調整も一緒である。被せた時のおさまりも良い。他の埋設土器は日常的に使われた土器を転用したと考えられるが、この土器については最初からセットになることを考えて作られた可能性もある。

**埋設土器 6 (SJ8. 5) :** B-17区の表土を剥いだ時点で、深鉢形土器の胴下半部が検出された。掘り込みラインを確認することはできなかった。深鉢形土器がほぼ正位に置かれている。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

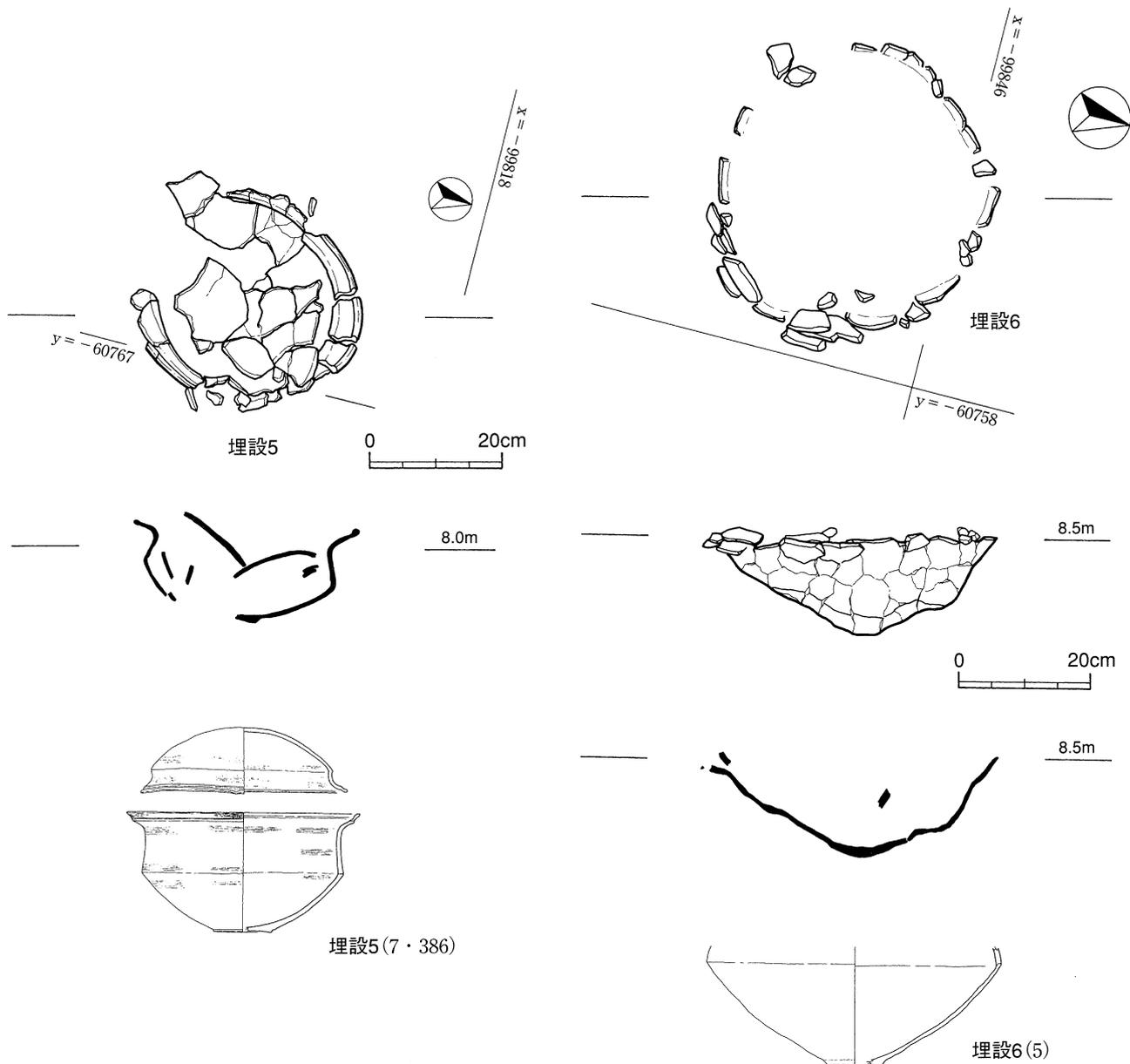
復元底径は8.2cmを測り、わずかに外開きしながら立ち上がってから大きく開く胴下半部へ至る。胴下半部は他の深鉢形土器よりも低く、「く」の字状に屈曲して肩部へ至る。この部分で欠損しており、口縁部の形状は不明である。底面は浅い上げ底となる。接合に困難を極め、底面の故意による穿孔の有無は確認できなかった。大きさの割に器壁は薄い。このような特徴から、上加世田式土器の範疇に含まれると考えられる。

**埋設土器 7 (SJ33. 9) :** 胴部上半と口縁部は直に接合しなかったため図上で復元してある。胴下半部はやや内湾しながら外開きし、胴部のほぼ中央で「く」の字状に強く屈曲する。胴部上半は外反気味に内傾し、口縁部付近で大きく外反する。

口縁部は屈曲してまっすぐ立ち上がり、口唇部は平に面取りした後、窪ませている。口縁部文様帯には2条の凹線が巡る。器面調整は内外面ともミガキによるものである。上加世田式土器に該当する。



第105図 埋設土器検出状況(3) 埋設土器4(SJ38)



第106図 埋設土器検出状況(4) 埋設土器5(SJ115)・6(SJ8)

**埋設土器 8** (SJ6. 10) : B-17区の表土を剥いだ時点で、深鉢形土器の頸部立ち上がり部分が検出された。深鉢の内部には土器片が落ち込んでおり、当時中に入っていたものが腐ってしまい、空洞に近い状態であったことが窺える。掘り込みラインを確認することはできなかった。深鉢形土器はほぼ正位に置かれており、底部の半分が打ち欠かれている。リン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

胴部最大径で「く」の字状に屈曲して、頸部はそのまま内傾する。胴下半部はわずかに内湾気味ではあるものの、ほぼストレートに底部へ至る。底部はわずかな立ち上がりがあり、底面外縁は盛り上がっており、上げ底状をなす。なお、深鉢形土器外から出土した土器で、3条の沈線が巡る口縁部分がある。直接接合する部分は

なかったが、胎土共に似ており、図上で復元した。頸部上部で大きく外反し、ほぼ直立する口縁部をもつタイプである。器面調整に貝殻条痕はみられない。以上のような特徴から、上加世田式土器に含まれると考えられる。

**埋設土器 9** (SJ80. 58) : B-14区のⅢ層上面で検出された。口縁部まで残る良好な検出状況であり、ほぼ正位に埋設されている。蓋は確認できなかった。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

口縁部は段をもって外開きしながら立ち上がる。3条の沈線がみられるが、一部4条になっている部分もある。沈線の幅は0.1cmである。最大径は胴部中央にあり、強く屈曲しているものの、やや丸みをもつ。頸部はストレートに内傾し、胴下半部もほぼストレートに底部へ至る。底

部はわずかな立ち上がりをもつ平底である。底部中央は故意に孔が開けられている。上加世田式土器の新しい段階から入佐式土器の古い段階に該当する。

**埋設土器10** (SJ39. 59・387) : C-16区から検出されたもので、Ⅲ層の途中で肩部付近を確認することができた。口縁部は土器中の中位に落ち込んでおり、落ち込んだ当時は埋設土器の下部に埋納物が残っていた状態だったのかもしれない。あるいは、土器内の下部に土が堆積していたと考えられる。内部の土器には、蓋として使用された浅鉢形土器 (387) もみられる。

蓋となった浅鉢形土器 (387) は、復元口径30cmを測る。底部はほぼ半円を描くような形状となる。体部上部で内側に屈曲し、大きく外反する口縁部をもつ。口縁部端部には粘土紐を一段重ねることによって丸くおさめる口唇部をつくり、内外面に1条の凹線が巡る様に見える。下部の深鉢形土器 (59) は、胴部最大径は33.5cmであり、「く」の字状に屈曲している。頸部はわずかに外反しながら内傾する。胴下部はやや丸みを持ち、底部へ至る。底部はわずかな立ち上がりを持ち、底面は浅い上げ底となる。底部は故意に打ち欠かされている。器面調整はミガキによる。以上の特徴から、上加世田式の新しい段階から入佐式土器の古い段階に該当すると考えられる。

**埋設土器11** (SJ40. 61) : C-16区から検出されたものであり、Ⅲ層の途中で肩部付近を確認することができた。肩部付近はかなりバラバラになっていたが、胴部下位はしっかりしていた。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

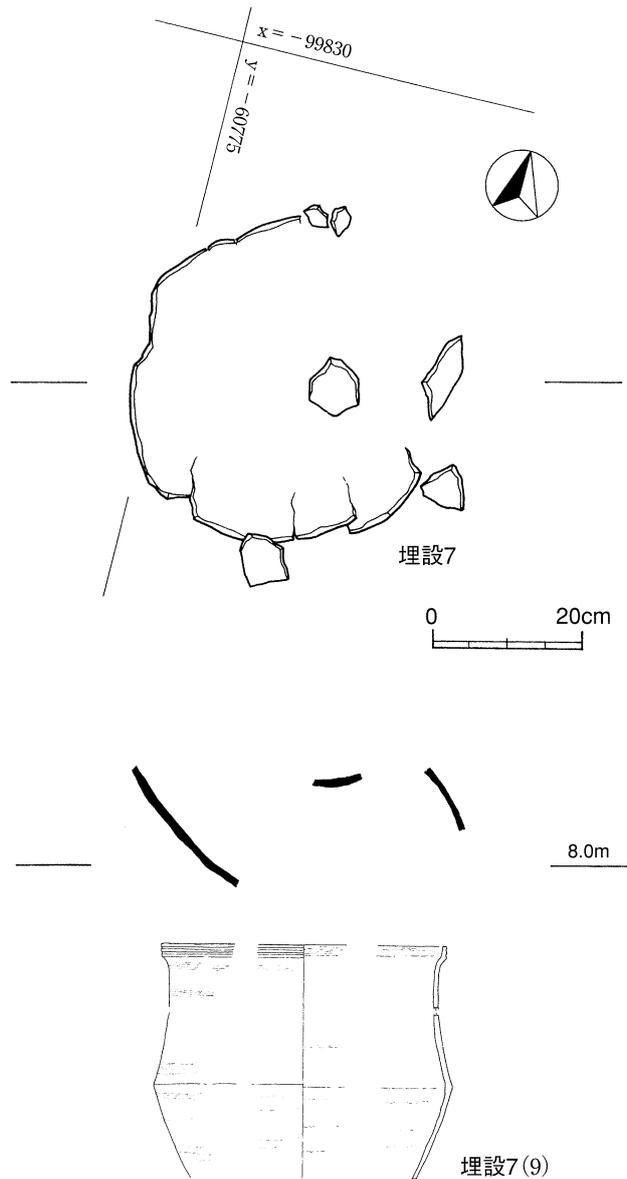
肩部と思われる破片もあったのであるが、接合は胴下半部までしかできなかった。復元底径は7.6cmを測り、上げ底をなす。そのまま大きく開く胴下半部となる。底部穿孔が行われていたかどうかは接合がうまくいかなかったので不明である。上加世田式土器の新しい段階から入佐式土器の古い段階に含まれると考えられる。

**埋設土器12** (SJ4. 63・372) : B-17区の表土を剥いだ時点で、深鉢形土器の頸部立ち上がり部分が検出された。深鉢内には浅鉢が口縁部を下にして出土したことから、これを蓋として利用していたことが窺える。掘り込みラインを確認することはできなかった。深鉢はほぼ正位に置かれている。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

下部の土器 (63) は、胴部最大径で緩く「く」の字状に屈曲して、内傾する頸部へ至る。胴下半部は丸みを帯びながらすぼまる底部へ至る。底部は上げ底状をなす。器面調整に貝殻条痕はみられない。こ

のようは特徴から、上加世田式土器の新しい段階から入佐式土器の古い段階に含まれると考えられる。なお底部には故意による打ち欠きはみられない。深鉢外の検出面下10cmのところに落ちていた口縁部は接合するかどうか確認していないが、この口縁部は少なくとも4条の沈線が施されるものである。

蓋として使われた浅鉢形土器 (372) は復元口径39cmを測るものであり、底部付近は欠損している。ややストレートに外開きする体部から肩部で内側に屈曲する。外側には明確な稜が入るのであるが、内側は緩く湾曲させてある。1cmにも満たない短い肩部から「く」の字状に屈曲させて口縁部をつくる。口縁端部にはもう一段粘土紐をやや内側に重ねることによって、口唇部をつくり出している。したがって、内側のみ凹線状になっている。肩部径と口径はほぼ等しい。



第107図 埋設土器検出状況(5)  
埋設土器7(SJ33)

**埋設土器13** (SJ5. 64・373) : B-17区の表土を剥いだ時点で、深鉢の胴部最大径付近が検出された。底から10cmほど上位の深鉢内にも土器片が落ち込んでいる。掘り込みラインを確認することはできなかった。深鉢はほぼ正位に置かれている。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

下部の深鉢形土器(64)の底径は8.8cmを測り、ストレートに外開きしながら胴部下半へ至る。胴部最大径の部分がわずかに残っており、「く」の字状に屈曲するものと考えられる。器面調整はミガキ様のナデであり、貝殻条痕はみられない。底部の穿孔や打ち欠きもなかった。上加世田式土器の新しい段階から入佐式土器の古い段階の範疇に含まれると考えられる。

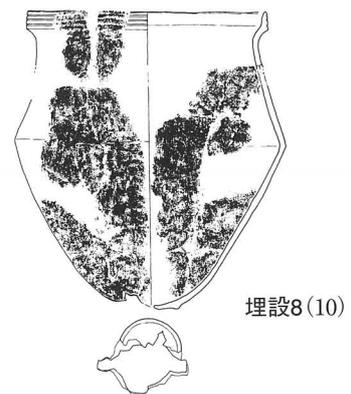
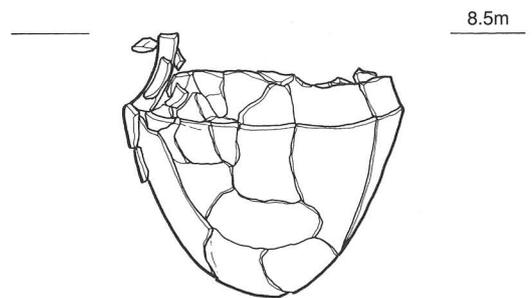
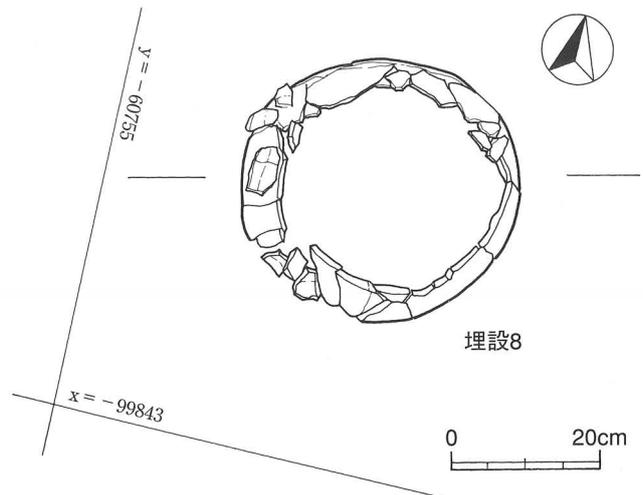
上蓋の浅鉢形土器(373)は、わずかに内湾して開く体部から「く」の字状に屈曲し、外反しながら立ち上がる15mmほどの肩部をもつ。口縁部付近では、大きく外反させて、直立する口唇部へ至る。口唇部は欠けているため形状は不明である。器面調整は内外面ともミガキによるものである。深鉢形土器とセットになることから、上加世田式土器の新しい段階から入佐式土器の古い段階の範疇に含まれると考えられる。

**埋設土器14** (SJ31. 65) : C-16区の表土を剥いだ時点で、口縁部は既に削平され、頸部以下が検出された。底部中央には円形の孔が故意に開けられている。土器は非常に良好な状態で出土したが、掘り込み面は確認できなかった。ほぼ正位に埋められていた。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

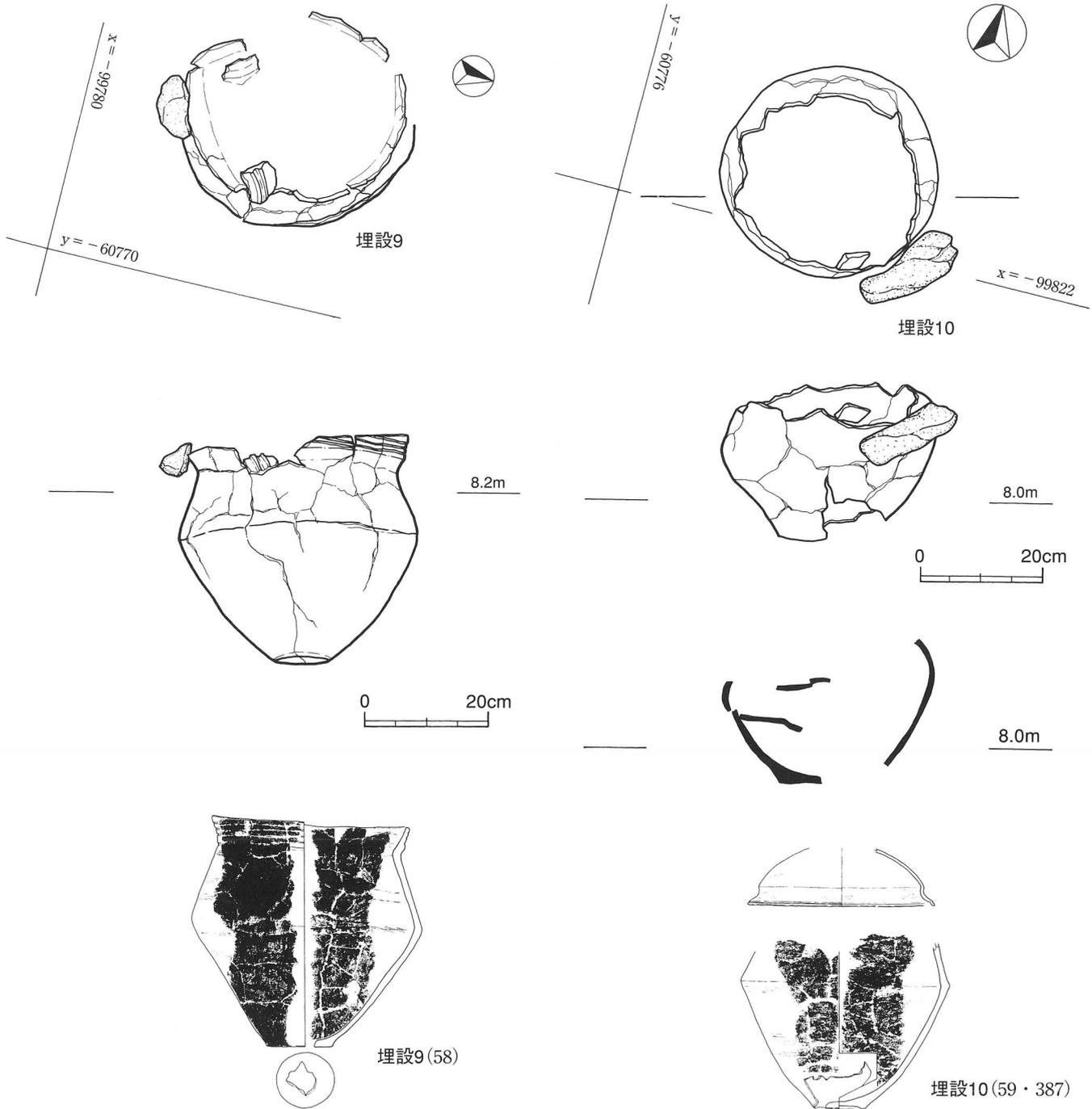
大型の深鉢形土器であり、頸部は外側にやや反りながら内傾して立ち上がる。胴部最大径で「く」の字状に屈曲し、それ以下は丸みを帯びて底部へ至る。底部の直径は10cmで、底面はやや盛り上がり、安定が悪い。底部の形はすぼまっており、厚さは胴部と同様である。器面調整は条痕によるものである。以上の特徴から入佐式土器の古い段階の範疇に該当すると考えられる。

**埋設土器15** (SJ12. 62) : C-16区の表土を剥いだ時点で、底部付近が検出された。深鉢はほぼ正位に置かれている。掘り込みラインは確認することができなかった。内部のリン分析を行ったが外部との差は明瞭でなかった。

胴下半部と底部の接合する箇所がなく、図上での復元によるものである。底径は8cmで、浅い上げ底となる。接地面からわずか3mmほど立ち上がり、大きく内湾しながら開く胴下半部となる。器壁は比較的薄く、外面の器面調整は貝殻条痕によるものである。底部の形態は古い様相を残しているながら、器面調整に新しい要素が加わる。入佐式土器の古い段階であると考えられる。



第108図 埋設土器検出状況(6)  
埋設土器8(SJ6)



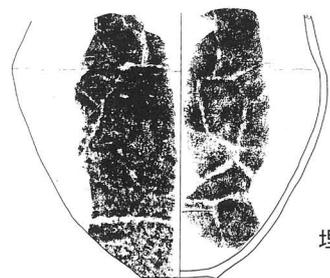
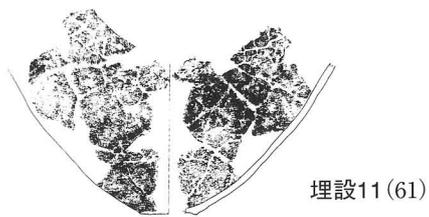
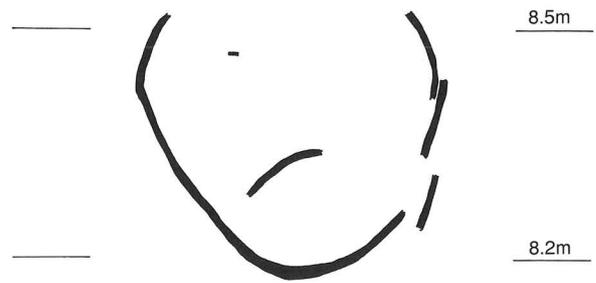
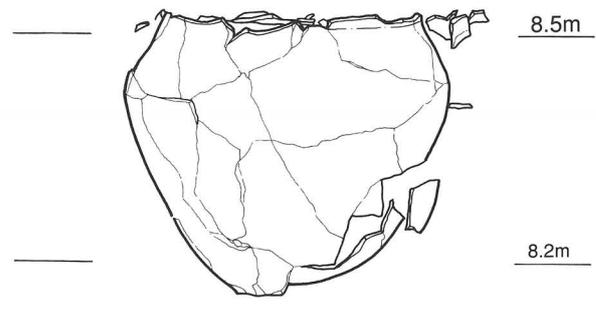
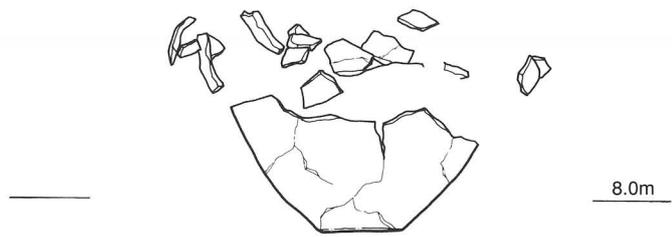
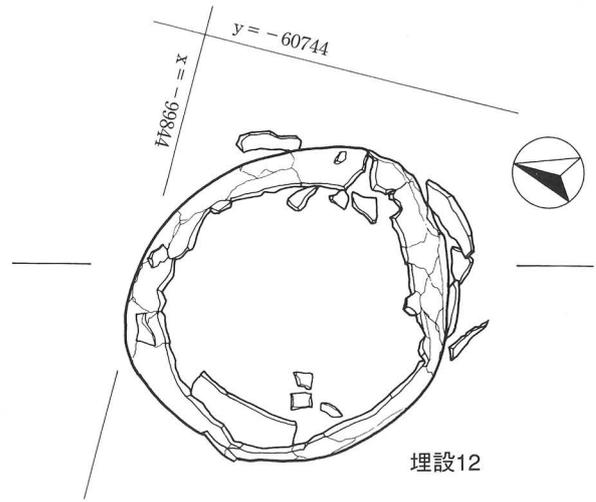
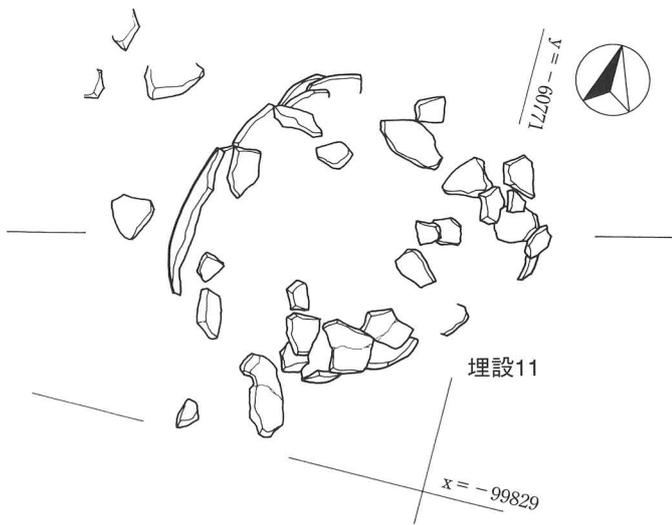
第109図 埋設土器検出状況(7) 埋設土器9(SJ80)・10(SJ39)

埋設土器16 (SJ 9. 66) : B-18区の表土を剥いだ時点で、底部付近が検出された。掘り込みラインは確認できなかった。ほぼ正位に置かれている。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

底径10cmの平底で、外開き気味に立ち上がる。胴下半部は内湾するものである。入佐式土器の古い段階のものであると考えられる。

埋設土器17 (SJ 3. 67) : B-16区の表土を剥いだ時点で、深鉢の胴部下半が検出された。掘り込みラインは確認することはできなかった。ほぼ正位に置かれている。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

底径11.6cmを測り、1.3cmほど垂直に立ち上がる底部から、内湾する胴下半部へ至る。底面はほぼ平である。底面中央に直径3.5cmほどの孔を故意に開け



第110図 埋設土器検出状況(8) 埋設土器11(SJ40)・12(SJ4)

である。上加世田式土器の新しい段階から入佐式土器の古い段階に位置付けられると考える。

**埋設土器18** (SJ7. 68) : B-17区の表土を剥いだ時点で、深鉢の胴下半部が検出された。底部から大きく開く器形であり、胴部上半部で一端屈曲する深鉢である可能性が高い。掘り込み面を確認することはできなかった。底部付近外側に円礫が一個置かれており、深鉢を正位に保つためだった可能性もある。リン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

内湾しながら大きく開く胴部下半である。底部は直径8.5cmを測り、そのまま外開きする。底面はわずかに上げ底となる。底面の中央部は故意に孔が開けられている。器壁は比較的薄く、器面調整も粗い。色調もやや赤っぽい土器であることから、上加世田式土器の中でも新しい段階から入佐式土器の古い段階であると考えられる。

**埋設土器19** (SJ78) : 検出した時点で、全体の形はわからず、判断に迷ったが、土器が集中する地点が通常の所ではみられないことから埋設土器として扱った。復元を試みたのであるが、つながる部分が少なく、特徴を見出せなかったので図化できなかった。埋設土器として設定できるかどうかかわからないけれども、調査時点での所感を伝えるために取り上げた。時期についても不明であるが、出土地点を考えて想定した。礫が集中している地点と隣接し、何らかの関係が窺えるが、明らかでない。

**埋設土器20** (SJ41. 69) : D-22区から検出されたものであり、II層下面で口縁部が削平された状態で見つかった。内部には他の土器片などは入っていなかった。ほぼ正位に置かれている。掘り込みラインなどは確認できなかった。底部の一部を打ち欠いている。

胴部最大径で緩く屈曲しながら内湾し、わずかに反る頸部へ至る。胴下半部はやや丸みを帯びながらもストレートに底部へ至る。底部はわずかに立ち上がっており、底面は平である。以上のような形状から、入佐式土器の古い段階であると考えられる。

**埋設土器21** (SJ130. 113) : B-21区のIII層を数cm掘り下げた地点で検出された。埋設土器36 (SJ126) ・35 (SJ128) よりは2mほど南側にある。ほぼ正位置に埋設されている。底部付近は確認することができなかった。また、掘り方は確認することができなかった。

胴部最大径と口径はほぼ同じであり、32.2cmを測る。胴部と肩部との境は不明瞭であり、緩く内湾していただく。頸部と口縁部の境は「く」の字状に屈曲し、外開きの口縁部が段をもって付く。口縁部文様帯には、凹線が少なくとも6条巡るが、凹線間の間隔に規則性はみら

れない。内面の器面調整は貝殻条痕であり、外面はミガキによるものである。入佐式土器の古い様相と新しい様相を兼ねている土器である。

**埋設土器22** (SJ30. 70) : B-18区の表土を剥いだ時点で、底部付近が検出された。残りの状態は悪い。上部は後世の削平によるものであるが、下部については当初から欠けて無かったものと考えられる。胴下半部が内湾しながら開くタイプであり、器壁も厚い。器面調整はミガキによるものである点から、上加世田式土器の新しい段階から入佐式土器の古い段階の範囲におさまると考えられる。

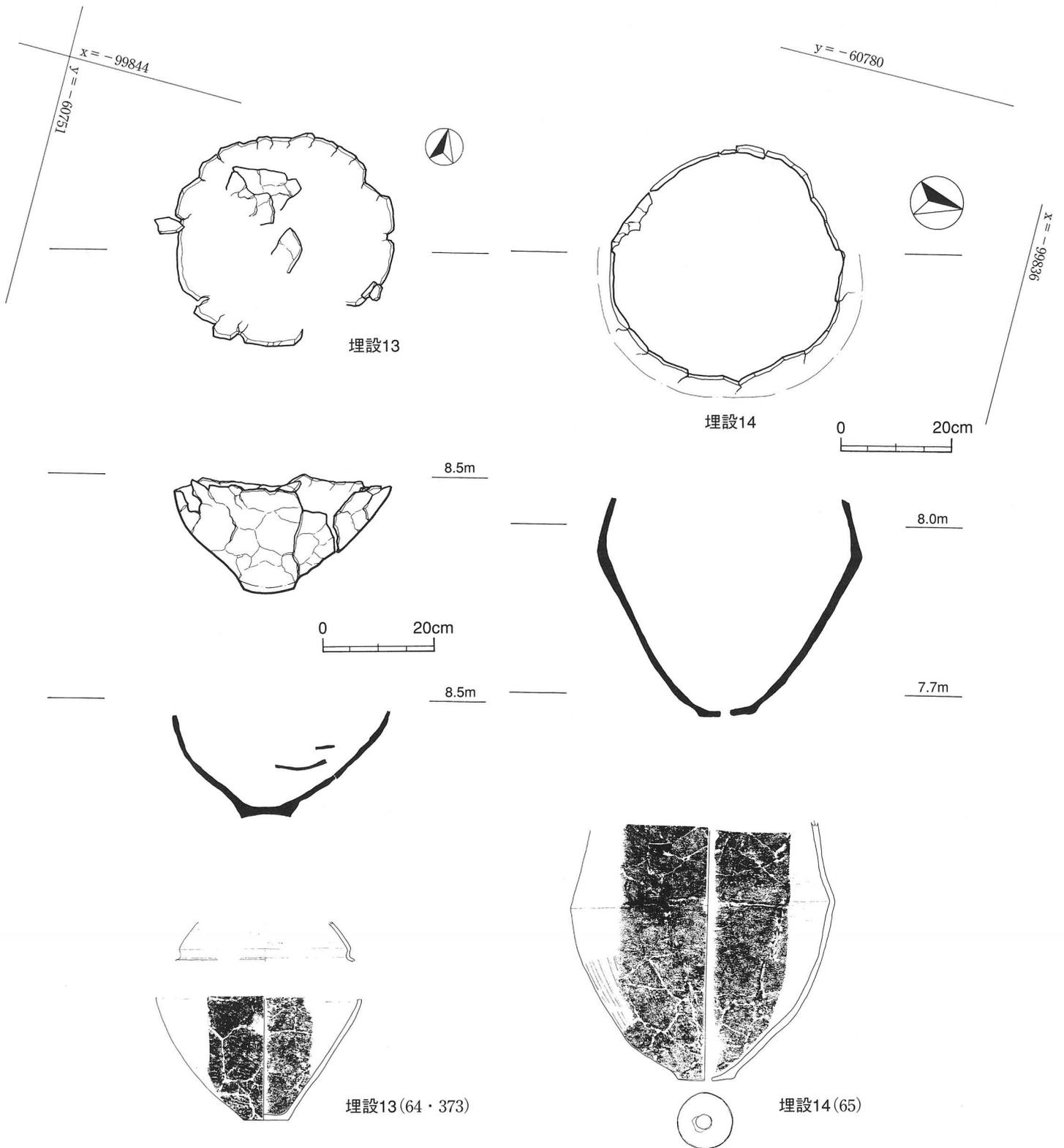
**埋設土器23** (SJ49. 401) : C-23区のIII層上面で検出した。検出した時点で南側半分は無く、半截しても以下には何も存在しなかった。平安時代以降の南北方向に延びる溝状遺構の痕跡と重なる部分にあり、その時点で壊された可能性もある。浅鉢形土器が口縁部を下にして出土したものであり、下部施設を確認することができなかったことから、厳密に言えば埋設土器に含まれないのかもしれない。しかし、検出時にほぼ水平な状態で出土した点と、埋設土器3 (SJ79) のように下部施設が土器以外の有機質素材を利用した例もあることから、埋設土器の可能性のあるものとして挙げたことを断っておきたい。

底部は削平されて欠損しており、全形を知ることはできないが、丸みをもって大きく開く体部から内側に屈曲し、直ちに大きく外反して口縁部に至る。口縁端部に粘土紐を1段重ねることによって外傾する口唇部をもつ。内面は接合部をナデ消しているが、外面は凹線を巡らしている。

**埋設土器24** (SJ42) : D-23区のIII層中で底部付近が検出された。土器は4cm程度を残すのみで、底部付近は存在しなかった。おそらく底部全体を抜いてから、埋設したのと考えられる。上部の方は、後世の削平のためどれくらいまで存在したか不明である。土器の復元を試みたが、接合しなかったので図示していない。土器はほぼ正位に置かれていた。掘り込みライン等は確認することができなかった。

**埋設土器25** (SJ50) : C-23区のIII層上面で、底部付近を検出した。半截したところ底部自体はみられなかった。底部内面には、炭化物状の物質があった。ほぼ正位に埋設されている。掘り込みラインは確認できなかった。

実物については、整理作業の段階で行方不明となり、図・写真とも提示することができず、深く反省している。



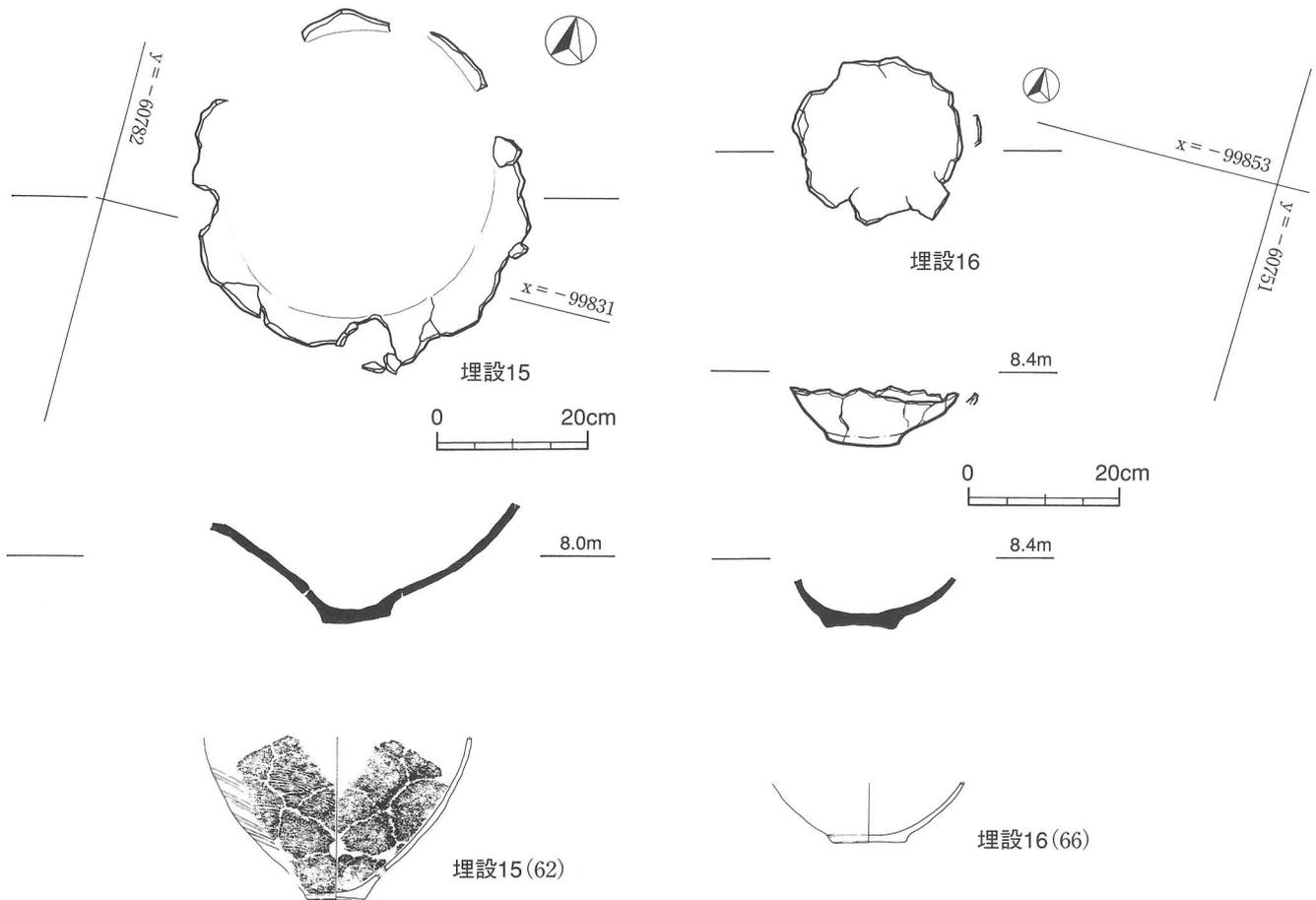
第111図 埋設土器検出状況(9) 埋設土器13(SJ5)・14(SJ31)

埋設土器26 (SJ10) : C-20区の表土を剥いだ時点で胴部下半部が検出された。掘り込みラインは確認できなかった。ほぼ正位に置かれている。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。接合・復元を試みたが、残りの状態が非常に悪く、図化できなかった。

埋設土器27 (SJ175. 163) : B-25区を重機によって最終確認している時点で検出した埋設土器である。

気づいたときには既に胴部下半まで重機で削平されていた。掘り込みラインは確認できなかった。ほぼ正位に据えられている。

口径43.9cm、器高52.3cmを測る大型の深鉢形土器である。胴部最大径は口径よりはわずかに大きく、浅い「く」の字状に内側へ屈曲する。頸部はほぼストレートに内傾し、口縁部との境で外側へ屈曲する。口縁部は低い段で区別し、緩く内湾しながら外開き



第112図 埋設土器検出状況(10) 埋設土器15(SJ12)・16(SJ9)

となる。口唇端部はやや先細りさせながら丸くおさめる。胴部下半はやや内湾気味に底部へ至る。底部径は12cmで円盤状を呈する。外面の器面調整は貝殻条痕によるものであり、特に口縁部は沈線を意識したように横方向に密に施している。以上のような特徴から、入佐式土器でも新しい段階に位置付けられると考える。底部の打ち欠きはみられなかった。底部内面付近には炭化した物質が付着していた。リン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

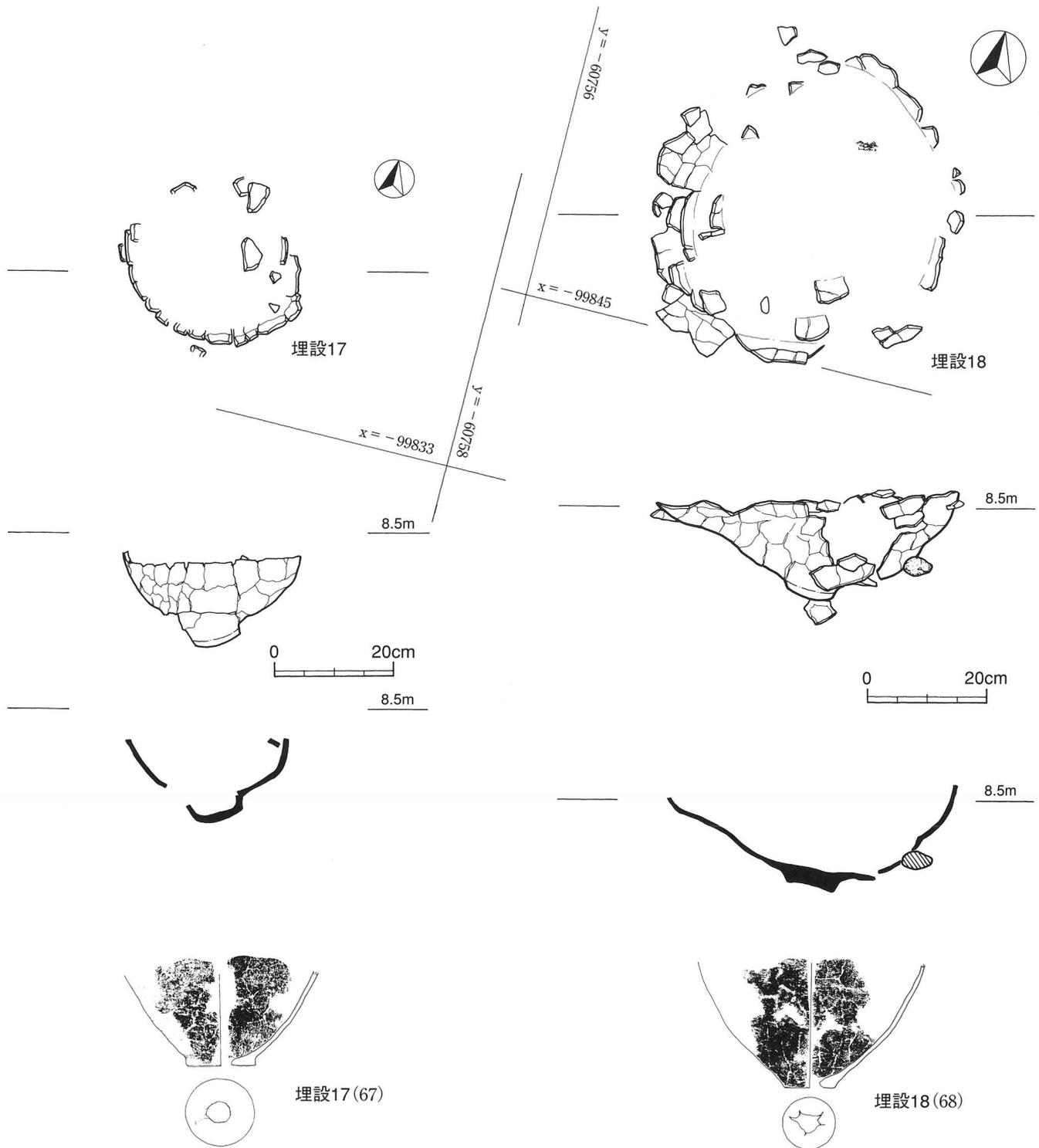
**埋設土器28** (SJ46. 164・188) : D-21区のⅢ層を10cmほど掘り下げた位置で検出した。底部が上を向いているのが特徴である。発掘調査時点では、「覆甕」と呼ばれているものと同一であると思っていた。ちょうど逆位に据えられており、底部が落ち込んでいることから、当時は空洞に近い状態であったと考えられる。土器の数cm下には人頭大の礫があるが、土器と関係があるかどうかは明らかでない。整理作業の時点で下部の土器の存在に気づいた。

底部を上にして被せられていた深鉢形土器 (188)

は、胴部下半部までしかなく、全体の器形は不明である。胴部下半は緩く内湾しながら底部へ至り、底部は張り出しをもつものである。底径は12cmであり、底部の高さが1cmと低いことから、張り出しは弱く見える。底面は平であり、器面調整に貝殻条痕はみられない。以上の特徴から、口縁部の状況ははっきりしないが、入佐式土器であると考えられる。

下部の土器(164)は、底径10cmを測る。上げ底をなしており、そのまま大きく内湾する胴下半部へ至る。器形としては古い様相を残しているけれども、外面の器面調整は粗い貝殻条痕によるものである。上部の土器と同じ入佐式土器と考えられる。

**埋設土器29** (見入来SJ5. 174) : B-4区のⅢ層で検出された。北側3分の1及び口縁部は、後世の削平により残っていなかった。ほぼ正位に埋設されており、底部は残っていなかったため故意に打ち欠いたものと考えられる。蓋はみられず、内部の頸部付近には円礫が落ち込んでいることから、木蓋の上に円礫が置かれ、土器内部に土が流入した時点で礫が落ち込んだと考え



第113図 埋設土器検出状況(11) 埋設土器17(SJ3)・18(SJ7)

られる。口縁部及び底部付近が欠けているので、全形を知ることはできないが、やや高い位置に胴部最大径がくる器形であると考えられる。胴部下半はほぼストレートに外開きするもので、最大径部分で内側に「く」の字状に屈曲し、その上は外反しながら内傾する。器壁はやや厚く、胎土に金色の雲母を含む。器面調整はミガキによるものである。胴部最大径部分から上がど

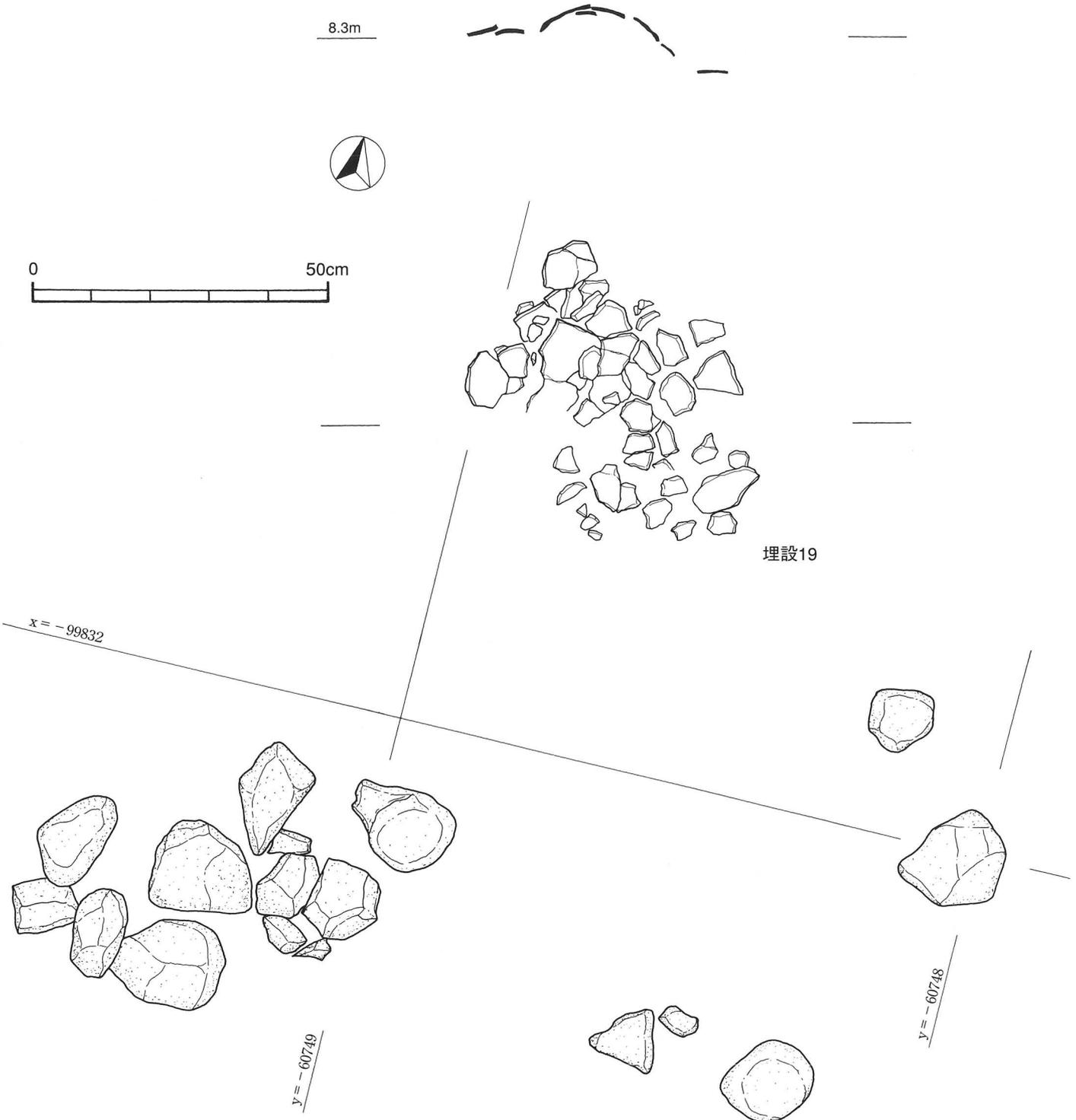
れくらいの長さになるのか不明であるが、屈曲の度合いと器面調整から入佐式土器に入ると考えられる。

本資料は今回の発掘調査で最初に検出された埋設土器であり、処理の仕方に不備な点があったので記しておく。一つは、器面がもろかったのでバインダー処理を行ったが、現地で検出された状態のままバインダーを筆で塗り込んでいくと、表面が乾いてしまい、それ

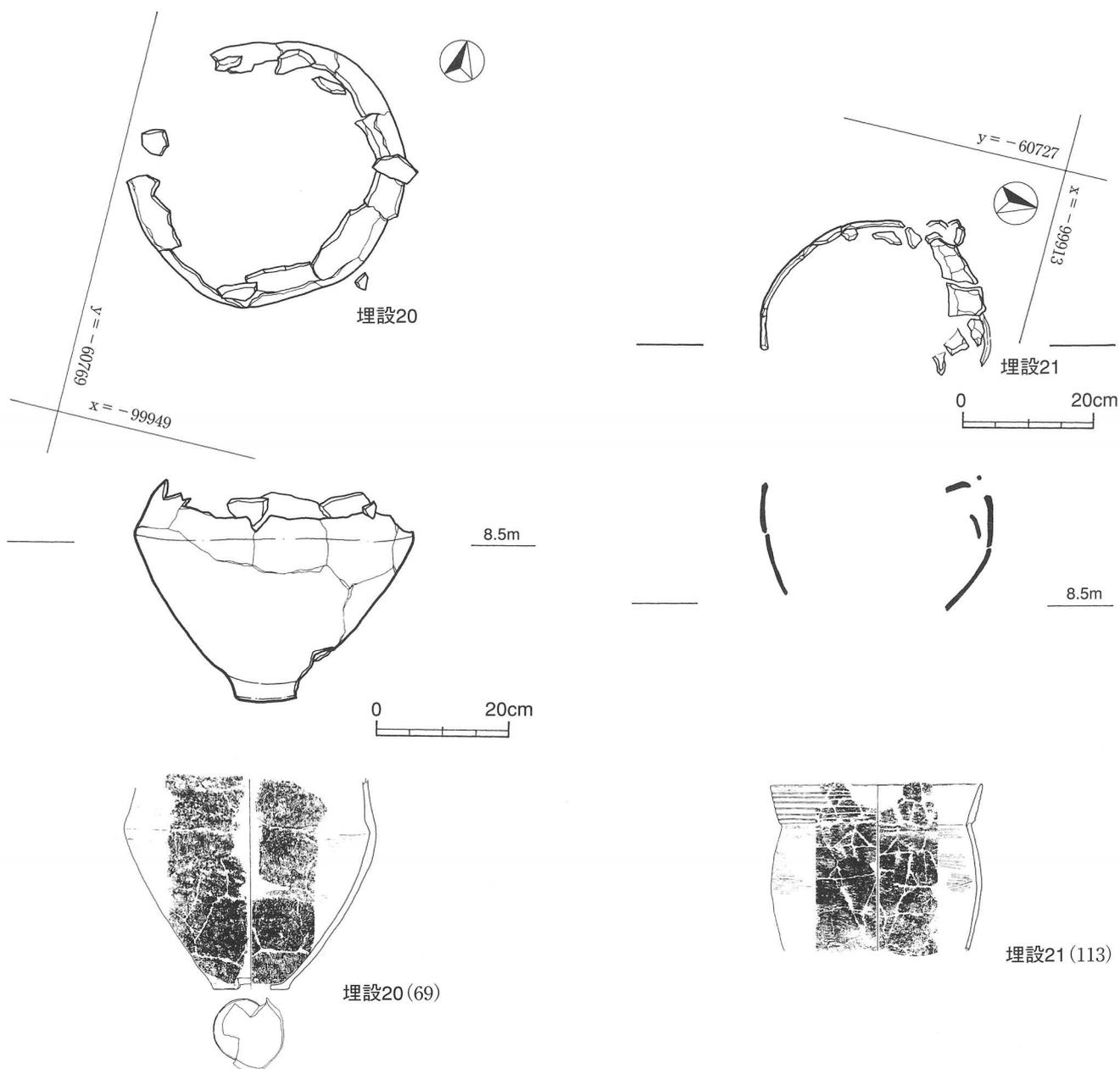
以上バインダーが内部にしみ込んでいかなかった。この失敗を教訓に、次からは取り上げた後、水洗いして充分乾燥させた上で、2倍に薄めたバインダー17溶液に一昼夜浸すことによってうまくいった。もう一つは、半截したままの状態シート等を被せておいたのであるが、雨水が半截したトレンチの中に溜ってしまい、埋設土器が崩れてしまった。これを教訓に次からは、土器の状態を確かめた上で、胴部を支える土の柱を2、3本残して半截した。したがって、半截した状況の写真は使えるものが少ない。

埋設土器30（見入来SJ84. 173）：D-2・3区のⅢ層で検出された。頸部から上は後世の削平により残存していなかった。ほぼ正位に埋められている。掘り込みラインは確認できなかった。底部は残っていなかったことから、故意に打ち欠いたものと考えられる。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

口縁部及び底部は欠損しており、全形を復元することはできなかった。おそらく底部付近は当初から故意に抜かれていたと考えられるが、接合作業が困難であったので、確実にどの部分まで打ち欠いていたのか不



第114図 埋設土器検出状況(12) 埋設土器19(SJ78)



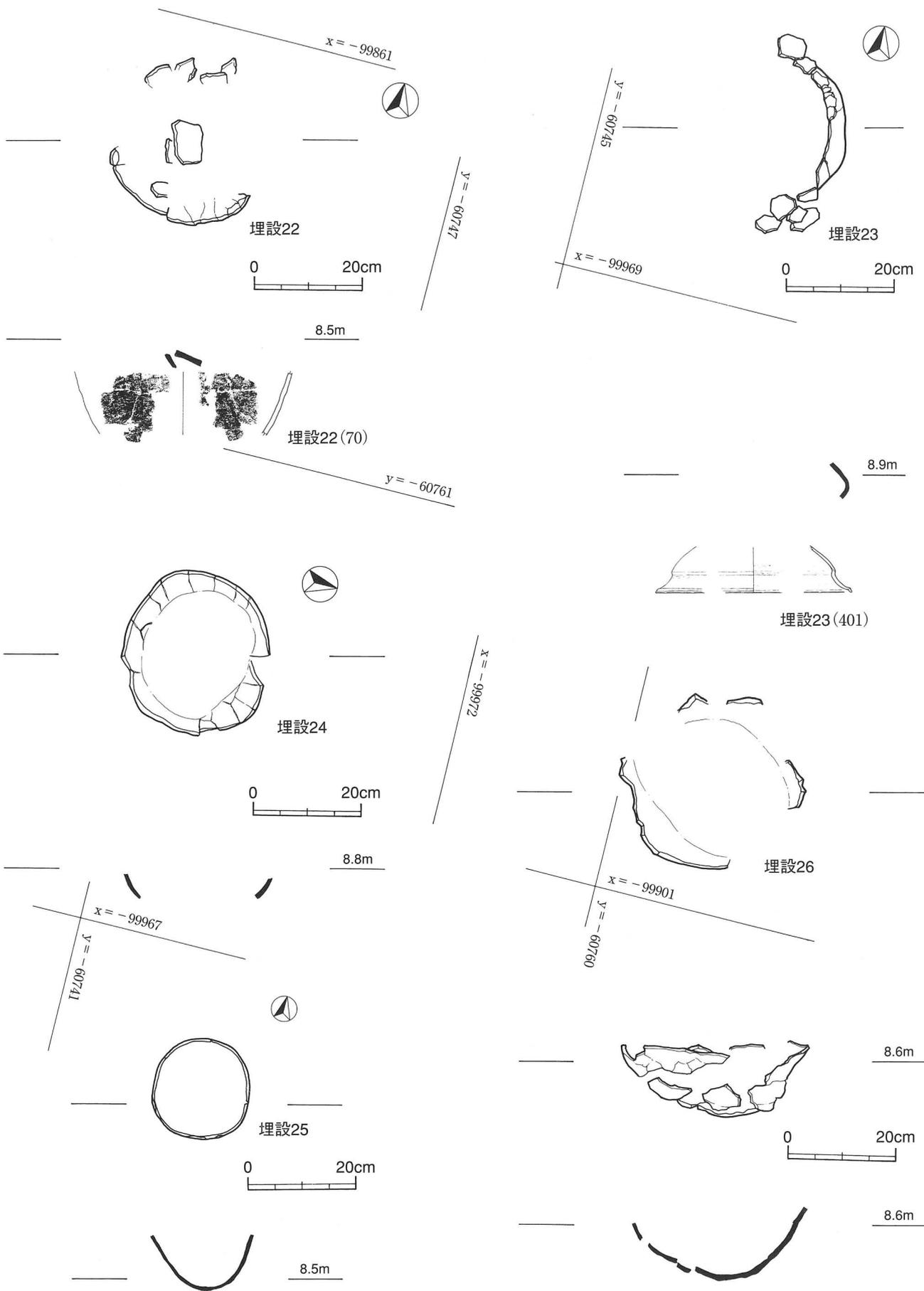
第115図 埋設土器検出状況(13) 埋設土器20(SJ41)・21(SJ130)

明である。胴部下半はストレートに外傾し、かなり高い位置で内側に屈曲して胴部最大径に至る。胴部最大径から口縁下部にかけてはやや外反気味となり、長さは短い。器面は摩耗しているため、調整は不明である。残存している部分が限られていて確実なことは言えないが、胴部最大径より上半の端部がさらに強く外反する様相をみせることから、これが口縁部との境となれば、この部分は短いことになり、黒川式土器に近いこととなる。しかし屈曲の度合い等から、入佐式土器の範疇に含まれると考えられる。

埋設土器31 (SJ131. 189・190) : B-21区のⅢ層を精査した時点で検出された。埋設土器が集中して出てきた

埋設土器37 (SJ125)・36 (SJ126)・35 (SJ128) から3 mほど南に位置する。内部に土器が入り込んでおり、一回り小さな深鉢形土器 (189) が倒立していた。胴部下半部以下は存在せず、埋設された当初から無かったのか後世の削平によるものかは不明である。もし底部が存在した状態で蓋として使用していたら、当時は表面上にはみ出していたのではないかと思われる。掘り方は確認できなかった。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

上蓋となる土器 (189) は口径26.6cmを測り、丸く内湾する肩部をもつ。肩部から口縁部境までは短く、明瞭な段をもって口縁部へ至る。口縁部は長めに外反しながら開き、口唇部を丸くおさめる。口縁端部の3か所



第116図 埋設土器検出状況(14) 埋設土器22(SJ30)・23(SJ49)・24(SJ42)・25(SJ50)・26(SJ10)

を内側に押し出している。その下の頸部にはリボン状の突起を貼り付けてある。以上のような特徴から、黒川式土器であると考えられる。

下部の深鉢形土器(190)はほぼ正位置に埋設されており、口縁部から底部まで残っている。口径30.5cm、底径8.4cm、器高34.3cmを測る。底部は脚台状に開き、口縁部も幅広く外開きするタイプである。肩部は丸いナゲ肩で、頸部までが短い。頸部と口縁部には段の痕跡が全く無く、器面調整は貝殻条痕である。それらの特徴から、上甕となったリボン付きの土器と同じく黒川式土器と考えられる。

**埋設土器32**(SJ11. 194) : D-20区の表土を剥いだ時点で、口縁部上端が検出された。口縁部は大きく開き、文様はみられない。底部は脚台状をなし、北側の一部が4分の1ほど欠けている。復元では全部石膏を入れてしまったが、日常の道具から非日常化するために、故意に打ち欠いたものと考えられる。半截した断面をみると、底部と胴部がずれている様子が観察できる。見た目では、胴部のほうが元の状態を保っているように見える。深鉢内部の土と外側の土の違いは認められず、掘り込みラインを確認することができなかった。深鉢はほぼ正位置に置かれている。今回検出された埋設土器の中で最も残りの良い土器であったが、蓋は認められなかった。木蓋等の腐ってしまう蓋の使用が考えられる。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

口径43.5cm、底径10cm、器高40cmを測る。脚台状の底部からほぼストレートにのびる胴部である。肩部から頸部にかけては短く、口縁部の段もみられないことから、黒川式土器の特徴をもつものである。

**埋設土器33**(SJ47. 187) : C-20区のⅢ層を数cm掘り下げた位置から口縁部を検出した。ほぼ正位置に置かれている。掘り込みラインは確認できなかった。

口径46cm、底径12cm、復元器高43cmを測る。肩部は丸く内湾し、頸部までは短い。わずかに段をもって外傾する口縁部に至る。胴下半部はほぼ直線的に底部へ向かう。底部と胴下半部は直接接合しなかったため、図上で復元してある。底部は外に張り出すタイプであるが、器壁は厚くない。器面調整は貝殻条痕によるものである。黒川式土器であるが、口縁部に段を残している点と、底部の厚みが薄い点は、古い様相を示す。

**埋設土器34**(SJ51. 193) : C-23区のⅢ層上面で、底部付近を検出した。残存状況が悪く、北西側の一部は欠けている。内部には浮いた状態で緑色の石材を用いた石斧(1433)が出土した。半截しても底部の残りは良

くなかったが、ほぼ正位置に埋設されている。

直径11cmの張り出しのある底部から、大きく開く胴部へ至る。底部と胴部が直接つながる場所がなかったため、図上での復元となるが、最大径の部分で内側に「く」の字状に屈曲する。肩部はやや外反気味に内傾している。器面調整は粗い貝殻条痕による。底面には木の実と考えられる圧痕がある。全体の器形からすれば古い様相をもっているけれど、上述の様な内容から黒川式土器に含まれると考えられる。

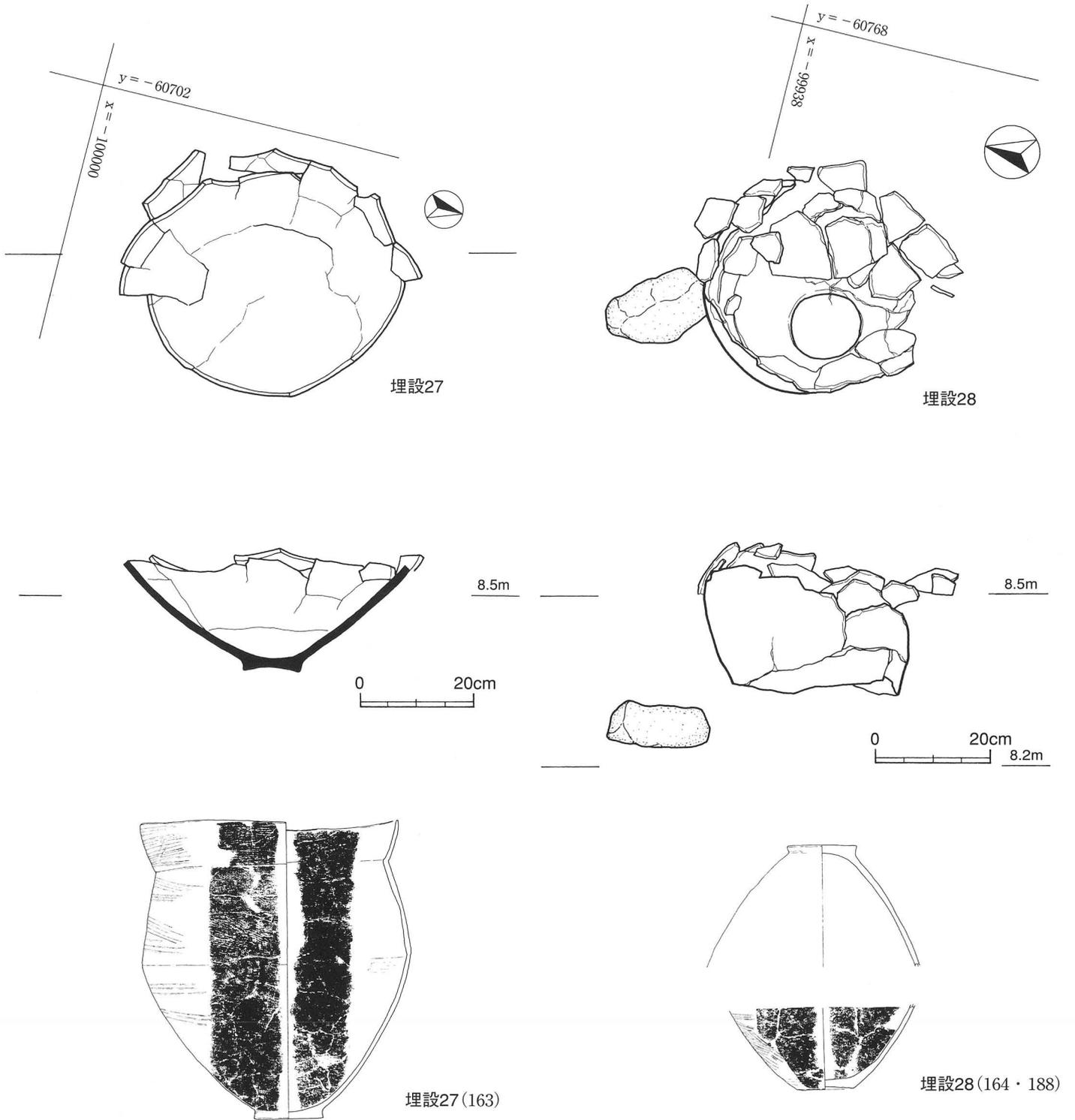
**埋設土器35**(SJ128. 166) : 埋設土器36(SJ126)に接して検出された。ほぼ正位置に埋設されている。掘り方は確認できなかった。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。埋設土器36の口縁部よりも数cmほど下位で円形に巡ることがわかった。胴部下半の途中から下は、接合が困難であり、どこまで続いていたか不明であるが、明らかに底部はみられなかったため、故意に抜いたものを使用したと考えられる。

肩部はやや稜を残しながら、丸みを帯びて屈曲する。肩部から口縁部境まではやや内湾しながら長めに内傾する。口縁部との境ははっきりしないが、内側にはわずかな稜を残し、やや内湾しながら口縁部は立ち上がる。器面調整は横方向のナゲによるものである。屈曲部分に稜が残る点や口縁部が開かず内湾気味に立ち上がる点は、入佐式に近い特徴であるが、肩部をもつということから、黒川式土器に該当すると考える。

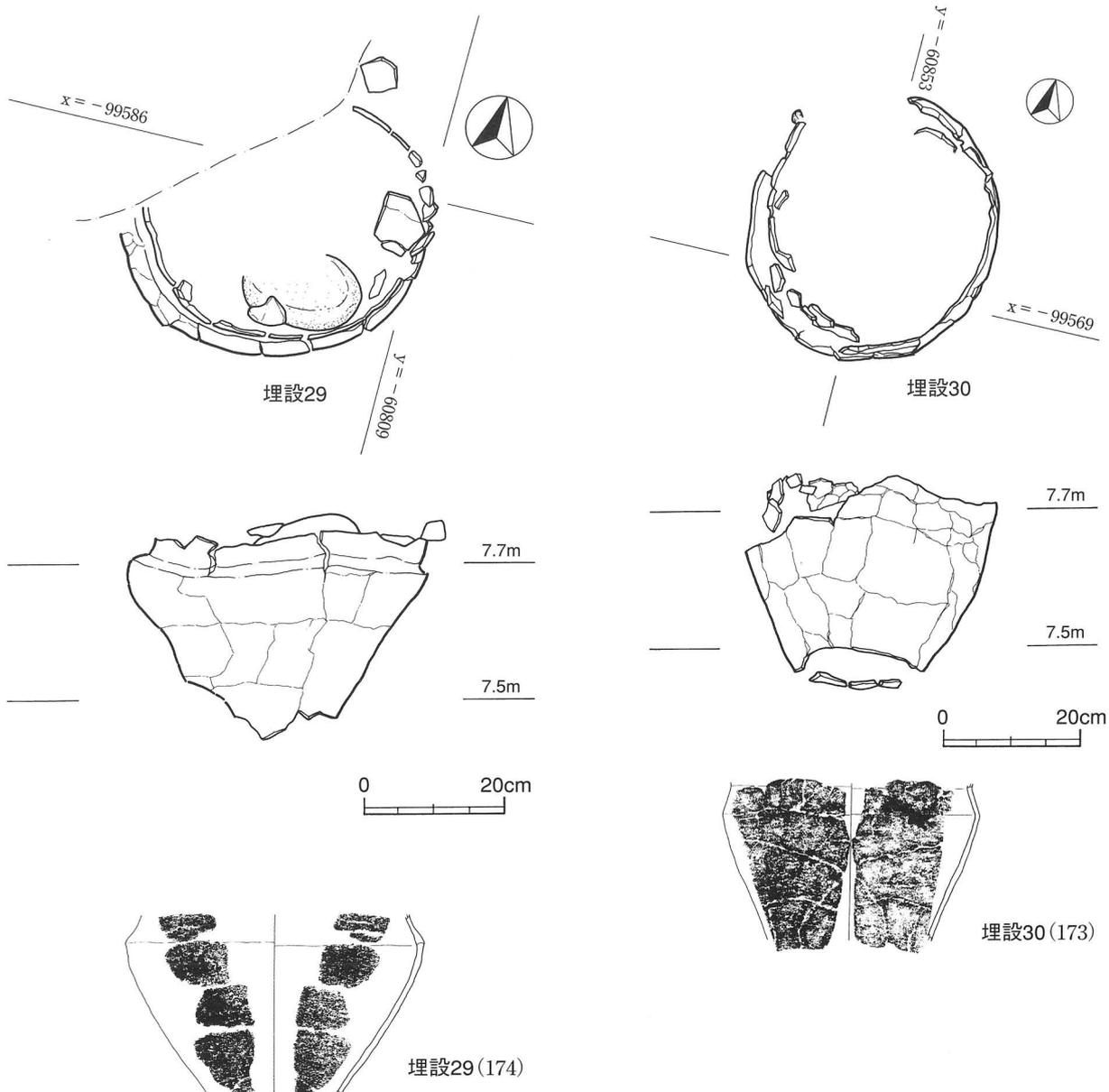
**埋設土器36**(SJ126. 191) : 埋設土器37(SJ125)に接して検出された。表土層を剥いだ時点で確認できたため、埋設土器37よりもわずかに高い位置にある。同時に存在したのか、あるいは時期差があるのかは不明である。ほぼ正位置に埋設され、底部まで残っている。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

口径36cm、底径9cm、器高33cmの深鉢形土器である。肩部は少し張りがあり、口縁部境までの長さは短い。口縁部との境は屈曲するものの、内面に稜は残さない。また、段も残さずほぼストレートに立ち上がる長めの口縁部である。胴部はストレートに底部へ向かい、底部は張り出しのある脚台状になるタイプである。器面調整は貝殻条痕によるものである。以上のような特徴から黒川式土器と考えられる。

**埋設土器37**(SJ125. 192) : B-21区のⅢ層を数cm掘り込んだ面で検出された。頸部から上位は残りの状態が悪く、胴部下半以下は存在しない。内部の下部には炭化物がみられる。ほぼ正位置に埋設されてい



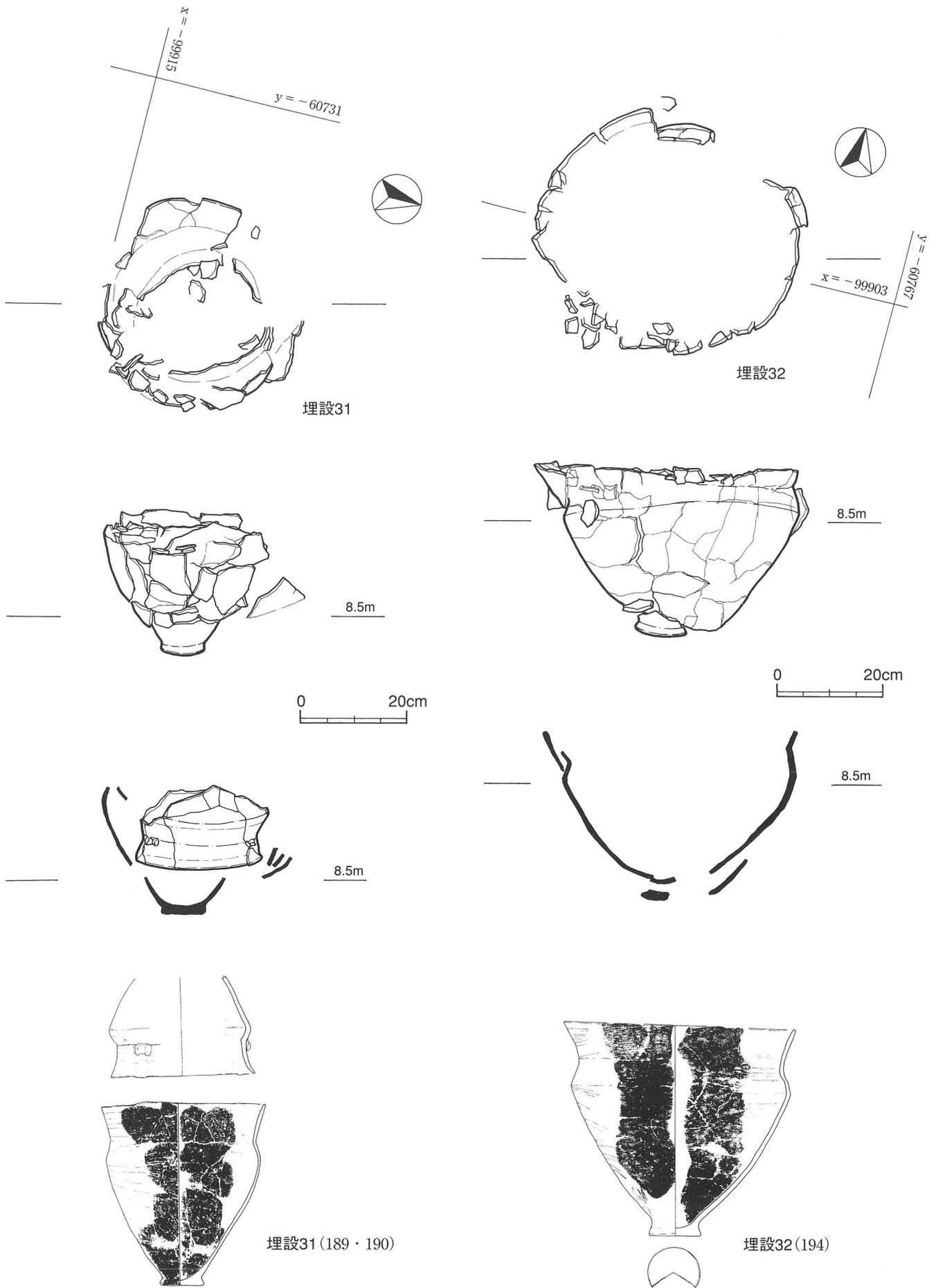
第117図 埋設土器検出状況 (15) 埋設土器27(SJ175)・28(SJ46)



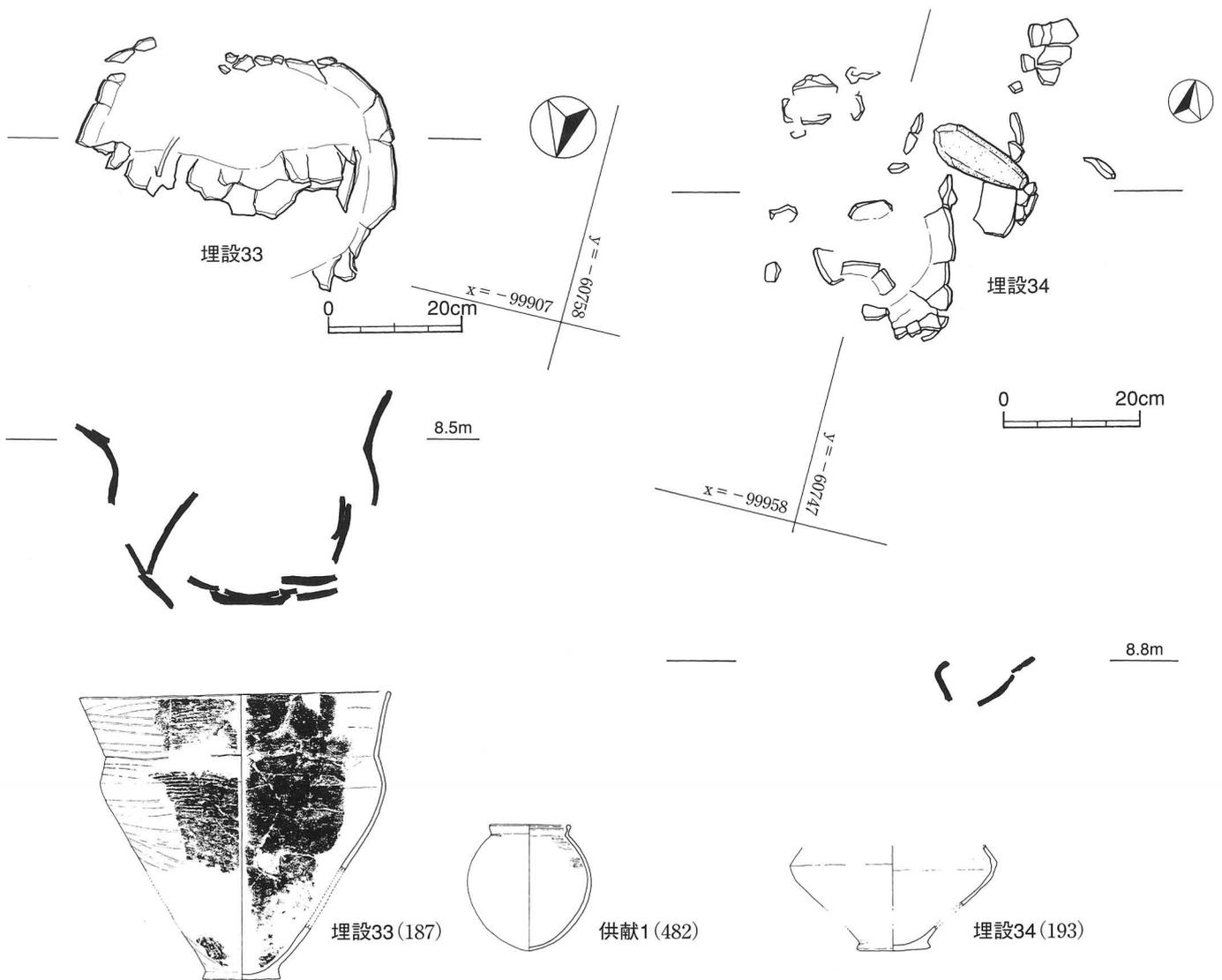
第118図 埋設土器検出状況(16) 埋設土器29(見SJ5)・30(見SJ84)

る。掘り方は確認できなかった。胴下半部から底部にかけては打ち欠かれていた。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。

口径は42cmを測り、肩部径よりも広い。緩く内湾する肩部をもち、頸部までは短い。口縁部境は段をもたず、外反気味に開き、口唇部は先細りとなる。器面調整は貝殻条痕によりものであり、口縁部は横方向を意識しており、沈線の名残と考えられる。器壁は薄い。以上の特徴から黒川式土器と判断される。



第119図 埋設土器検出状況(17) 埋設土器31(SJ131)・32(SJ11)



第120図 埋設土器検出状況(18) 埋設土器33(SJ47)・34(SJ51)・供献土器1(SJ48)

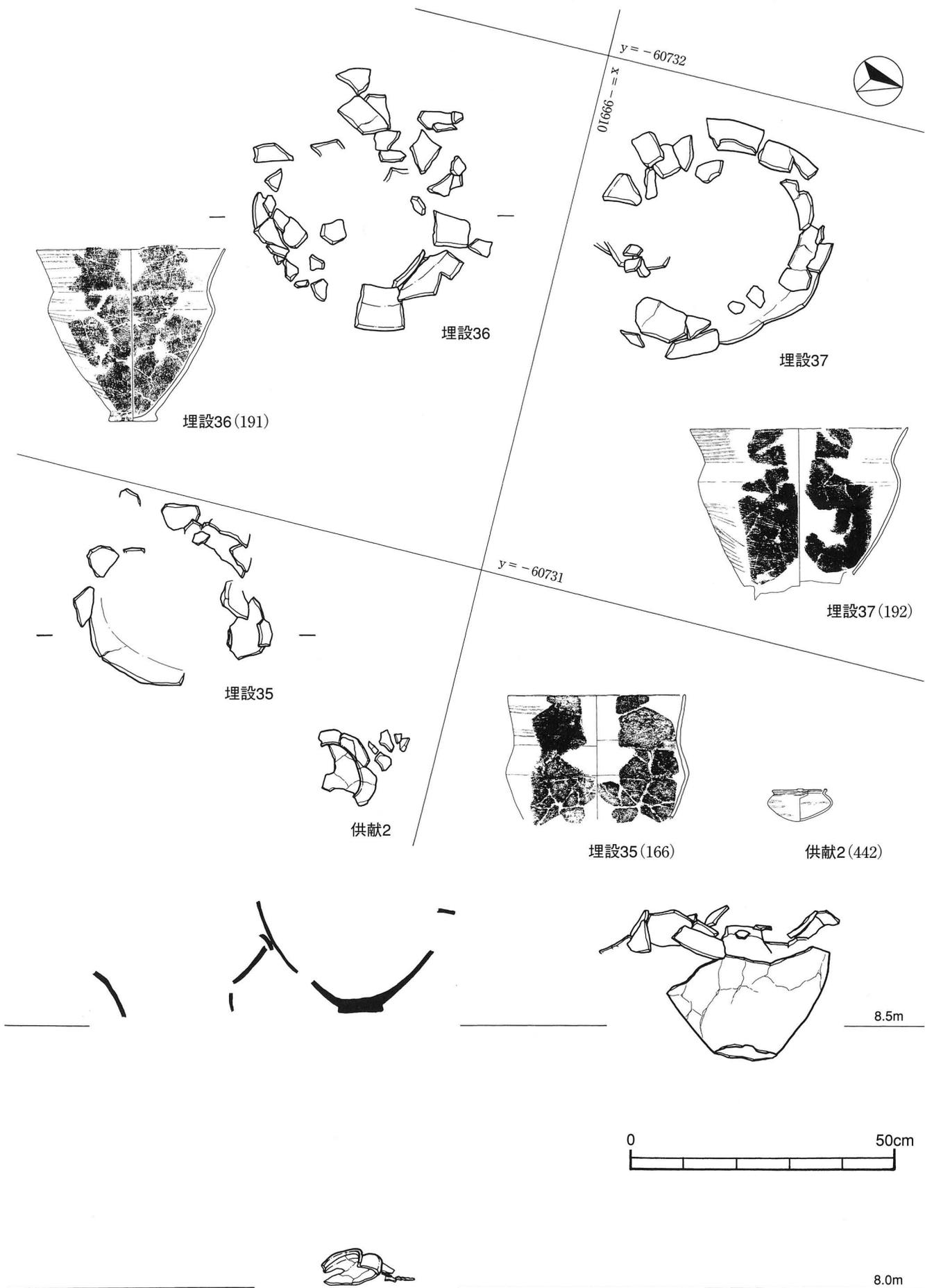
(2) 供献土器

**供献土器 1 (SJ48. 482)** : C-20区のⅢ層を数cm掘り下げた位置から出土した。発掘調査時点では埋設土器と考えていたが、埋設土器33 (SJ47) の副葬品とも考えられるので、供献土器とした。重機によって最終確認を行っている際に出土したため、出土状況の実測図はない。

鶏卵を立てたような器形をしており、口縁部のみ外側へ短く屈曲させている。さらに粘土紐を1段重ねることによって丸くおさめた口唇部をつくる。内面には1条の凹線が巡らされた様にみえる。黒川式土器に伴うものと考えられる。

口径10.4cm、器高6.2cmを測る。最大径は胴部であり、丸く内湾して口縁部に至る。粘土紐を2段重ねることによって口縁部をつくり、内外面とも1条の凹線を巡らしたようにみえる。口唇部は丸くおさめてあり、少なくとも1か所は口唇全体を肥厚させて、突起をつくり出している。胴部下半は尖り気味の丸底を呈する。器面調整は内外面ともにミガキによるものである。このような特徴から、黒川式土器に該当すると考える。埋設土器36もしくは埋設土器35のどちらに供献されたかは不明である。

**供献土器 2 (SJP129. 442)** : 埋設土器36 (SJ126) ・35 (SJ128) の東側1mほどの地点から検出された小型の土器である。埋設土器36の底部よりも50cmほど深い所から出土している。斜位の状態で出土したが、本来は正位置にあったのかもしれない。内部のリン分析を行ったが、外部との差は明瞭でなかった。



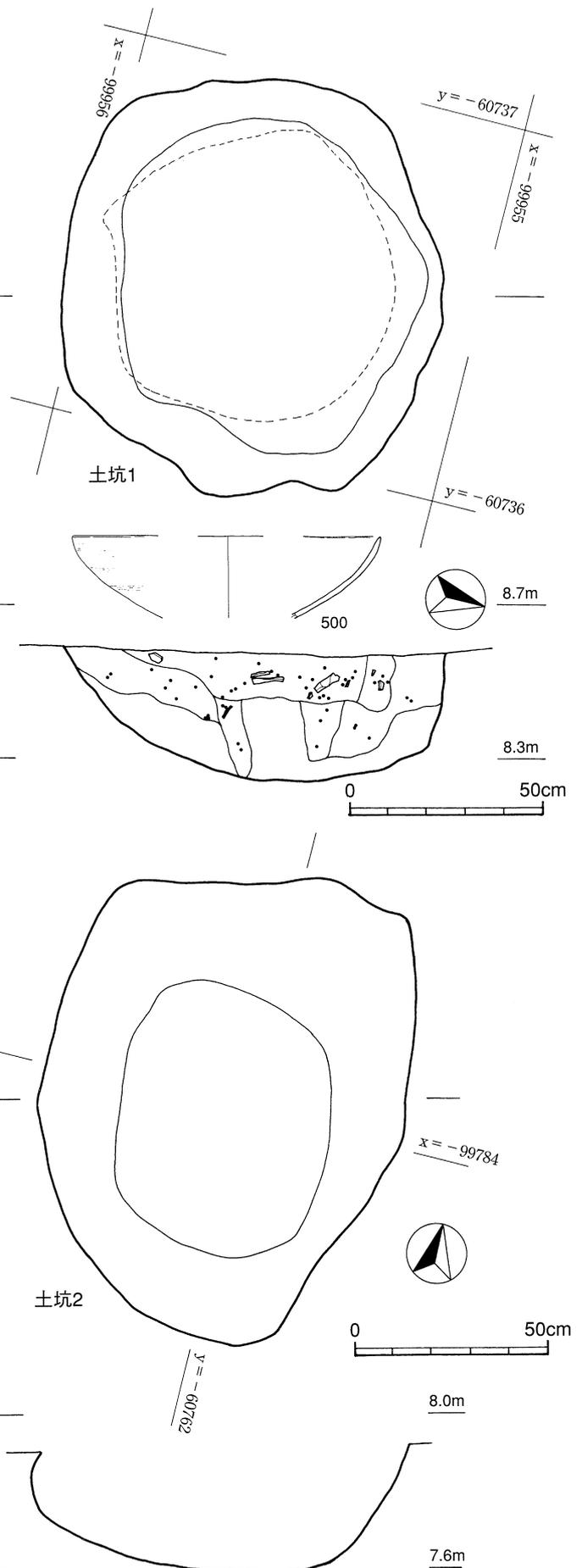
第121図 埋設土器検出状況(19) 埋設土器35(SJ128)・36(SJ126)・37(SJ125)・供献土器2(SJP129)

(3) 土坑

**土坑1 (SK71) :** C-23区のIV層上面で検出されたものであり、直径98.3cmのほぼ円形をなす。埋土内には、破碎した土器片とドングリの種子と考えられる炭化物が多く混在していた。炭化種子は埋土上位に多く、土器片もこの部分に集中している。土器片は複数の浅鉢、深鉢が存在し、貯蔵穴内を覆っていたというような様相はみられなかった。平面図の破線で描いた部分が炭化物の範囲であり、断面図の黒点が炭化物である。基盤となるIV層と埋土との識別は難しく、炭化物が出土する部分までを埋土としてとらえるにとどまった。検出面からの深さは35cmである。炭化種子は粘土質の層に付いてしまっていて崩れるものが多かったが、サンプル程度には確認することができた。したがって、炭化物の全体量は不明である。土坑内の炭化種子の同定を行った結果、258点のすべてがイチイガシであることがわかった。また、この炭化物による放射性炭素年代測定の結果、 $2800 \pm 60$ 年BP (紀元前930年) という測定値が得られている。最近のAMS法による土器に付着した煤の年代測定結果よりも若干新しい年代値ではあるが、浅鉢形土器 (500) や深鉢形土器底部の形状から、黒川式土器期に該当するものと考えられる。

土坑1から出土したドングリは分析の結果、すべてイチイガシであることが判明した。しかも果皮を残すことなく、子葉のままの状態である。肉眼による観察では、子葉の表面には縦方向に細い筋が残っている。名久井文明氏は、この細い筋が乾燥による収縮の皺であるとして、民俗事例をもとにドングリを乾燥させて保存し、食べる時に搗いて調理した「搗栗(かちぐり)」と同様のものとしている。全国の縄文時代草創期から平安時代にわたる遺跡出土のクリ及びドングリ類を実見するとともに、民俗事例も精力的に調査し、非常に説得力のある見解である。ただし、名久井氏本人も述べている様に、民俗事例では食べる直前に果皮を剥く点と、果皮を剥いた状態で土中に保存する例がみられない点は、遺跡での検出例と差異がある。これらの点については今後の課題であるが、民俗事例を知っている方々が高齢化しているので、早急な行動が必要となる。縄文時代の生活風景を復元するには、名久井氏が指摘する様に、「縄文時代の文化とよく共通する民俗例に関しては、それが古くから受け継がれてきた結果として現代に残っていると考えた方がよいということである。ことは物質文化にとどまらないであろう。」(p.21. 右0.43~0.46)という点を基にして、民俗資料と考古資料のつき合わせをやっていかなければならないと考える。

名久井文明 「乾燥堅果類備蓄の歴史的展開」『日本考古学』第17号 2004. 5 日本考古学協会



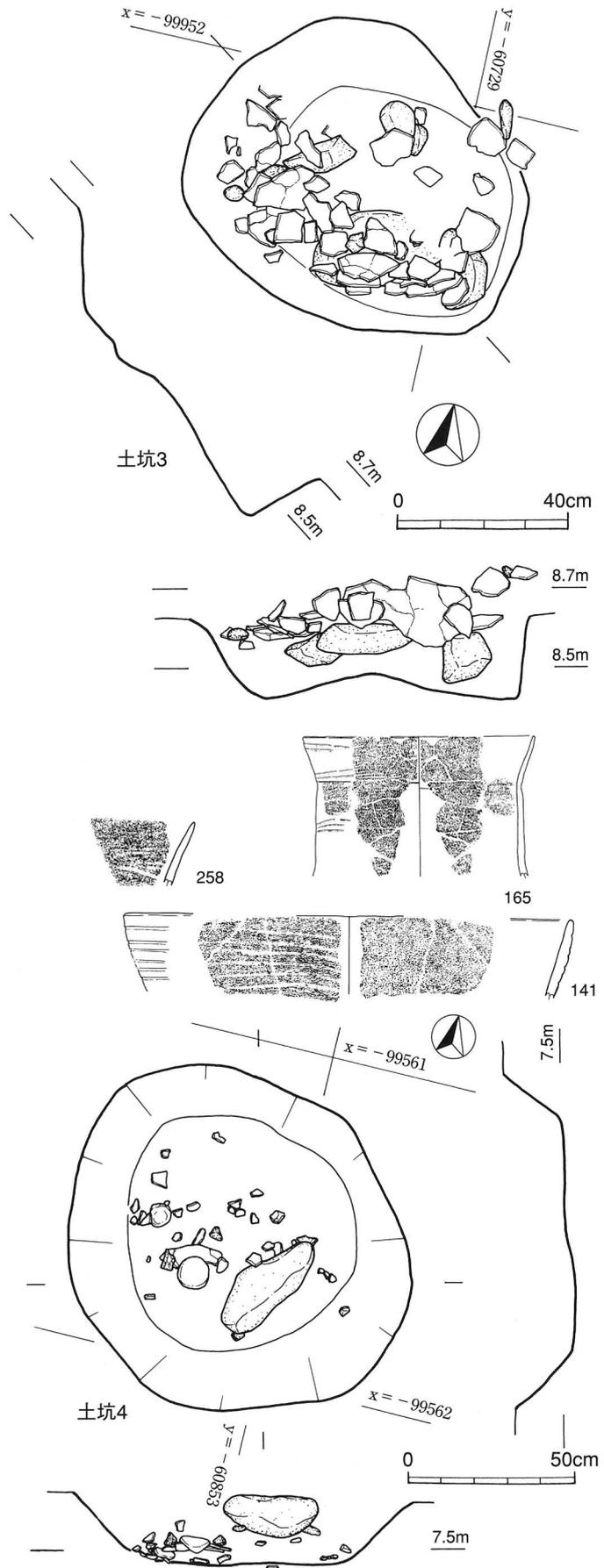
第122図 土坑検出状況(1) 土坑1(SK71)・2(SK118)

**土坑2 (SK118)** : B-14区のⅢ層を念押しのため深く掘り下げた時点で検出された。長径122.5cm×短径95cmの楕円形をなし、検出面からの深さは32.5cmを測る。埋土は淡い茶褐色粘質土であり、炭化粒をわずかに含むことで周辺の土と区別できる。埋土からは縄文時代後期末の土器片が出土した。土坑の性格としては不明である。

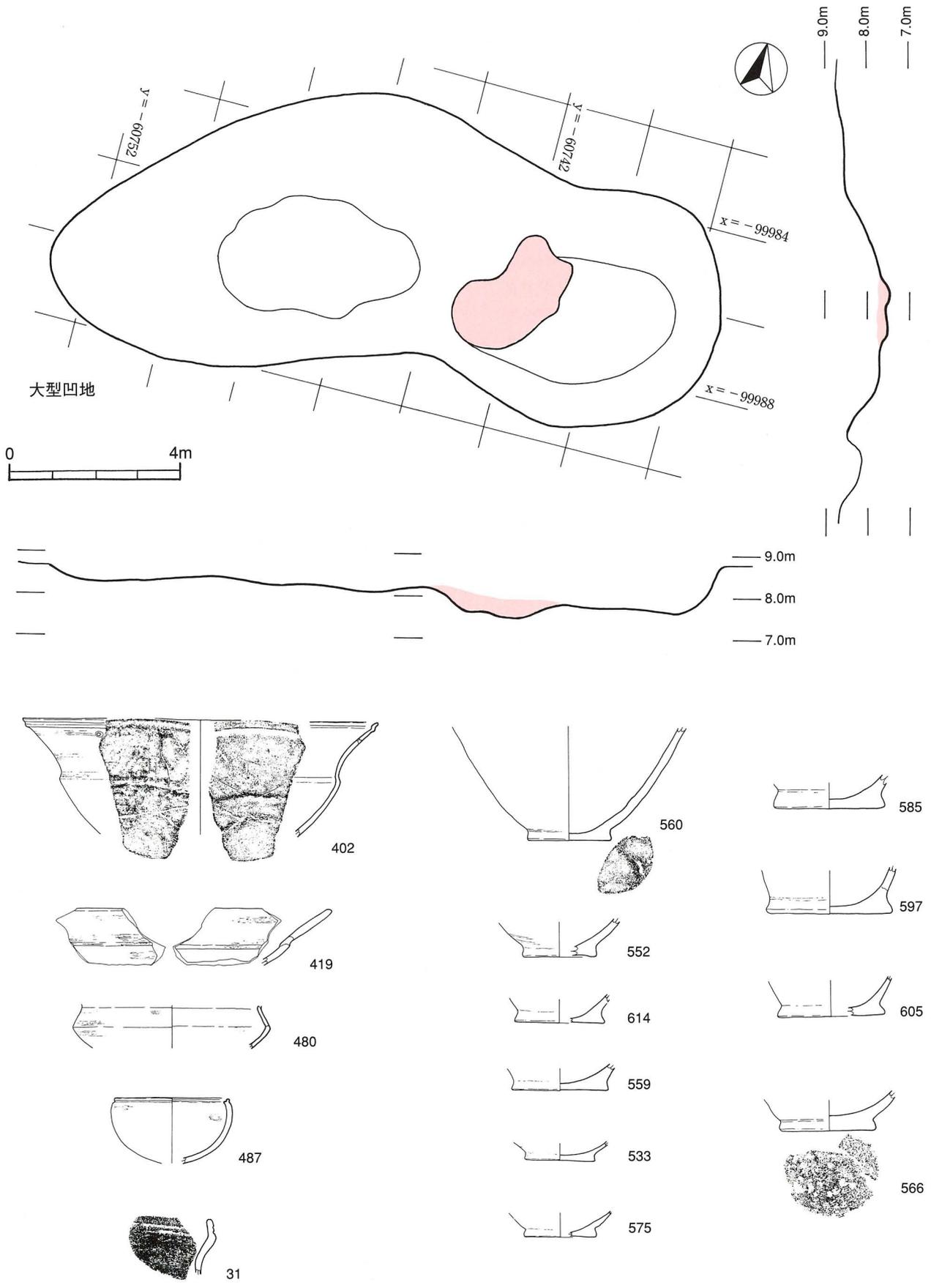
**土坑3 (SK169)** : B-23区のⅢ層を数cm掘り下げた時点で、土器が集中して出土したことから検出された。長径105cm×短径89cm、深さ24cmを測る楕円形の土坑である。埋土はⅢ層とほぼ同様であり、わずかに炭化物を含む。土坑の掘り方は確実なものではなく、土器あるいは炭化物の出るところでとめた。それほど周辺の土層との区別が困難であった。土坑の中位に小児頭大の礫が2個あり、その上に破砕した土器片が多量に出土した。小児頭大の礫の他にも数点の礫が検出されたことから、重しとして使用されたと想定される。土器については、土坑の廃棄後に捨てられたものとする。出土した土器は、長い肩部からわずかに外傾する口縁部をもつものであり、口縁部の段を辛うじてもっている。ほとんど摩耗しているためはっきりとはみえないが、器面調整は貝殻条痕によるものである。入佐式土器の新段階に該当すると考えられ、縄文時代晩期初頭の重しを伴う土坑であると考えられる。

**土坑4 (見入来SK1)** : C-2区のⅢ層で検出された。埋土は黄灰褐色弱粘質土である。ベースとしてはⅢ層と同様の土であり、炭化物を多く含む。焼土粒も含まれる。確実な掘り方ラインはみえないが、炭化物や遺物の有無で判断した。層としての焼土や床面が焼けている様子がみられなかったことから、長期的な火の使用は考えられない。ここでの短期的な火の使用、もしくは他の場所から焼却土を移したのではなかろうか。大きな礫があるものの、この下で土器片等が出土することから、この状態で使用された重しとは考えられない。土器の破片や石材等が雑多に出土することから、一次的な使用は不明であるが、二次的には廃棄穴になったと考えられる。実測できる遺物はなかったものの、土器片の特徴から縄文時代晩期と判断した。

**土坑5 (SK138)** : B-21区のⅢ層を数cm掘り下げた時点で検出された。周辺はやや砂質を帯びてきたが、この部分だけ粘質があり土器片や炭化粒が混じっていた。50cm程度の円形である。縄文土器は小さな破片が多く、接合できるものはほとんどなかった。浅鉢形土器の形式から、黒川式土器の時期に該当すると考えられる。略図しかなく、正確な位置と数値は不明である。



第123図 土坑検出状況(2) 土坑3(SK169)・4(見SK1)



第124図 大型凹地検出状況 (SX60)

(4) 大型凹地

**大型凹地 (SX60) :** C・D-24区で確認された遺構であり、掘り込みラインは全くみえなかったが、多量の土器や焼土塊が出土する範囲を遺構と判断した。注記の際、勘違いして「B-24 SX」と記入している遺物についても、この遺構内の出土である。埋土はⅢ層と全く同じである。土器は上部に多く、下部には10cm~20cm大の焼土塊が多く出土した(写真図版7)。また、玉類も7点出土した。土器や焼土塊は原位置を保っているとは考えられず、周辺から投棄されたような状態である。遺物の範囲から、長径15.8m×短径5.8m、深さ1.15mの楕円形をした凹地に復元できる。埋土内出土の土器の特徴から、入佐式土器の時期に該当すると考えられる。加世田市上加世田遺跡や大分県大石遺構で検出されている大型の円形土坑との類似性が考えられる。

(5) 凹地

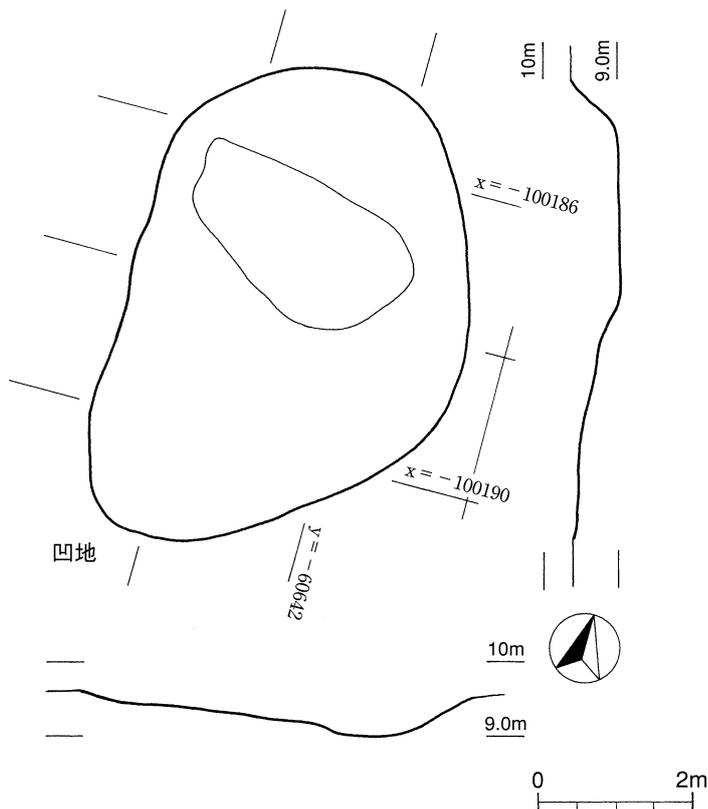
**凹地 (SF193) :** A-35区のⅢ層を掘り下げている段階で検出された焼土である。焼土自体で形作ることなく、廃棄されたような状態であると考えられる。焼土塊は8cm程度の大きさである。縄文土器も出土し、その範囲は直径4m程度の播鉢状になる。B-24区で検出された大型凹地(SX60)よりも小ぶりで、遺物の出土量も少ないが、同様な様相を示している。埋土はほとんどⅢ層と同じであり、底面も壁面も分離することができず、遺構の形状については、遺物の出土範囲によらなければならなかった。断面図のラインは直接現地で実測したのではなく、遺物の出土状況から推定したラインである。内部から炭化物が出土したので、樹種同定をした結果、コナラ属アカガシ亜属であることがわかった。出土土器で図示したものはないが、縄文時代後期末~晩期にかけての遺構である。遺構の性格については今後の課題としたい。

(6) 不明遺構

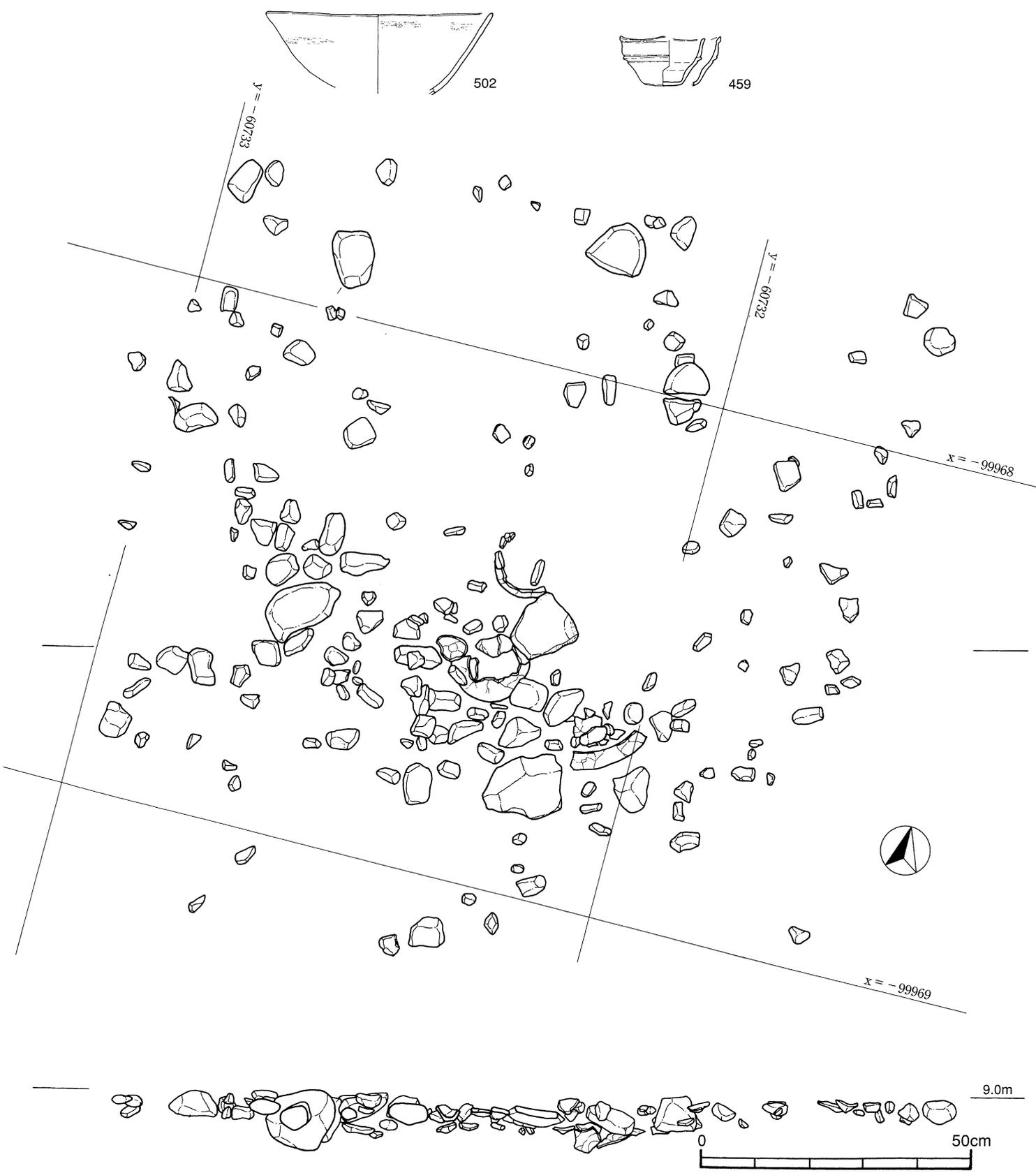
**不明遺構 1 (SX67) :** C-23区のⅢ層面で検出された遺構で、直径150cmの円形状に円礫が配置され、その中央に縄文時代晩期土器が数個押しつぶされた状態で出土した(写真図版6)。円礫は人頭大から拳大まで様々である。土器は浅鉢や赤く塗られた小型の碗状の土器(459)であり、一般的な場所と異なっている。何らかの呪術的な行為の場であったと考える。時期は小型浅鉢形土器や組織痕土器が多い区域であることから、黒川式土器新段階であると考えられる。

**不明遺構 2 (SF117) :** B-15区のⅣ層を念押しのため深く掘り下げた時点で検出した。南北幅400cmの略方

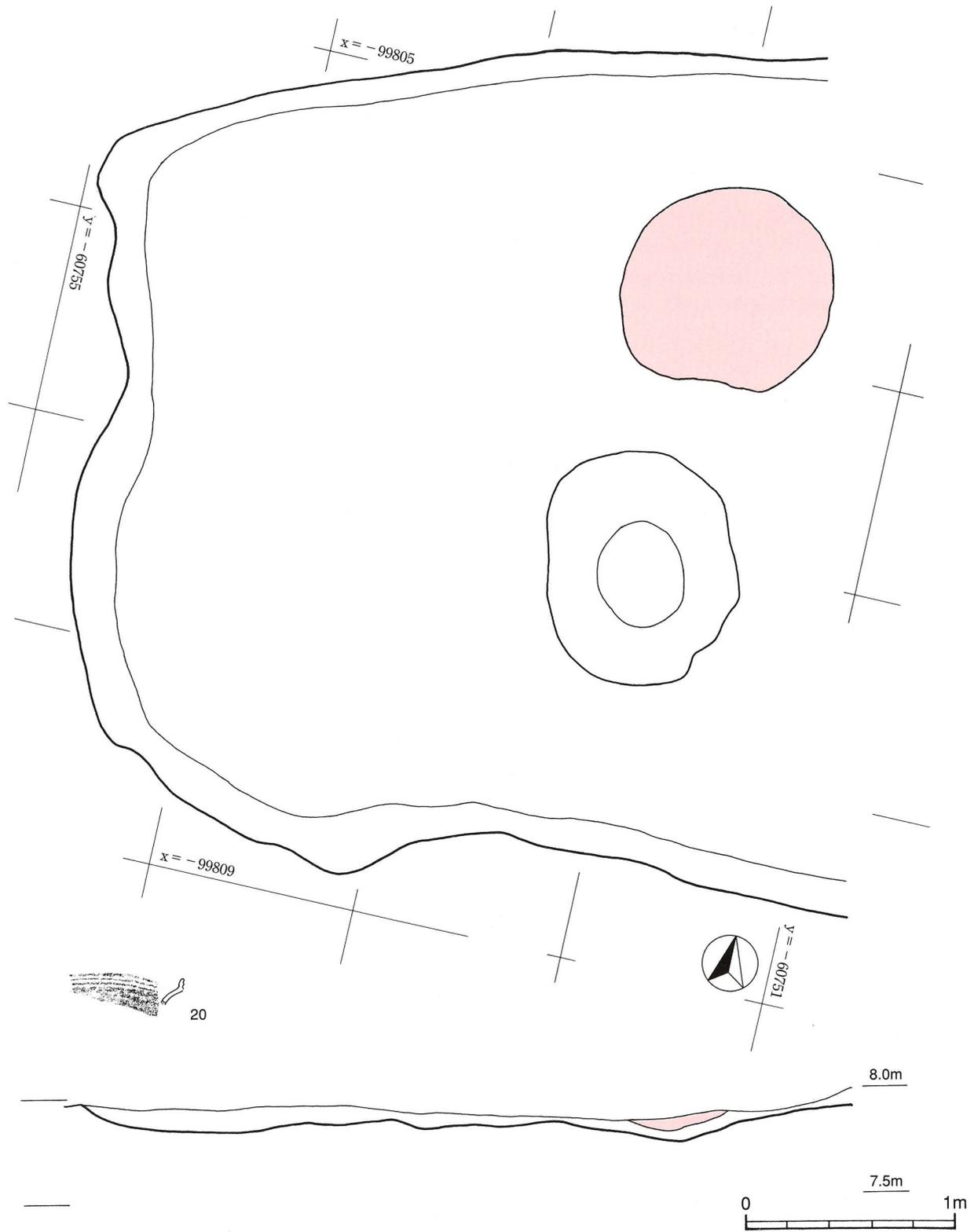
形で、深さは24.2cmを測る。中央南寄りには直径92.8cmの浅い窪みがあり、その北側に焼土がある。焼土部分は直径100cm、深さ7cmの凹レンズ状をなす。その周辺には茶褐色の粘質土が深さ5cm程度で堆積している。炭化粒や土器片などを含んでいる。この土は東側の調査対象範囲外にも続くようである。規模や形状としては住居跡の可能性もあるが、柱穴を確認することができず、住居跡とする積極的な根拠はみられない。深鉢形土器及び浅鉢形土器ともに上加世田式土器が出土したことから、縄文時代後期末に位置付けられると考える。



第125図 凹地検出状況 (SF193)



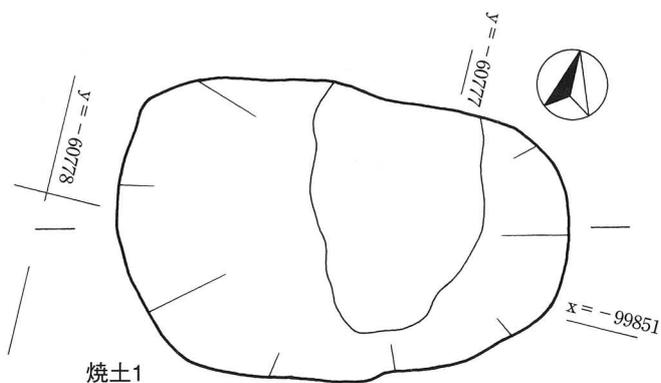
第126図 不明遺構検出状況(1) 不明遺構1(SX67)



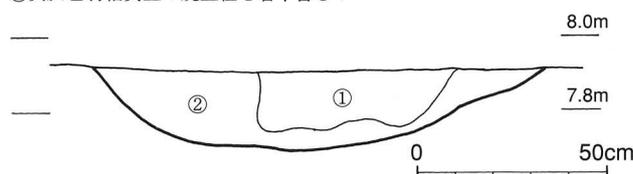
第127図 不明遺構検出状況(2) 不明遺構2(SF117)

(7) 焼土

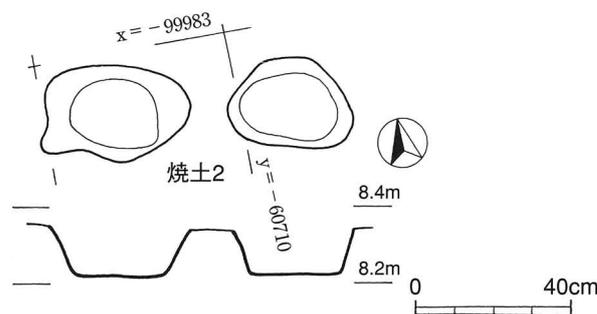
**焼土 1 (SF32) :** C-17区で、最後の念押しのための重機による掘り下げの際検出された。遺物包含層部分よりも約45cm低い場所で検出されたため、竪穴住居の屋内炉ともとれるが、住居自体のプランをとらえることはできなかった。埋土については、①は赤茶褐色粘質土であり、3cm大の焼土のブロックを多く含み、②は黄灰色弱粘質土であり、焼土粒を若干含んでいる。見入来遺跡でも縄文時代後期末～晩期の焼土が検出されていることと、農業開発総合センター遺跡群の金峰町諏訪牟田遺跡でも焼土が単独に発見された事例があることから、この時期に普遍的なものとしてあるのか今後検討したい。



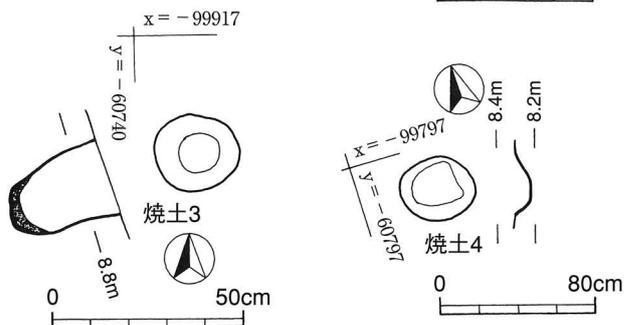
- ①赤茶褐色粘質土：3cm大の焼土のブロックを多く含む
- ②黄灰色弱粘質土：焼土粒を若干含む



**焼土 2 (SF173) :** B-24区の最終確認を重機で行っている時、IV層内で確認した炭化物を含む範囲である。焼土をわずかに含んでいる。埋土を掘り下げると、38cm×25cm×深さ12cmと33cm×24cm×深さ12cmの2つの小さな土坑となった。この部分では遺物は出土していないが、この上位では縄文時代後期末～晩期の土器が出土した。炭化物の樹種同定を行った結果、コナラ属アカガシ亜属と同定された。性格は不明である。

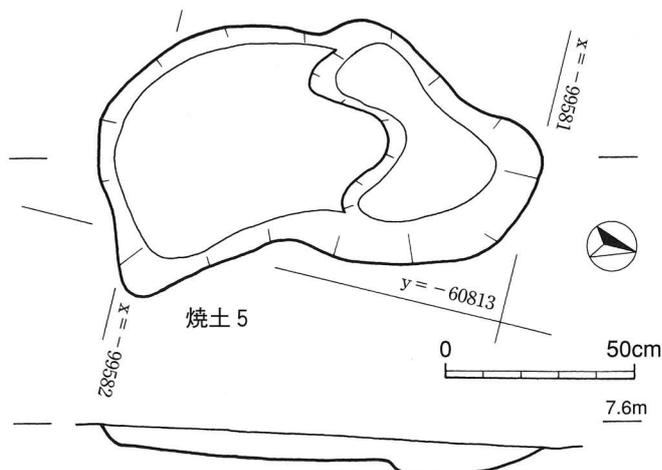


**焼土 3 (SF127) :** B-21区のIII層を掘り下げる途中で検出された。直径20cm、深さ28cmのピットである。埋土は灰茶褐色の粘土であり、炭化粒を含んでいる。周辺に同様の柱穴は確認できず、単独で存在したものと考えられる。埋土の状況と検出位置から、縄文時代のものと判断した。

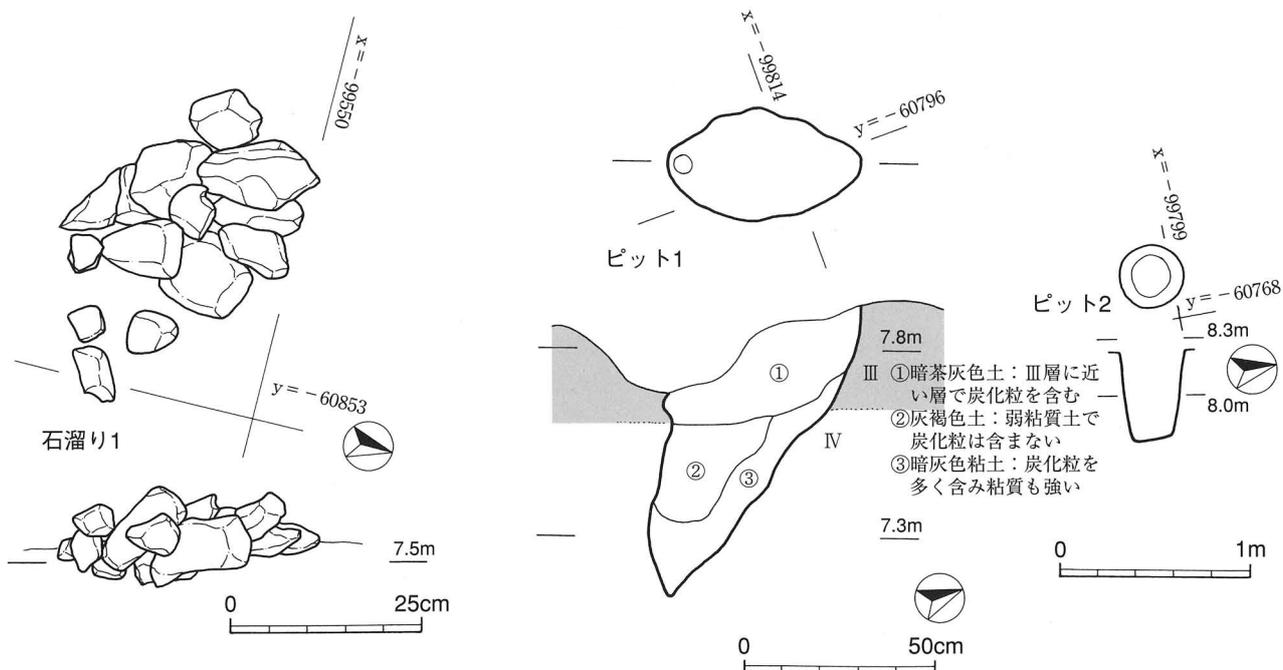


**焼土 4 (SF120) :** B-15区のIII層中半で検出された。淡い赤色に焼けた部分が40cm×30cm、深さ9cmで確認できた。出土遺物はみられないが、土層の状況から縄文時代後期末～晩期に該当するものと考えられる。

**焼土 5 (見SF 4) :** B-4区のIII層で検出された。117cm×64cmの略円形に赤橙色に焼けた部分がみられた。床面は2段に分かれており、深さは7cmと9cmを測る。焼土内での遺物の出土はなかったが、検出した層と周辺の遺物の散布状況から、縄文時代後期末～晩期のものと判断した。



第128図 焼土検出状況(1) 焼土1(SF32)・2(SF173)・3(SF127)・4(SF120)・5(見SF4)



第129図 石溜り及びピット検出状況 石溜り1(見SS2)・ピット1(SX28)・2(SP21)

(8) 石溜り

石溜り1(見SS2):C-2区のⅢ層で検出された。13点の礫が集中しており、砂岩と安山岩で構成されている。礫が小ぶりで点数が少ないこと、小範囲に集中し掘り込みがみられないこと、礫が赤化してないことなどから、縄文時代早期にみられる集石遺構とは性格が異なると考えられる。しかし、どのような性格であったのかは類例を待ちたい。土器片が1点伴うことと、検出した層位から、縄文時代後期終末～晩期に位置付けられると考える。計測した8点については表のとおりである。

石溜り1(見SS2)の礫計測値

	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
1	15	7	6	750	砂岩
2	12	8	6	—	砂岩
3	12.5	9.5	8	—	安山岩
4	15.5	11.5	10	—	安山岩
5	11	9	5	485	安山岩
6	9	8	5	450	砂岩
7	8	8	6	572	安山岩
8	4	4.5	2.5	50	安山岩

石溜り2(見SS3)の礫計測値

	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
1	7.5	7.5	5	440	安山岩
2	9	5.5	4	230	砂岩
3	15	8	4.5	600	砂岩
4	7	4.5	2.5	80	砂岩
5	8	6.5	3	185	安山岩
6	11	6	3.5	190	砂岩
7	5.5	4.5	4	100	砂岩
8	4.5	4	2.5	70	砂岩
9	3.2	3	1.6	22	砂岩
10	5	4	3.5	56	安山岩

石溜り2(見SS3):C-3区のⅢ層で検出された。

写真撮影後、水没により崩壊したので、実測図は作れなかった。礫の数は10点で、砂岩及び安山岩で構成されていた。石溜り1(見SS2)と同様な内容をもっていることから、時期・性格とも同じだったと考えられる。計測した10点については表のとおりである。

(9) ピット

ピット1(SX28):D-15区で検出したピット状の土坑である。検出面での平面形が長径52cm×短径31cmの楕円形を呈する。主軸はほぼ南北である。南側は垂直に、北側は斜位に掘り込んでいるのが特徴である。深さは74cmを測り、底面は先細りとなっている。埋土に炭化粒を多く含み粘質が強い。土器片が混在していることから縄文時代の所産であると考えられるが、用途は不明である。断面を截ち割ると、写真図版20のように掘り込みラインより外側がかなり変色しており、低地の粘質土地帯では、埋土が周辺の土壌に対して大きな影響を及ぼすことがわかった。

ピット2(SP121):B-15区のⅢ層中半で検出された。直径34cm、深さ49cmのピットであるが、内部から縄文時代後期終末～晩期の土器片が折り重なるように出土した。問題意識をもちず掘り上げてしまったために、出土の状況がわかる図はない。故意に埋めたと思われるが性格的には不明である。

## 2. 縄文時代の出土遺物

### (1) 縄文土器

#### ① 深鉢形土器 (第130～170図 1～323)

大坪遺跡で出土した深鉢形土器を、器形や文様及び器面調整を基にして、Ⅰ類～Ⅳ類に分類した。さらに分けられるものについては、細分してある。個別の土器の記述については、埋設土器のところを書いてあるので、ここでは全体的な特徴を述べるとともに、埋設土器以外の代表的な遺物の記述のみとする。なお、それぞれの遺物はどれかの類に含めてあるが、厳密な区分ではないことをお断りしておく。

**Ⅰ類** (1～112) : 胴部最大径が器高を二分する位置にあり、口縁部直径よりも大きい。底部は上げ底もしくは平底で、すばまっている。胴部下半はやや丸みをもちながら胴部最大径に至る。胴部最大径で「く」の字状に屈曲し、この部分の上部に凹線を巡らすものもある。胴上部から頸部にかけては外反しながら内傾し、口縁部へ至る。口縁部で再び屈曲させ、短い口縁部文様帯をつくり、1～3条の凹線を巡らしている。器面調整はミガキによるものである。口縁部の形状からⅠa・Ⅰb類に細分できる。既存の型式名では、上加世田式土器から入佐式土器古段階に該当する。

**Ⅰa類** (1～57) : 口縁部が内側に屈曲するものであり、口縁部幅は狭い。凹線は先端の丸い棒状工具あるいは半截竹管の皮側を使用し、丁寧に引かれている。凹線の条数は少ない。上げ底の底部が多い。

3は、復元口径33cm、器高14.2cm、それに確実な底径8.4cmを測り、深鉢形土器と浅鉢形土器の中間的な形の土器である。胴部最大径部分で「く」の字状に強く屈曲し、頸部はわずかに内傾する。口縁部との接点が見つからなかったため、正確なことは言えないが、大きく外反する口縁部をもつ。口縁部には、外開きした端部にもう一段粘土紐を重ねることによって、外面は1条の凹線を巡らしているように見える。胴部下半は、120度の角度をもって、大きく開いている。底部はわずかに角度を変えて、高台風に作り出しており、底面は上げ底である。黒褐色を呈し、内外面ともミガキによる器面調整である。上加世田式土器に該当すると考える。

**Ⅰb類** (58～112) : 口縁部が直立もしくは外に開くものであり、口縁部幅は広い。凹線の条数は3～7本である。胴部屈曲はⅠa類ほど強くなく、この部分に凹線を巡らすものはない。胴上部から頸部にかけての反りは弱い。Ⅰa類に比べて器壁が厚い。底部は平底が多い。入佐式土器古段階に該当する。

110については、有明町教育委員会の御厚意により、胎土内の植物珪酸体分析を実施したが、イネ属などの栽培植物は検出されなかった。

**Ⅱ類** (113～186) : 胴部最大径は器高を二分する位置よりやや上にあり、口縁部直径と同じかやや小さい。底部はやや厚く、円盤状をなしている。胴部下半はわずかに内湾しながら胴部最大径に至る。胴部最大径で丸みを帯びながら緩く内側へ屈曲する。胴上部から頸部にかけてもわずかに内湾気味に内傾し、口縁部へ至る。口縁部は肥厚させ、沈線を巡らしている。口縁部幅はやや広く、沈線の条数も多い。器面調整はナデもしくは貝殻条痕による。口縁部の形状からⅡa・Ⅱb類に細分できる。既存の型式名では入佐式土器新段階に該当する。

**Ⅱa類** (113～162) : 外面の口縁部文様帯の段が明瞭で、沈線も1本1本はつきり描かれる。口縁部の屈曲がⅠ類に似たものと、外側に「く」の字状に屈曲させたものがある。Ⅱb類に比べて口縁部文様帯はやや狭く、器壁が厚い。136・137は口縁部文様帯に鋸歯文を描くものである。

**Ⅱb類** (163～186) : 口縁部文様帯の段がやや不明瞭で、沈線の描き方がやや雑であり、貝殻条痕によるものも多い。口縁部の屈曲も弱い。口縁部文様帯はやや広く、器壁は薄い。型式学的にⅡa類に後出するものと考えられる。

**Ⅲ類** (187～220) : 肩部をもつものであり、頸部から外傾する口縁部に至る。底部は厚く、張り出しを持つ。底部から胴部はほぼ直線的に外開きし、肩部で丸く内側へ湾曲する。肩部にリボン状の突起をもつものもあり、また口縁部にも突起を付けるものがある。口縁部はわずかに段をもつものもあるが、段の無いものもある。口縁部の幅は広く、横方向の条痕によって文様効果を出している。器面調整は内外面とも貝殻条痕によるものである。既存の型式名では黒川式土器に該当する。

195については、有明町教育委員会の御厚意により、胎土内の植物珪酸体分析を実施したが、イネ属などの栽培植物は検出されなかった。

**Ⅳ類** (221～308) : 器形などの特徴が、上述したⅠ類～Ⅲ類に含まれない土器であり、内外面とも貝殻条痕もしくは条痕による器面調整である。胴上部から口縁部にかけての形状からⅣa～Ⅳd類に細分した。

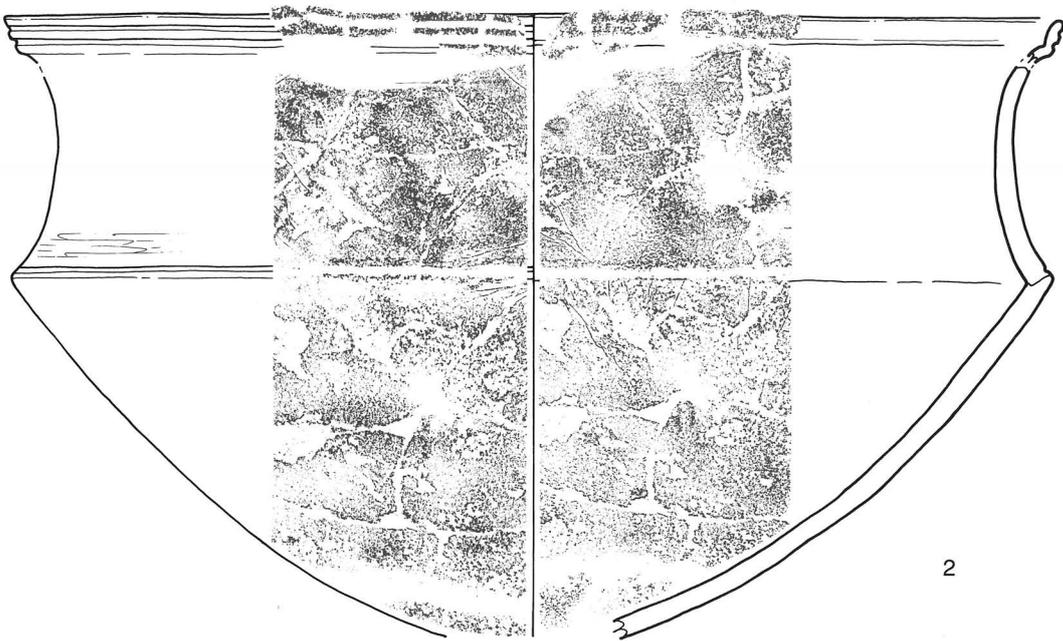
**Ⅳa類** (221～229) : 胴上部で屈曲し、外反しながら口縁部に至るものである。

**Ⅳb類** (230～253) : 胴上部でわずかに屈曲し、直口する口縁部に至るものである。

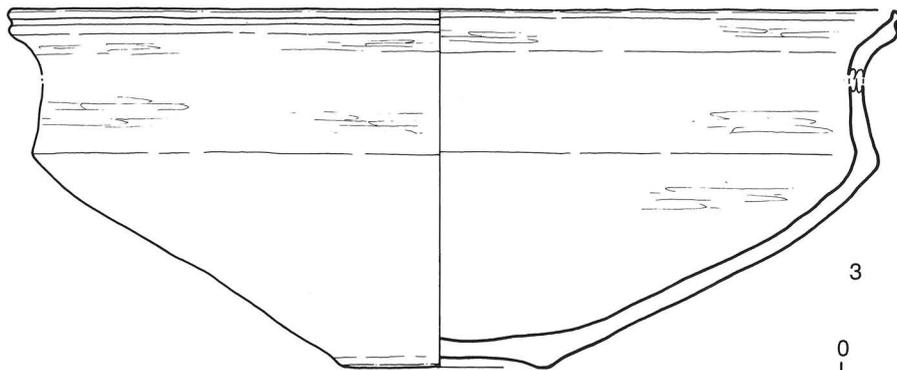
230は確実な接合点はなかったため、図上で復元したものである。底部は張り出しのある脚台状となるものであり、やや直立気味に立ち上がる。胴部でわずかに内傾し、やや外反気味ではあるが、ほとんど直立して口縁



1



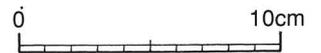
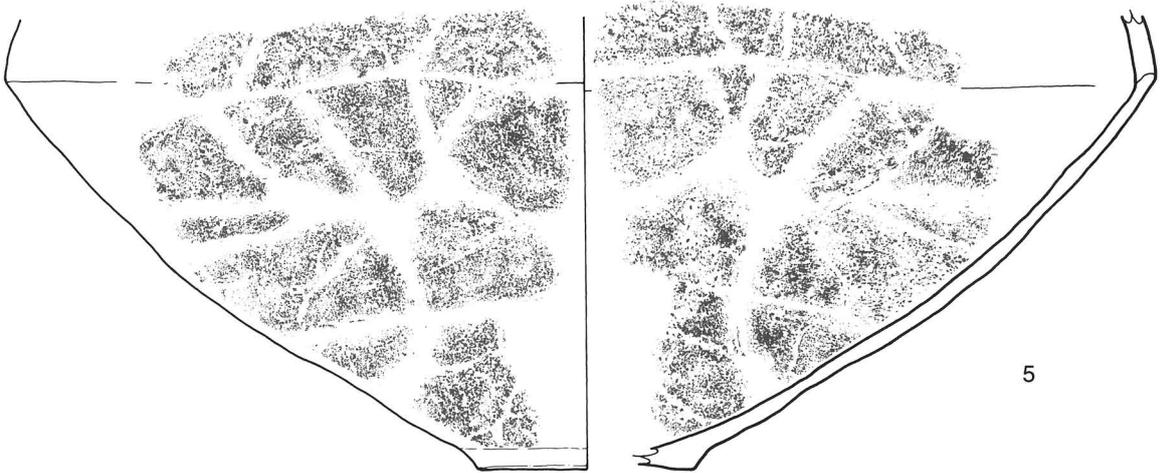
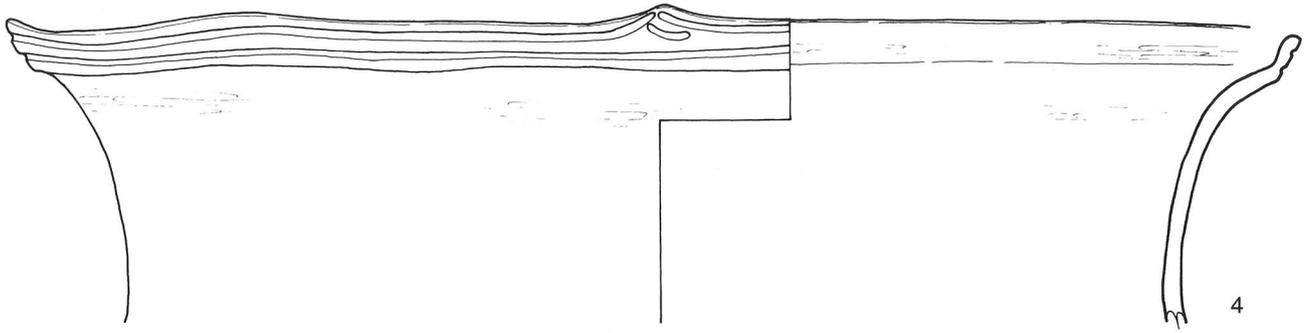
2



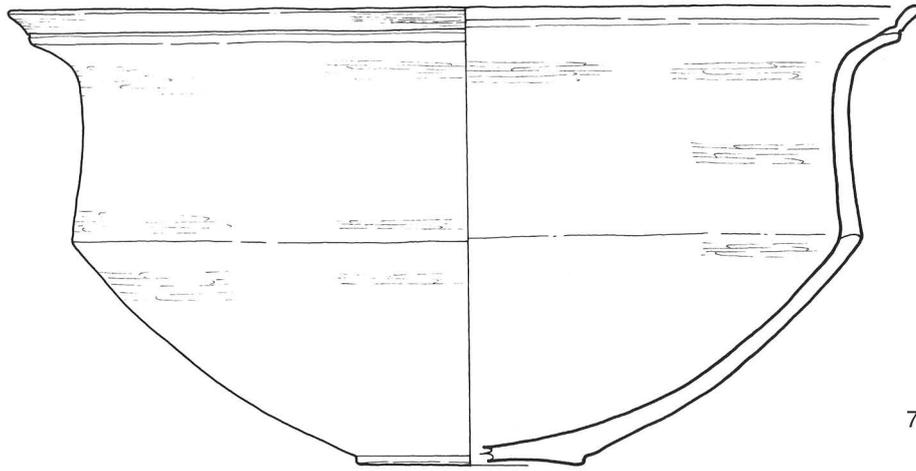
3



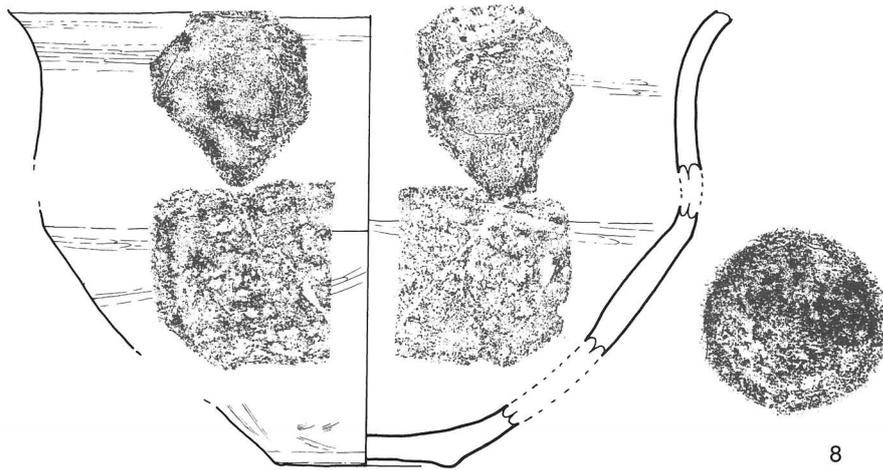
第130図 出土遺物 縄文土器(1)



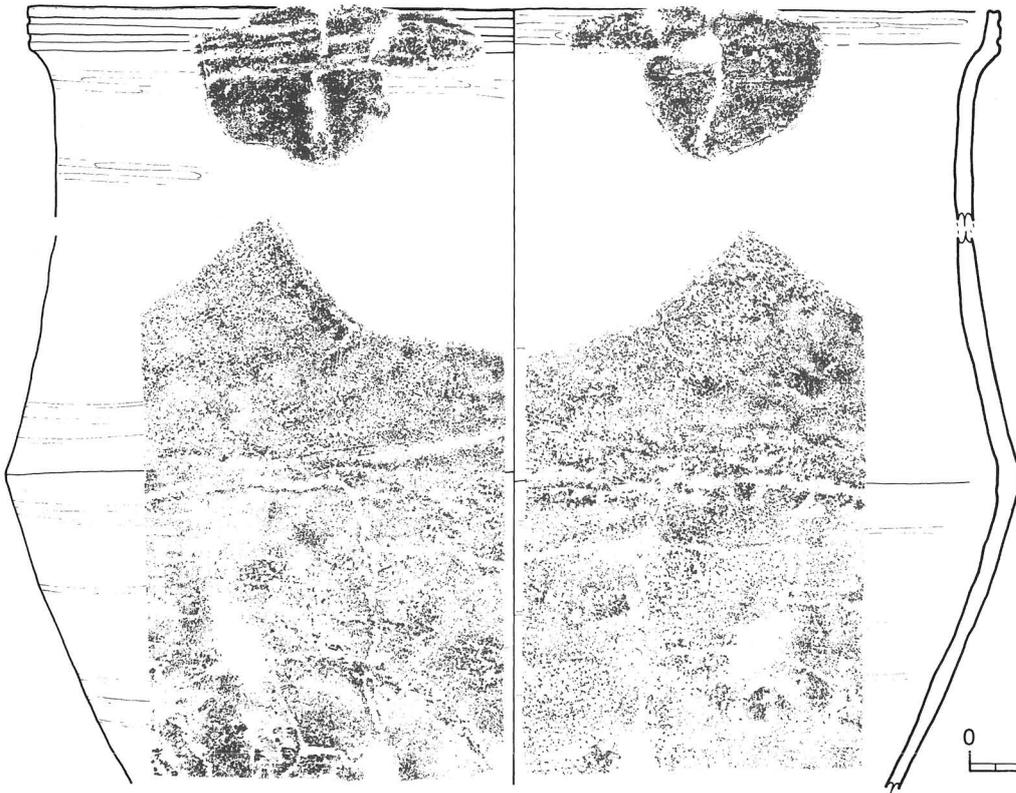
第131図 出土遺物 縄文土器(2)



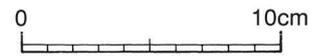
7



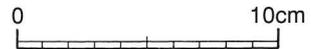
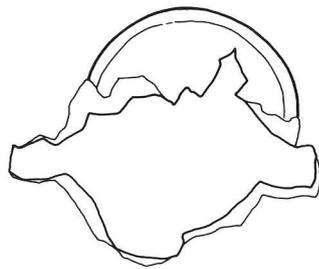
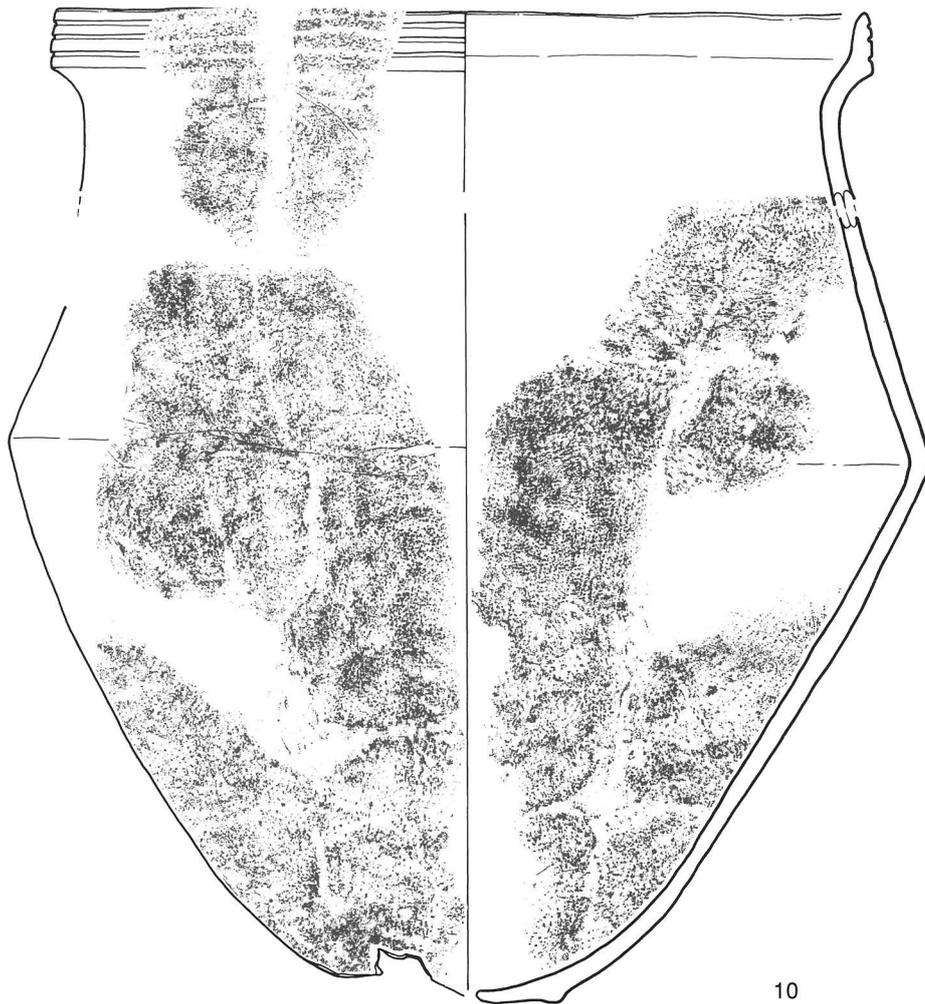
8



9



第132図 出土遺物 縄文土器(3)



第133図 出土遺物 縄文土器(4)

部へ至る。口唇部は生きていのかどうか迷ったのであるが、風化の度合いが他の面と変わらない点と、これ以上高くなる例を知らないことから判断した。底面には木の実の圧痕が浅く付いている。胴部から口縁部の変化がほとんど無いのであるが、底部の形態から黒川式土器に該当すると考えられる。

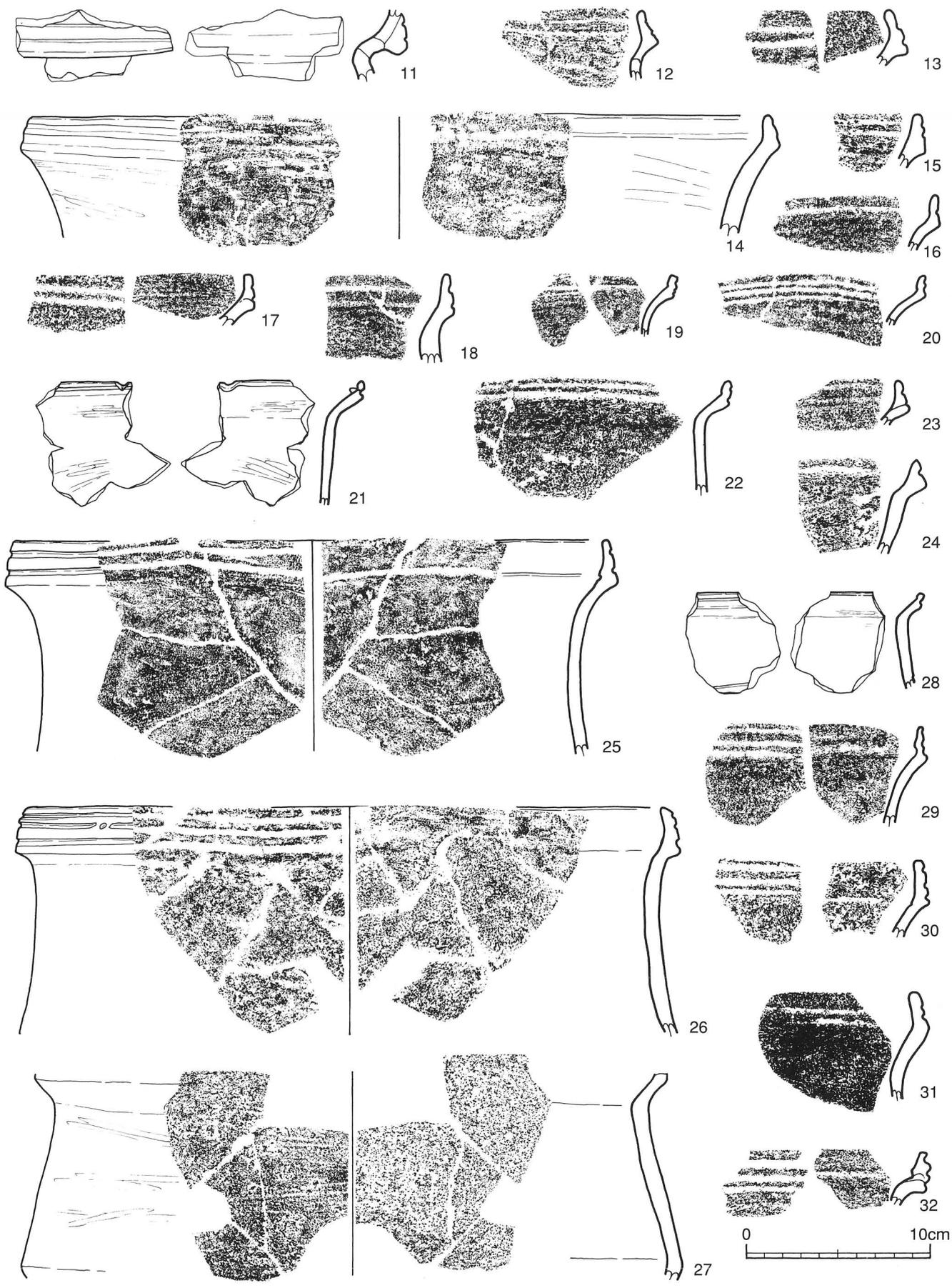
**IVc類** (254～279)：屈曲せずに、胴部と口縁部の境が無いものである。

**IVd類** (280～308)：ある程度口縁部の形状がわかる土器を掲載した。したがって、もう少し残存率が良ければ他の類に含まれる可能性のある土器もある。

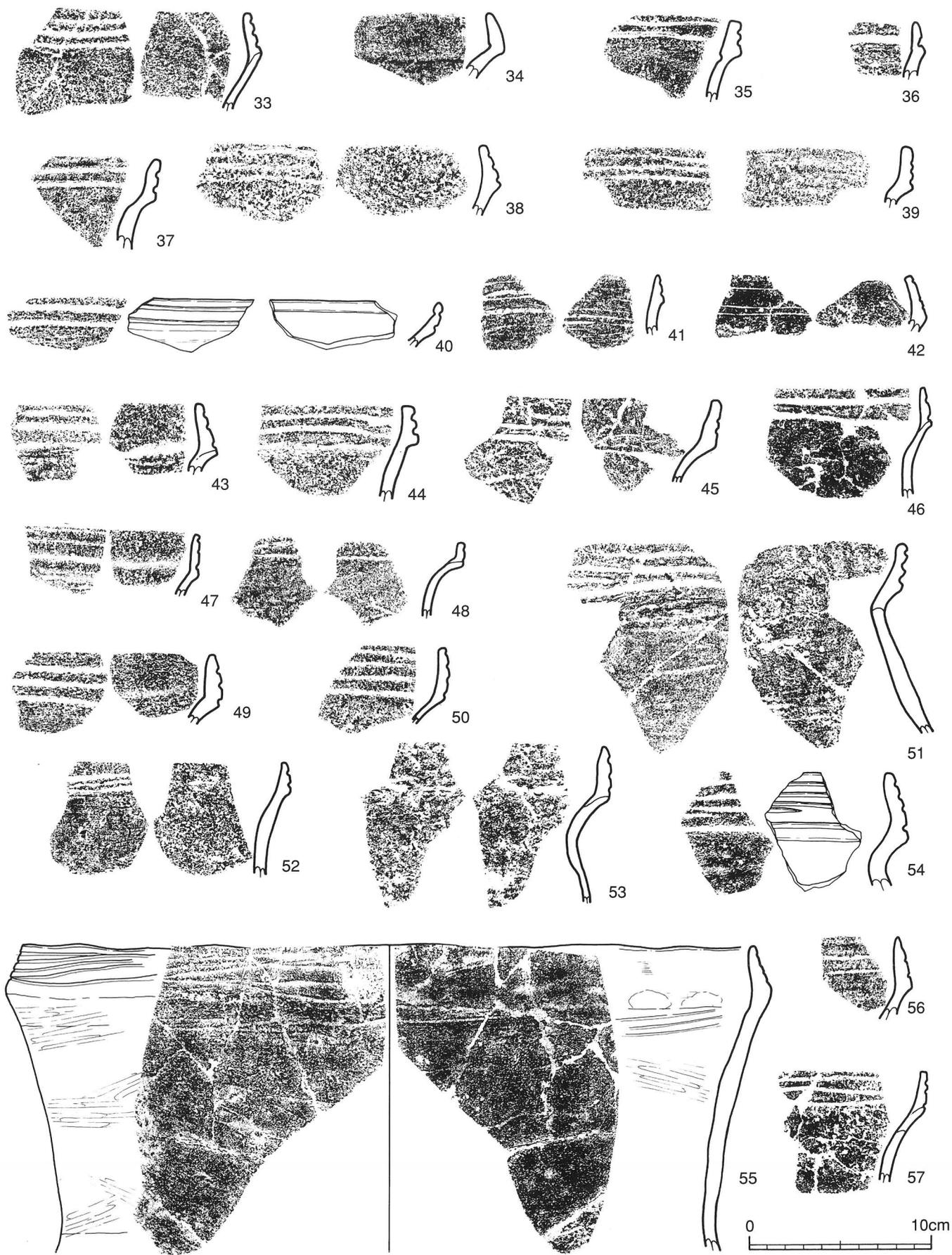
294の口縁部には、器面が粗くてはつきりしない

が、654に類似した文様が描かれている。303は、製作途中でヒビ割れを生じたのか、焼成前に内外面から粘土を補填してある。しかし、それでも使用中に割れてしまったのか、補修孔を開けて丁寧に使った様子が窺える。

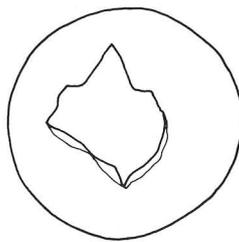
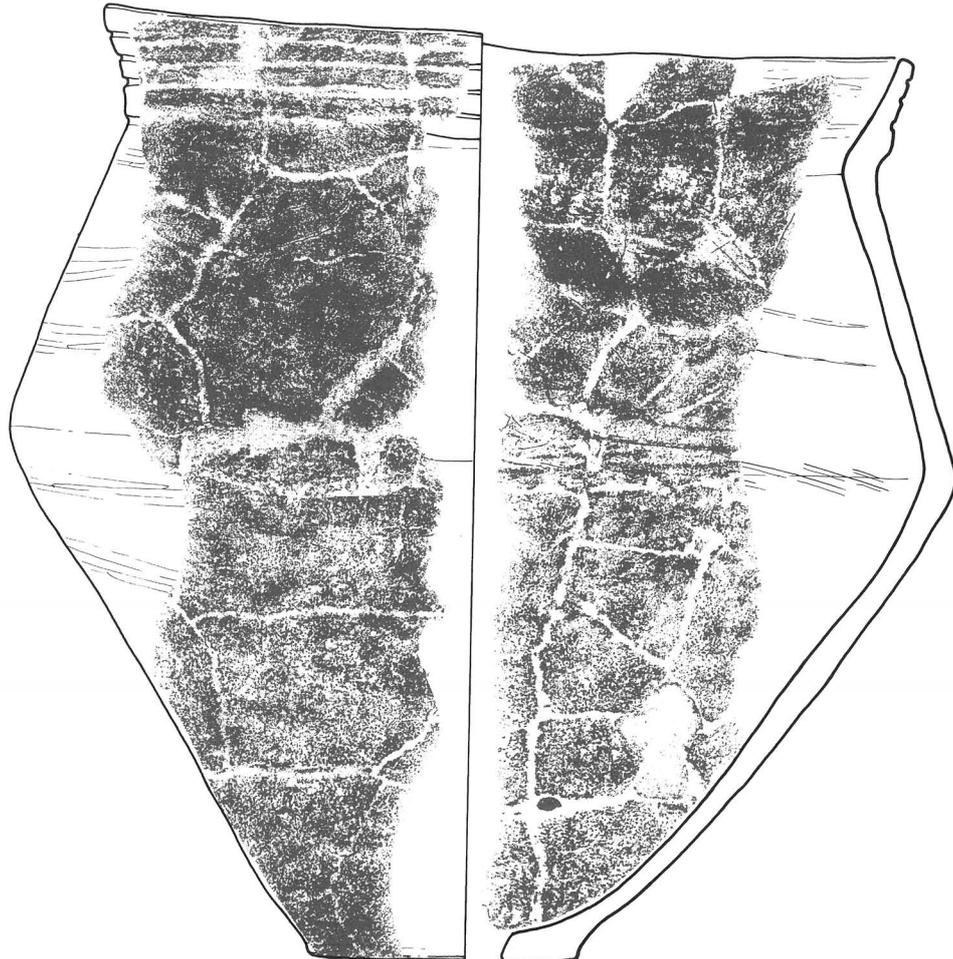
**その他の深鉢形土器** (309～323)：I類～IV類の中にも含まれない土器と極少量の土器を個別に紹介する。309～314は口縁部を肥厚させるものであり、刻目は施さない。無刻目突帯文の時期に該当すると考える。315～321は刻目突帯文土器である。「く」の字形に大きく屈曲し、大ぶりの刻目を施す。322は口縁部が緩



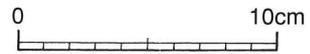
第134図 出土遺物 縄文土器(5)



第135図 出土遺物 縄文土器(6)



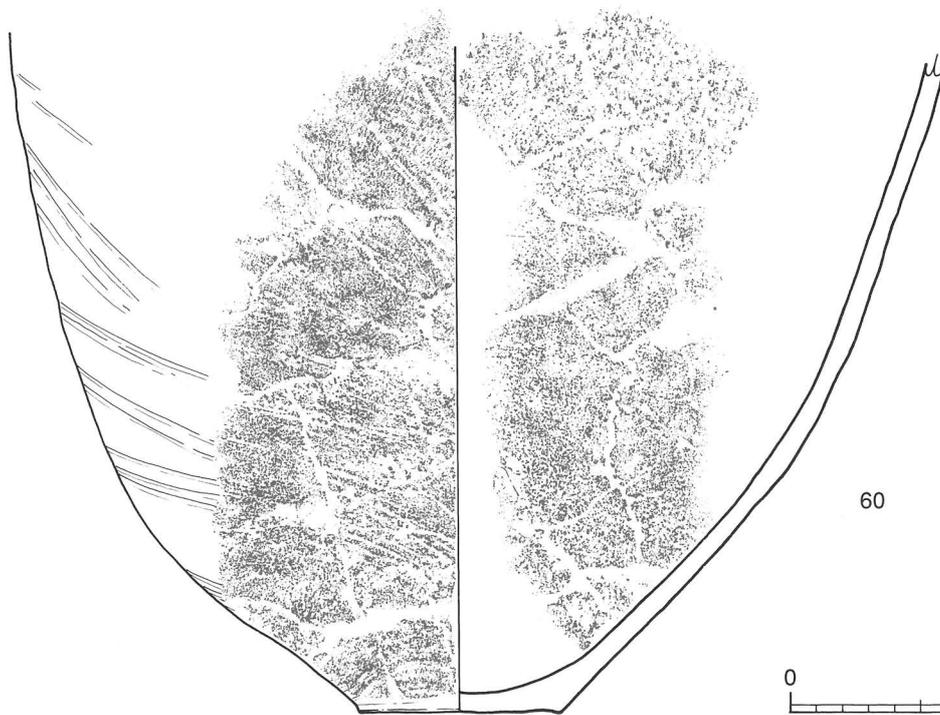
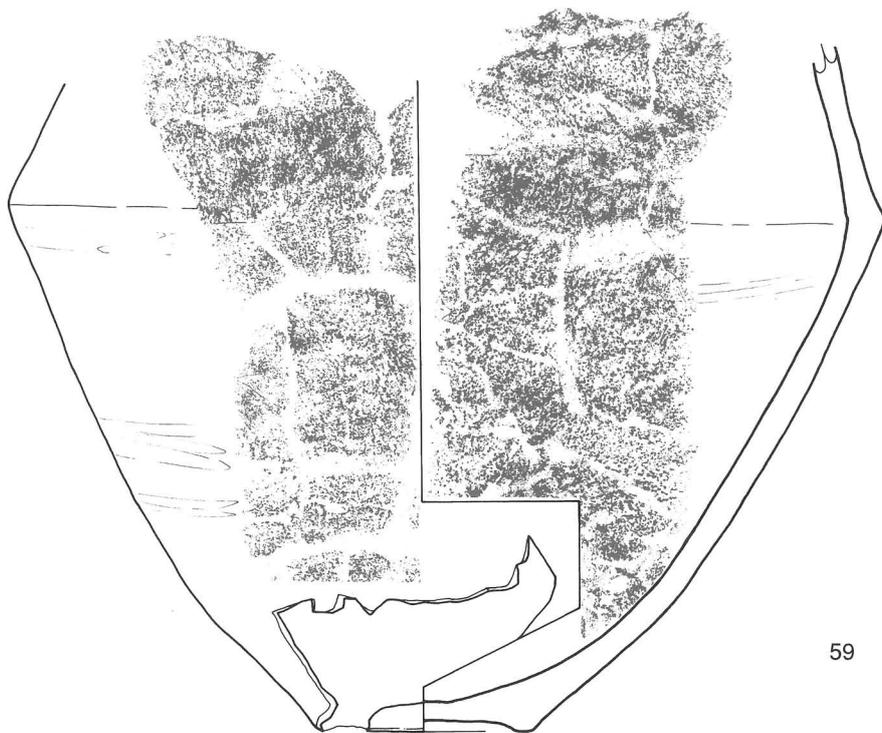
58



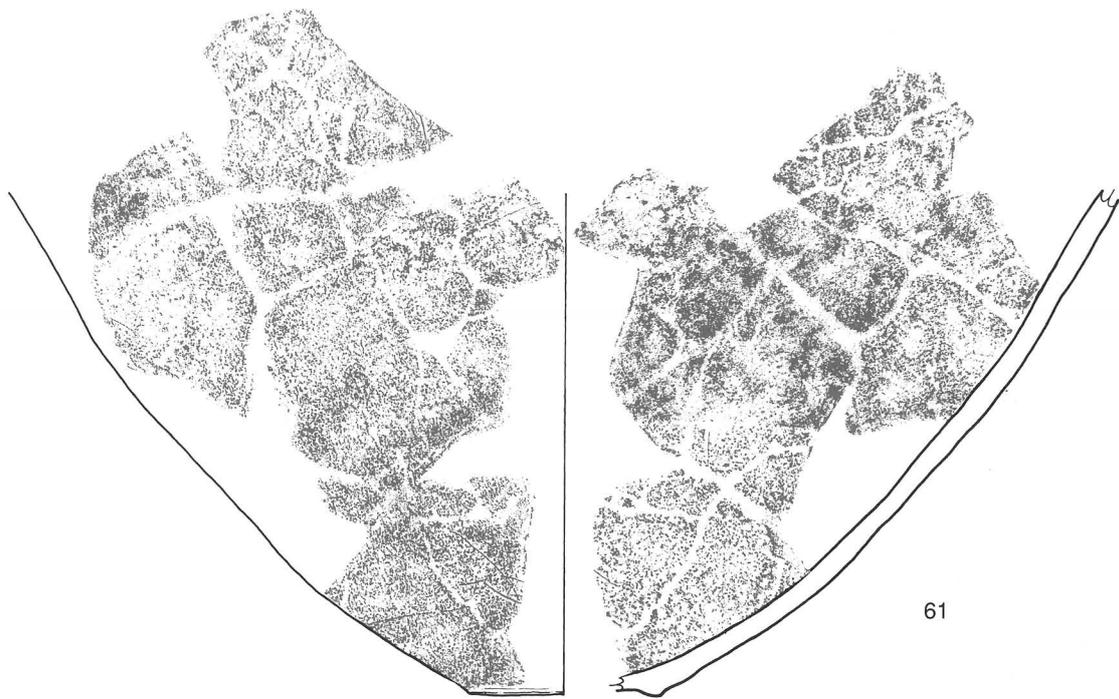
第136図 出土遺物 縄文土器(7)

表10 縄文土器観察表 1

図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他 備考	写真図版	
								外面	内面					
第130 図	1	B-15	SJ124		深鉢形土器	完形	I a類				-	-	25	
	2	B-5	SJ119		深鉢形土器	完形	I a類	極暗赤褐・ミガキ	極暗赤褐・ミガキ		-	凝灰岩	25	
	3		4584		深鉢形土器	-	I a類				-	-	-	
第131 図	4	B-14	SJ79		深鉢形土器	-	I a類	赤褐・ミガキ	赤褐・ミガキ		-	軽石	-	
	5	B-17	SJ8		深鉢形土器	-	I a類	にぶい黄橙	褐灰		-	2mm大の石英	27	
	6	C-15	SJ38		深鉢形土器	胴部～底部	I a類	にぶい黄・凹線・ミガキ	にぶい黄・摩耗		-	金雲母	26	
第132 図	7	C-16			深鉢形土器	-	I a類	黄灰・ミガキ	黄灰・ミガキ		-	金雲母	27	
	8	B-15			深鉢形土器	-	I a類				-	-	-	
	9	C-16			深鉢形土器	-	I a類	黒・ミガキ	浅黄橙		-	2mm大の石英	27	
第133 図	10	B-17			深鉢形土器	胴部	I a類	明赤褐	黒		-	金雲母	27	
第134 図	11	D-19		Ⅲ	深鉢形土器	胴部	I a類	浅黄橙・凹線	黄灰・磨耗	7428	8.24	金雲母	-	
	12				深鉢形土器	口縁部	I a類	褐・黄橙・凹線・ミガキ	褐・ミガキ	大坪	-	-	-	
	13	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい褐・凹線・ミガキ	褐・ミガキ	462	8.03	-	-	
	14	D-17			深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・ミガキ	暗褐・ミガキ	7920	8.29	-	-	
	15				深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・凹線	黒褐・ミガキ	大坪	-	角閃石	-	
	16	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	I a類	黄橙・凹線・ミガキ	黄橙・ミガキ	8344	8.30	角閃石	-	
	17	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・凹線・ミガキ	暗褐・ミガキ	8366	8.25	角閃石・軽石	-	
	18	D-16		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	I a類	黒・凹線・ミガキ	黒・ミガキ	7835	8.34	-	-	
	19	B-14				深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・凹線・ミガキ	黒褐・ミガキ	14087	8.18	-	-
	20	B-15	SF117			深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい褐・凹線・ミガキ	にぶい褐・ミガキ	大坪	-	角閃石	-



第137図 出土遺物 縄文土器(8)



61



62



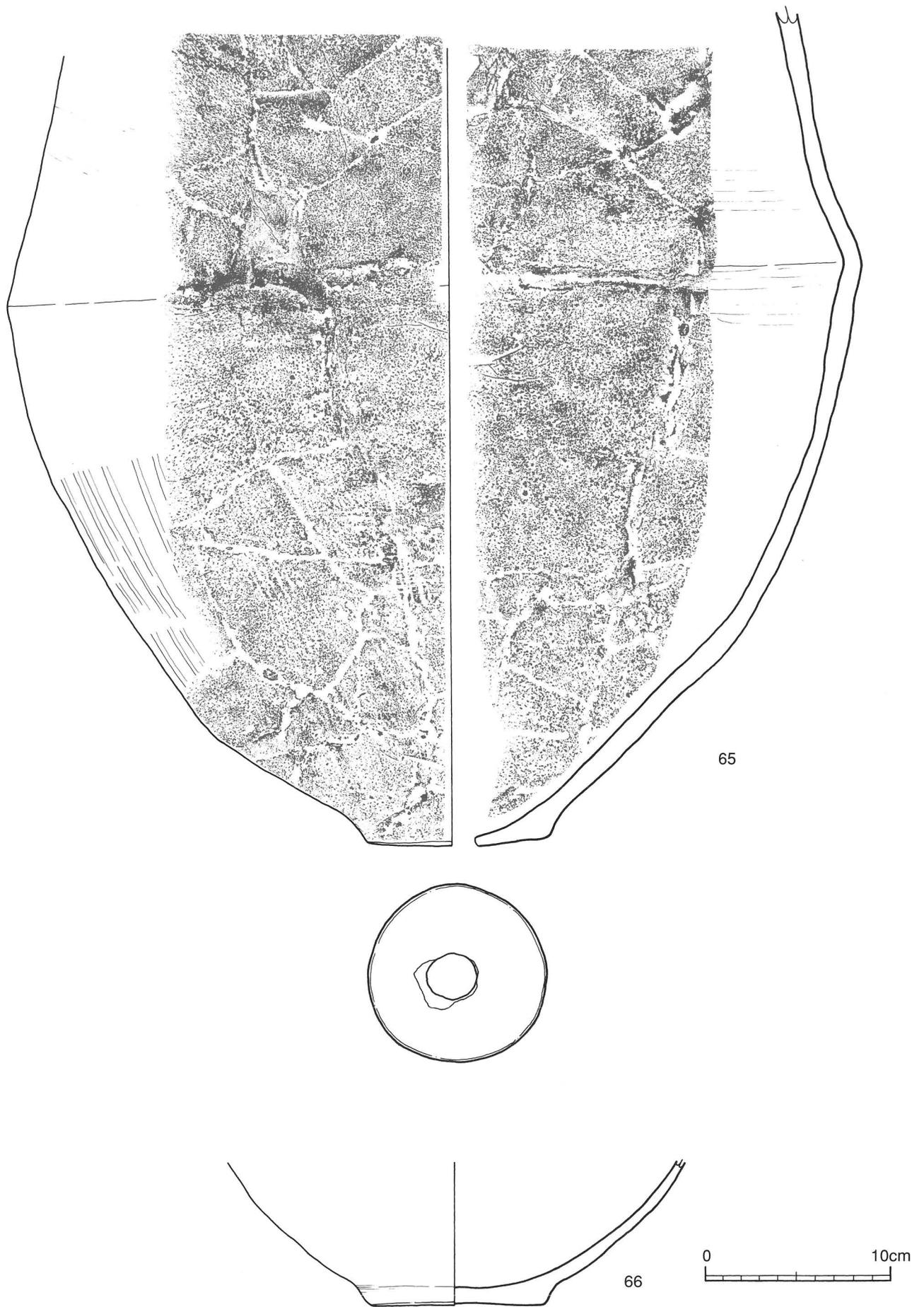
第138図 出土遺物 縄文土器(9)

表11 縄文土器観察表 2

図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他 備考	写真図版	
								外面	内面					
第 134 図	21				深鉢形土器	口縁部	I a類	褐灰・凹線・ミガキ	褐灰・ミガキ	注記ナシ	-	金雲母	-	
	22	B-15			深鉢形土器	口縁部	I a類	黒・凹線・磨耗	にぶい褐・ナデ横	大坪	-	金雲母	-	
	23				深鉢形土器	口縁部	I a類	灰褐・凹線・ミガキ	灰褐・ミガキ	大坪	-	角閃石	-	
	24				深鉢形土器	口縁部	I a類	明褐・凹線・磨耗	黒褐・磨耗	大坪	-	金雲母	-	
	25	B-14		III	深鉢形土器	実測班	I a類	明褐・凹線・ミガキ	にぶい橙・ミガキ	14539	9.50	金雲母	-	
	26	B-14			深鉢形土器	口縁部	I a類	褐灰・凹線・ミガキ	褐灰・凹線・ミガキ	14478	8.14	角閃石	-	
	27	C-18		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・ナデ横	黒褐・磨耗	8878	7.28	-	-	
	28	D-18		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・凹線・ミガキ	灰褐・ミガキ	3683	8.40	角閃石	-	
	29	B-14	SX81			深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・凹線・ミガキ	黒褐・ミガキ	13831	8.22	-	-
	30	B-14		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・凹線・ミガキ	黒・ミガキ	9782	8.38	金雲母	-	



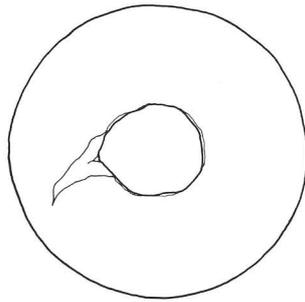
第139図 出土遺物 縄文土器(10)



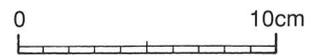
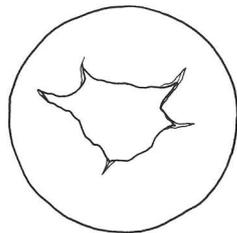
第140図 出土遺物 縄文土器(11)



67



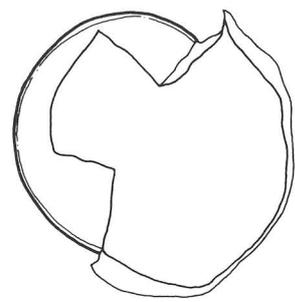
68



第141図 出土遺物 縄文土器(12)



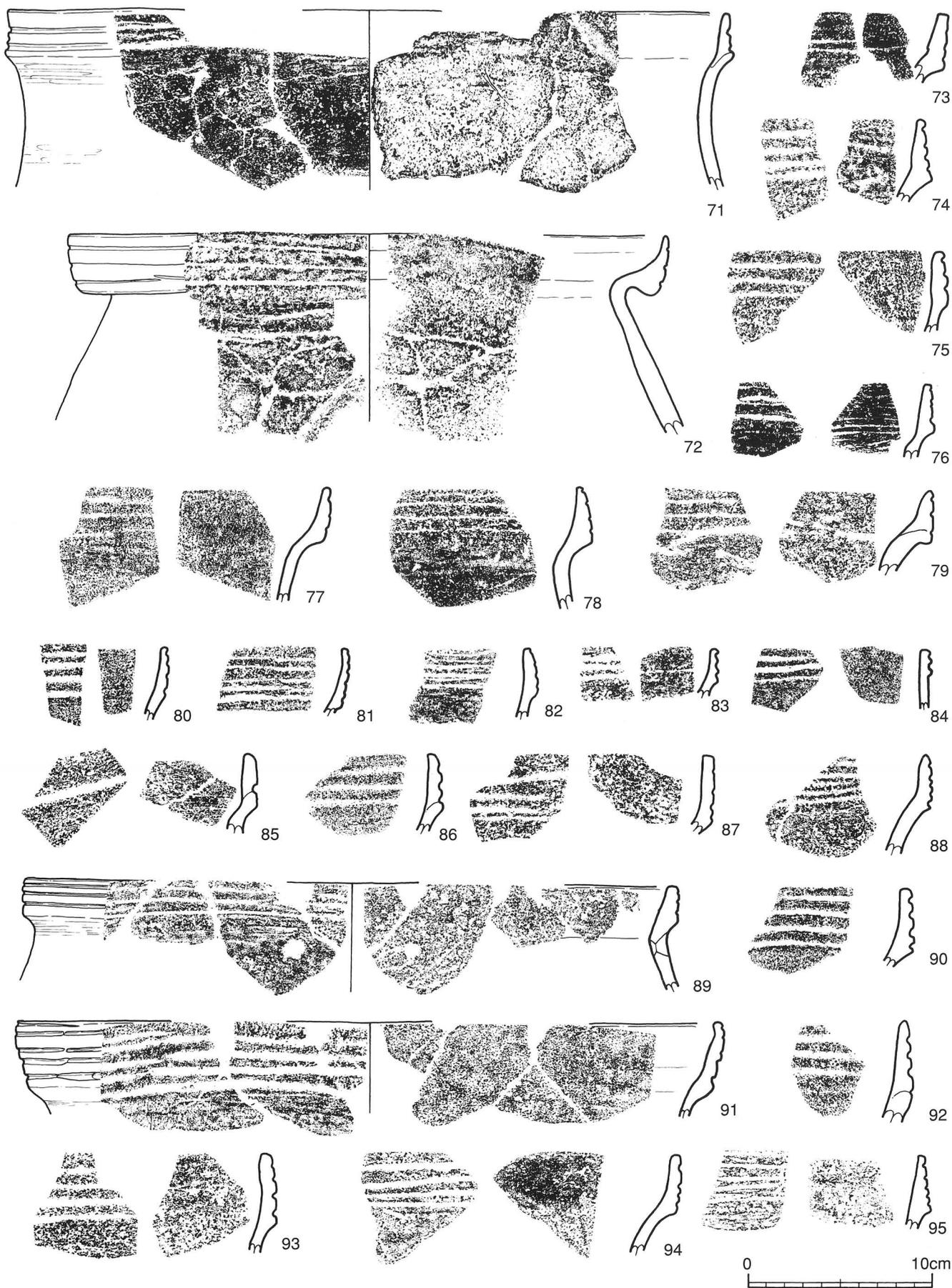
69



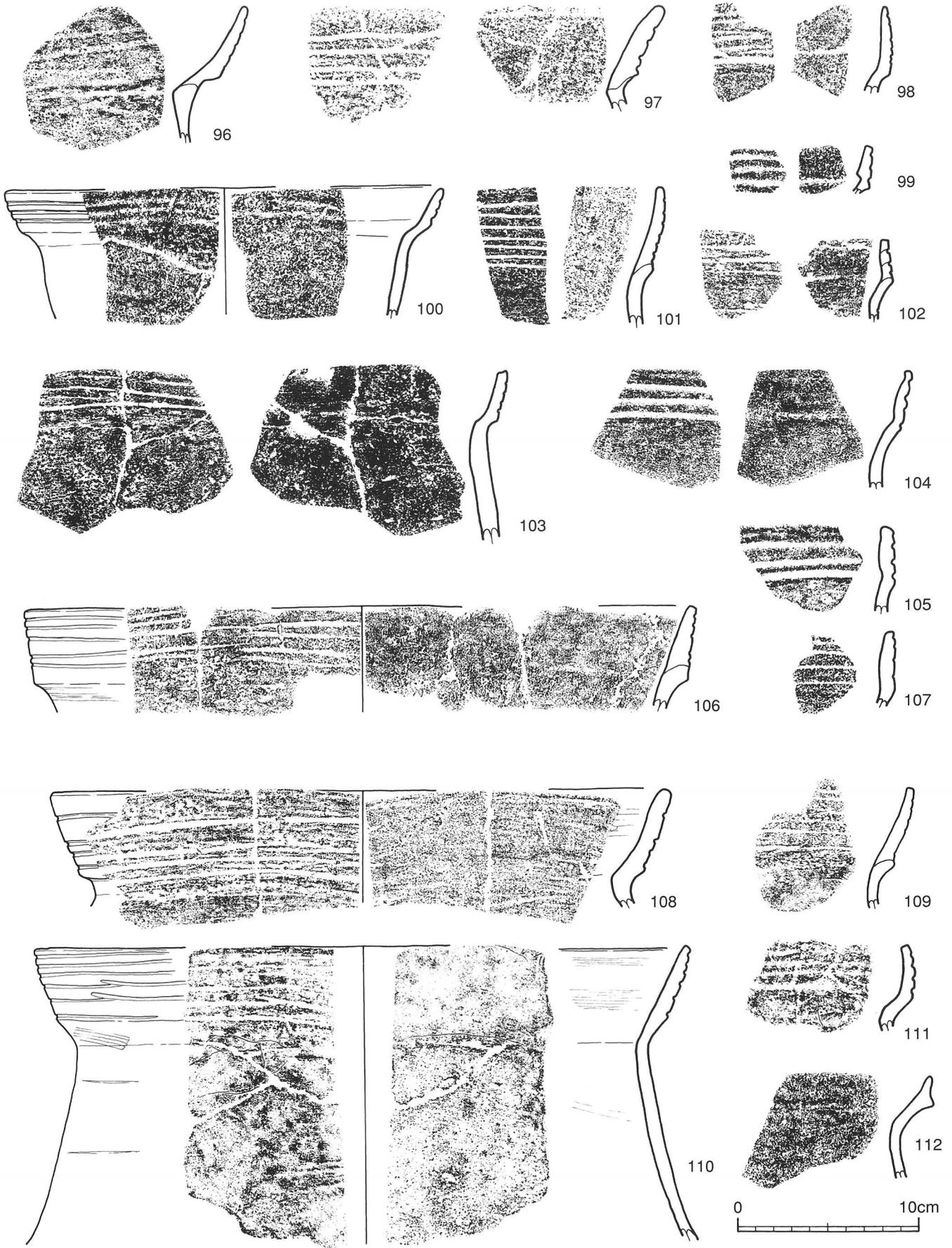
70



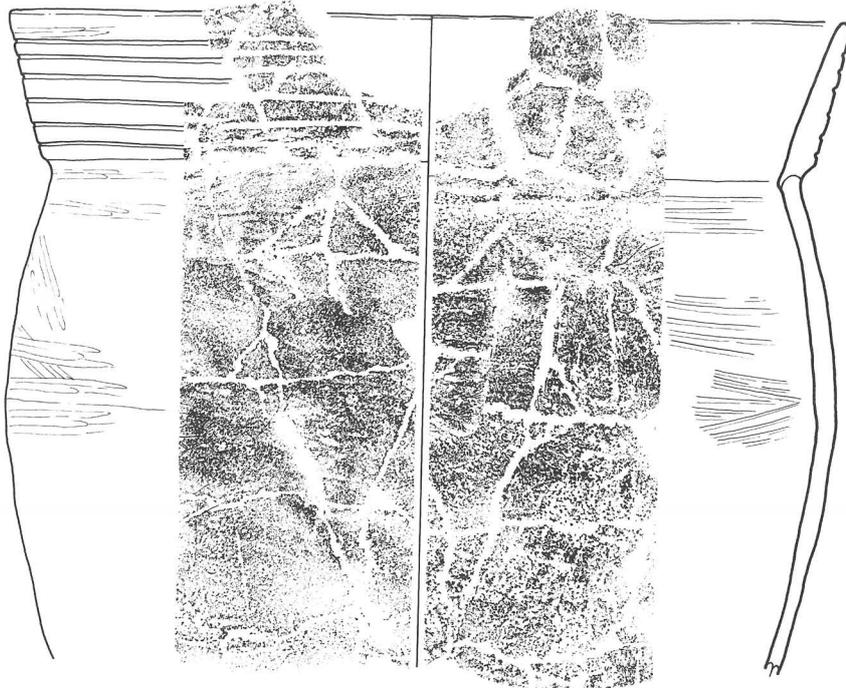
第142図 出土遺物 縄文土器(13)



第143図 出土遺物 縄文土器(14)



第144図 出土遺物 縄文土器(15)



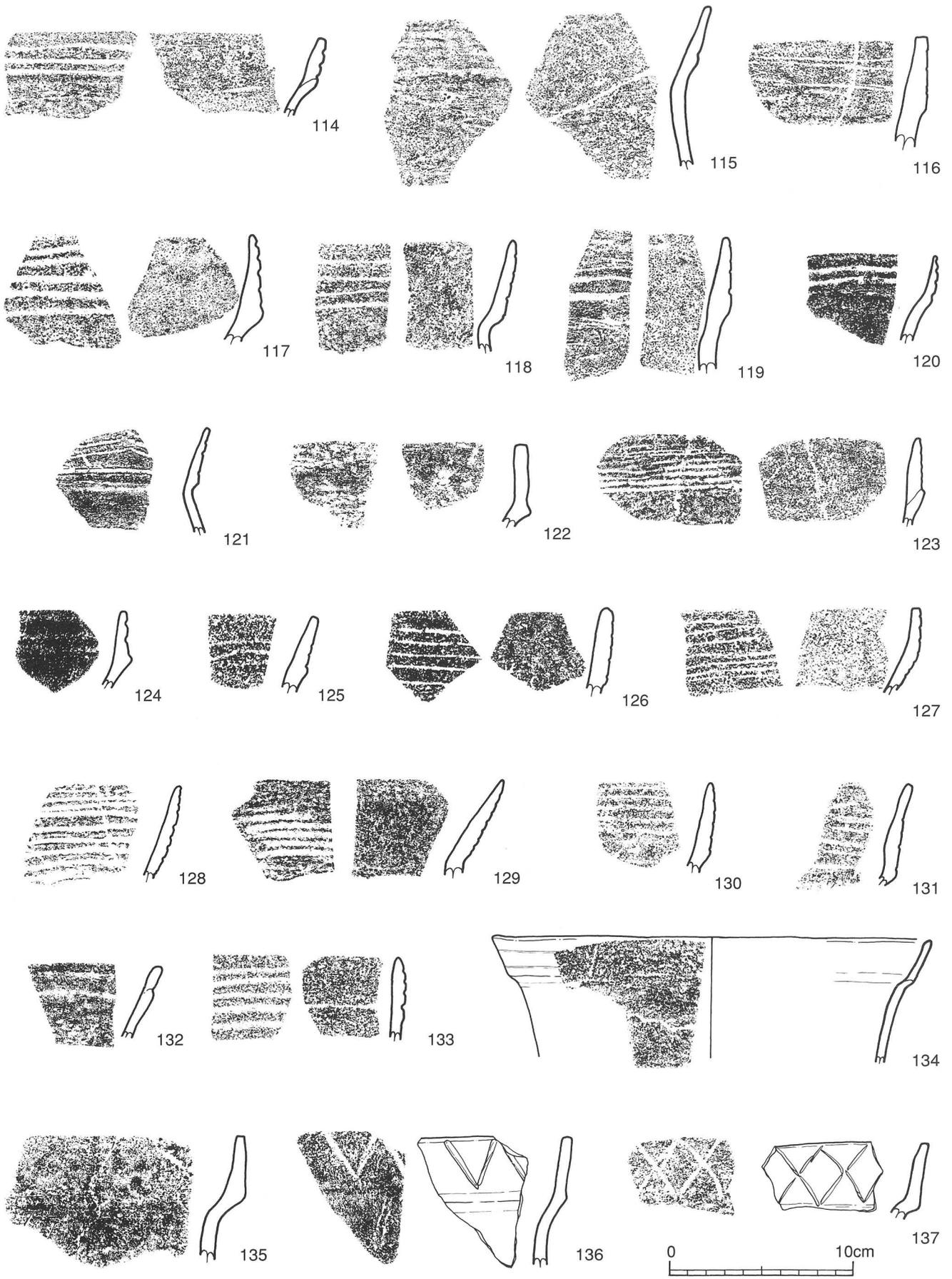
第145図 出土遺物 縄文土器(16)

113

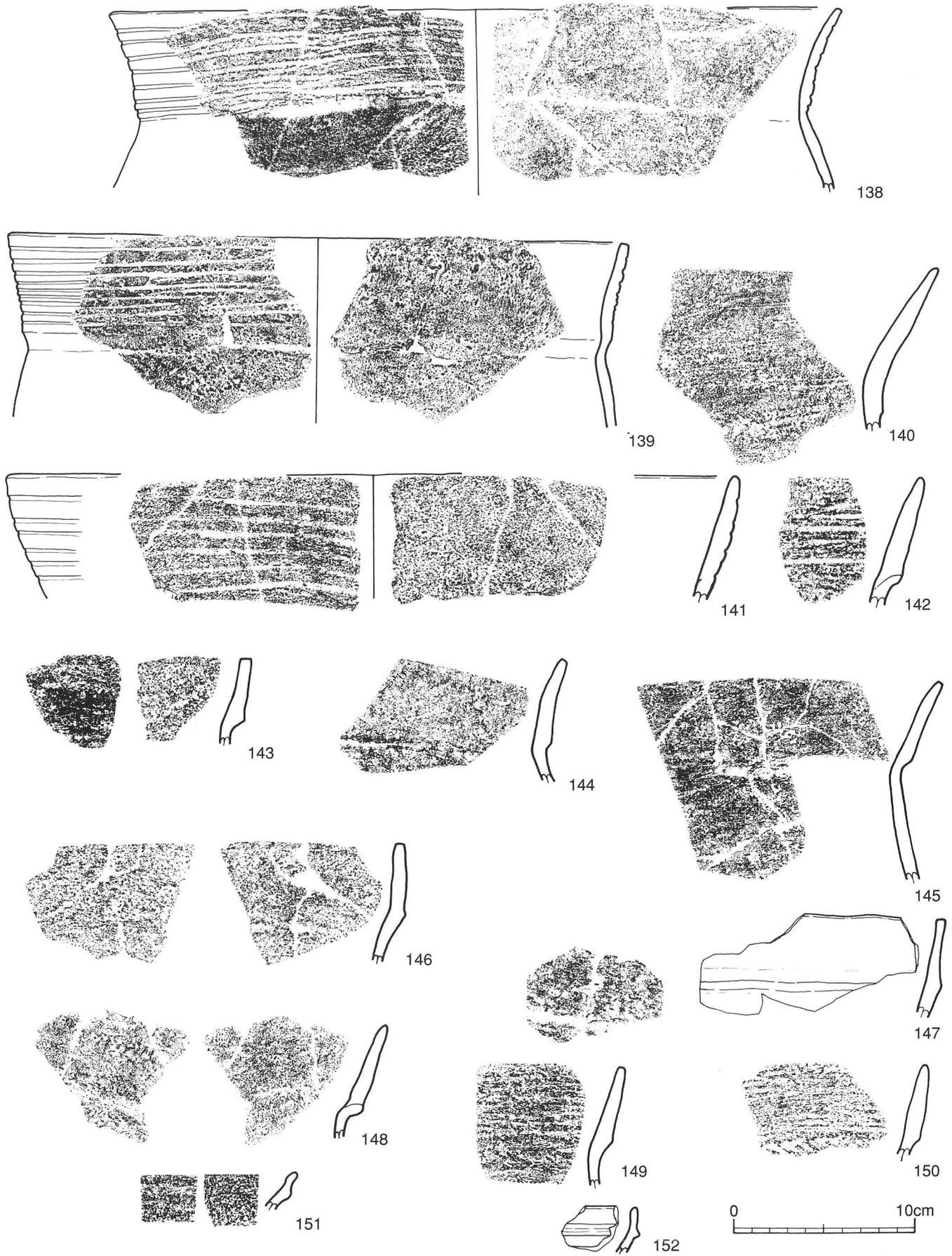


表12 縄文土器観察表 3

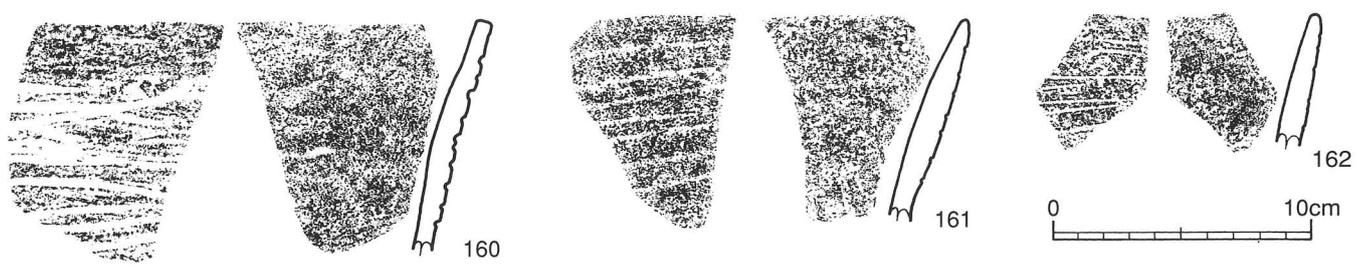
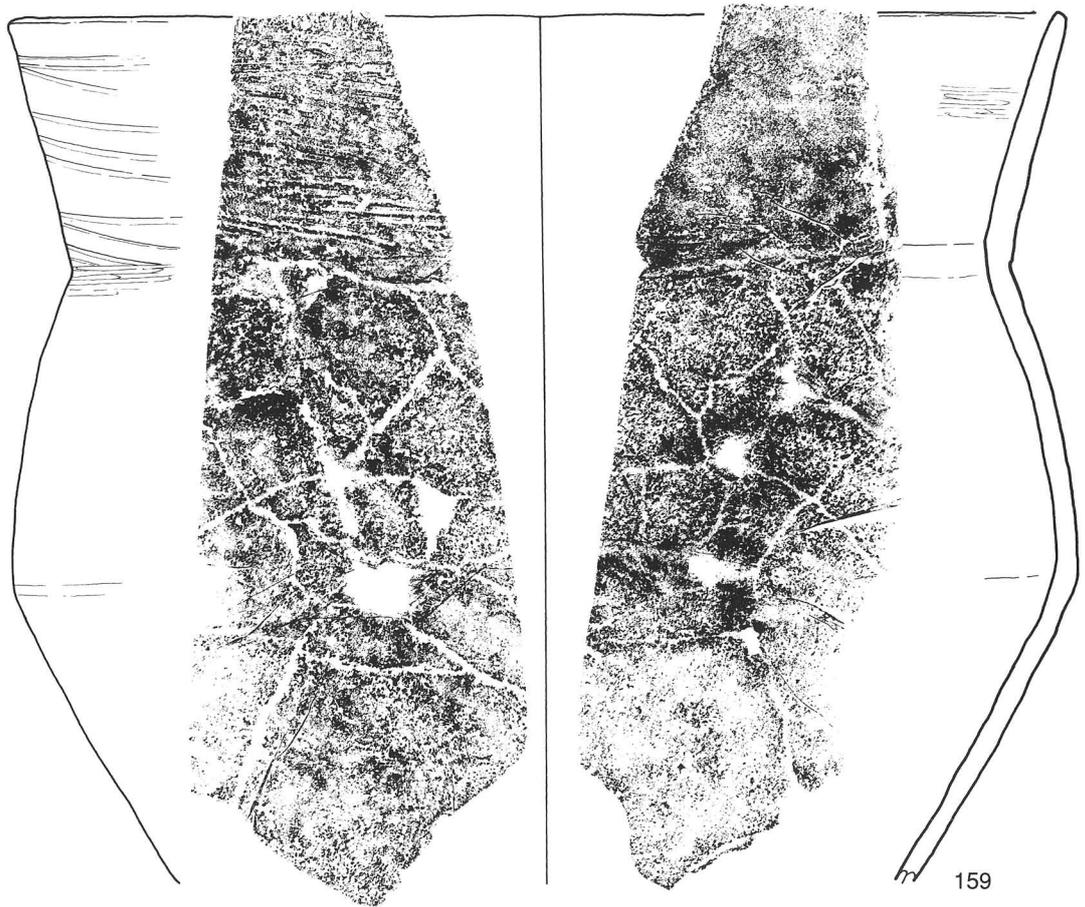
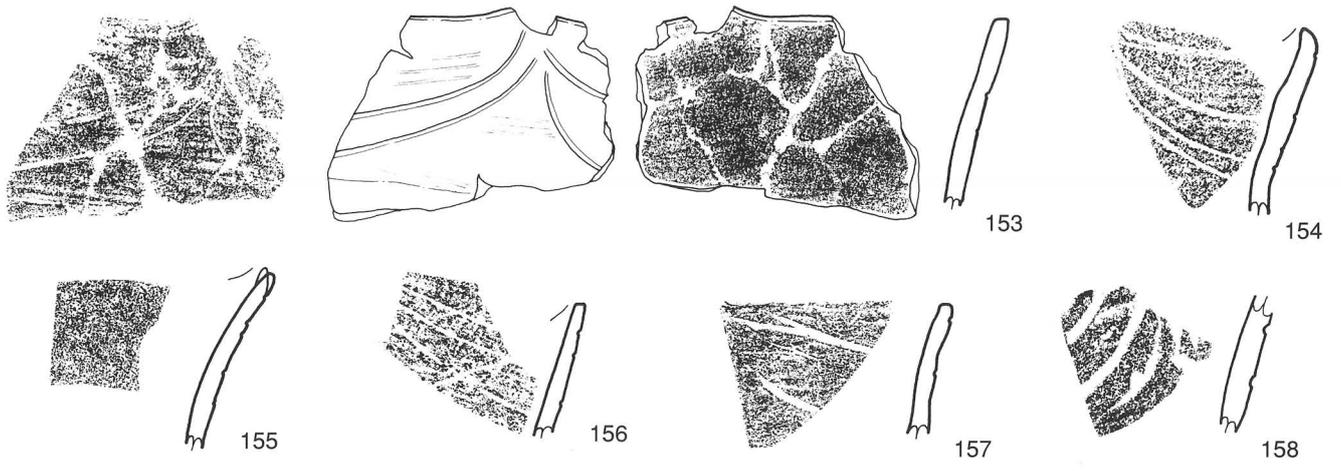
図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他 備考	写真図版	
								外面	内面					
第134図	31	C-24	SX		深鉢形土器	口縁部	I a類	褐・凹線・磨耗	明褐灰・磨耗		-	角閃石・金雲母	-	
	32	C-14			深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい褐・凹線・ミガキ	褐・ミガキ	995	8.08	軽石	-	
第135図	33	D-16		II b	深鉢形土器	口縁部	I a類	明赤褐・凹線・ミガキ	明赤褐・ミガキ	5008	8.32	金雲母	-	
	34	D-17			深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい赤褐・ミガキ	明赤褐・ミガキ	8079	8.34	軽石	-	
	35	D-11		II	深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい褐・凹線・ミガキ	黒・ミガキ	268	8.17	角閃石	-	
	36	B-18		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい黄橙・ミガキ	にぶい黄橙・ミガキ	8534	-	-	-	
	37	C-17			深鉢形土器	口縁部	I a類	黒・凹線・磨耗	黒・磨耗	8389	8.27	-	-	
	38				深鉢形土器	口縁部	I a類	橙・磨耗	橙・磨耗	見入来	-	-	-	
	39	D-15		II b	深鉢形土器	口縁部	I a類	黒・凹線・磨耗	にぶい褐・ナデ横	5740	7.95	-	-	
	40	D-17			深鉢形土器	口縁部	I a類			4490-2102 R-688	8.14	-	-	
	41	C-5		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	明赤褐・凹線・ミガキ	黒・ナデ・条痕		-	-	-	
	42	C-18		II b	深鉢形土器	口縁部	I a類	橙・凹線・ミガキ	橙・凹線・ミガキ	8622	-	金雲母	-	
	43	D-15		III	深鉢形土器	口縁部	I a類			4770	8.00	-	-	
	44	D-15		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	淡赤橙・凹線・ナデ横	橙・ミガキ	5785	7.90	金雲母	-	
	45	D-15		III	深鉢形土器	口縁部	I a類			5255	7.96	-	-	
	46	C-17		II	深鉢形土器	口縁部	I a類	明赤褐・凹線・ミガキ	明赤褐・ミガキ	8341	8.31	金雲母	-	
	47	D-19			深鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・凹線・ナデ	黒褐・ナデ	大坪	-	金雲母	-	
	48				深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい褐・ミガキ	にぶい褐・ミガキ		-	金雲母	-	
	49	C-17			深鉢形土器	口縁部	I a類	赤褐・凹線・ナデ横	明赤褐・ナデ横	8329	8.29	金雲母	-	
	50	D-15		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい橙・凹線・磨耗	にぶい橙・磨耗	4850	8.03	角閃石	-	
	51	D-18		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	暗褐・凹線・ナデ横	灰黄褐・ナデ横	3681	8.38	-	-	
	52	C-17		II b	深鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい褐・凹線・ミガキ	にぶい褐・ナデ横	8873	7.23	-	-	
	53	D-15		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	褐・凹線・ナデ横	褐・ナデ横	5299	7.94	-	-	
	54	C-17		II b	深鉢形土器	口縁部	I a類	浅黄橙・凹線・ミガキ	灰黄橙・ミガキ	8313	8.33	角閃石	-	
	55			III	深鉢形土器	口縁部	I a類	明黄褐・凹線・ミガキ	黄褐・ミガキ		-	金雲母	-	
	56	C-15			深鉢形土器	口縁部	I a類	灰白・磨耗	灰白・磨耗	オオツボ	-	-	-	
	57	C-15・D-22		III	深鉢形土器	口縁部	I a類	黒・凹線・磨耗	黒褐・磨耗	9025・10633	7.99	金雲母	-	
	第136図	58	B-14	SJ80		深鉢形土器	完形	I b類	明褐・凹線・ミガキ	明褐・ナデ		-	金雲母	28
		59	C-16	SJ39下		深鉢形土器	胴部	I b類	赤褐	赤褐		-	SJ39上に浅鉢有・金雲母	28
第137図	60	B-17			深鉢形土器	完形	I b類				-	-	37	
第138図	61	C-16			深鉢形土器	-	I b類				-	-	-	
	62	C-16			深鉢形土器	-	I b類				-	-	-	
第139図	63	B-17			深鉢形土器	-	I b類	明褐・摩耗	明褐・摩耗		-	2mm大の石英	29	
	64	B-17			深鉢形土器	-	I b類	明赤褐	にぶい橙		-	2mm大の石英	29	
第140図	65	C-16			深鉢形土器	-	I b類	褐・条痕	褐・ナデ		-	金雲母	30	



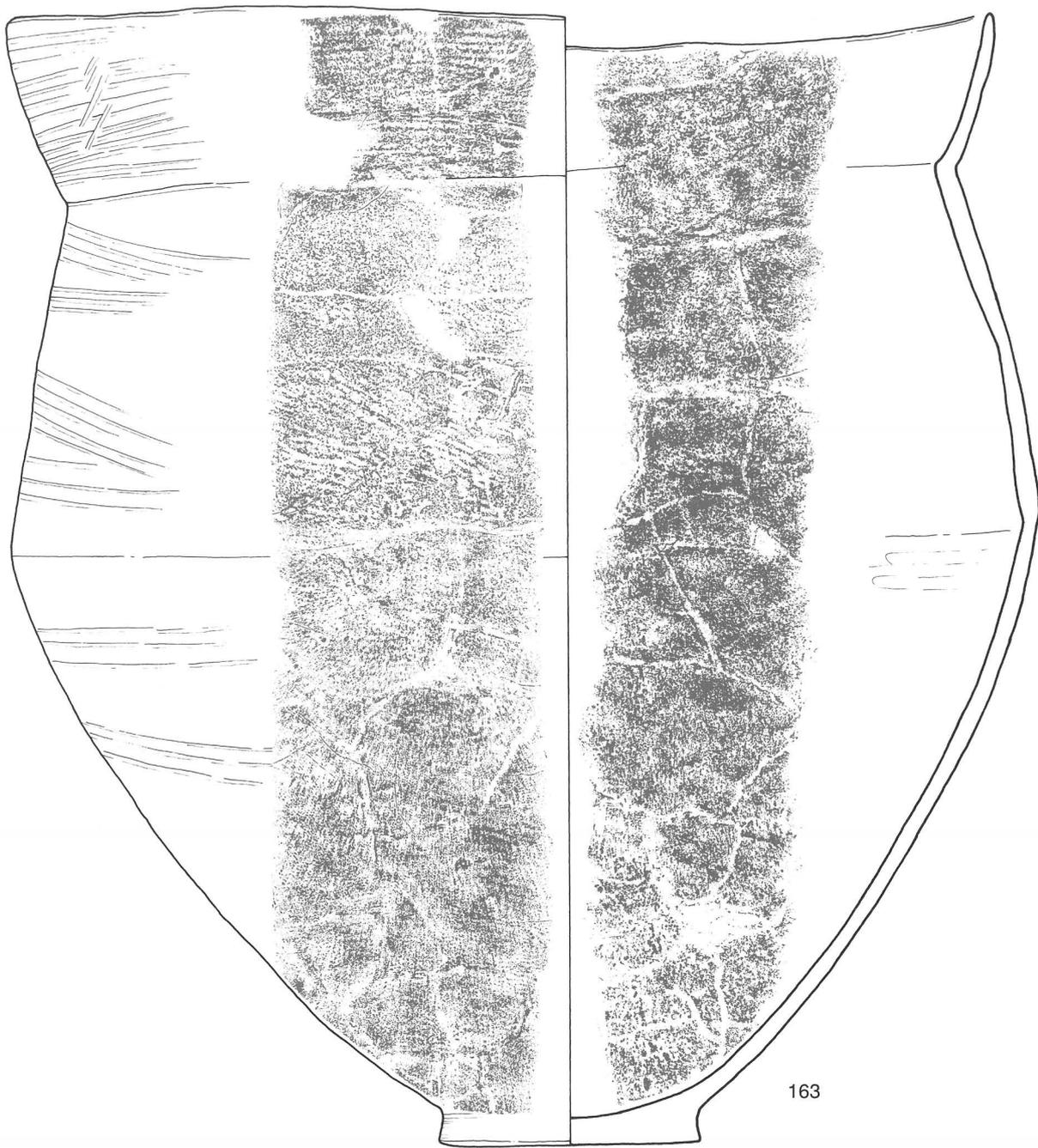
第146図 出土遺物 縄文土器(17)



第147図 出土遺物 縄文土器 (18)



第148図 出土遺物 縄文土器(19)

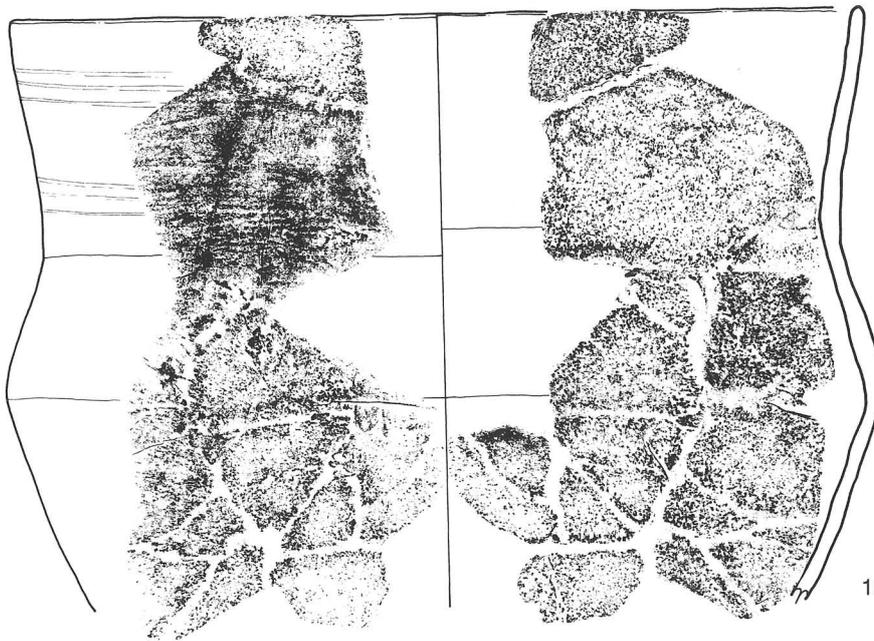


0 10cm

第149図 出土遺物 縄文土器(20)



165



166

0 10cm

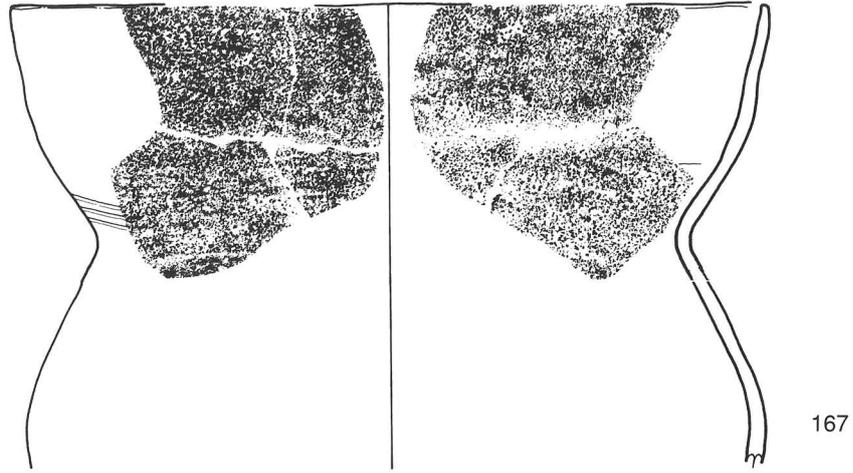
第150図 出土遺物 縄文土器(21)

表13 縄文土器観察表 4

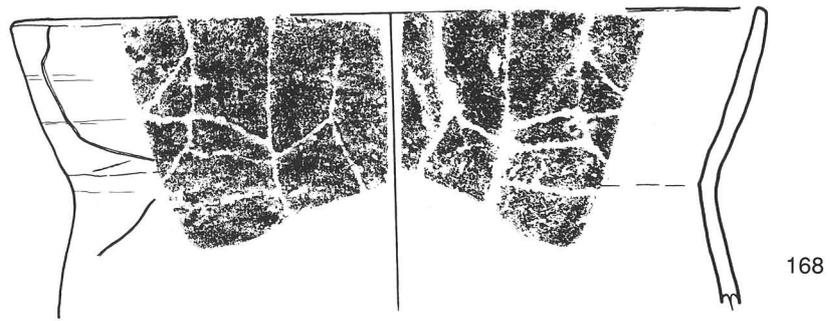
図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他 備考	写真図版
								外面	内面				
第140図	66	B-18			深鉢形土器	-	I b類				-	-	30
第141図	67	B-16			深鉢形土器	-	I b類	赤	暗赤褐		-	凝灰岩	30
	68	B-17			深鉢形土器	-	I b類	橙	にぶい赤褐		-	2mm大の石英	31
	69	D-22			深鉢形土器	-	I b類	明赤褐	明赤褐		-	凝灰岩	31
第142図	70	B-18			深鉢形土器	-	I b類				-	-	-
第143図	71	D-17		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・凹線・ミガキ	赤褐・磨耗	7679・8341	8.46	多量の金雲母・小石	-
	72	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	I b類	浅黄橙・凹線・磨耗	褐灰・磨耗	8585	7.17	金雲母・小石	-
	73				深鉢形土器	口縁部	I b類	浅黄橙・凹線・ナデ	黄橙・ナデ	注記ナシ	-	金雲母	-
	74	C-17	壁溝		深鉢形土器	口縁部	I b類	灰緑・黒・凹線・赤褐色・ナデ	黒褐・ナデ	大坪	-	角閃石	-
	75	D-16		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	I b類	明赤褐・凹線・ナデ	にぶい赤褐・ナデ	6152	8.07	金雲母	-
	76	C-5				深鉢形土器	口縁部	I b類			大坪	-	-

表14 縄文土器観察表5

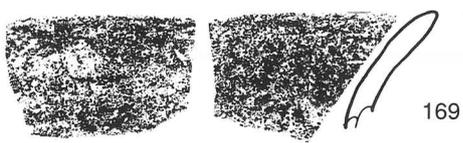
図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他備考	写真図録
								外面	内面				
第143 図	77	C-16		II	深鉢形土器	口縁部	I b類	明赤褐・凹線・ミガキ	褐・ミガキ	注記ナシ	-	金雲母	-
	78	D-18		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・凹線・ミガキ	暗赤褐・ミガキ	4293	8.33	2mm大の石英・金雲母	-
	79	D-18		II b	深鉢形土器	口縁部	I b類	明赤褐・凹線・ナデ	明赤橙・ナデ	4567	8.38	金雲母	-
	80	C-17		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	明赤褐	明赤褐	8386	8.25	2mm大の石英	-
	81				深鉢形土器	口縁部	I b類	極暗赤褐	極暗赤褐	-	-	金雲母	-
	82				深鉢形土器	口縁部	I b類	-	-	-	-	-	-
	83	C-15		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	暗赤褐	赤褐	9242	8.32	茶粒	-
	84				深鉢形土器	口縁部	I b類	褐灰・凹線・ナデ横	褐灰・磨耗	-	-	軽石	-
	85	D-18		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・凹線・ナデ	赤褐・ミガキ	3923	8.41	金雲母	-
	86		ナシ		深鉢形土器	口縁部	I b類	黄灰・凹線・磨耗	褐灰・磨耗	大坪	-	金雲母	-
	87	D-16		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	にぶい橙・凹線・磨耗	淡橙・磨耗	6013	8.10	2mm大の石英	-
	88	D-18		II b	深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・凹線・ミガキ	暗赤褐・ミガキ	5429	8.40	金雲母・小石	-
	89	C-17	壁溝		深鉢形土器	口縁部	I b類	黒褐・凹線・ミガキ	赤褐・ミガキ	大坪	-	角閃石	-
	90	D-18		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	黒褐・凹線・ナデ	褐灰・ナデ	5128	8.39	角閃石	-
	91				深鉢形土器	口縁部	I b類	明赤褐・凹線・ナデ	黄灰・ナデ	大坪	-	3mm大の石英	-
	92				深鉢形土器	口縁部	I b類	黒褐・凹線・ナデ	明褐・ナデ	大坪	-	2mm大の石英	-
	93	A-32	SD146		深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・凹線・ミガキ	褐灰・ナデ	16967	9.37	金雲母・小石	-
	94	D-18		II b	深鉢形土器	口縁部	I b類	灰褐・凹線・ミガキ	赤褐・ミガキ	NO252と同一	-	金雲母	-
	95	C-20		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	淡黄橙・凹線・ミガキ	黄橙・ミガキ	7655	8.46	金雲母	-
	96	D-24		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	黒・凹線・磨耗	褐灰・ナデ	大坪	-	軽石	-
97	D-18		II b	深鉢形土器	口縁部	I b類	淡黄・凹線・ミガキ	淡黄橙・ミガキ	3694	8.43	-	-	
98	C-17	壁溝		深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・凹線・ナデ	赤褐・ナデ	NO194と同一	-	石英(白)	-	
99	C-17		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	明赤褐・凹線・磨耗	赤褐・磨耗	注記ナシ	-	-	-	
100				深鉢形土器	口縁部	I b類	灰褐・凹線・磨耗	灰褐・ナデ	大坪	-	2mm大の石英	-	
101	D-24	SX		深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・凹線・ミガキ	にぶい橙・磨耗	11610	8.42	金雲母	-	
102	B-14		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	-	-	9695・16544	8.34	-	-	
103	D-17		III	深鉢形土器	実測班	I b類	赤褐・沈線・ミガキ	褐灰・ナデ	7676	8.37	凝灰岩	-	
104	C-17		II	深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐	赤褐	NO251と同一	-	多量の砂粒	-	
105	C-5		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	にぶい赤褐	にぶい赤褐	大坪	-	多量の砂粒	-	
106	C-24		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・沈線・ミガキ	赤褐・ミガキ	12130	8.95	金雲母・小石	-	
107	C-17		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	にぶい橙・凹線・磨耗	褐灰・磨耗	8414	8.33	金雲母・小石	-	
108	D-21		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	黒褐・凹線・ミガキ	赤褐・ミガキ	10829	8.44	金雲母	-	
109	D-24		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	明赤褐	明赤褐	大坪	-	金雲母	-	
110	D-24		III	深鉢形土器	実測班	I b類	淡橙・沈線・ナデ	橙・ナデ	10858	8.82	凝灰岩	-	
111	D-13		III	深鉢形土器	口縁部	I b類	にぶい赤褐・ミガキ	にぶい赤褐・ミガキ	676	8.30	凝灰岩	-	
112	C-17		II b	深鉢形土器	口縁部	I b類	にぶい赤褐・磨耗	にぶい赤褐・磨耗	8793	7.26	金雲母・小石	-	
113	B-21	SJ130		深鉢形土器	-	II a類	にぶい赤褐	にぶい赤褐	-	-	角閃石	31	
114	C-17		II b	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・凹線・磨耗	黒褐・磨耗	8580	7.27	多量の砂粒	-	
115	C-17		II b	深鉢形土器	口縁部	II a類	褐・ミガキ	黒褐・ミガキ	8796	7.31	金雲母・小石	-	
116	D-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	淡黄橙・沈線・ナデ	灰褐・ミガキ	NO268と同一	-	金雲母・小石	-	
117	C-17		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	灰赤・凹線・磨耗	明褐・磨耗	大坪	-	2mm大の石英	-	
118	D-18		II b	深鉢形土器	口縁部	II a類	赤褐・凹線・ナデ	赤褐・ナデ	3906	8.45	金雲母・小石	-	
119	C-17		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黄橙・凹線・ミガキ	淡黄橙・ミガキ	大坪	-	金雲母・小石	-	
120	B-15		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・凹線・磨耗	黒褐・磨耗	注記ナシ	-	凝灰岩	-	
121	C-24		IV	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・凹線・ミガキ	黒・ミガキ	12450	8.20	角閃石	-	
122	B-14		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	赤褐・ナデ横	赤褐・ナデ横	14516	8.14	軽石	-	
123	D-18		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・凹線・ミガキ	赤褐・ミガキ	6908	8.15	金雲母・小石	-	
124	D-15		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	赤褐・凹線・磨耗	暗赤褐・磨耗	4948	8.20	軽石	-	
125	D-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	にぶい赤褐・磨耗	黒褐・磨耗	大坪	-	金雲母・小石	-	
126	D-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	赤褐・凹線・ミガキ	明赤褐・ナデ	14247・17247	0.00	金雲母・小石	-	
127	D-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	暗褐・凹線・ミガキ	褐・ナデ横	-	-	金雲母・小石	-	
128	C-23		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・凹線・ミガキ	褐灰・ナデ	12958	8.94	-	-	
129	D-17		II	深鉢形土器	口縁部	II a類	にぶい赤褐・凹線・磨耗	にぶい赤褐・磨耗	1686	8.43	軽石	-	
130	D-18		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	灰白・凹線・磨耗	灰白・磨耗	3609	8.41	金雲母・小石	-	
131	大坪			深鉢形土器	口縁部	II a類	明赤褐・凹線・磨耗	にぶい赤褐・ナデ	-	-	金雲母・小石	-	
132	C-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	褐灰・磨耗	黒・磨耗	12973	8.79	小石	-	
133	D-23		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	明褐・凹線・磨耗	明褐・磨耗	10653	8.77	-	-	
134	D-15		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・磨耗	明褐灰・磨耗	3910	8.38	2mm大の石英	-	
135	B-18		II b	深鉢形土器	口縁部	II a類	にぶい黄橙・ナデ	にぶい黄橙・ナデ	8513	-	金雲母・小石	-	
136	D-18		II b	深鉢形土器	口縁部	II a類	明赤橙・磨耗	淡黄橙・磨耗	3908	8.44	金雲母・小石	-	
137	C-17		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒・磨耗	明赤橙・磨耗	8374	8.21	金雲母・小石・菱形文	-	
138	B-22		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・沈線・ナデ	褐・ナデ	15386	8.81	凝灰岩	-	
139	D-22		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	暗赤褐・凹線・磨耗	赤褐・磨耗	10627	8.45	軽石・凝灰岩	-	
140	A-34		II	深鉢形土器	口縁部	II a類	淡橙・ナデ	黒褐・ナデ	-	-	2mm大の石英	-	
141	B-23	SK169		深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・凹線・ナデ	黒褐・磨耗	大坪	-	小石	-	
142	A-22		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	赤褐・凹線・ナデ	にぶい赤褐・ナデ	14709	8.89	金雲母・小石	-	
143	C-17		II b	深鉢形土器	口縁部	II a類	にぶい橙・ナデ	にぶい橙・ナデ	5855	8.39	金雲母・小石	-	
144	C-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	明赤褐・ナデ	暗赤褐・ナデ	12354	8.88	茶粒	-	
145	D-21		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	赤褐・ミガキ	暗赤褐・磨耗	10553	8.54	金雲母	-	
146	C-18		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	淡橙・ナデ	橙・ナデ	注記ナシ	-	金雲母・小石	-	
147	B-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	褐灰・ナデ	褐灰・ナデ	15922・15929	8.90	軽石	-	
148	D-21		IV	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・ナデ	黒褐・ナデ	16552	9.61	金雲母・小石	-	
149	D-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	明赤褐・貝殻条痕	明赤褐・ナデ	大坪	-	金雲母・小石	-	
150	D-24		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	暗赤褐・貝殻条痕	赤褐・磨耗	10858	8.82	金雲母	-	
151	C-15		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	灰褐・磨耗	灰褐・磨耗	8120	8.08	-	-	
152	D-15		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	灰黄橙・磨耗	黒・磨耗	1347	8.16	-	-	
153	A-35		IV	深鉢形土器	口縁部	II a類	暗赤褐・ナデ	赤褐・ナデ	17074	9.15	金雲母・外面重弧文	-	
154	D-17		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・磨耗	黒・磨耗	7419	8.33	外面重弧文	-	
155	B-22		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	暗褐・ナデ	褐・ナデ	13098	8.72	角閃石・外面重弧文	-	
156	D-12		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	橙・ナデ	褐灰・磨耗	257	8.10	外面重弧文・石英	-	
157	A-34		III	深鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐・丁寧なナデ	黒褐・丁寧なナデ	16544	9.22	外面重弧文	-	
158	B-22		III	深鉢形土器	口縁部か?	II a類	灰黄橙・凹線・ナデ横	灰黄褐・ナデ	13370	8.74	凝灰岩	-	
159				深鉢形土器	-	II a類	赤褐・貝殻条痕	明赤褐・磨耗	大坪	-	金雲母	-	



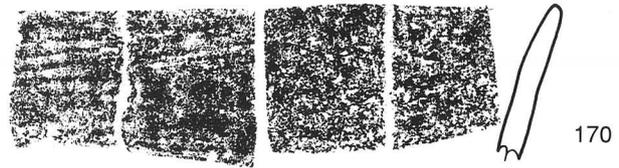
167



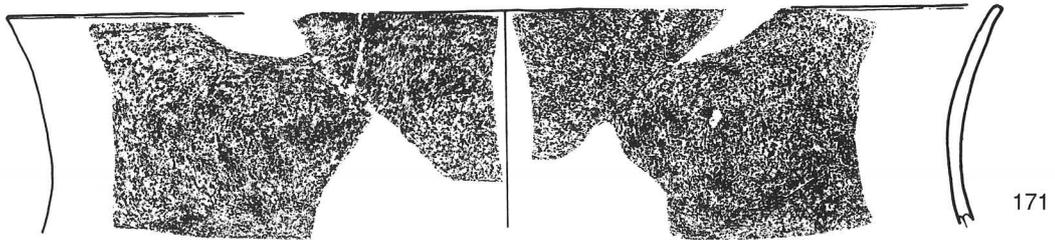
168



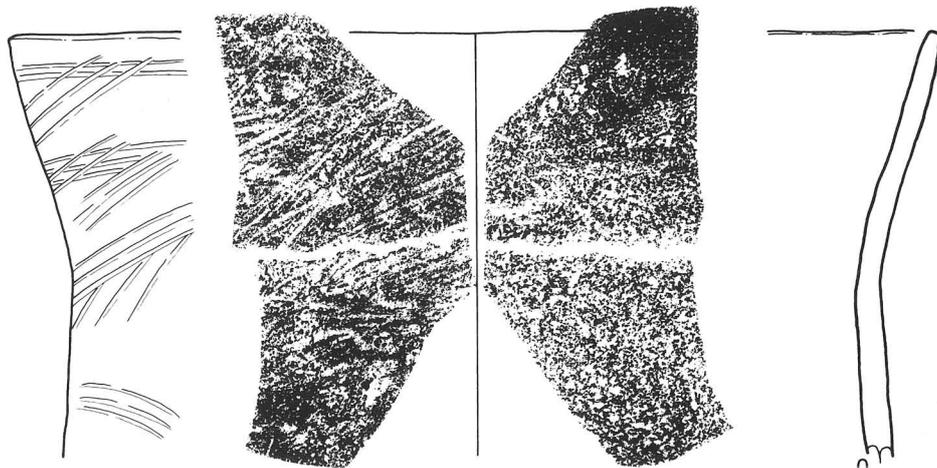
169



170



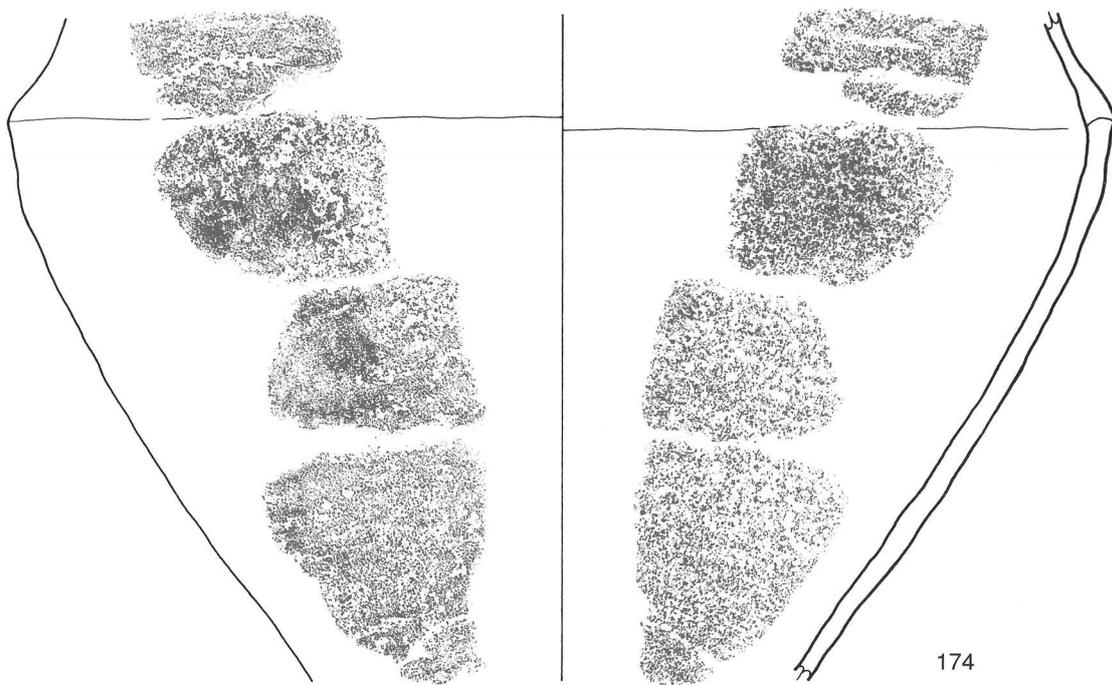
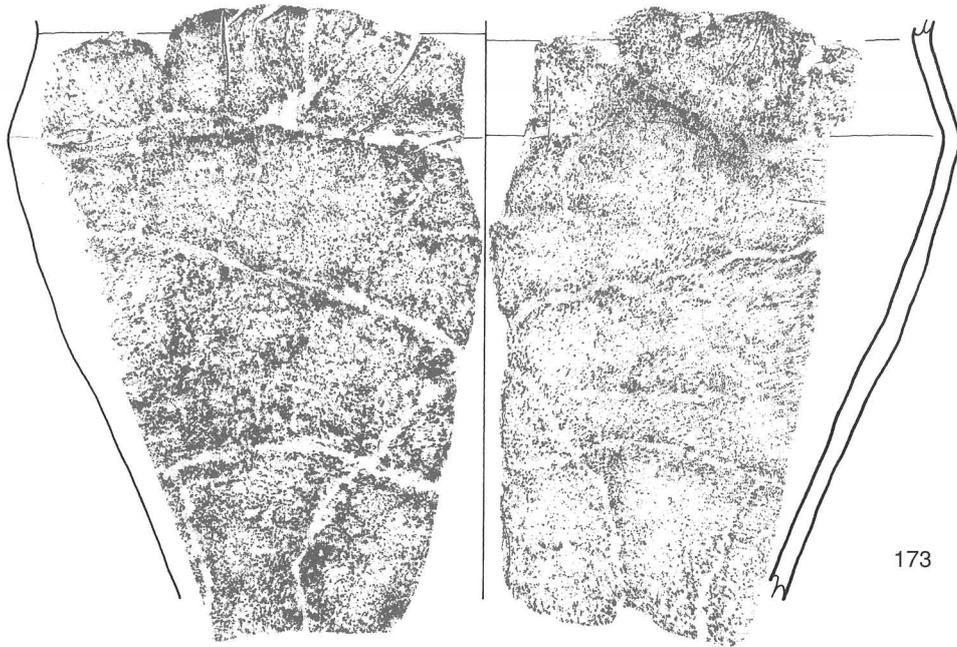
171



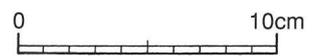
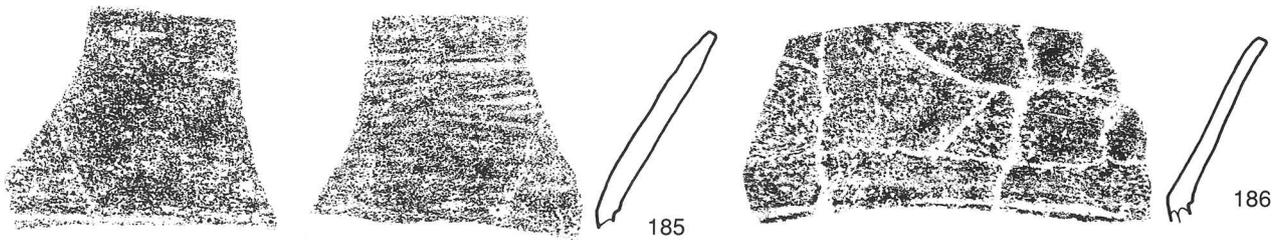
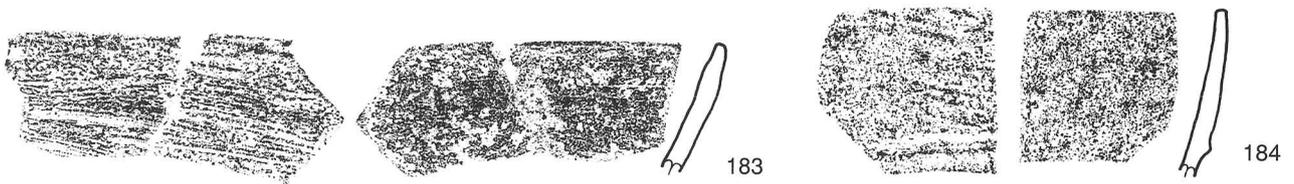
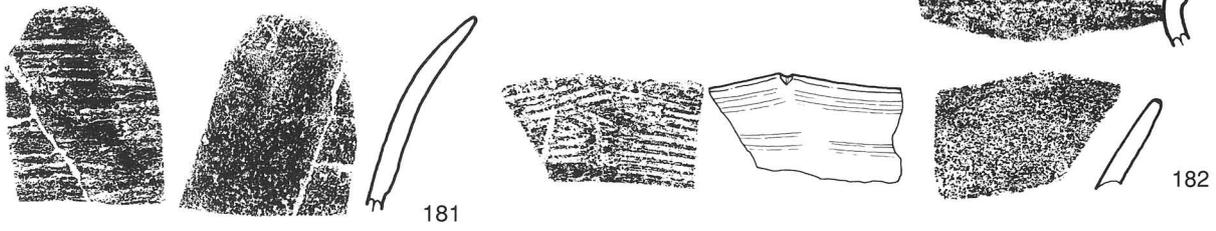
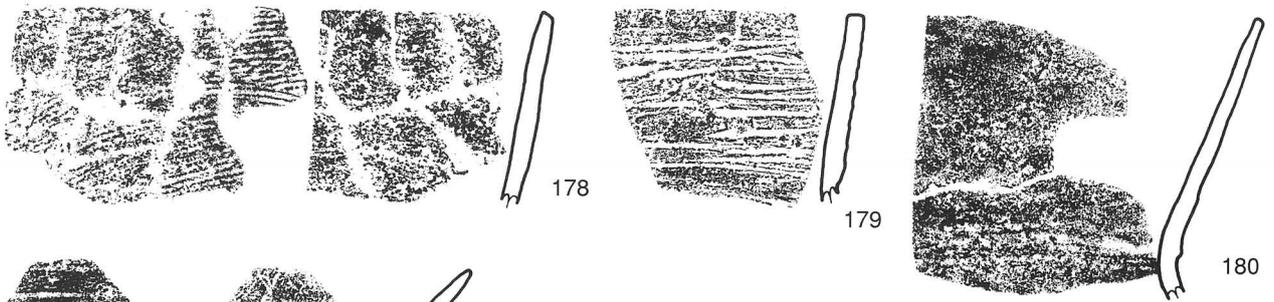
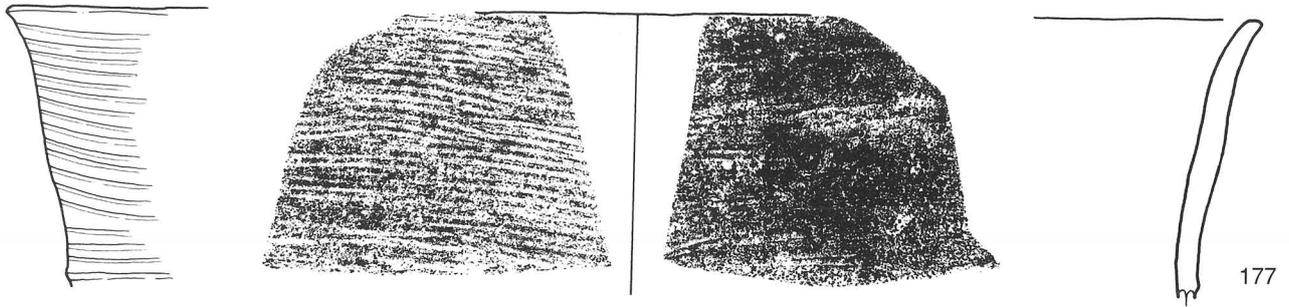
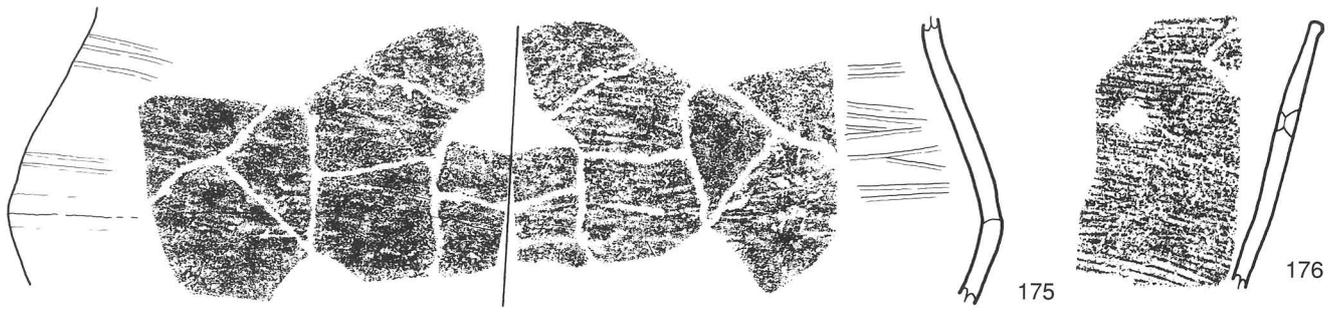
172



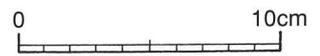
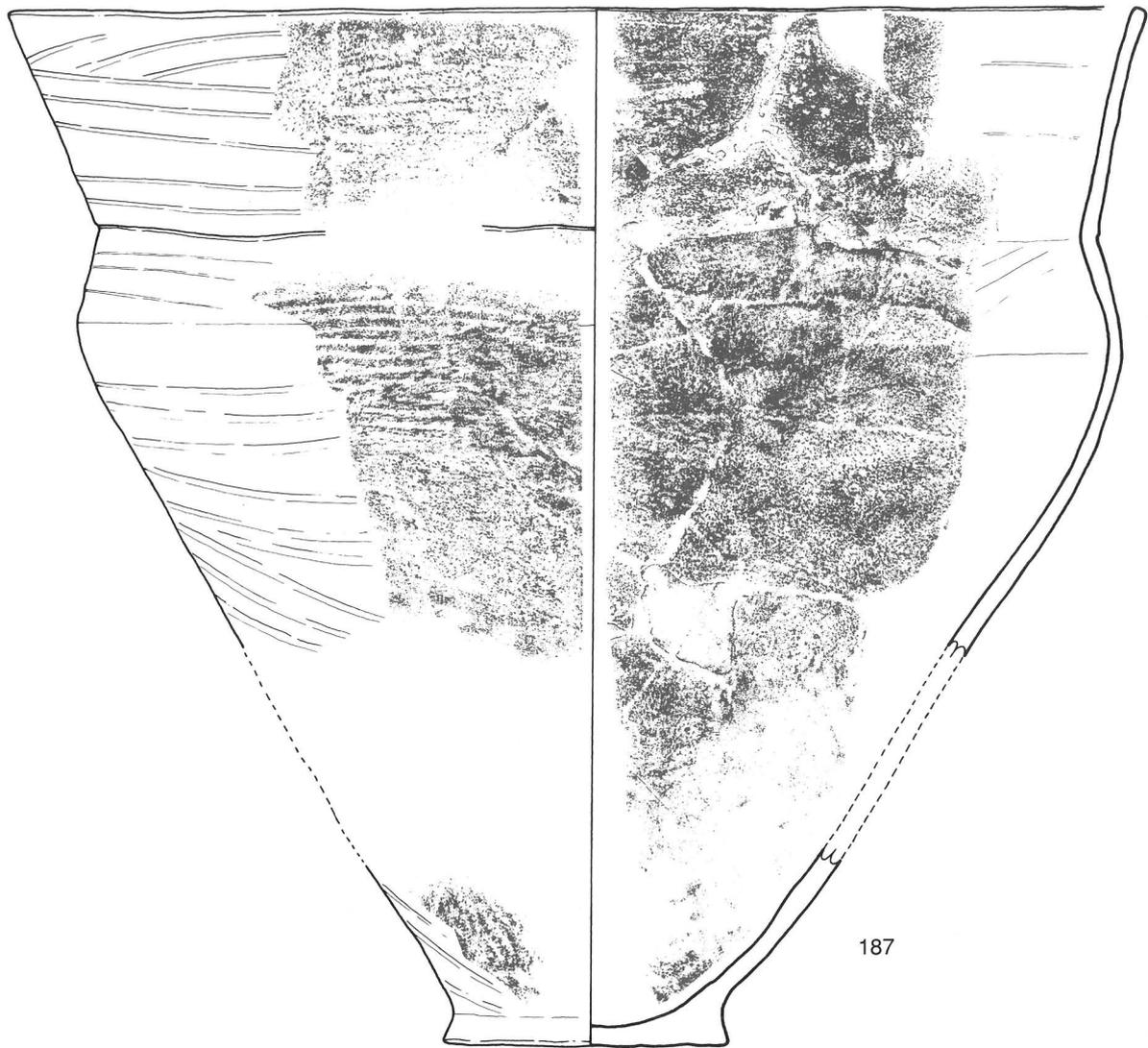
第151図 出土遺物 縄文土器(22)



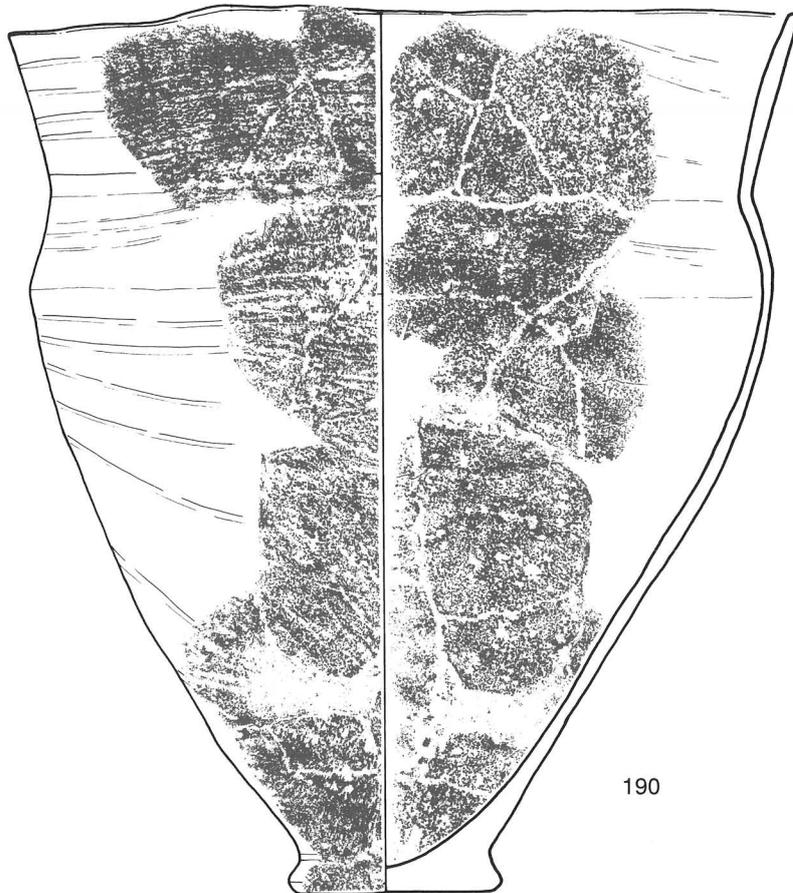
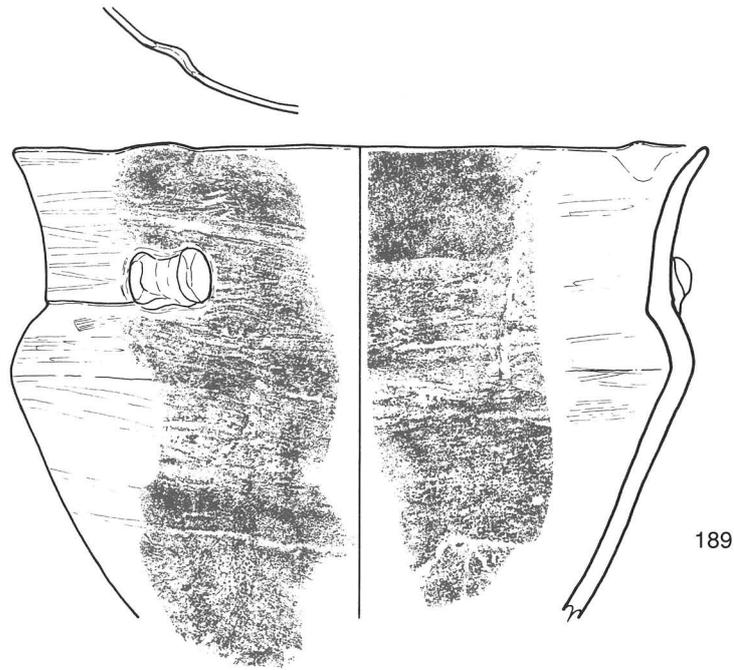
第152図 出土遺物 縄文土器(23)



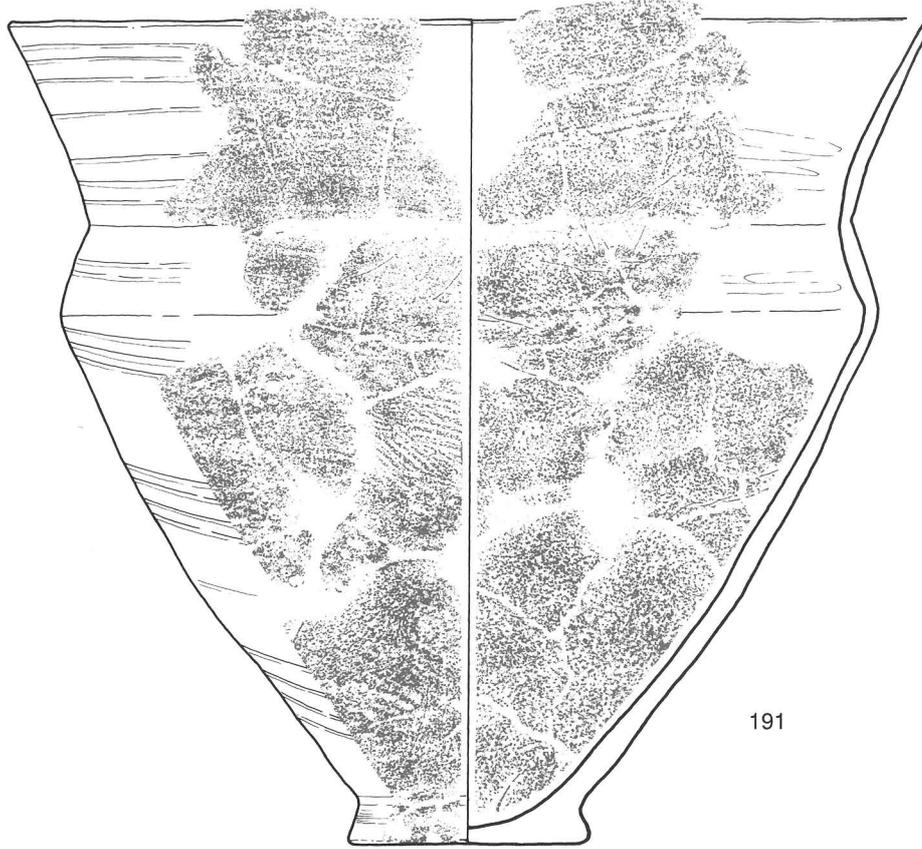
第153図 出土遺物 縄文土器(24)



第154図 出土遺物 縄文土器(25)



第155図 出土遺物 縄文土器(26)



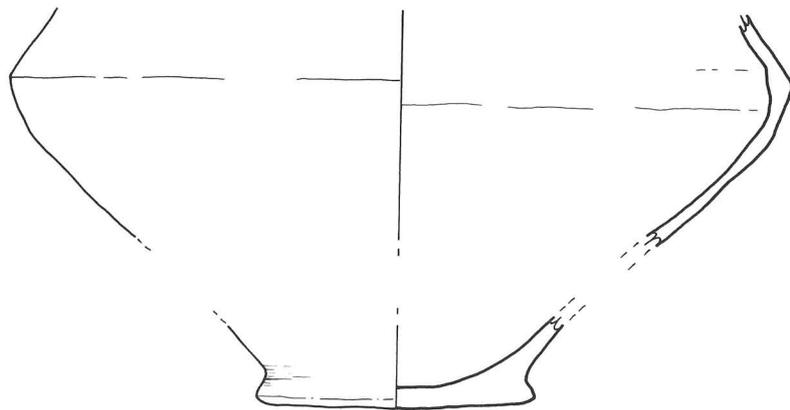
191



第156図 出土遺物 縄文土器(27)

表15 縄文土器観察表 6

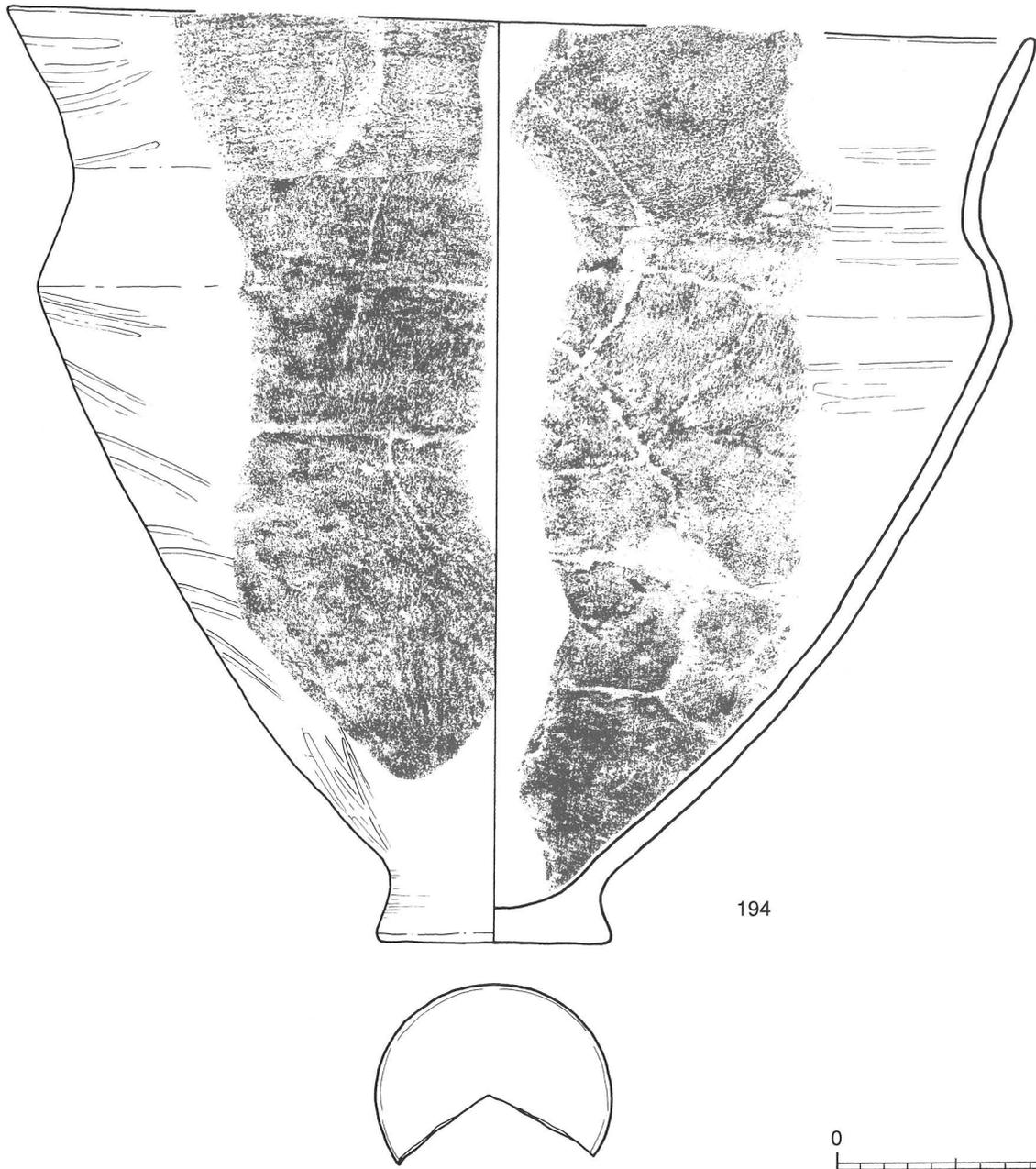
図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他 備考	写真図版	
								外面	内面					
第148図	160				深鉢形土器	口縁部	Ⅱa類	灰褐・条痕・ナデ	にぶい赤褐・ナデ	大坪	—	凝灰岩	—	
	161	B-16		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱa類	褐・凹線・磨耗	灰白・磨耗	12663	8.34	半透明の石英・凝灰岩	—	
	162	C-22		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱa類	赤褐・条痕・ナデ	黒・ミガキ	11242	8.58	金雲母	—	
第149図	163	B-25			深鉢形土器	完形	Ⅱb類	浅黄・条痕	浅黄・条痕	—	—	金雲母	33	
	164	D-21			深鉢形土器	—	Ⅱb類	にぶい橙・条痕	にぶい橙	—	—	金雲母	33	
第150図	165	B-23			深鉢形土器	—	Ⅱb類	—	—	—	—	—	—	
	166	B-21		Ⅲ	深鉢形土器	—	Ⅱb類	—	—	—	—	—	—	
	167	C-24	SX		深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	—	—	NO358同—	—	—	—	
第151図	168	C-24	SX		深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	—	—	—	—	—	—	
	169				深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	—	—	—	—	—	—	
	170				深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	—	—	—	—	—	—	
	171	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	—	—	552	8.07	—	—	
	172	C-24		Ⅳ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	—	—	12423	8.00	—	—	
第152図	173	B-4	見SJ 5		深鉢形土器	—	Ⅱb類	赤褐	にぶい赤褐	—	—	金雲母	34	
	174	D-2	見SJ84		深鉢形土器	—	Ⅱb類	にぶい赤褐	にぶい赤褐	—	—	2mm大の石英	33	
第153図	175	A-22		Ⅲ	深鉢形土器	胴部	Ⅱb類	黒褐・ミガキ	褐灰・条痕	14719	8.76	—	—	
	176	A-35			深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	暗赤・貝殻条痕	暗赤・ミガキ	—	—	側面部に穿孔	—	
	177	A-35			深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	赤褐・貝殻条痕	赤褐・条痕	—	—	—	—	
	178				深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	赤褐・条痕	赤褐・条痕	榎木田	—	—	—	
	179	B-18		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	赤褐・沈線	灰白・磨耗	8512	—	金雲母	—	
	180	C-17		Ⅱb	深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	にぶい橙・ナデ	橙・ナデ	8595	7.20	—	—	
	181	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	明赤褐・条痕	淡赤橙・ナデ	13318	8.77	—	—	
	182				深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	赤黒・貝殻条痕	暗赤褐・ミガキ	—	—	—	金雲母	—
	183	D-17		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	赤褐・条痕	赤褐・ナデ	16817	9.42	—	—	
	184	D-23		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	にぶい橙・磨耗	にぶい橙・磨耗	10684	8.68	—	—	
第154図	185	B-22	SD43		深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	明褐灰・磨耗	褐灰・貝殻条痕	13400	8.86	—	—	
	186	C-21		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅱb類	灰白・条痕	黒・ミガキ	11269	8.49	—	—	
	187	C-20	SJ47		深鉢形土器	完形	Ⅲ類	明褐・条痕	明褐・条痕	—	—	—	35	
	188	D-21	SJ46B		深鉢形土器	—	Ⅲ類	明褐・条痕	明褐・条痕	—	—	金雲母・底部木ノ実状圧痕	33	
	189	B-21	SJ131A		深鉢形土器	口縁部～胴部	Ⅲ類	浅黄・リボン・条痕	浅黄・ナデ	—	—	金雲母・角閃石	34	
	190	B-21	SJ131B		深鉢形土器	—	Ⅲ類	赤褐・条痕	赤褐・ナデ	—	—	2mm大の石英	34	
第156図	191	B-21	SJ126		深鉢形土器	—	Ⅲ類	赤褐・条痕	赤褐・ナデ	—	—	2mm大の石英	36	
第157図	192	B-21	SJ125		深鉢形土器	—	Ⅲ類	赤・条痕	赤・ナデ	—	—	2mm大の石英	—	



193

0 10cm

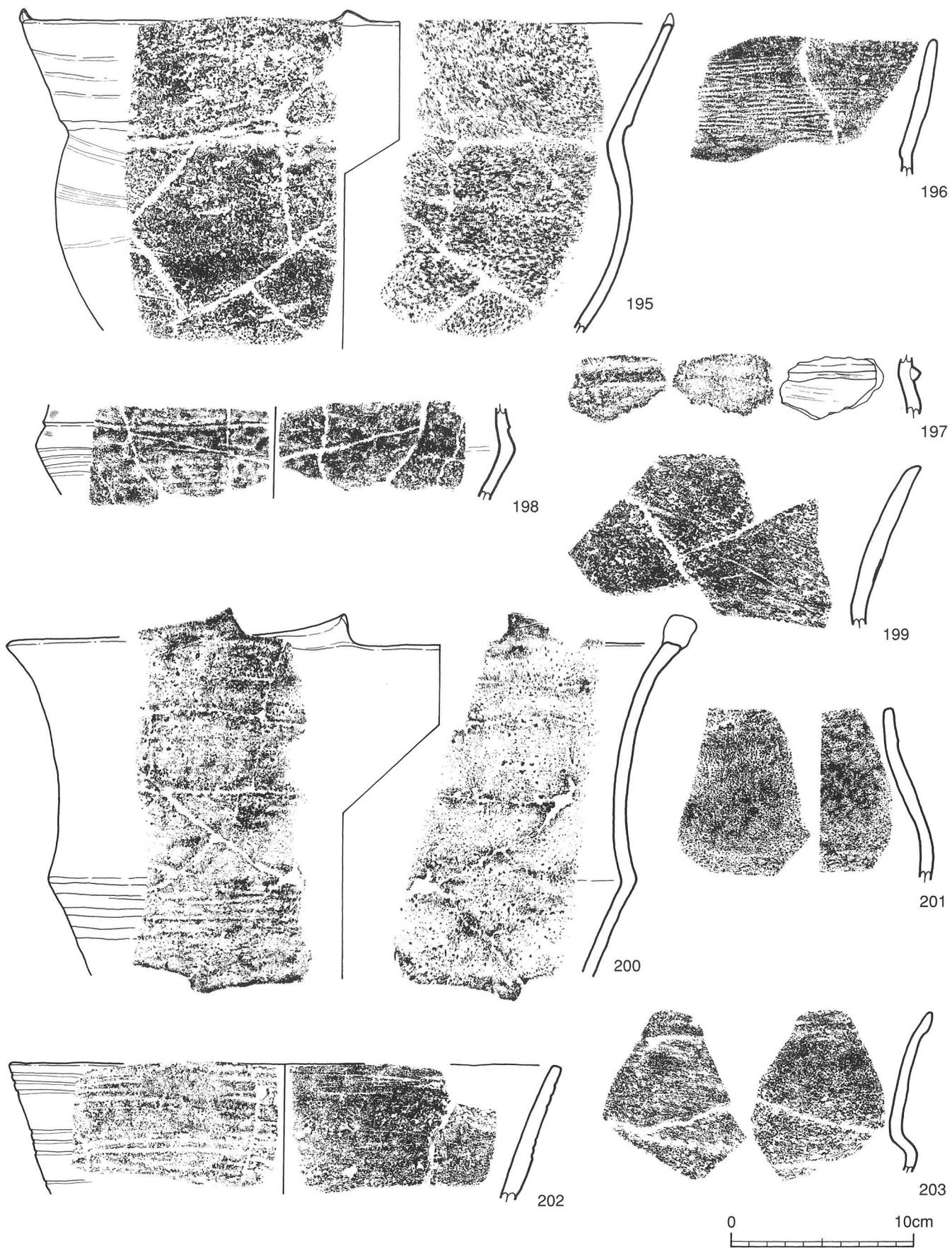
第157図 出土遺物 縄文土器(28)



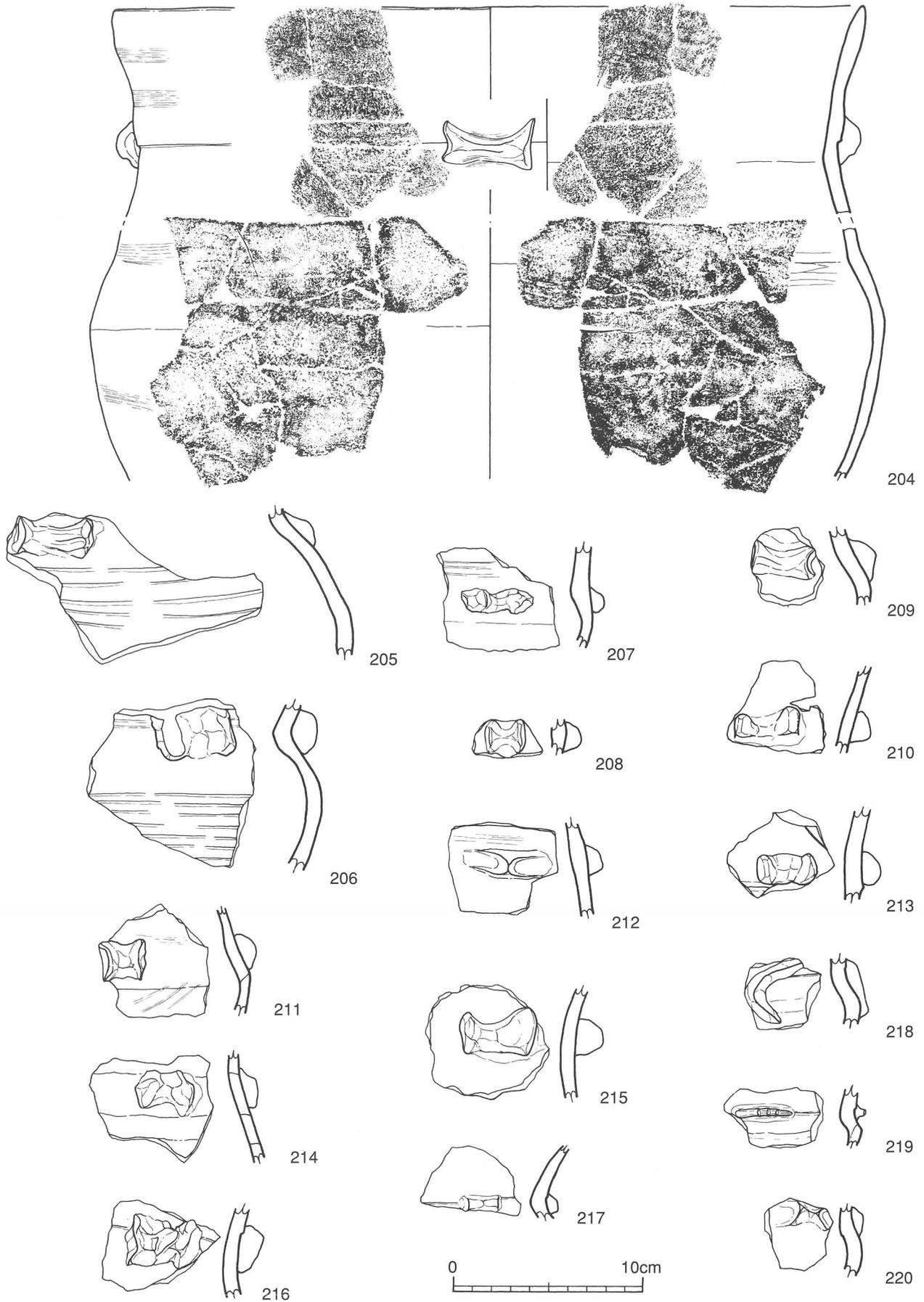
第158図 出土遺物 縄文土器(29)

表16 縄文土器観察表7

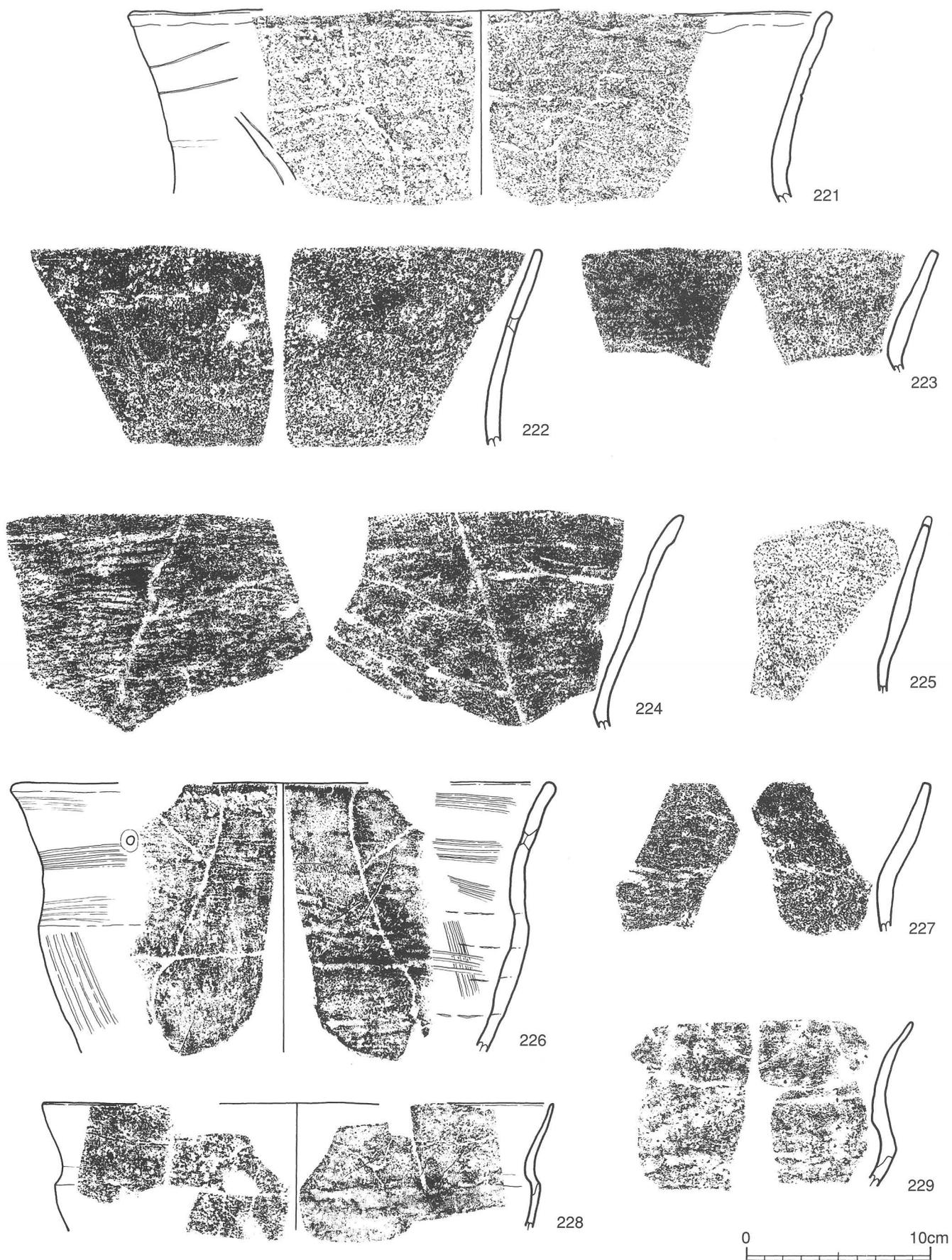
図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他 備考	写真図版
								外面	内面				
第157図	193	C-22	SJ51		深鉢形土器	-	Ⅲ類	橙	橙		-	金雲母・茶粒	36
第158図	194	D-20	SJ11		深鉢形土器	完形	Ⅲ類	にぶい橙・条痕	にぶい橙		-	凝灰岩	35
第159 図	195				深鉢形土器	口縁部	Ⅲ類	黒褐・粗いナデ	褐灰・摩耗		-	-	-
	196				深鉢形土器	口縁部	Ⅲ類	にぶい橙・貝殻条痕	黒褐・ナデ	大坪	-	-	-
	197				深鉢形土器	胴部	Ⅲ類	赤褐・ナデ	灰褐・摩耗	大坪	-	-	-
	198	C-23		Ⅲ	深鉢形土器	胴部	Ⅲ類	にぶい赤褐・条痕	にぶい赤褐・丁寧なナデ	12940	8.88	-	-
	199	B-25			深鉢形土器	口縁部	Ⅲ類	赤褐・丁寧なナデ	赤褐・丁寧なナデ	大坪	-	-	-
	200	B-15		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅲ類	赤褐・貝殻条痕	黒褐・摩耗	14155	8.25	-	-
	201	A-35			深鉢形土器	口縁部	Ⅲ類	褐・摩耗	にぶい褐・ナデ		-	-	-
	202	B-23		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅲ類	赤褐・貝殻条痕	暗赤灰・ナデ	15980	8.62	-	-
	203	D-18		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅲ類	明褐灰・条痕	黒・ナデ	7317	8.35	-	-
	204	B-23		Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類	明赤褐	にぶい赤褐	15113	8.78	金雲母・小石	-
第160 図	205	D-18			深鉢形土器	その他	Ⅲ類	浅黄橙・条痕	浅黄橙	大坪	-	3mm大の石英	-
	206				深鉢形土器	その他	Ⅲ類	赤褐・条痕	暗赤灰	大坪	-	2mm大の石英	-
	207	D-15		Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類	明赤褐	にぶい橙	1330	8.18	角閃石・半透明の石英	-
	208	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類	暗赤灰	赤褐	14993	8.63	-	-
	209	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類	にぶい橙	橙	16497	9.55	角閃石・2mm大の石英	-
	210				深鉢形土器	その他	Ⅲ類	浅黄橙	褐灰		-	半透明の石英	-



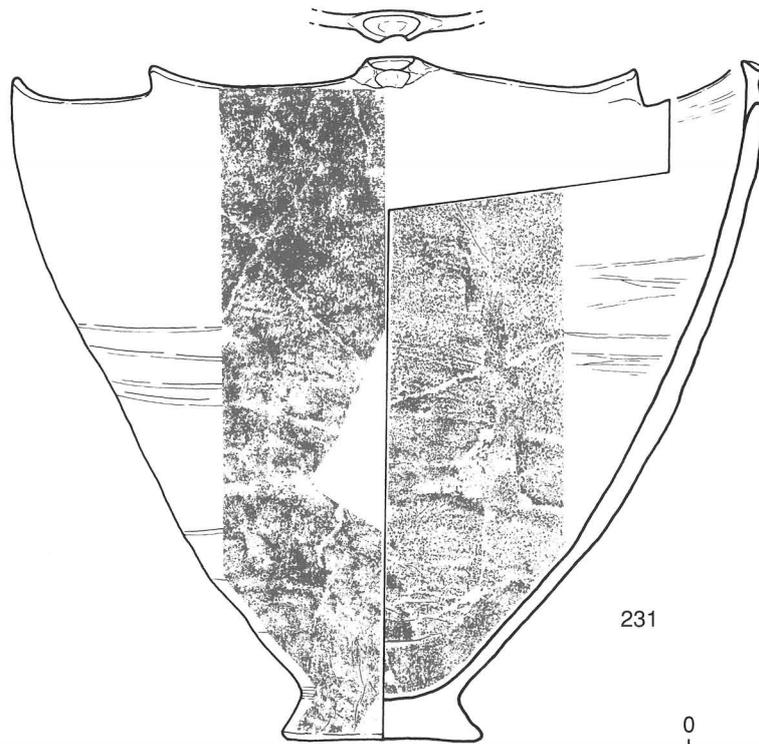
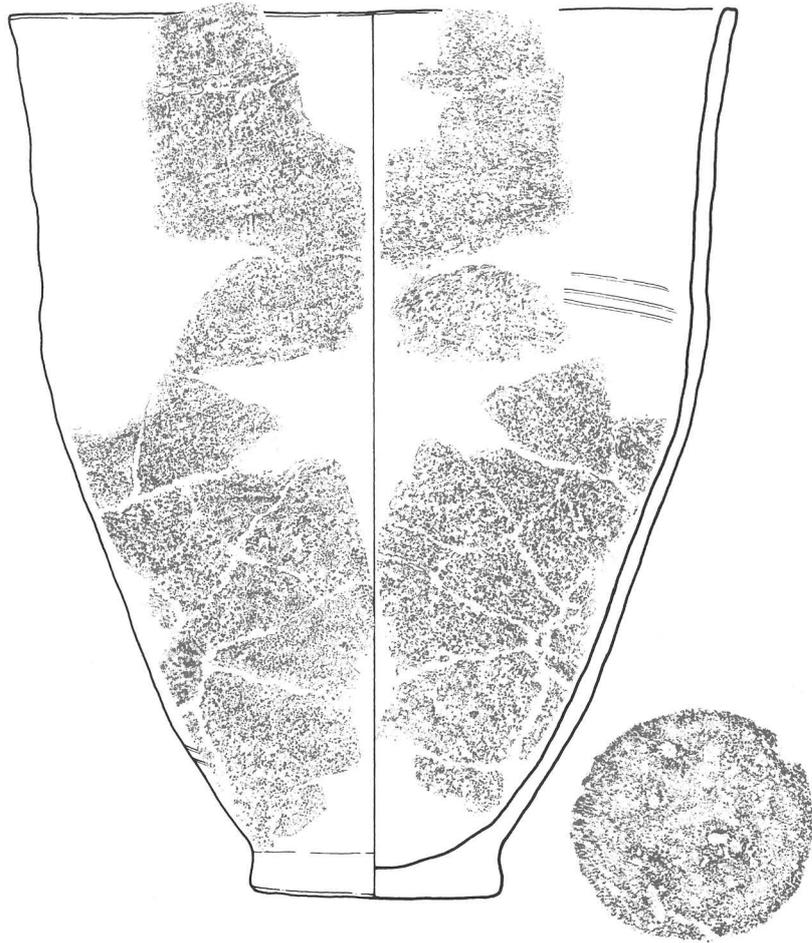
第159図 出土遺物 縄文土器(30)



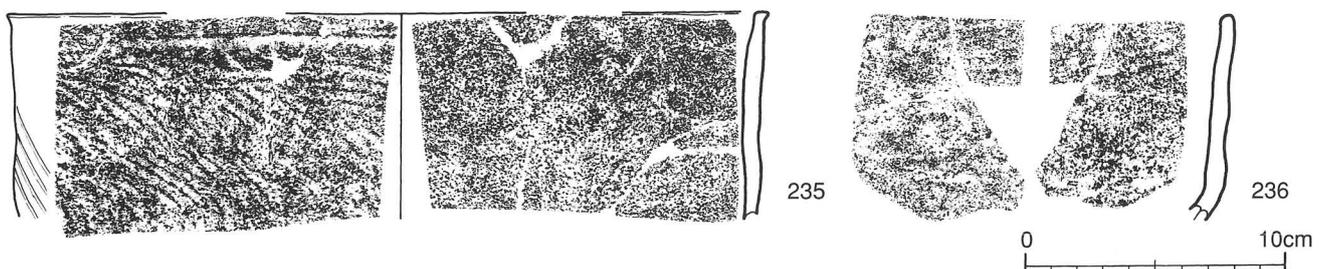
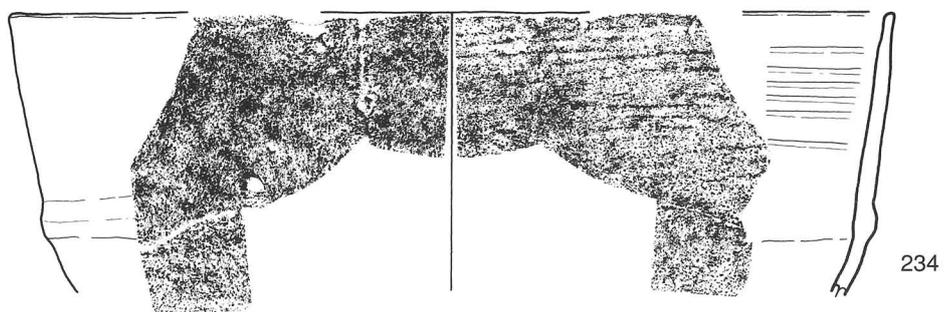
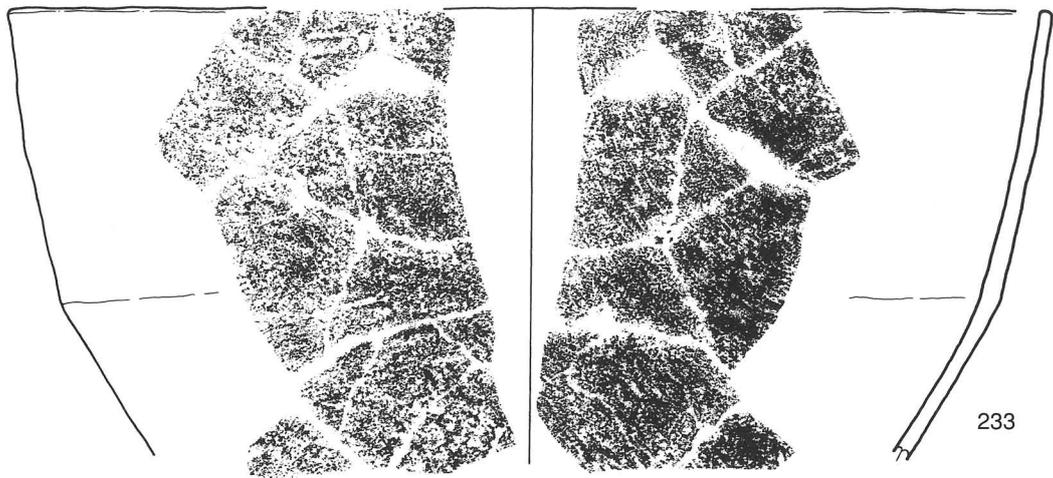
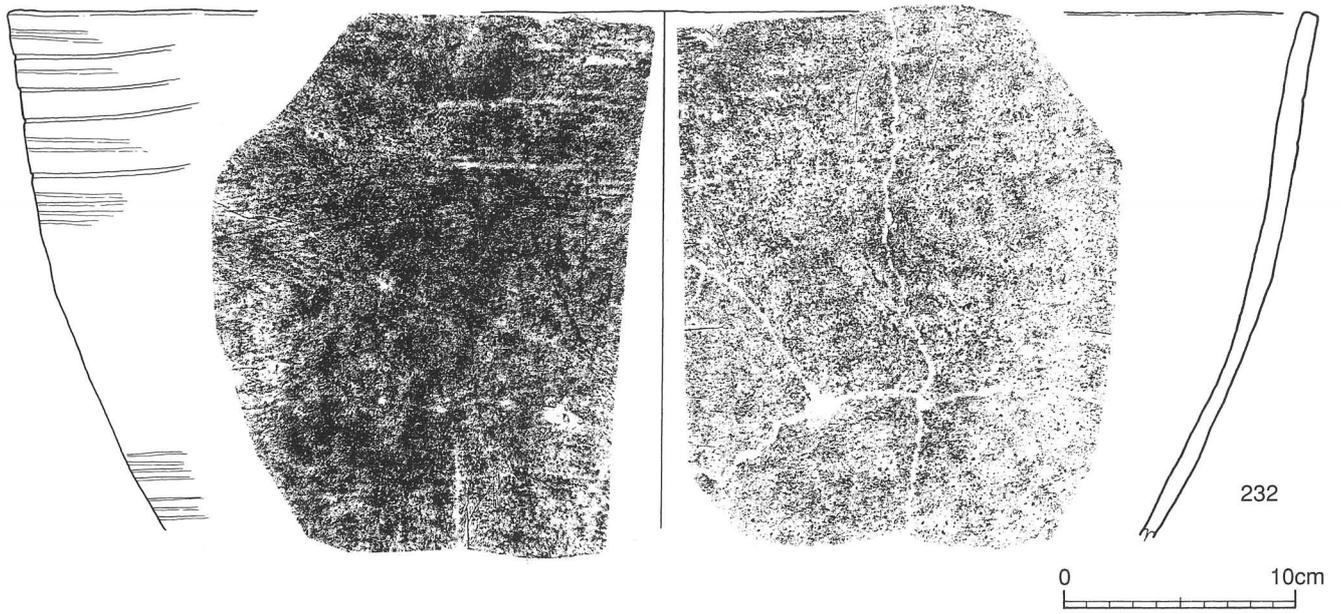
第160図 出土遺物 縄文土器(31)



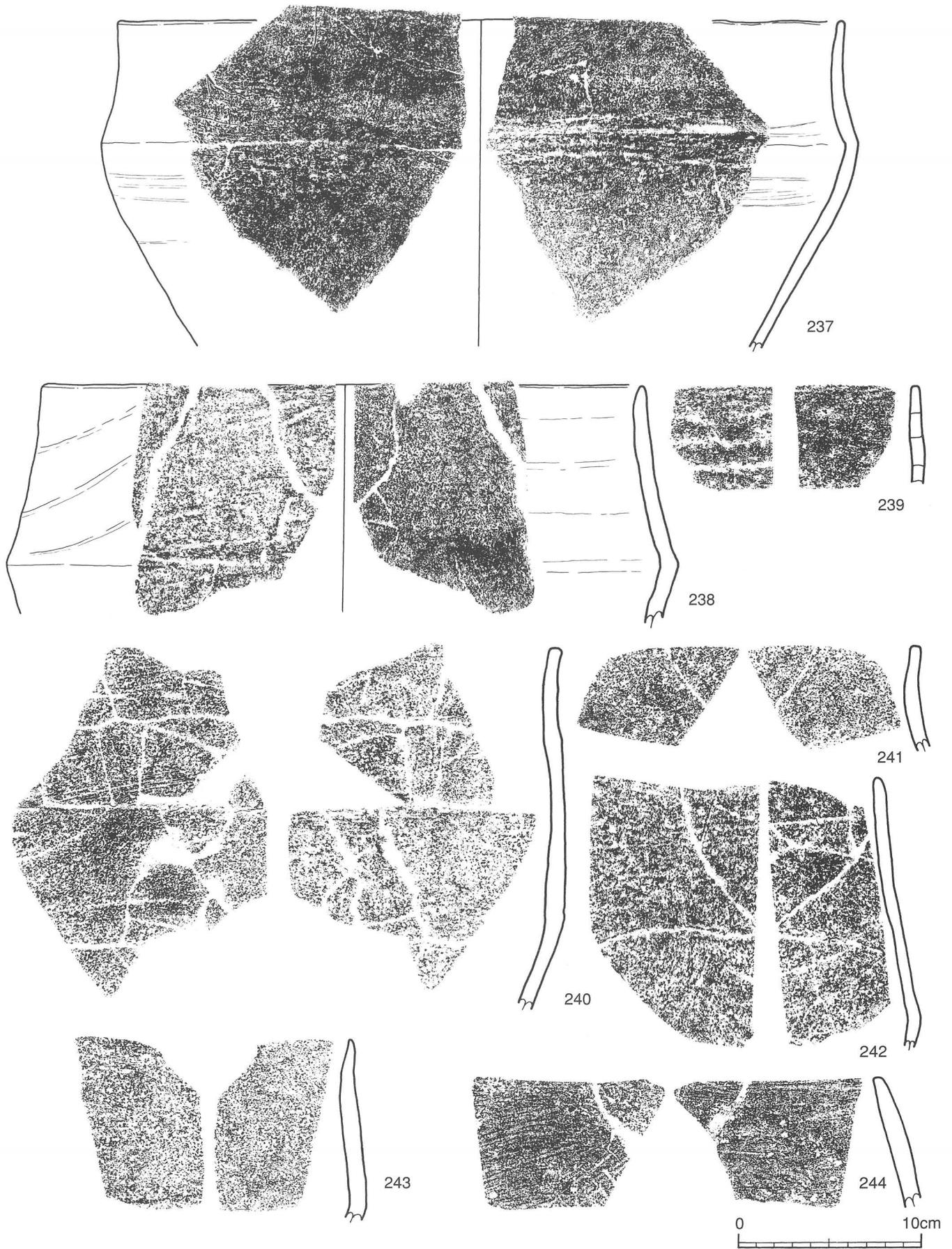
第161図 出土遺物 縄文土器(32)



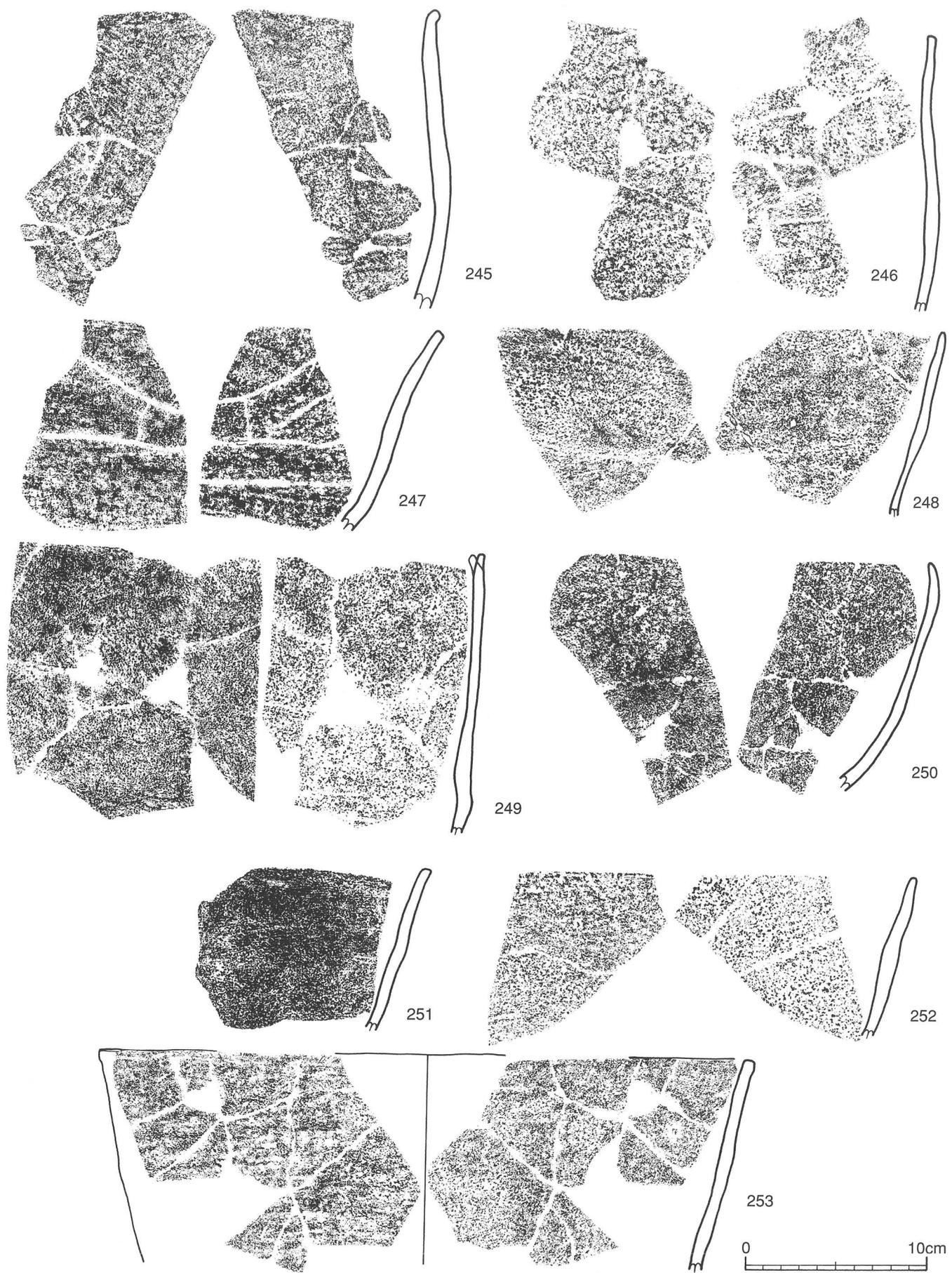
第162図 出土遺物 縄文土器(33)



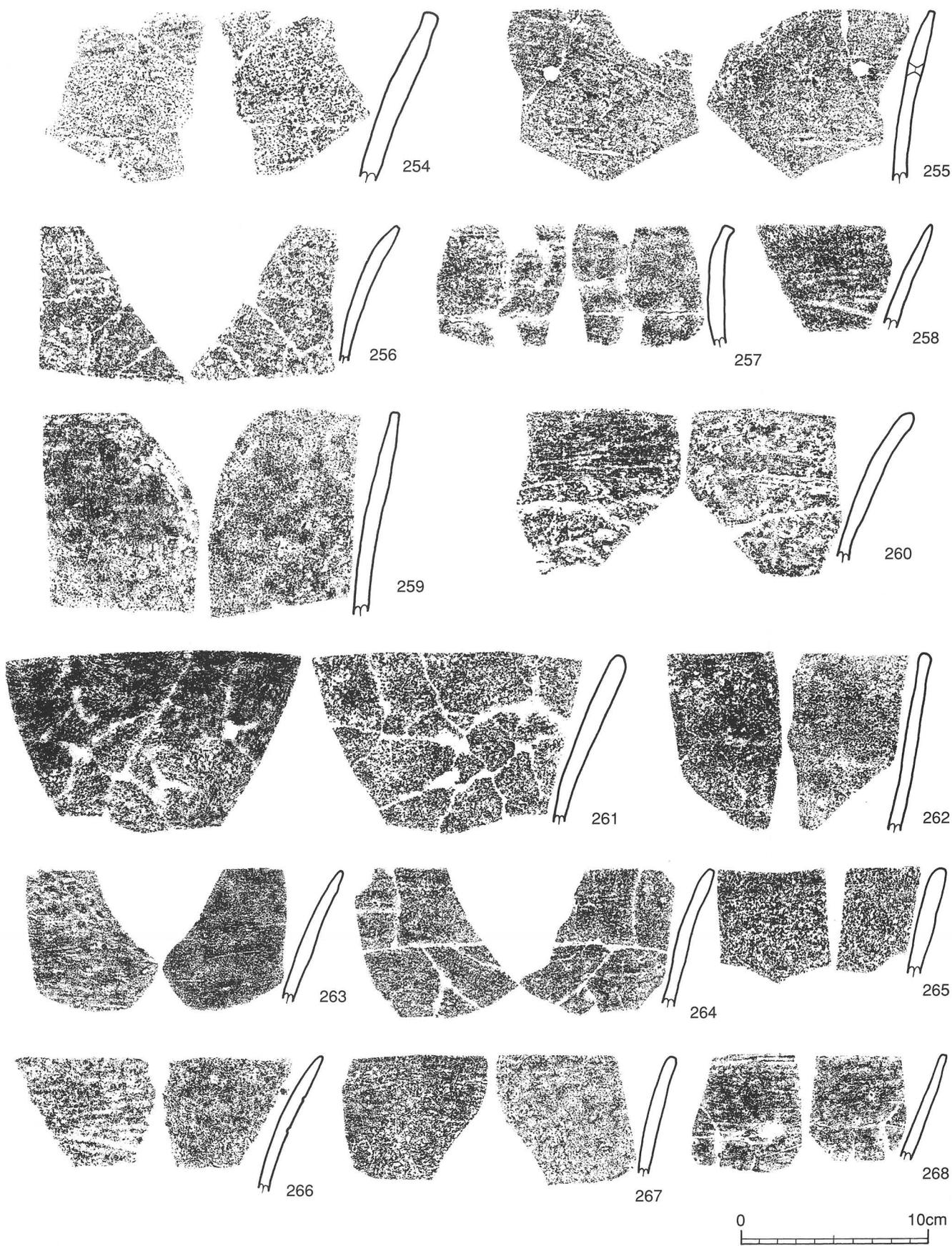
第163図 出土遺物 縄文土器(34)



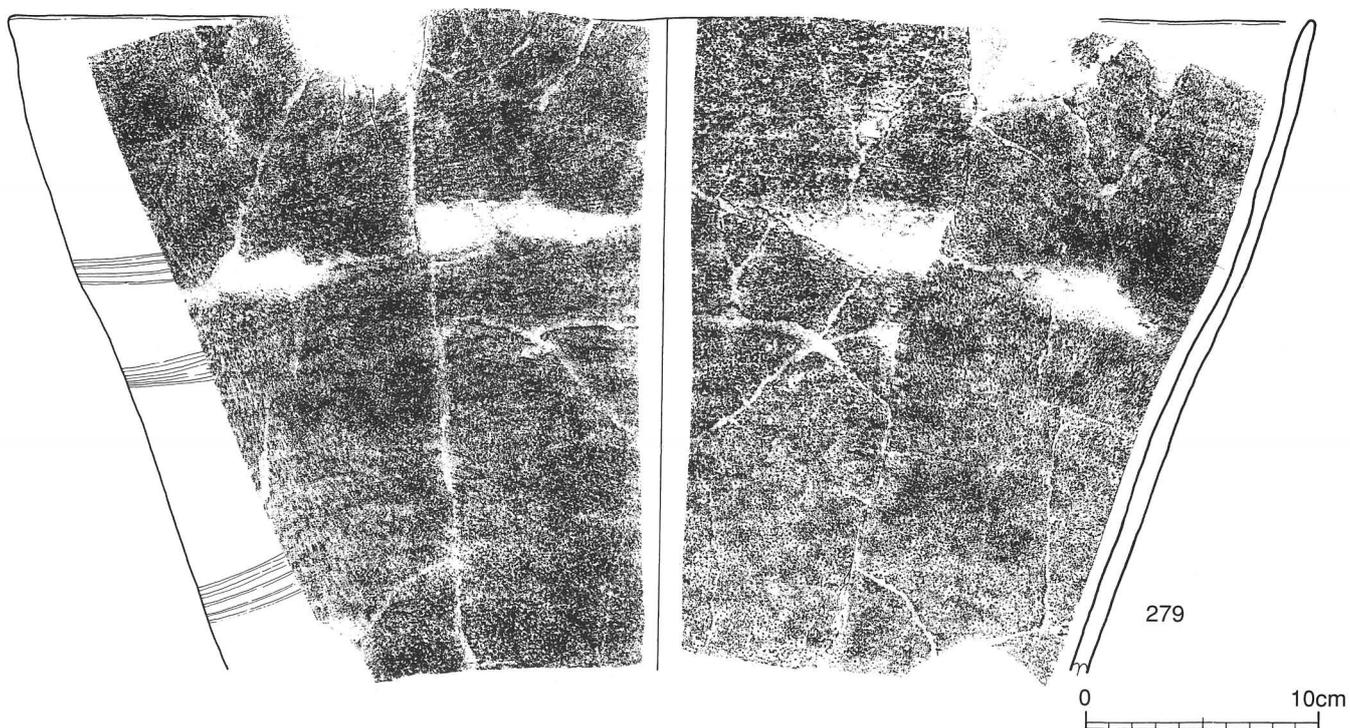
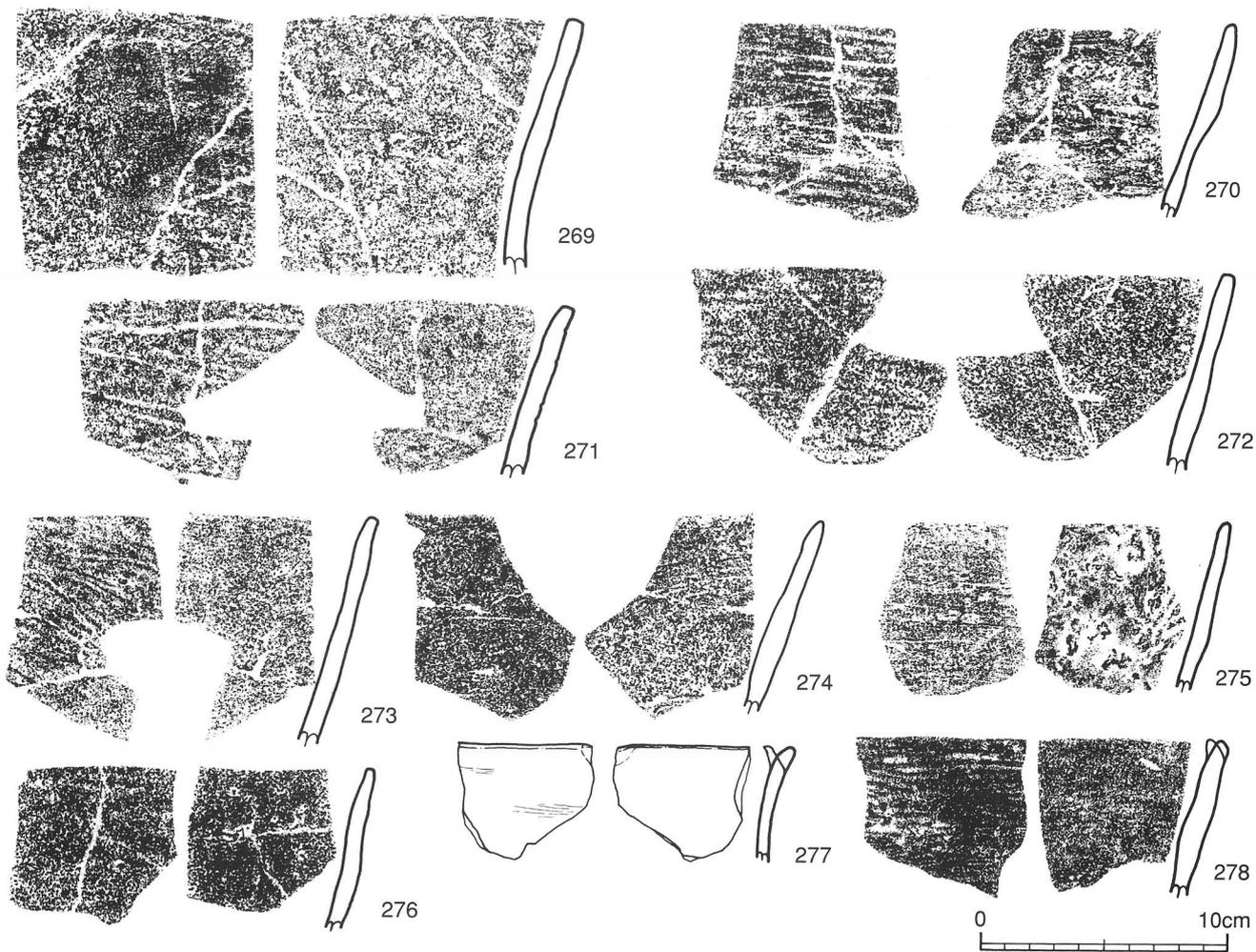
第164図 出土遺物 縄文土器 (35)



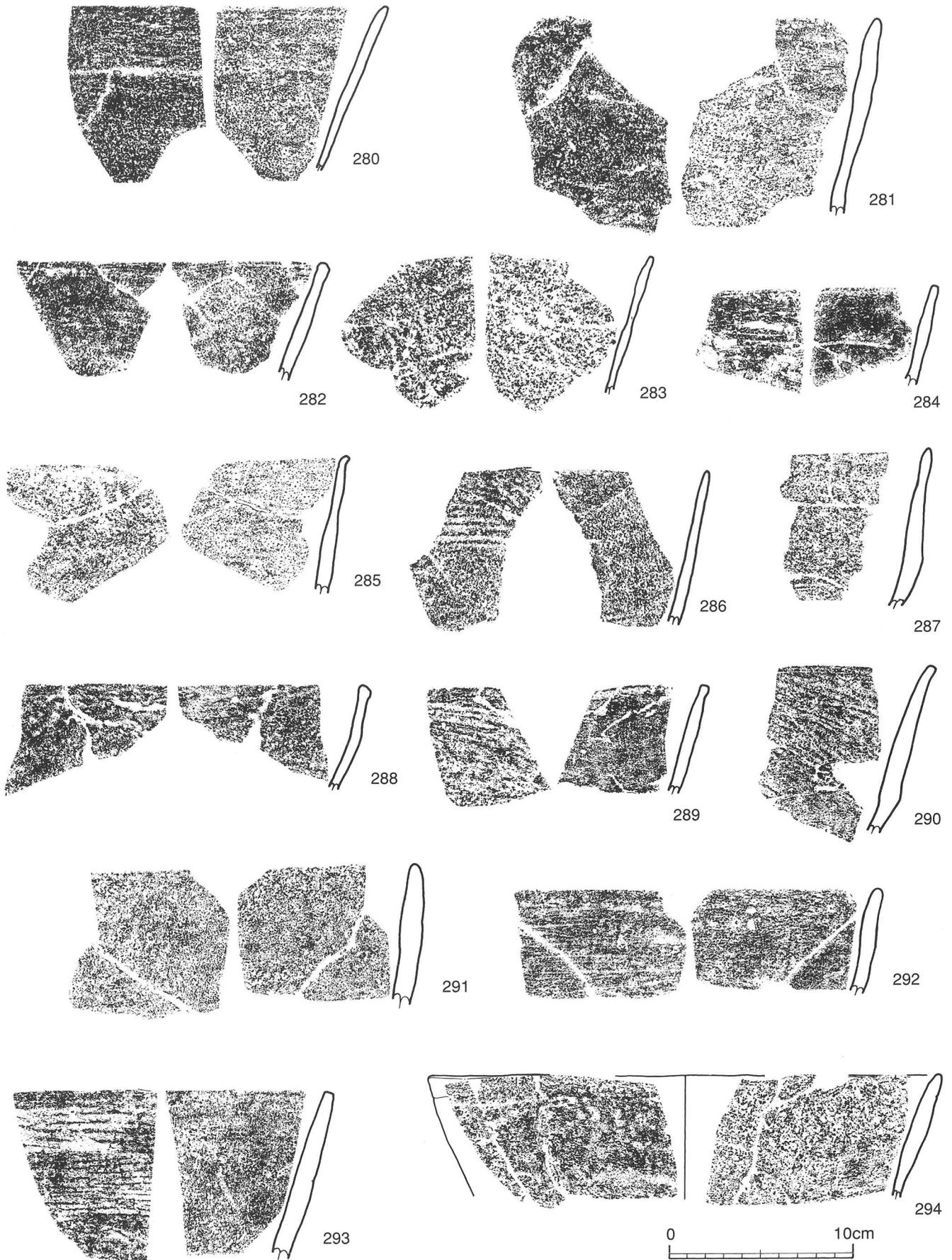
第165図 出土遺物 縄文土器(36)



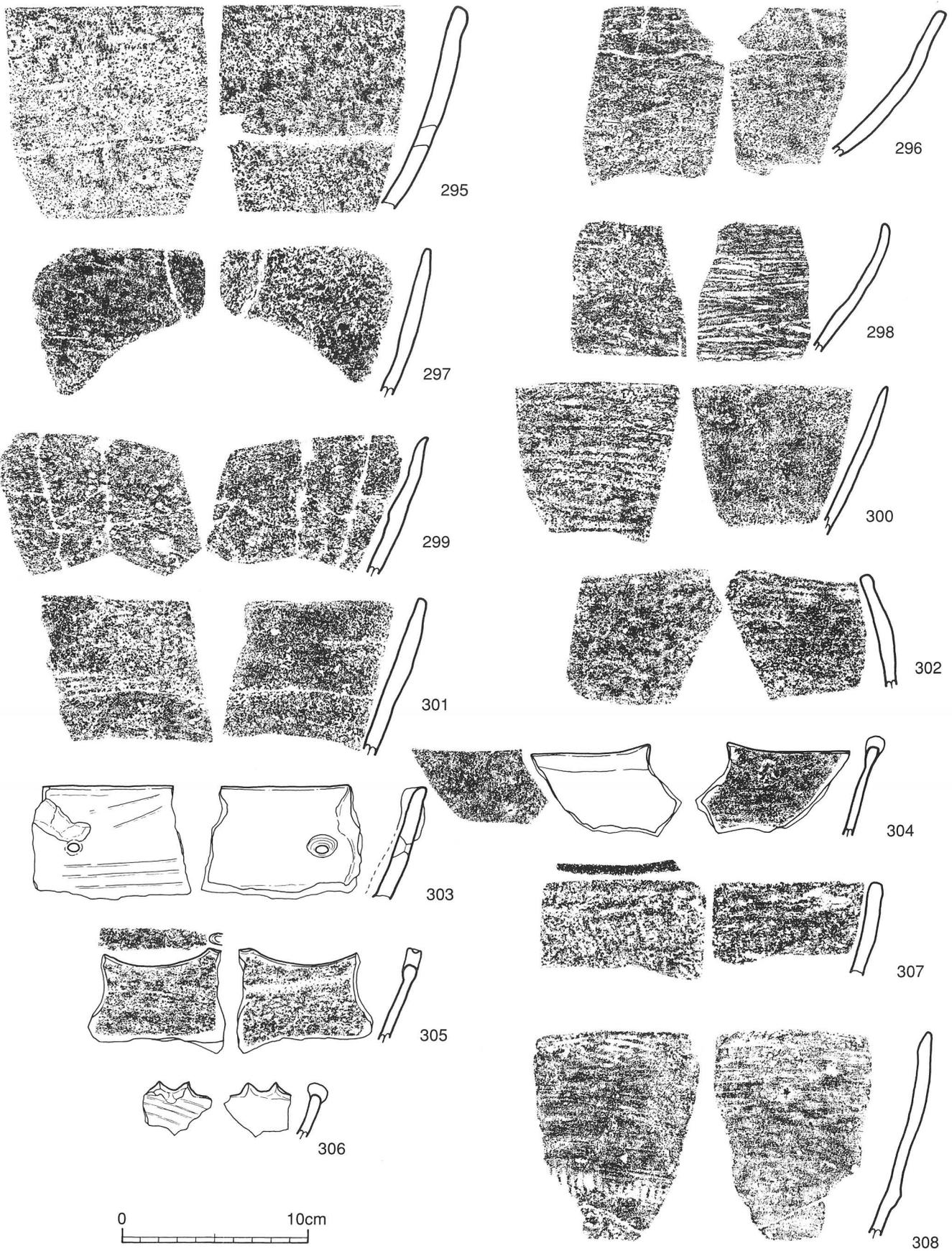
第166図 出土遺物 縄文土器(37)



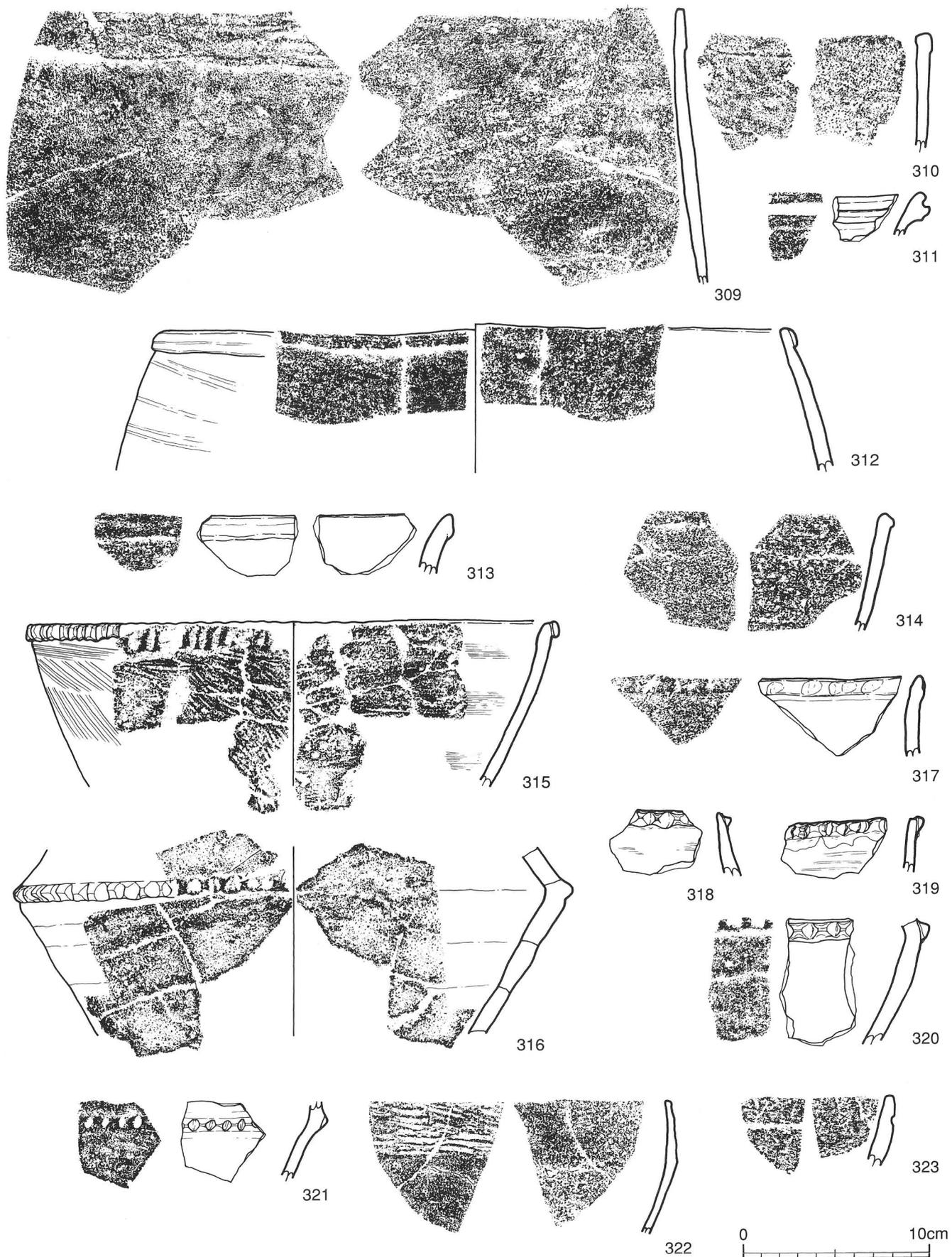
第167図 出土遺物 縄文土器(38)



第168図 出土遺物 縄文土器(39)



第169図 出土遺物 縄文土器(40)



第170図 出土遺物 縄文土器(41)

く屈曲するもので、この外面のみに条痕が観察される。323は口縁部に凹線が巡るものである。322・323とも縄文時代終末～弥生時代初頭のものと考えられる。

## ②組織痕土器（第171～174図 324～371）

組織痕がはっきりみられるのは全部で62点出土し、小破片まで図化に努めた。中華鍋形の器形を呈し、口縁部下位に組織の圧痕がみられる。組織痕がみられない土器についても、内面がミガキで外面が粗い条痕の場合や器形及び煤の付着具合から、同じ種類であると考えてこの類に含めた。353は口縁部付近まで組織痕が認められるものであり、これまで県内から出土した例の中では特異である。組織痕としては網目・編布・不明のものがあり、特に網目が目立っている。網目の大きさは3～6mmであり、他の遺跡例よりもかなり目の細かいものがある。編布は2種類あり、経緯幅は6.5mmと18mmである。もう一つの不明なものは、モデリングを観察しても明らかにできなかった。分布域は無刻目突帯文土器と刻目突帯文土器が出土した地点であり、同時期のものと考えられる。

369は4mm幅の単位をもつが、何であるかは判断できない。370は糸をからめてはいるが、網目か編布かの判断はつかない。371は7mm幅の単位をもち、それに直交する様な繊維が認められる。

## ③浅鉢形土器（第175～179図 372～449）

浅鉢形土器の形状は多様であり、分類に苦慮するが、便宜上大きく2つに分類する。Ⅰ類は肩部が「く」の字状に内側へ屈曲するものであり、Ⅱ類としたものは肩部が丸く内湾するものである。それぞれ他の部位の特徴によって細分することとする。

**Ⅰa類**（372～379）：肩部と頸部の間が短く、頸部で「く」の字状に外側へ屈曲し、短い口縁部をもつ。

**Ⅰb類**（380～382・384）：肩部と頸部の間が短く、頸部で「く」の字状に外側へ屈曲するのはⅠa類と同じであるが、口縁部が長めでストレートに口唇部へ至る。

**Ⅰc類**（386～403）：肩部で「く」の字状に内側へ屈曲するが、頸部は大きく外反しながら開く。口唇部は粘土紐を1条重ねることによって二重口縁風となる。

**Ⅰd類**（404～420）：肩部で「く」の字状に内側へ屈曲し、長めの口縁部をもつ点はⅠc類と同じであるが、頸部がわずかに屈曲気味になるものである。頸部が屈曲する点はⅠa・Ⅰb類にも近い。

407は口径19.5cm・器高7cmを測る。底面はわずかに平坦になるけれども、大きく内湾する体部をもつ。外面に稜を残しながら内側に屈曲するが、5mmほどで再び外側へ緩く外反しながら開く。さらに、粘土紐を1段直立させながら重ねることによって口唇部

をつくり、外面に凹線を巡らす。内外面ともミガキによる器面調整である。胎土の金雲母が目立つ。台風時の散逸で、出土地点は不明である。

**Ⅱa類**（421～430・383・385）：肩部で大きく内湾し、頸部で「く」の字状に外側へ屈曲し、短いながらも口縁部をもつものである。

**Ⅱb類**（431～450）：頸部で「く」の字状に外側へ屈曲する点はⅡa類と同様であるが、頸部がほとんどなく口唇部に至るものである。頸部上位に粘土紐を2段重ねるもの（434～443）と、1段だけのもの（431～433・444～449）がある。

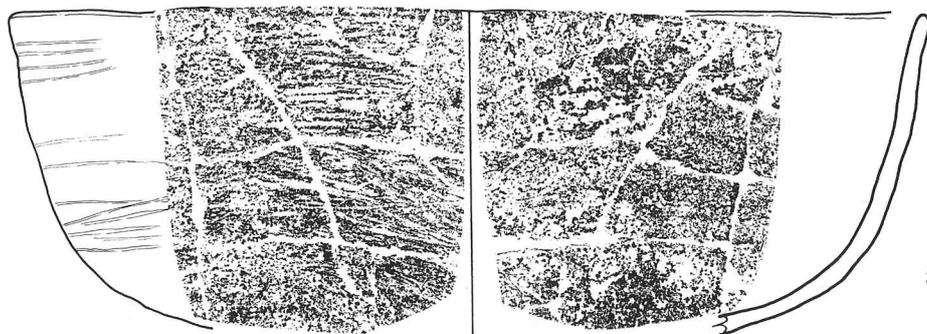
## ④小型浅鉢形土器（第180図 451～470）

丸平底をした底部で、外面に1条あるいは2条の沈線を巡らすものもある。体部下半は外反気味に外開きして、体部中央に至る。体部中央で1条あるいは2条の沈線を巡らすものもある。体部上半にはバリエーションがあり、内湾気味に外開きするもの（451～456・459）、短く内湾してから開くもの（458・461）、内湾しながら内側に傾くもの（463・467～470）などがある。体部上半が外開きするものは、波状口縁が多く、口縁部に沿って沈線を引き、その下側をわずかに削り出している。体部上半が内側に傾くものは、浅鉢形土器Ⅱb類と同じように頸部がほとんどなく、粘土紐を1段もしくは2段重ねることによって口唇部としている。

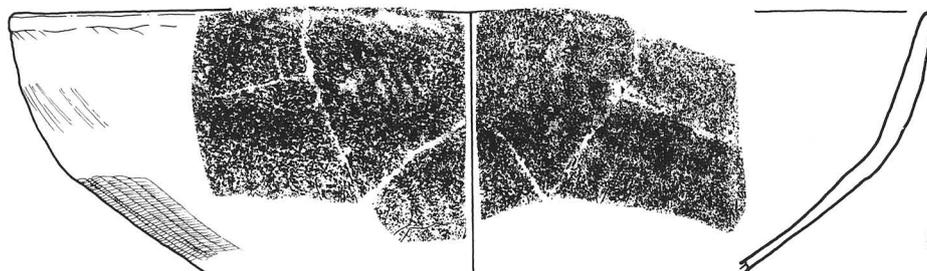
459には外面全体に赤色顔料が塗られており、底面まで続いている。本センター内の蛍光X線分析装置で分析した結果（213頁）、パイプ状の粒子が確認され第二酸化鉄（ベンガラ）であることがわかった。461は口径14cm・底径5.4cm・器高6.2cmを測る小型の浅鉢形土器である。底部は丸平底で、外反しながら外開きする胴部下半へ至る。底部は2条の細い凹線を巡らす。胴部最大径のわずかに下に1条の凹線を巡らし、この部分が接合痕となっている。頸部で一度締まり、内湾しながら大きく開く口縁部となる。口唇部は平に面取りし、外側にわずかに張り出しをもたせ、一見凹線が巡るようにみえる。欠損のため確実なことは言えないが、波状口縁になると考えられる。467は小型精製浅鉢形土器である。口径14.6cm・最大径17.8cm・底径4.5cm・器高9.5cmを測り、底部はほぼ平で、丸みを帯びながら大きく外側に開く。接地面との境に1条の沈線を巡らす。体部上位で丸みもちながら内側に屈曲し、この部分に2条の沈線を巡らす。肩部は内湾させ、文様帯としている。全周を3分割して窓枠状の区画をつくる。沈線によって区画するのであるが、内側を若干削ることによって、沈線間が浮線状となる。1つの区画の中央には、粘土紐の貼り付けによって「X」字状の文様が描かれる。この部分がおそらく正面となったであろう。



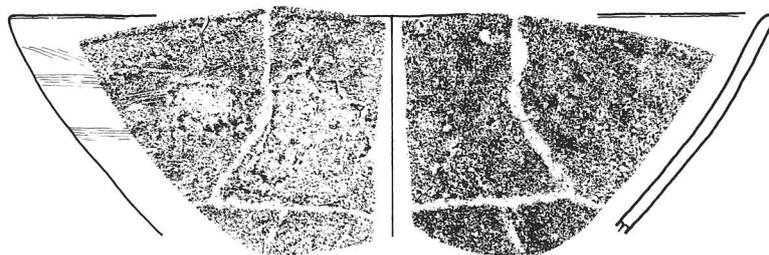
324



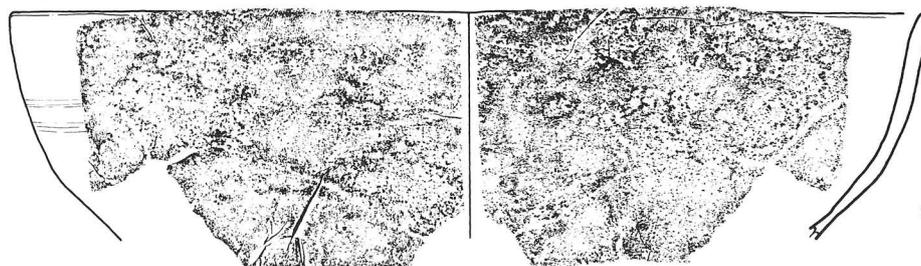
325



326



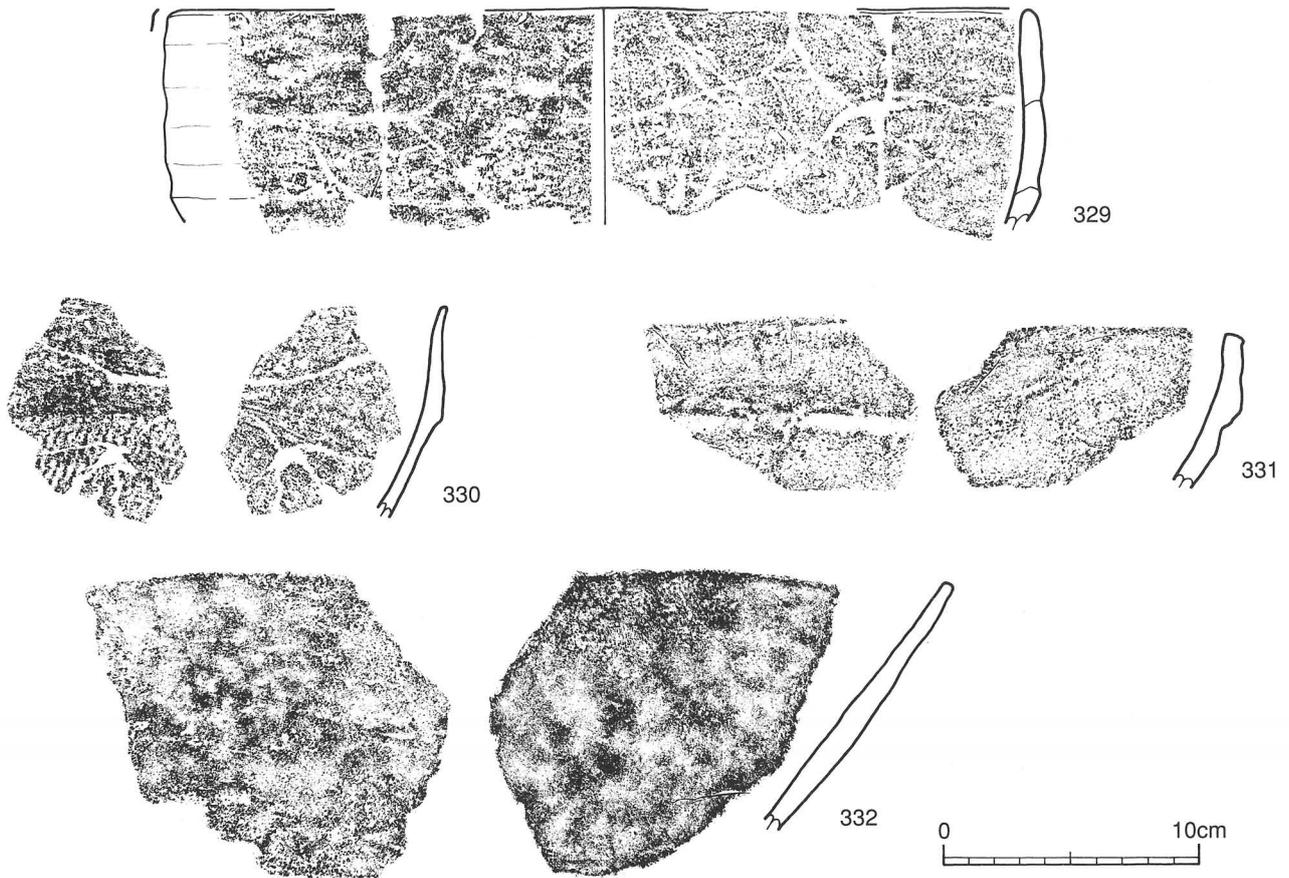
327



328



第171図 出土遺物 縄文土器(42)



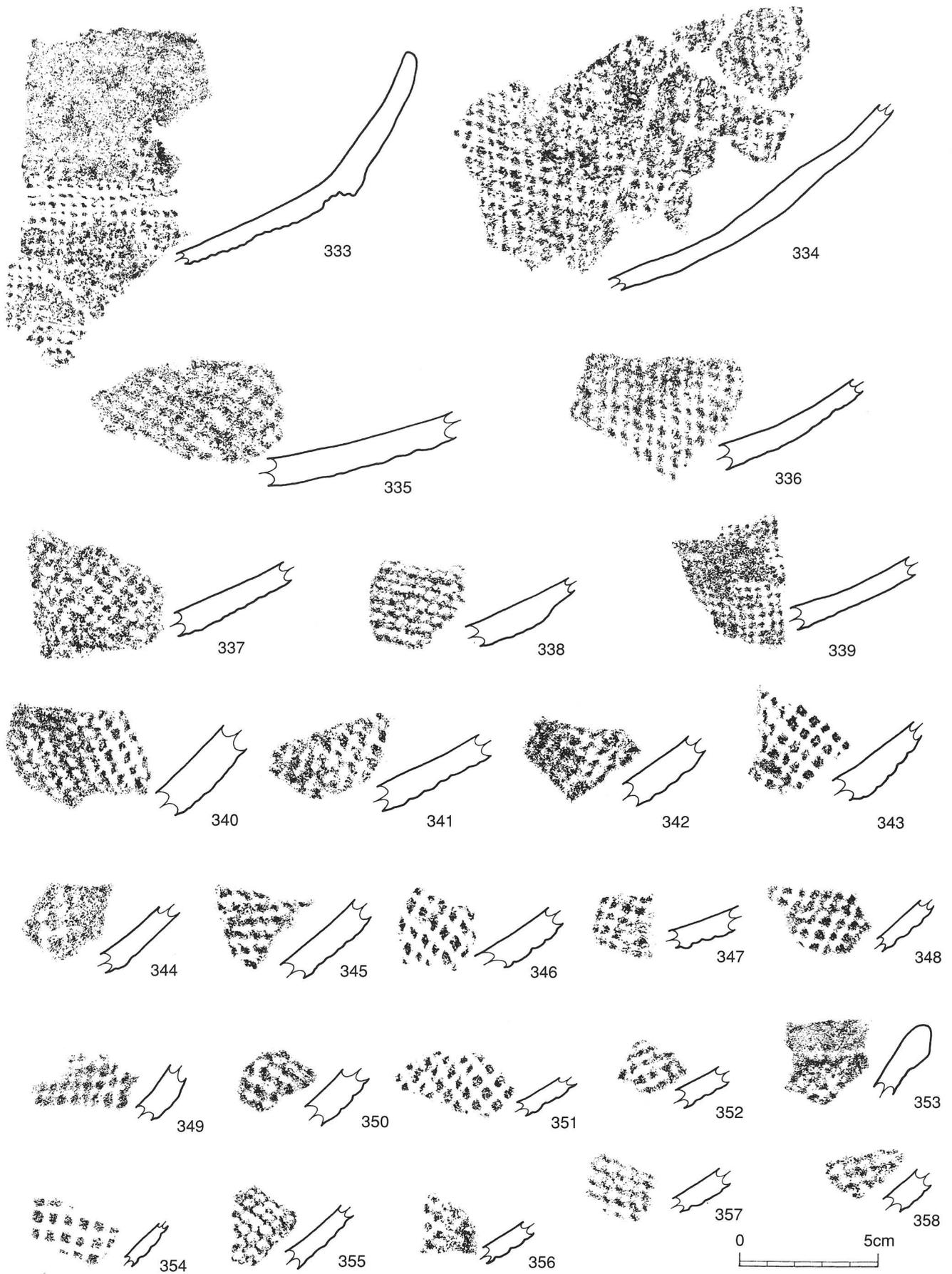
第172図 出土遺物 縄文土器(43)

表17 縄文土器観察表 8

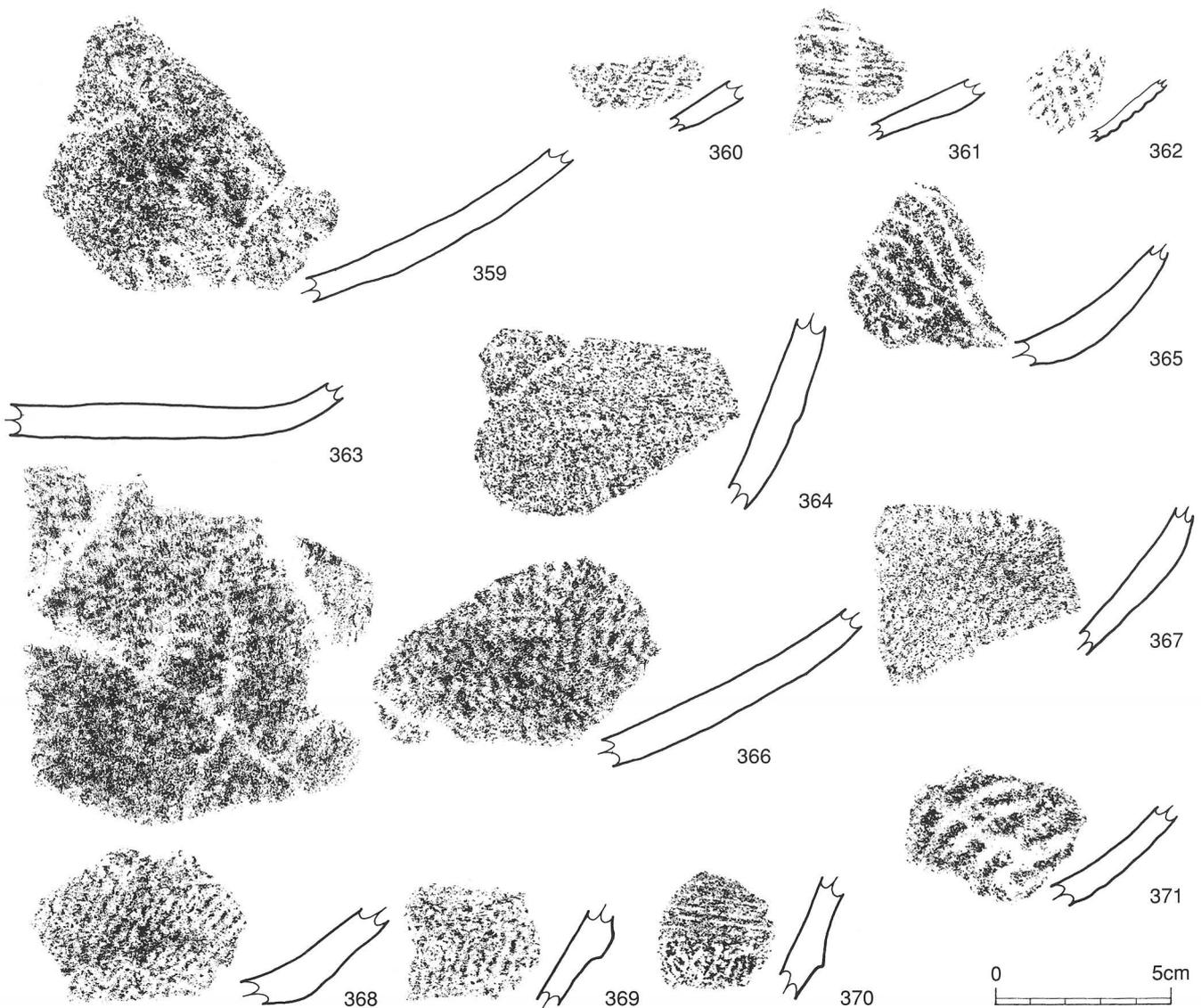
図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他 備考	写真	
								外面	内面					
第160 図	211	D-18		Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類			7288	8.30	-	-	
	212				深鉢形土器	その他	Ⅲ類			注記ナシ	-	-	-	
	213	D-18		Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類			7062	8.40	-	-	
	214	D-13		Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類			864	8.05	-	-	
	215	B-21	SK138		深鉢形土器	その他	Ⅲ類			大坪	-	-	-	
	216	B-35			Ⅳ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類			17014	8.20	-	-
	217	D-20			Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類			7587	8.54	-	-
	218	B-32	SD22			深鉢形土器	その他	Ⅲ類			16944	9.16	-	-
	219	C-17			Ⅱb	深鉢形土器	その他	Ⅲ類			5878	8.34	-	-
	220	B-22			Ⅲ	深鉢形土器	その他	Ⅲ類			14986	8.83	-	-
第161 図	221	D-18		Ⅱb	深鉢形土器	口縁部	Ⅳa類			4512	8.30	-	-	
	222	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳa類			443	8.08	-	-	
	223	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳa類			大坪	-	-	-	
	224	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳa類			15087	8.50	-	-	
	225	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳa類			16463	9.52	-	-	
	226	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	実測班	Ⅳa類			16544	9.22	-	-	
	227	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳa類			14735	8.66	-	-	
	228	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳa類			103	8.20	-	-	
	229	D-15		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳa類			1229	8.17	-	-	
第162 図	230	D-17		Ⅲ	深鉢形土器	-	Ⅳb類			7409	8.36	-	-	
	231	C-19		Ⅳ	深鉢形土器	完形	Ⅳb類			7435	8.27	-	37	
第163 図	232	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	橙・条痕	黒褐色・摩耗	14538	9.50	14020	-	
	233	A-32	SD	Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	にぶい赤褐色・粗いナデ	黒褐色・粗いナデ	17045	9.51	-	-	
	234	C-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	黒褐色・摩耗	黒褐色・貝殻条痕	12908	8.81	-	-	
	235	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	灰白・条痕	黒・摩耗	11496	8.88	-	-	
	236	B-29		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	灰白・摩耗	黒褐・摩耗	16079	9.39	角閃石	-	
	237	B-15		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	淡赤橙・ナデ	褐灰・ナデ	13950	8.24	-	-	
	238	B-15		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	にぶい橙・ナデ	黒褐色・ナデ	13671	8.29	-	-	
第164 図	239	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	黒褐色・ナデ	暗赤褐色・摩耗	10870	8.94	-	-	
	240	B-30		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	にぶい橙・条痕	にぶい橙・ナデ	16623	9.38	-	-	
	241	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	明赤灰・摩耗	にぶい赤褐・摩耗	11473	8.86	-	-	
	242	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	暗赤褐色・ナデ	橙・ナデ	10893	8.94	-	-	
	243	D-18				深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	橙・摩耗	橙・摩耗	-	-	-	
	244	C-22		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	Ⅳb類	赤・条痕	赤黒・粗いナデ	11242	8.58	金雲母	-	

表18 縄文土器観察表 9

図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他備考	写真図版
								外面	内面				
第165図	245	C-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV b類	黒褐・ナデ	黒褐・ナデ	11751	8.98	角閃石	-
	246				深鉢形土器	口縁部	IV b類	明赤褐・ナデ	褐灰・ナデ	見入来	-	茶粒	-
	247	A-32	SD146		深鉢形土器	口縁部	IV b類	赤褐・ナデ	淡橙・ナデ	16961	9.58	凝灰岩	-
	248	A-23		Ⅳ	深鉢形土器	口縁部	IV b類	にぶい赤褐・摩耗	褐灰・摩耗	16587	9.87	3mm大の石英	-
	249	D-12		Ⅱ	深鉢形土器	口縁部	IV b類	橙・貝殻条痕	褐灰・摩耗	586	8.13	2mm大の石英・凝灰岩	-
	250				深鉢形土器	口縁部	IV b類	赤褐・丁寧なナデ	にぶい赤褐・丁寧なナデ	-	-	角閃石	-
	251	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV b類	黒褐・ナデ	褐灰・ナデ	13756	8.23	-	-
	252	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV b類	にぶい橙・ナデ	黒褐・摩耗	13757	8.25	2mm大の石英	-
	253	D-12			深鉢形土器	口縁部	IV b類	黒褐・ナデ	黒褐・ナデ	27	8.17	軽石	-
	254	D-22		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	褐灰・摩耗	黒褐・摩耗	10407	8.70	2mm大の石英・角閃石	-
第166図	255				深鉢形土器	口縁部	IV c類	明赤褐・粗いナデ	明赤灰・摩耗	見入来	-	側面に穿孔・金雲母	-
	256	D-11		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	褐灰・摩耗	赤褐・摩耗	398	8.16	石英(白)	-
	257	C-15		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	明赤褐・ナデ	黒・ナデ	8123	8.11	凝灰岩・半透明の石英	-
	258	B-23	SK169		深鉢形土器	口縁部	IV c類	褐灰・条痕	褐灰・ナデ	大坪	-	金雲母	-
	259	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	にぶい赤褐・丁寧なナデ	にぶい赤褐・ナデ	487	8.06	角閃石	-
	260	A-33		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	にぶい赤褐・摩耗	赤褐・摩耗	16467	9.48	2mm大の石英・角閃石	-
	261	C-17			深鉢形土器	口縁部	IV c類	橙・摩耗	淡赤橙・摩耗	-	-	2mm大の石英・角閃石	-
	262	C-16		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	褐灰・ナデ	黒・ナデ	9450	8.28	凝灰岩	-
	263				深鉢形土器	口縁部	IV c類	橙	橙	-	-	角閃石	-
	264	D-13		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	黄橙・粗いナデ	褐灰・摩耗	785	8.42	凝灰岩	-
第167図	265	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	明赤灰・摩耗	褐灰・摩耗	11436	8.80	11727 凝灰岩	-
	266				深鉢形土器	口縁部	IV c類	明赤灰・粗いナデ	赤褐・摩耗	-	-	金雲母	-
	267	D-18		Ⅱ b	深鉢形土器	口縁部	IV c類	赤灰・粗いナデ	にぶい赤褐・ナデ	4582	8.42	2mm大の石英	-
	268	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	明赤褐・粗いナデ	黒褐・ナデ	16547	9.59	凝灰岩	-
	269	D-12			深鉢形土器	口縁部	IV c類	赤褐・ナデ	赤灰・摩耗	162	8.18	2mm大の石英	-
	270	C-24		Ⅳ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	にぶい黄橙・条痕	にぶい黄橙・ナデ	12428	8.32	金雲母	-
	271	D-17		Ⅱ b	深鉢形土器	口縁部	IV c類	褐灰・条痕	にぶい黄橙・ナデ	8053	8.40	2mm大の石英	-
	272	A-22		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	にぶい赤褐	にぶい橙	14692	8.90	2mm大の石英・金雲母	-
	273			Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	にぶい赤褐	黒褐	? 65	0.00	角閃石	-
	274	B-15	SK77		深鉢形土器	口縁部	IV c類	黒褐・摩耗	黒褐・摩耗	13743	8.22	半透明の石英・凝灰岩	-
第168図	275	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	褐灰・粗いナデ	褐灰・丁寧なナデ	10852	8.90	金雲母	-
	276	B-23		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類			15511	8.85	凝灰岩	-
	277	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	褐灰・丁寧なナデ	橙・丁寧なナデ	16537	9.37	-	-
	278	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV c類	褐灰・粗いナデ	褐灰・丁寧なナデ	16470	9.46	3mm大の石英	-
	279				深鉢形土器	口縁部	IV c類	にぶい赤褐・粗いナデ	黒・ナデ	注記ナシ	-	角閃石	-
	280	B-23		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	黒褐・ナデ横	褐灰・ナデ	15827	8.83	軽石	-
	281	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	にぶい黄橙・摩耗	褐・ナデ	13575	8.26	半透明の石英	-
	282	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	明褐・ナデ横	褐灰・ナデ	138	8.19	茶粒	-
	283	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	明赤褐・摩耗	灰赤・摩耗	319	8.17	粗い小礫	-
	284	D-15			深鉢形土器	口縁部	IV d類	黒・ナデ	にぶい橙・ミガキ	1209	8.18	金雲母	-
第169図	285	C-14		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	暗褐	褐灰	14466	8.24	角閃石	-
	286				深鉢形土器	口縁部	IV d類	灰褐・貝殻条痕	黒褐・ナデ	注記ナシ	-	半透明の石英	-
	287	B-24			深鉢形土器	口縁部	IV d類	にぶい褐・ナデ	灰白・ナデ	大坪	-	-	-
	288	B-29		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	明褐灰・摩耗	褐灰・摩耗	16082	9.33	凝灰岩	-
	289	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	灰褐・貝殻条痕	黒・ナデ	13879	8.20	2mm大の石英	-
	290	B-29			深鉢形土器	口縁部	IV d類	褐灰・摩耗	灰褐・摩耗	16110	9.37	凝灰岩	-
	291	B-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	淡橙・摩耗	明褐灰・摩耗	16562	9.82	金雲母	-
	292	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	黒褐・条痕	にぶい赤褐・粗いナデ	11565	8.78	-	-
	293	B-21		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	明赤褐・貝殻条痕	黒褐・丁寧なナデ	13096	8.77	金雲母	-
	294	A-33			深鉢形土器	口縁部	IV d類	黒褐・摩耗	黒褐・摩耗	大坪	-	半透明の石英	-
第170図	295	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	にぶい赤褐・摩耗	灰褐・摩耗	11473	8.88	2mm大の石英・凝灰岩	-
	296	D-20		Ⅱ b	深鉢形土器	口縁部	IV d類	灰白・ナデ	黒・ナデ	7176	8.57	微量の角閃石	-
	297	C-15		Ⅱ b	深鉢形土器	口縁部	IV d類	黒褐・ナデ	褐灰・丁寧なナデ	8104	8.18	半透明の石英	-
	298	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	灰褐・ナデ	黒・ナデ貝殻条痕	155	8.12	半透明の石英	-
	299	D-13			深鉢形土器	口縁部	IV d類	褐灰・摩耗	にぶい橙・摩耗	814	8.31	微量の金雲母・凝灰岩	-
	300	C-16		Ⅳ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	褐・粗いナデ	褐・丁寧なナデ	2789	8.20	微量の金雲母	-
	301	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	暗赤褐・丁寧なナデ	淡赤橙・丁寧なナデ	490	8.10	半透明の石英	-
	302	A-23		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	灰白・摩耗	黒・摩耗	16584	9.98	微量の金雲母	-
	303				深鉢形土器	口縁部	IV d類	褐・粗いナデ	黒褐・粗いナデ	大坪	-	補修孔・補修粘土	-
	304	C-16		Ⅱ b	深鉢形土器	口縁部	IV d類	褐灰・ナデ	黒・ナデ	8726	8.32	凝灰岩	-
第171図	305	A-33		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	黒褐・摩耗	黒・摩耗	16448	9.55	-	-
	306	C-14		Ⅲ	深鉢形土器	その他	IV d類	黒褐・摩耗	黒褐・摩耗	1061	8.12	半透明の石英	-
	307	C-15	SX75		深鉢形土器	口縁部	IV d類	にぶい橙・ナデ	褐灰・ナデ	13602	8.20	凝灰岩	-
	308	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	IV d類	赤灰・粗いナデ	にぶい赤褐・ナデ	10896	8.83	-	-
	309	A-33			深鉢形土器	口縁部	-	褐・ナデ	褐灰・ナデ	16469	9.36	半透明の石英・軽石	-
	310	B-24		Ⅲ	深鉢形土器	(下に細線あり)	-	淡黄橙	褐灰	15937	8.92	半透明の石英・軽石	-
	311	C-22			深鉢形土器	口縁部	-	淡橙・摩耗	褐灰・摩耗	-	-	角閃石	-
	312	B-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	-	にぶい橙・摩耗	褐灰・摩耗	13381・13382・13383	8.94	2mm大の石英	-
	313	B-30		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	-	褐灰・摩耗	黒・摩耗	16621	9.39	軽石	-
	314	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	-	褐灰・摩耗	明褐灰・摩耗	9632	8.38	半透明の石英	-
第171図	315	D-17		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	-	褐灰・摩耗	褐灰・摩耗	7683	8.33	金雲母	-
	316	B-15		Ⅲ	深鉢形土器	-	-	明褐・摩耗	明褐・摩耗	11815	8.35	刻目突帯文・金雲母・小石	-
	317	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	-	明赤褐・摩耗	灰褐・摩耗	226	8.16	半透明の石英・軽石	-
	318				深鉢形土器	口縁部	-	明褐	明褐	-	-	金雲母・小石	-
	319	A-24			深鉢形土器	口縁部	-	暗赤褐・摩耗	褐灰・摩耗	大坪	-	突帯部分へう刻み・半透明の石英	-
	320				深鉢形土器	口縁部	-	にぶい赤褐・摩耗	にぶい赤褐・摩耗	大坪	-	突帯部分へう刻み・金雲母・小石	-
	321	B-16		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	-	灰黄褐・ハケムヘラ刻み	にぶい黄橙・ハケム	12685	8.35	突帯部分へう刻み	-
	322	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	-	褐灰・貝殻条痕	褐灰・摩耗	13848・13861	8.18	-	-
	323	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	口縁部	-	褐灰・摩耗	褐灰・摩耗	11524	8.67	金雲母	-
	324	A-23		Ⅱ	組織痕土器	口縁部	-	黒褐・摩耗	黒褐・摩耗	14876	9.01	凝灰岩	37
325	B-23		Ⅱ	組織痕土器	口縁部	-	黒褐・粗いナデ	黒褐・ナデ	15460	8.87	-	-	
326	B-23		Ⅲ	組織痕土器	口縁部	-	褐灰・凹線	褐灰・ナデ	15548	8.81	-	-	
327	C-16		Ⅱ	組織痕土器	口縁部	-	黒褐・条痕	褐・摩耗	2779	8.35	金雲母	-	



第173図 出土遺物 縄文土器(44)



第174図 出土遺物 縄文土器(45)

ここを正面とすると、口縁部の右側に鱗状の突起がみられるのであるが、左側にも対となる鱗状突起があったとしてもおかしくない。口縁部にはもう1段粘土紐を重ねることによって、口唇部をつくり出しており、内外面に1条ずつの沈線を巡らしたようにみえる。

⑤鉢形土器 (第181・182図 471～485・500～503)

浅鉢形土器・小型浅鉢形土器そして盃形土器に含まれない形のものである。471～475は体部上位で内側に屈曲し、外反しながら口縁部へ至る。浅鉢形土器I b類との区別はつきにくいのであるが、若干屈曲にメリハリがない。

478は胴部屈曲部の上位に1条の沈線を巡らせており、古い様相を示す。482は供献土器1であり、前述した。483・484は刻目突帯文土器に伴う浅鉢形土器の器形に類似するが、確証はない。500～503は口唇部までストレ

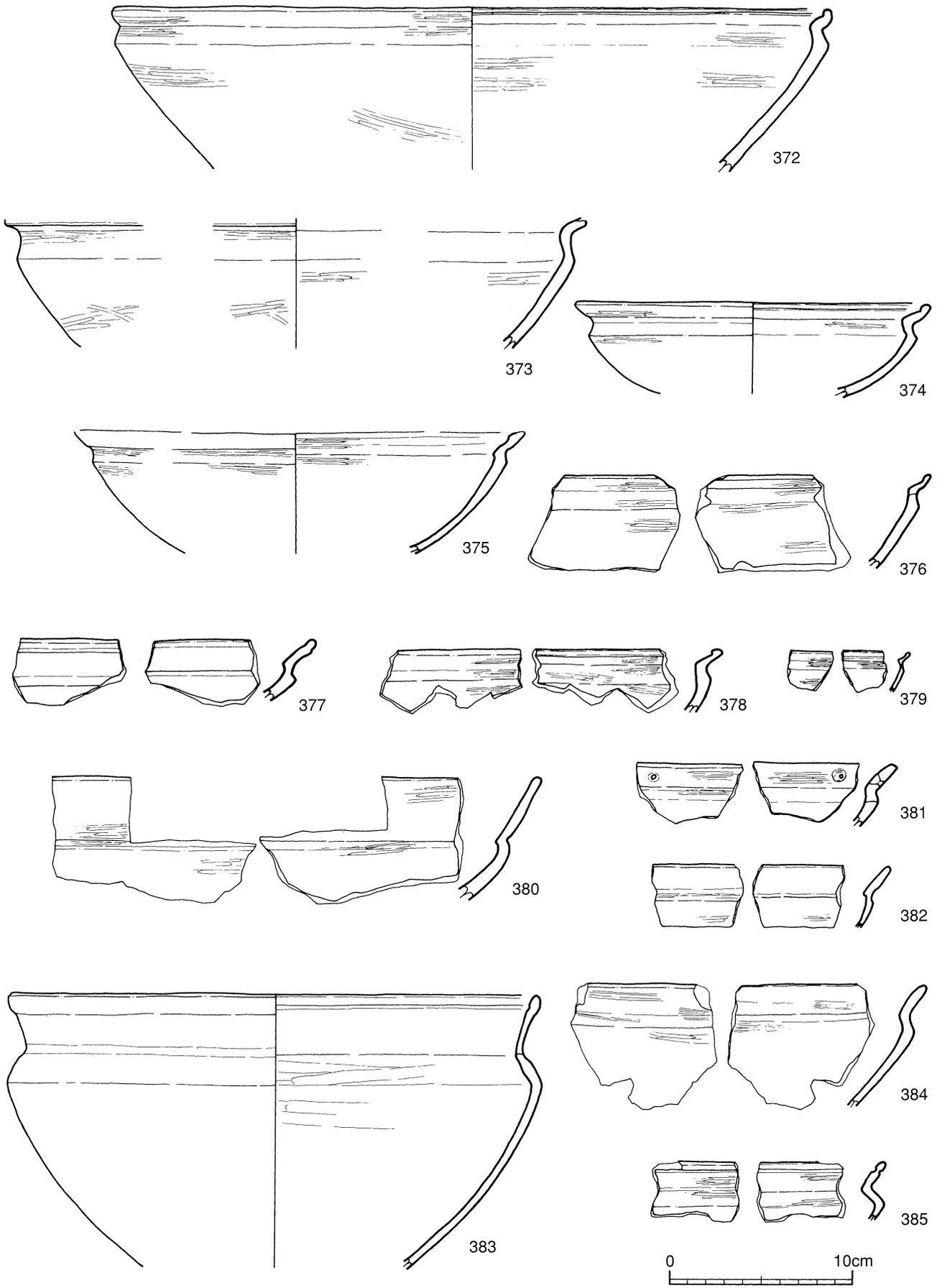
ートにのびるタイプである。502は丸く内湾する底部付近からストレートに外開きする器形である。口径は27cmを測り、口唇部は丸くおさめる。底部の形状は不明である。器面調整は内外面ともミガキである。

⑥盃形土器 (第182図 486～499)

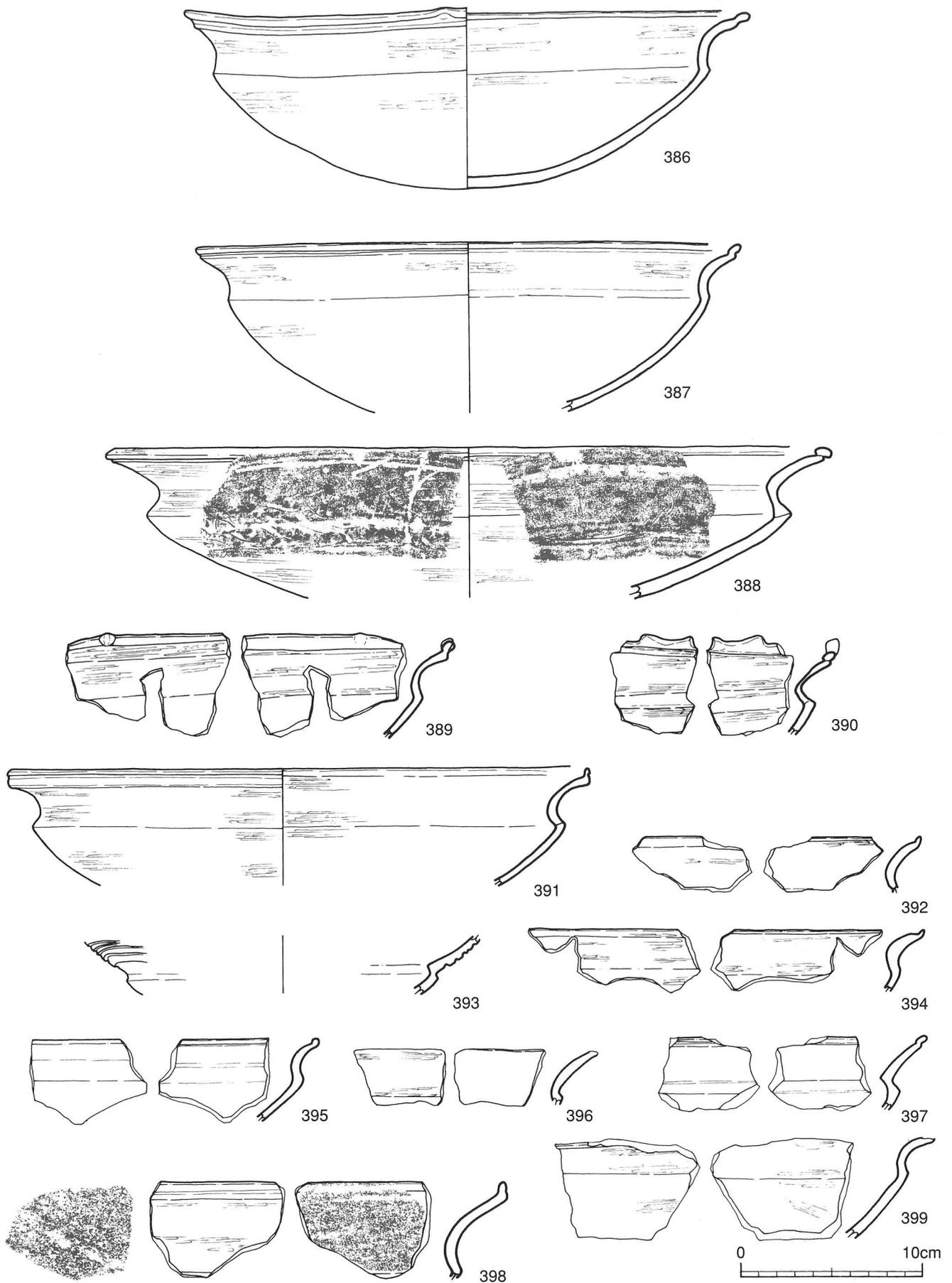
486～499は丸底の塊状のもので、盃(マリ)形土器と呼ばれるものである。口縁部がストレートなタイプと変化をつけたタイプがある。口縁部に変化をもたせたものは内外面を肥厚させるもの(486)、内外面に沈線を巡らすもの(487)、短く屈曲させるもの(490)などがある。

⑦深鉢形土器底部 (第183～189図 504～652)

底部の破片とわかるものはかなり多くあったが、紙面の関係上半分以上が残存するものについて149点を図化した。種類ごとに恣意的に選別したものでないので、割



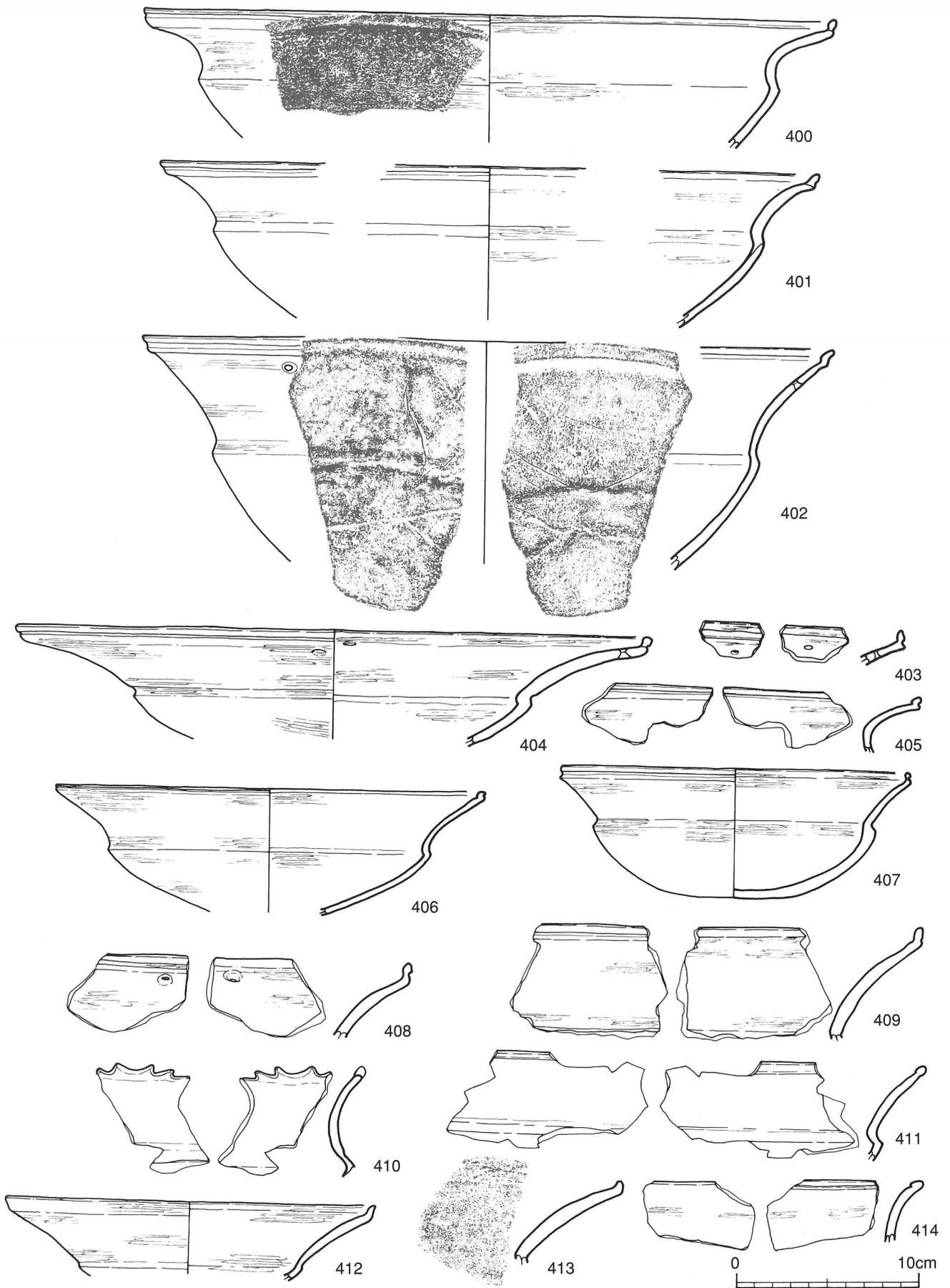
第175図 出土遺物 縄文土器(46)



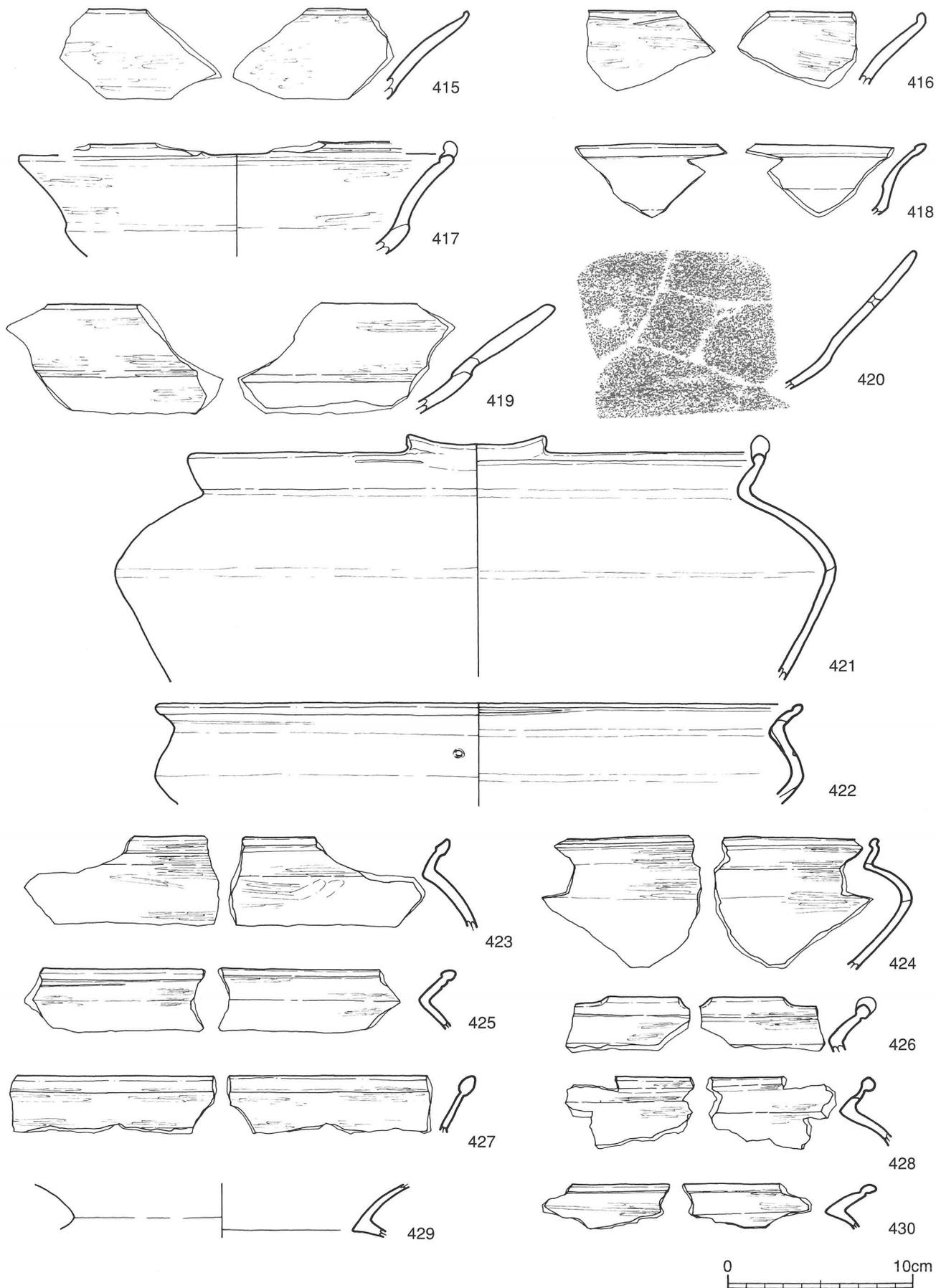
第176図 出土遺物 縄文土器(47)

表19 縄文土器観察表 10

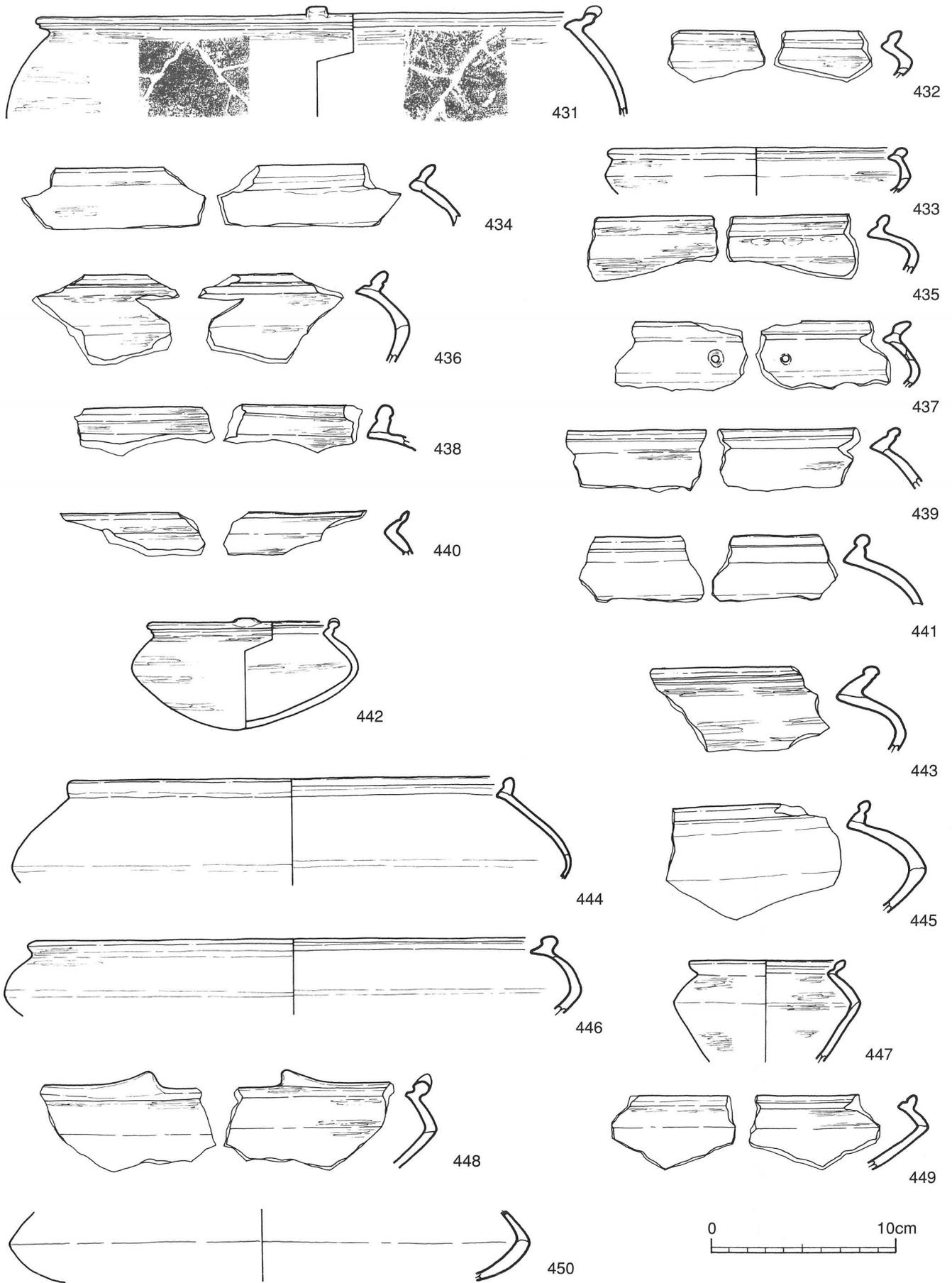
図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他備考	写真図解	
								外面	内面					
第172図	328	D-01	SK26	Ⅲ	組織痕土器	口縁部	-	黒褐・ナデ	黒・ナデ	198	8.13	-	-	
	329	C-24		Ⅲ	組織痕土器	口縁部	-	黒褐・条痕	にぶい橙・磨耗	11754	8.99	-	-	
	330	B-24		Ⅲ	組織痕土器	口縁部	-	明褐灰・磨耗	褐灰・ナデ	15953	8.94	-	-	
	331	C-15		Ⅲ	組織痕土器	口縁部	-	明赤褐・磨耗	にぶい赤褐・ナデ	14236	8.25	角閃石	-	
	332	B-15		Ⅱ	組織痕土器	口縁部	-	黒褐・ミガキ	黒・ミガキ	268	8.17	-	-	
	333	C-23		Ⅲ	組織痕土器	網目	-			12863	8.96	-	37	
	334	D-12		Ⅲ	組織痕土器	網目	-			150	8.14	-	37	
	335	C-22	SD43	Ⅱ	組織痕土器	網目	-	橙	にぶい橙	大坪	-	角閃石	-	
	336	C-24		Ⅲ	組織痕土器	網目	-			12052	8.98	-	37	
	337	C-24		Ⅳ	組織痕土器	網目	-	赤褐	にぶい赤褐	12300	8.52	角閃石	-	
	338	B-23			組織痕土器	網目	-	赤	赤	大坪	-	2mm大の石英	-	
	339	B-23			組織痕土器	網目	-			大坪	-	-	37	
	340	C-23			組織痕土器	網目	-			大坪	-	-	-	
	341	D-13		Ⅱ	組織痕土器	網目	-	黄橙	黄橙	822	8.25	2mm大の石英	-	
	342				組織痕土器	網目	-	赤	赤	大坪	-	2mm大の石英	-	
	343	B-24			組織痕土器	網目	-			大坪	-	-	37	
	第173図	344				組織痕土器	網目	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	大坪	-	-	-
345		D-25			組織痕土器	網目	-	赤	赤	大坪	-	2mm大の石英	-	
346					組織痕土器	網目	-			大坪	-	-	37	
347					組織痕土器	網目	-	黒褐	橙	大坪	-	-	-	
348		B-24			組織痕土器	網目	-	にぶい赤褐	赤灰	大坪	-	-	-	
349		D-25A			組織痕土器	網目	-	赤橙	黒褐	大坪	-	-	-	
350		C-23			組織痕土器	網目	-	赤	赤	大坪	-	2mm大の石英	-	
351					組織痕土器	網目	-			大坪	-	-	37	
352		C-24			組織痕土器	網目	-	明赤褐	赤灰	大坪	-	-	-	
353		C-17		Ⅲ	組織痕土器	網目	-	赤	赤	大坪	-	-	-	
354					組織痕土器	網目	-			大坪	-	-	37	
355		B-24			組織痕土器	網目	-			大坪	-	-	37	
356					組織痕土器	網目	-	にぶい橙	にぶい橙	大坪	-	茶粒	-	
357					組織痕土器	網目	-	赤	赤	大坪	-	-	-	
358		C-23			組織痕土器	網目	-	赤	赤	大坪	-	-	-	
第174図		359	B-15		Ⅲ	組織痕土器	編布	-	橙	褐灰	14157	8.29	凝灰岩・角閃石	-
		360				組織痕土器	編布	-	褐	褐灰	大坪	-	金雲母・小石	-
		361	D-24			組織痕土器	編布	-	黒	にぶい褐	大坪	-	-	-
		362	C-24A			組織痕土器		-	にぶい橙	褐灰	大坪	-	角閃石	-
		363	C-24		Ⅲ	組織痕土器		-	赤褐	黒	12052	8.98	角閃石	-
	364				組織痕土器		-	褐灰	褐灰		-	2mm大の石英・角閃石	-	
	365				組織痕土器		-	明赤褐	褐灰	大坪	-	-	-	
	366	C-24		Ⅲ	組織痕土器		-	明赤褐	黒	12112	8.99	石英(白)	-	
	367	C-14		Ⅱ	組織痕土器		-	明赤褐	にぶい橙	9562	8.29	半透明の石英・角閃石	-	
	368	B-24			組織痕土器		-	にぶい橙	褐灰	大坪	-	軽石・2mm大の石英	-	
	369				組織痕土器		-	黒褐	褐灰		-	凝灰岩	-	
	370	D-24		Ⅲ	組織痕土器		-	明赤褐	にぶい赤褐	11499	8.80	-	-	
	371	A-25		I b	組織痕土器		-	明赤褐	浅黄橙	大坪	-	軽石・角閃石	-	
第175図	372	B-17			浅鉢形土器	-	I a類	にぶい赤褐・ミガキ	にぶい赤褐・ミガキ		-	軽石	29	
	373	B-17			浅鉢形土器	胴部～底部	I a類				-	他に下	-	
	374	D-21		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I a類	赤灰・ミガキ	黒・ミガキ	10055	8.43	金雲母	-	
	375	C-16			浅鉢形土器	-	I a類				-	-	-	
	376	D-18		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I a類	明褐灰・磨耗	褐灰・磨耗	7306	8.33	-	-	
	377	B-15	SK77	Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I a類	にぶい褐・磨耗	褐灰・磨耗	13716	8.28	-	-	
	378	D-17		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I a類	黒褐・ミガキ	明褐灰・ミガキ	8060	8.30	-	-	
	379	D-20			浅鉢形土器	口縁部	I a類	明褐灰・磨耗	明褐灰・磨耗	大坪	-	-	-	
	380	C-16		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I b類	赤褐・磨耗	赤褐・磨耗	14501	8.19	-	-	
	381	D-17		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I b類	明褐灰・ミガキ	褐灰・ミガキ	7940	8.36	-	-	
	382	A-22		Ⅱ b	浅鉢形土器	口縁部	I b類	褐灰・磨耗	灰褐・磨耗	4749	8.32	-	-	
	383	B-33		Ⅱ	浅鉢形土器	口縁部	-	にぶい黄橙・黒褐・磨耗	褐灰・磨耗	16192	9.58	-	-	
	384	D-17		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I b類	黒褐・磨耗	灰褐・磨耗	7689	8.30	-	-	
	385	C-18		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	-	褐灰・磨耗	黒褐・磨耗	8696	7.38	-	-	
第176図	386	C-16			浅鉢形土器	-	I c類	黄灰・ミガキ	黒褐・ミガキ		-	金雲母	26	
	387	C-16			浅鉢形土器	口縁部～胴部	I c類	黄橙・ミガキ	浅黄橙・ミガキ		-	石英(白)	-	
	388	A-35			浅鉢形土器	口縁部	I c類	黒・ミガキ	黒・ミガキ	16846・16853	9.32	金雲母	38	
	389	B-14		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	褐灰・ミガキ	褐灰・ミガキ	13700	8.25	-	-	
	390	D-17		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	黒褐・ミガキ	黒・ミガキ	7986	8.25	凝灰岩	-	
	391	C-17壁溝			浅鉢形土器	口縁部	I c類	灰黄褐・ミガキ	黒褐・ナデ		-	角閃石	38	
	392	D-15		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	赤褐・ナデ	赤褐・ナデ	1348	8.18	-	-	
	393	C-22		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	明褐灰・沈線	明褐灰・ナデ	11109	8.69	角閃石	-	
	394	A-23		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	黒褐・ミガキ	黒褐・ミガキ	16599	9.90	-	-	
	395	C-17		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	黒褐・磨耗	黄褐・磨耗	8577	7.17	-	-	
	396	D-15		Ⅱ b	浅鉢形土器	口縁部	I c類	褐灰	褐灰	5300	7.99	-	-	
	397	D-21		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	褐灰・ナデ	黒褐・ナデ	10595	8.51	角閃石	-	
	398	D-17		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	灰褐・ナデ	褐灰・ナデ	6447	8.14	-	-	
	399	B-14	SK77	Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	褐灰・ナデ	褐灰・ナデ	13706	8.20	-	-	
第177図	400	C-16		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	褐灰・ミガキ	褐灰・ミガキ	14920・14392	8.32	-	-	
	401	C-22			浅鉢形土器	-	I c類				-	-	-	
	402	D-24	SX		浅鉢形土器	口縁部	I c類	明赤褐・ナデ	にぶい橙・ナデ	11610	8.42	-	-	
	403	C-24		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I c類	黒褐・ミガキ	黒褐・ミガキ	12890	8.49	側面部に穿孔あり	-	
	404	D-24			浅鉢形土器	口縁部	I d類	褐・ナデ	黒褐・ナデ		-	金雲母・側面部に穿孔あり	-	
	405	C-16		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I d類	褐灰・ミガキ	黒褐・ミガキ	1880	7.95	-	-	
	406	D-21		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I d類	黒褐・ミガキ	黒・ミガキ	10828	8.35	-	-	
	407				浅鉢形土器	完形	I d類	にぶい橙・ミガキ	にぶい橙・ミガキ		-	金雲母	38	
	408	D-24		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I d類	灰褐・ナデ	灰褐・ナデ		-	側面部に穿孔あり	-	
	409	C-24		Ⅳ	浅鉢形土器	口縁部	I d類	褐・ミガキ	黒褐・ミガキ	12537	8.35	-	-	
410	D-12		Ⅲ	浅鉢形土器	口縁部	I d類	褐灰・磨耗	灰白・磨耗	466-2	7.68	-	-		



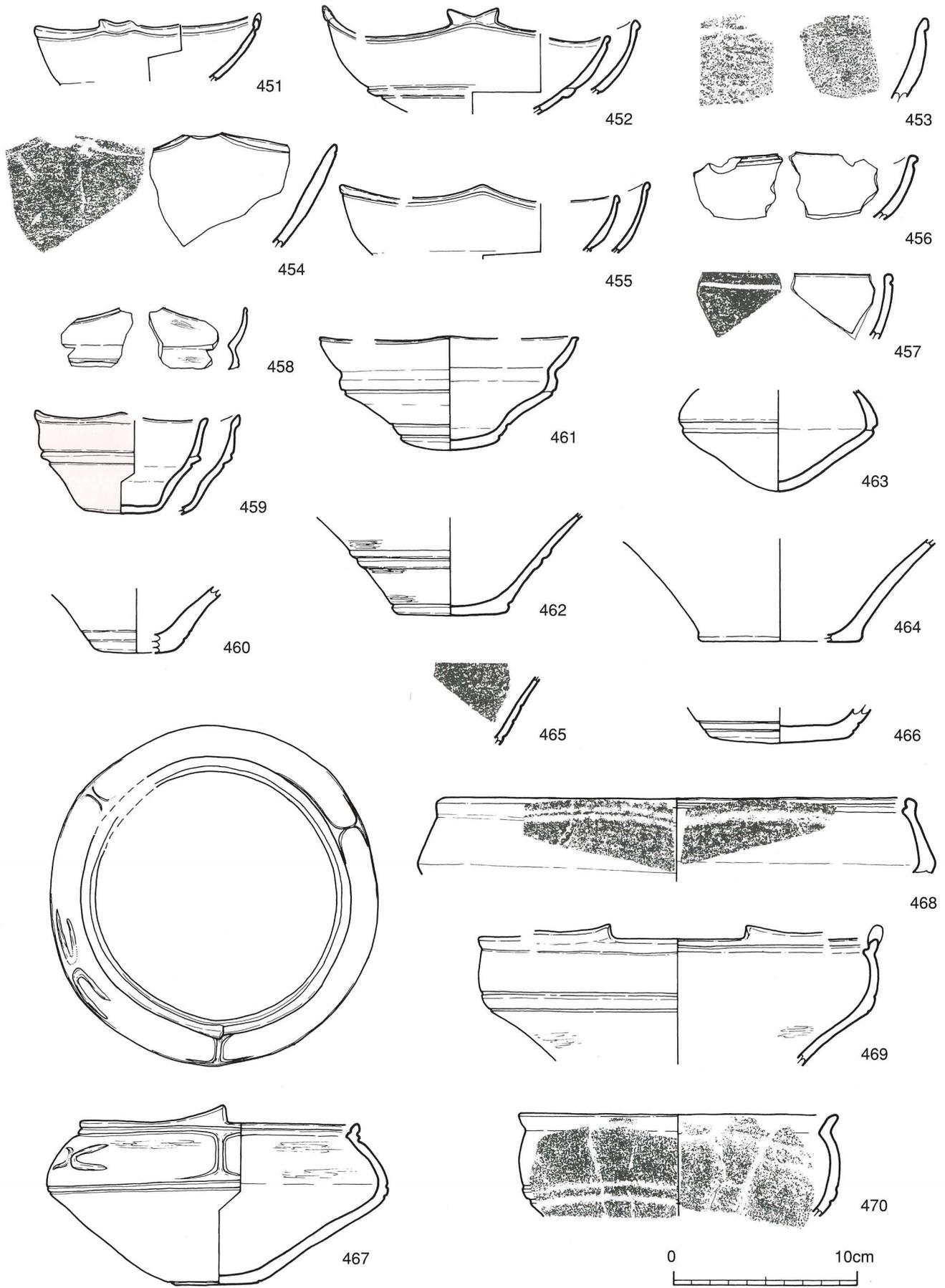
第177図 出土遺物 縄文土器(48)



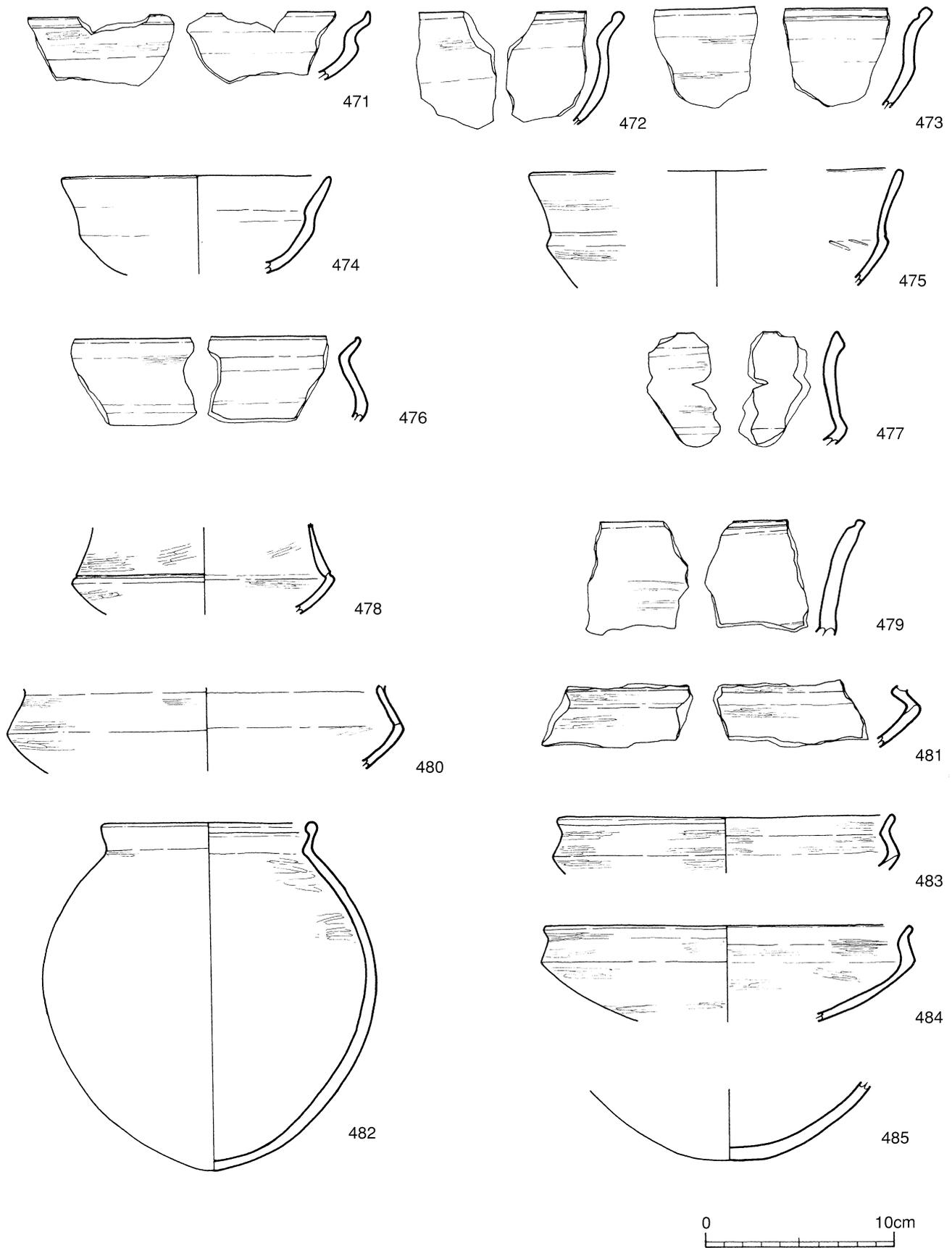
第178図 出土遺物 縄文土器(49)



第179図 出土遺物 縄文土器(50)



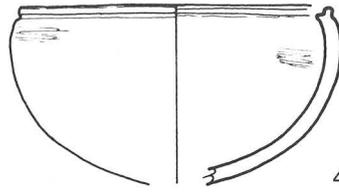
第180図 出土遺物 縄文土器(51)



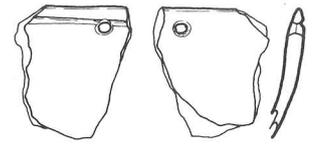
第181図 出土遺物 縄文土器(52)



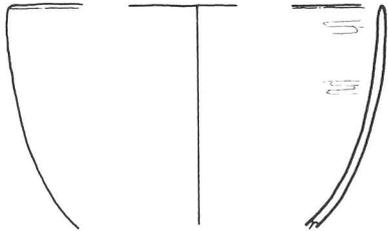
486



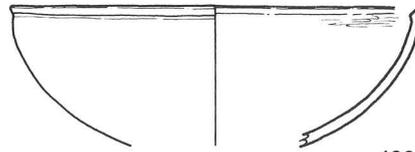
487



488



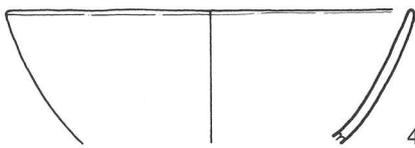
489



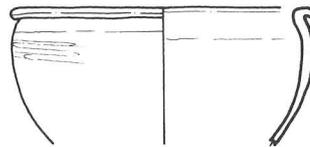
490



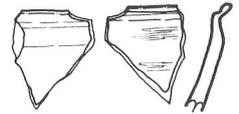
491



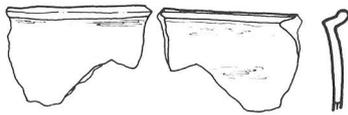
492



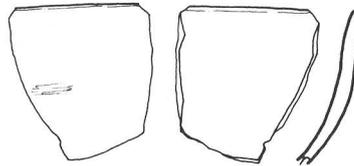
493



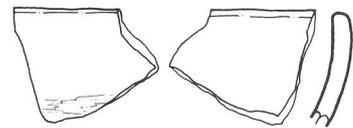
494



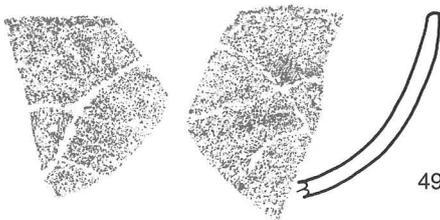
495



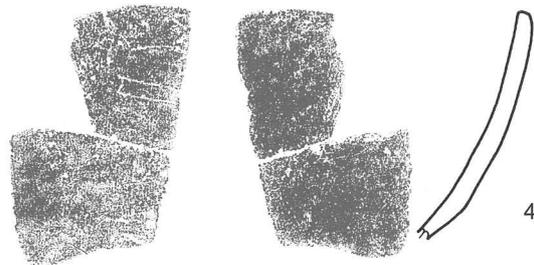
496



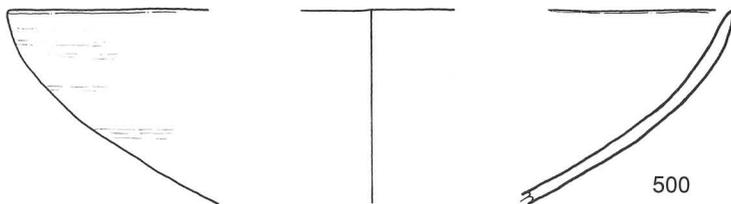
497



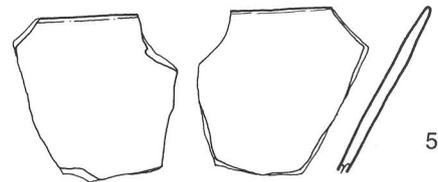
498



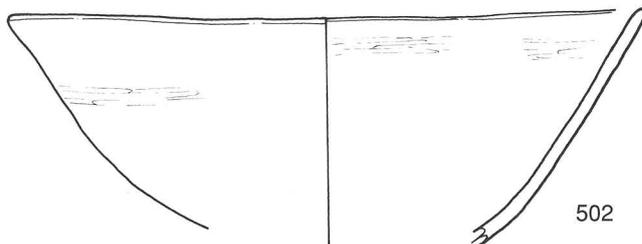
499



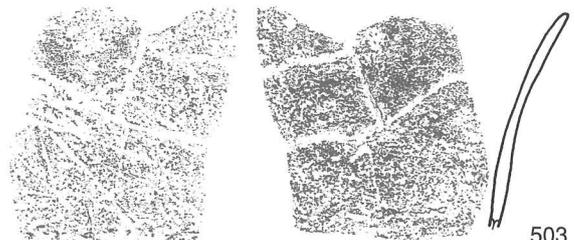
500



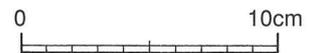
501



502



503



第182図 出土遺物 縄文土器(53)

表20 縄文土器観察表 11

図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル(m)	特徴・胎土・焼成・その他備考	写真図録	
								外面	内面					
第177図	411	D-17		II b	浅鉢形土器	口縁部	I d類	褐灰・ナデ	褐灰・ナデ	1731	8.35	-	-	
	412	C-24		III	浅鉢形土器	口縁部	I d類	褐灰・ナデ	褐灰・ナデ	12981	8.36	-	-	
	413	C-24		IV	浅鉢形土器	口縁部	I d類	にぶい橙・ミガキ	褐灰・ミガキ	12242	8.52	-	-	
	414	C-17		III	浅鉢形土器	口縁部	I d類	羽褐・ミガキ	明褐灰・ミガキ	8331	8.30	金雲母	-	
	415	C-24		III	浅鉢形土器	口縁部	I d類	にぶい赤褐・ミガキ	黒褐	12890	8.49	金雲母	-	
	416	C-24		III	浅鉢形土器	口縁部	I d類	暗赤褐・ミガキ	黒褐・ミガキ	12890	8.49	金雲母	-	
	417	A-24		III	浅鉢形土器	口縁部	I d類	にぶい赤褐	黒褐	16616	9.95	凝灰岩	-	
	418	D-12		III	浅鉢形土器	口縁部	I d類	にぶい橙	褐灰	503	7.98	-	-	
	419	C-24	SX		浅鉢形土器	口縁部	I d類	灰褐	灰褐	-	-	金雲母	-	
	420	B-23		III	浅鉢形土器	口縁部	I d類	暗赤褐	暗赤褐	15822	8.82	多量の砂粒	-	
第178図	421				浅鉢形土器	口縁部	II a類	明褐灰	黒	見入来	-	-	-	
	422	C-18		II b	浅鉢形土器	口縁部	II a類	褐灰	褐灰	8622	-	-	-	
	423	A-32		III	浅鉢形土器	口縁部	II a類	橙・ミガキ	にぶい橙	17087	9.36	-	-	
	424	D-17		III	浅鉢形土器	口縁部	II a類	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1687	8.37	-	-	
	425	A-22		III	浅鉢形土器	口縁部	II a類	黒褐	黒褐	15328	8.95	金雲母	-	
	426	D-17		III	浅鉢形土器	口縁部	II a類	にぶい赤褐	黒	7680	8.37	-	-	
	427	B-22		III	浅鉢形土器	口縁部	II a類	暗赤褐	暗赤褐	13482	8.72	5mm大の石英(白)	-	
	428	C-24		III	浅鉢形土器	口縁部	II a類	灰褐	灰褐	12915	8.71	-	-	
	429	D-18		II b	浅鉢形土器	口縁部	II a類	褐灰	褐灰	4512	8.30	微小な金雲母	-	
	430	C-18		III	浅鉢形土器	口縁部	II a類	褐灰	褐灰	8622	-	小石	-	
第179図	431				浅鉢形土器	口縁部	II b類	明赤褐・ミガキ	褐灰	大坪	-	-	角閃石	
	432	C-14	SX75	III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	褐灰	褐灰	14329	8.22	-	-	
	433	C-22		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	にぶい赤褐	黒褐	11250	8.61	-	-	
	434	B-14		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	浅橙	褐灰	13577	8.25	軽石	-	
	435	D-18		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	にぶい橙	にぶい橙	7000	8.39	微量の金雲母	-	
	436	B-22		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	にぶい橙	にぶい橙	15249	8.79	-	-	
	437	D-21		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	にぶい橙	にぶい橙	10161	8.67	2mm大の石英	-	
	438	D-12		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	にぶい赤褐	褐灰	303	8.19	角閃石	-	
	439	D-21		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	にぶい橙	にぶい橙	10016	8.54	小石	-	
	440	D-18		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	褐・ナデ	黒褐・磨耗	5412	8.36	-	-	
第180図	441	A-35		IV	浅鉢形土器	口縁部	II b類	黒褐・ナデ	灰褐・ナデ	17086	9.08	-	-	
	442	B-21		III	浅鉢形土器	完形	II b類	明褐・ミガキ	褐・丁寧なナデ	-	-	微量の金雲母	36	
	443	B-16		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	暗褐・ミガキ	褐灰	12670	8.31	-	-	
	444			III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	黒褐・ナデ	黒・ナデ	-	-	-	-	
	445			III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	黒褐・ナデ	黒褐・ナデ	-	-	軽石・2mm大の石英	-	
	446	B-15	SK77	III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	灰白・ナデ	黒・ナデ	13748	8.28	-	-	
	447	B-15		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	黒褐・ナデ	黒褐・ミガキ	11701	8.41	-	-	
	448	B-24		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	黒褐・磨耗	黄灰・ナデ	9721・9665	8.35	2mm大の石英	-	
	449	D-12		III	浅鉢形土器	口縁部	II b類	黒・磨耗	黒褐・ナデ	14	8.17	-	-	
	450	C-18		III	浅鉢形土器	胴部	II b類	黄灰・ナデ	黄灰・ナデ	11701	8.41	半透明の2mm大の石英	-	
第181図	451	C-24		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	-	-	12566	9.02	-	-	
	452	D-25		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	褐灰・ナデ	黒・ナデ	11727	8.96	-	-	
	453	D-24		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	黒褐・磨耗	黒褐・磨耗	11548	8.49	-	-	
	454	C-24		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	灰白・ナデ	暗赤灰・ミガキ	12280	8.86	軽石	-	
	455	C-26		II	小型浅鉢形土器	口縁部	-	-	-	11726	9.00	-	-	
	456	C-22	SD44		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	黒・磨耗	黒・磨耗	12820	8.67	-	-
	457	C-15		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	灰黄褐・ナデ	黒・磨耗	9043	8.08	-	-	
	458	C-24		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	
	459	C-23		III	小型浅鉢形土器	底部	-	-	-	12712	8.94	-	-	
	460	B-5	SK45	II	小型浅鉢形土器	底部	-	-	-	-	-	-	-	
第182図	461	B-29		III	小型浅鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい橙	16080	9.40	凝灰岩	38	
	462	B-29		III	小型浅鉢形土器	底部	-	褐灰・ナデ	褐灰・ナデ	16091	9.36	-	-	
	463	B-22		III	小型浅鉢形土器	底部	-	黒褐・ナデ	黒褐・ナデ	15000	8.61	-	-	
	464	D-24		III	小型浅鉢形土器	底部	-	褐灰・ナデ	明黄褐・ナデ	11306	8.92	-	-	
	465	C-02		III	小型浅鉢形土器	底部	-	-	-	-	-	-	-	
	466	B-15		III	小型浅鉢形土器	底部	-	黒褐・ナデ	褐灰・ナデ	13656	8.33	-	-	
	467	C-23		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	黒・ミガキ	黒・ミガキ	-	-	金雲母	38	
	468	D-22		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	黒・磨耗	黒・磨耗	-	-	-	-	
	469	D-24		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	黒褐・ナデ	褐灰・ナデ	10928	8.68	軽石	38	
	470	B-23		III	小型浅鉢形土器	口縁部	-	橙・ナデ	褐灰・丁寧なナデ	16613	9.93	-	-	
第181図	471	C-14	SX75		鉢形土器	口縁部	-	-	-	14460	7.99	-	-	
	472	C-24		III	鉢形土器	口縁部	-	褐・ミガキ	明赤褐・ミガキ	12144	8.93	-	-	
	473	C-24		III	鉢形土器	口縁部	-	赤褐・ミガキ	赤褐・ミガキ	12145	8.92	-	-	
	474	C-24		III	鉢形土器	口縁部	-	明赤褐・ナデ	黒褐・ナデ	12130	8.95	軽石	-	
	475	B-22		III	鉢形土器	実測班	-	にぶい褐・ミガキ	明赤褐・ミガキ	15020	8.75	-	-	
	476	B-35		II b	鉢形土器	口縁部	-	-	-	1966	8.50	-	-	
	477	C-15		III	鉢形土器	口縁部	-	褐灰・ミガキ	にぶい橙・ミガキ	8999	8.12	-	-	
	478			III	鉢形土器	胴部	-	-	-	大坪	-	-	-	
	479	D-21		III	鉢形土器	口縁部	-	-	-	9953	8.58	-	-	
	480	C-24	SX		鉢形土器	胴部	-	-	-	-	-	-	-	
第182図	481	B-22		III	鉢形土器	胴部	-	-	-	13482	8.72	-	-	
	482	D-17	SJ48		鉢形土器	底部	-	橙・ミガキ	にぶい橙・ミガキ	6640	8.14	2mm大の石英	35	
	483	A-35		III	鉢形土器	口縁部	-	褐・ミガキ	暗褐・ミガキ	16817	9.42	-	-	
	484			III	鉢形土器	口縁部	-	明褐・ミガキ	黒褐・ミガキ	-	-	-	-	
	485	B-14		III	鉢形土器	底部	-	-	-	9721	8.35	-	-	
	486	D-22	SD43		盤形土器	口縁部	-	-	-	9831	8.50	-	-	
	487	C-24	SX		盤形土器	口縁部	-	褐灰・ナデ	灰褐・ミガキ	-	-	凝灰岩	38	
	488	B-33		III	盤形土器	口縁部	-	灰褐・磨耗	褐灰・磨耗	16300	9.57	穿孔あり	-	
	489	A-33		III	盤形土器	口縁部	-	褐灰・磨耗	褐灰・磨耗	16446	9.41	-	-	
	490	D-22		III	盤形土器	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	
491	D-12		III	盤形土器	口縁部	-	黒・ミガキ	褐灰・丁寧なナデ	286	8.14	-	-		
492	C-24		III	盤形土器	口縁部	-	褐灰・磨耗	褐灰・磨耗	12932	8.87	-	-		
493	C-16		III	盤形土器	口縁部	-	-	-	-	-	-	-		

合としての傾向は保っていると考える。形状からⅠ～Ⅲ類に分類した。652はどこにも当てはまらない形状であり、浅鉢形土器や組織痕土器とも異なるので、ここで提示しておきたい。

**Ⅰ類** (504～532) : 胴下半部からやや内湾しながらすぼまる底部である。上げ底になるものや、平底がある。底部の直径は5.5～11cmにおさまる。器壁は比較的薄い。504は碁笥底風になるものである。

**Ⅱ類** (533～554) : 胴下半部と底部の境がやや明瞭で、境部分と接地部分の直径の差が少ないものである。器壁はやや厚い。わずかに上げ底状になるものもあるが、ほとんど平底である。

548はわずかに上げ底状となり、縁に沿って2か所の突起がみられる。553は571や612と同様の渦巻状の圧痕がみられる。

**Ⅲ類** (555～651) : 胴下半部との境がやや明瞭で、台形状に大きく張り出し厚みのある底部である。ほとんど平底であるが、上げ底になるものもわずかながらみられる。底面に木の实と考えられる圧痕がみられるものも多い。

603は蛇ノ目状の高台の様なつくりである。651は脚台状をしている。618の胎土内には1mm～1.5mm大の赤色粒子が目立つ。本センターの蛍光X線分析装置を使用して赤色粒子とそれ以外の胎土部分の分析を試みた。その結果、赤色粒子部分がそれ以外と比較して、鉄分が突出していることがわかった。

#### ⑧縄文土製品 (第189図 653～655)

653は一見普通の縄文時代晩期土器の口縁部であるが、一つの土器片の中で色が異なっている。上の方が赤褐色で、下が乳褐色をしている。割れ口を観察すると、粘土紐の接ぎ目のところで色が変わり、明らかに異なった粘土で土器がつけられていることがわかる。このような土器は、古くは縄文時代草創期からあり、新しくは平安時代の高台付坏にもある。本田道輝氏によると、このような土器がつけられた理由として次のようなことが考えられている(本田2000)。①装飾のため ②土器の部位によるつくり分け ③製作途中での粘土不足 ④製作途中での意義である。本遺物がどのような意味を持っていたのか知る由もないが、注意を喚起する意味で取り上げた。

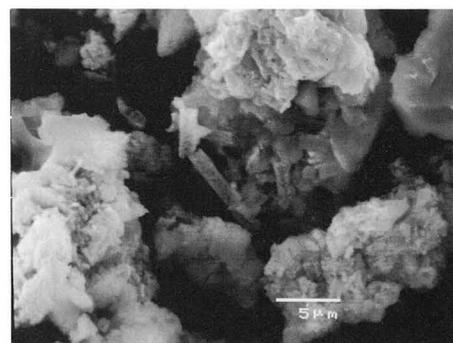
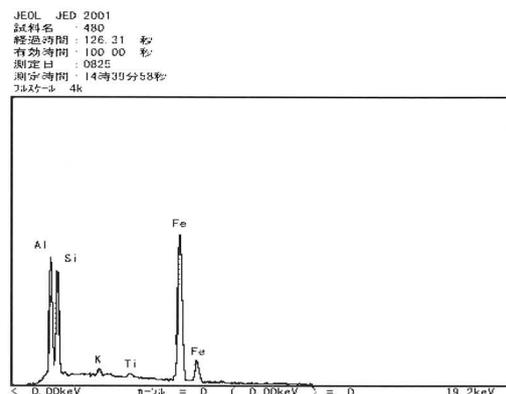
654は土器の文様の一部なのか、土製品の一部なのか判断がつかないまま掲載してある。ヘラ状の工具で描いており、何を描こうとしていたかは不明である。294の口縁部にも類似した文様が描かれている。

655はB-15区のⅢ層から出土した。直径38mm、厚さ6mmの円盤形で、中心からややずれたところに直径6mmの孔が開いている。横から見るとわずかに湾曲していることと、厚さが類似していることから、縄文時代の深鉢形土

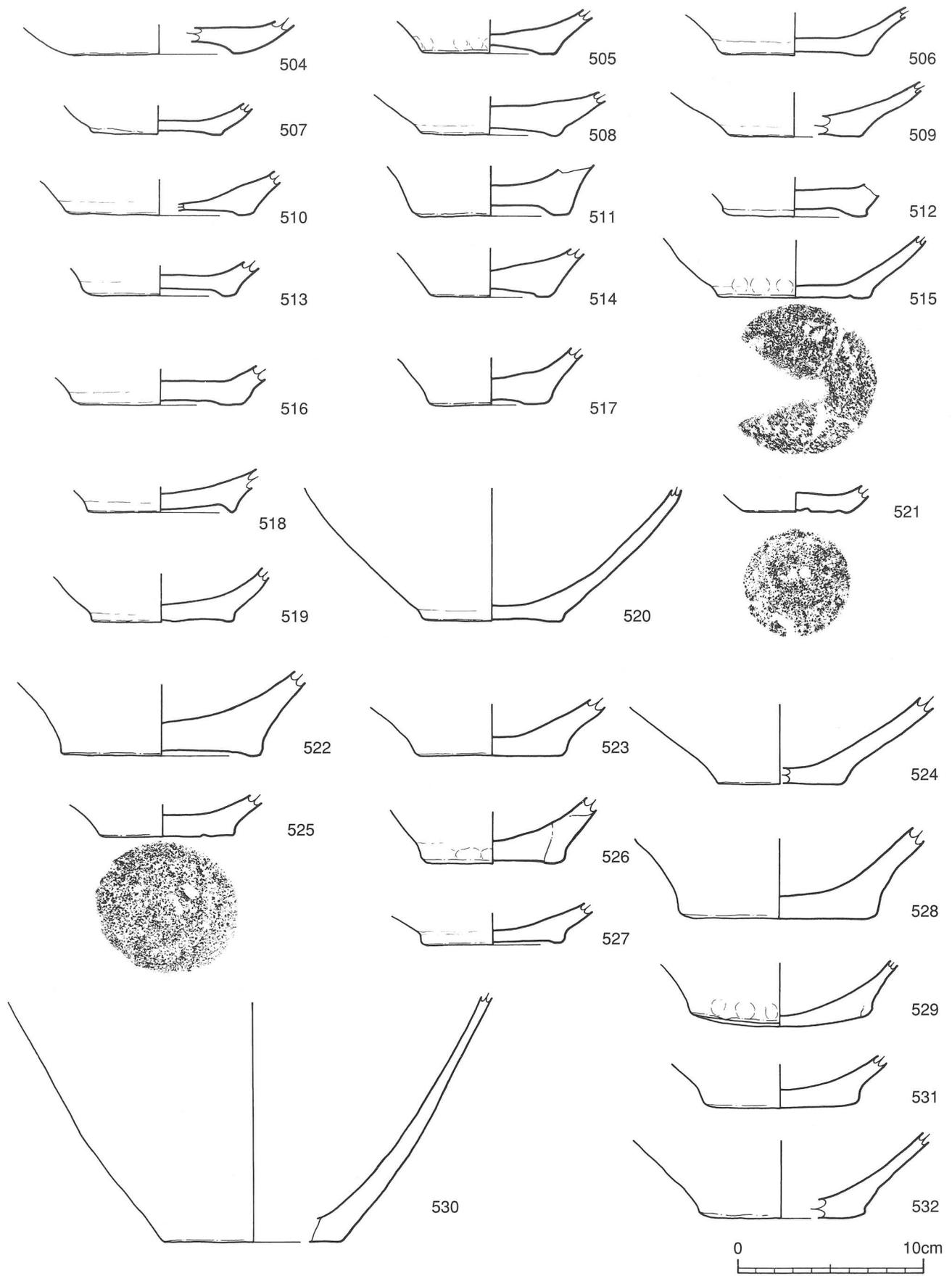
器の破片を再利用しているものと考えられる。一面が赤茶色をしているのに対し、もう一面が少し黒茶色をしており、焼成時の温度差が窺える。一見円盤状土製加工品のようなものであるが、異なる部分もあり断定できない。前迫亮一氏によると、円盤状土製加工品は縄文時代中期末～後期中半に最も多くみられ、加治木町干迫遺跡では1,270点出土しているという(前迫2000)。古くは縄文時代早期前半から存在し、新しいものは江戸時代の陶磁器を利用したものもある。使い方については諸説あり、編物等の錘説・竹筒の蓋説・遊具玩具説といろいろ考えられるが、まだ解明されていない。今回本遺跡から出土した土製加工品は、中心からずれて孔を開ける点や加工の仕方が非常に丁寧であることから、垂飾品の可能性も考えられる。しかし、明確な紐ずれの痕跡は認められない。胎土に滑石粒が含まれることから、土器そのものは縄文時代後期末～晩期にかけてのものではなく、中期末頃のものと考えられる。沖田岩戸遺跡の調査で、胎土に滑石粒を含む並木式土器が1点出土していることからこの時期のものであると考えられるが、加工された時期がいつだったのかは不明である。

本田道輝 2000 「異なる素地を組み合わせでつくられた土器」『大河』第7号 大河同人

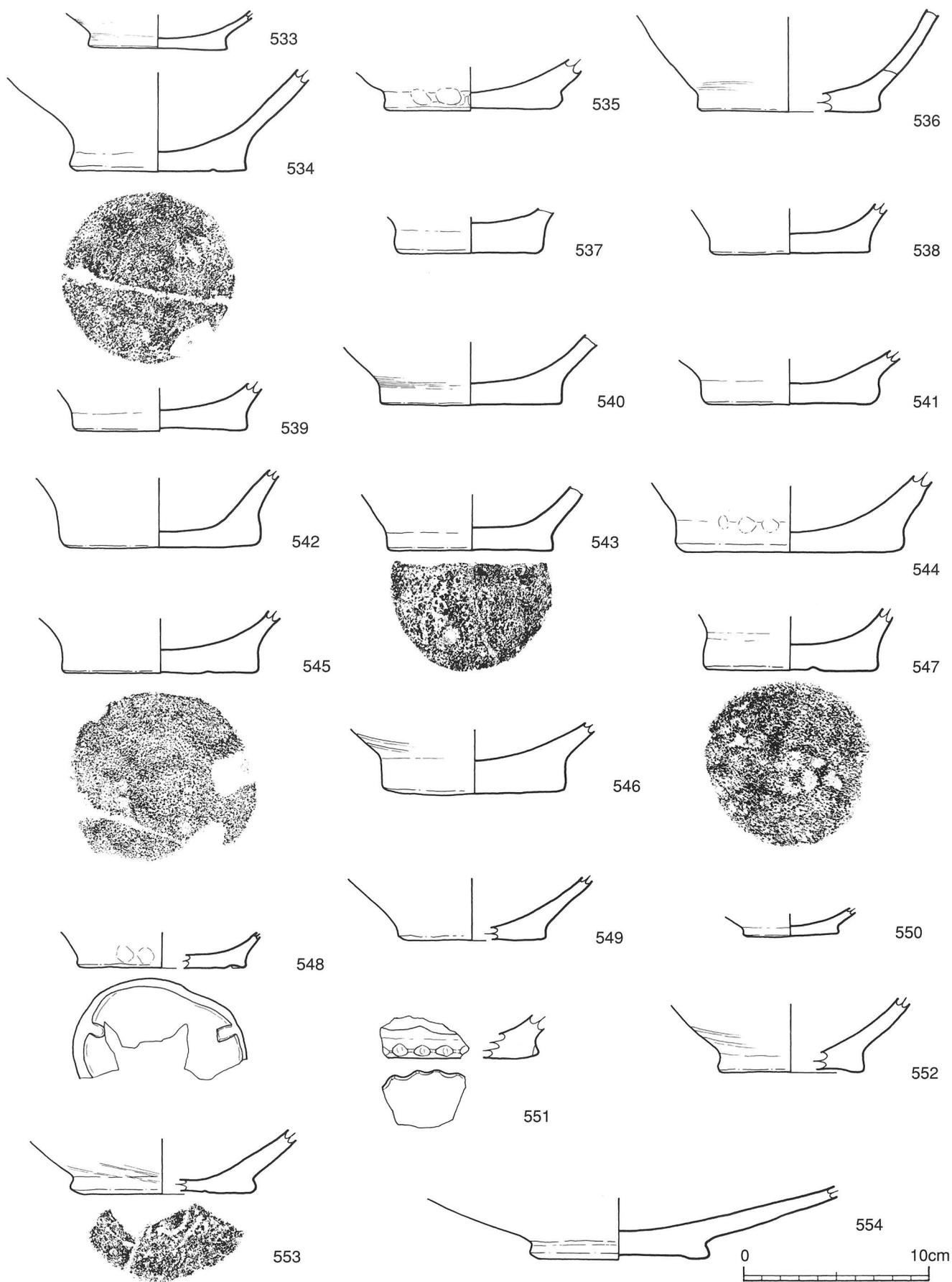
前迫亮一 2000 「かごしま考古なんでもランキング円盤状土製加工品」『大河』第7号 大河同人



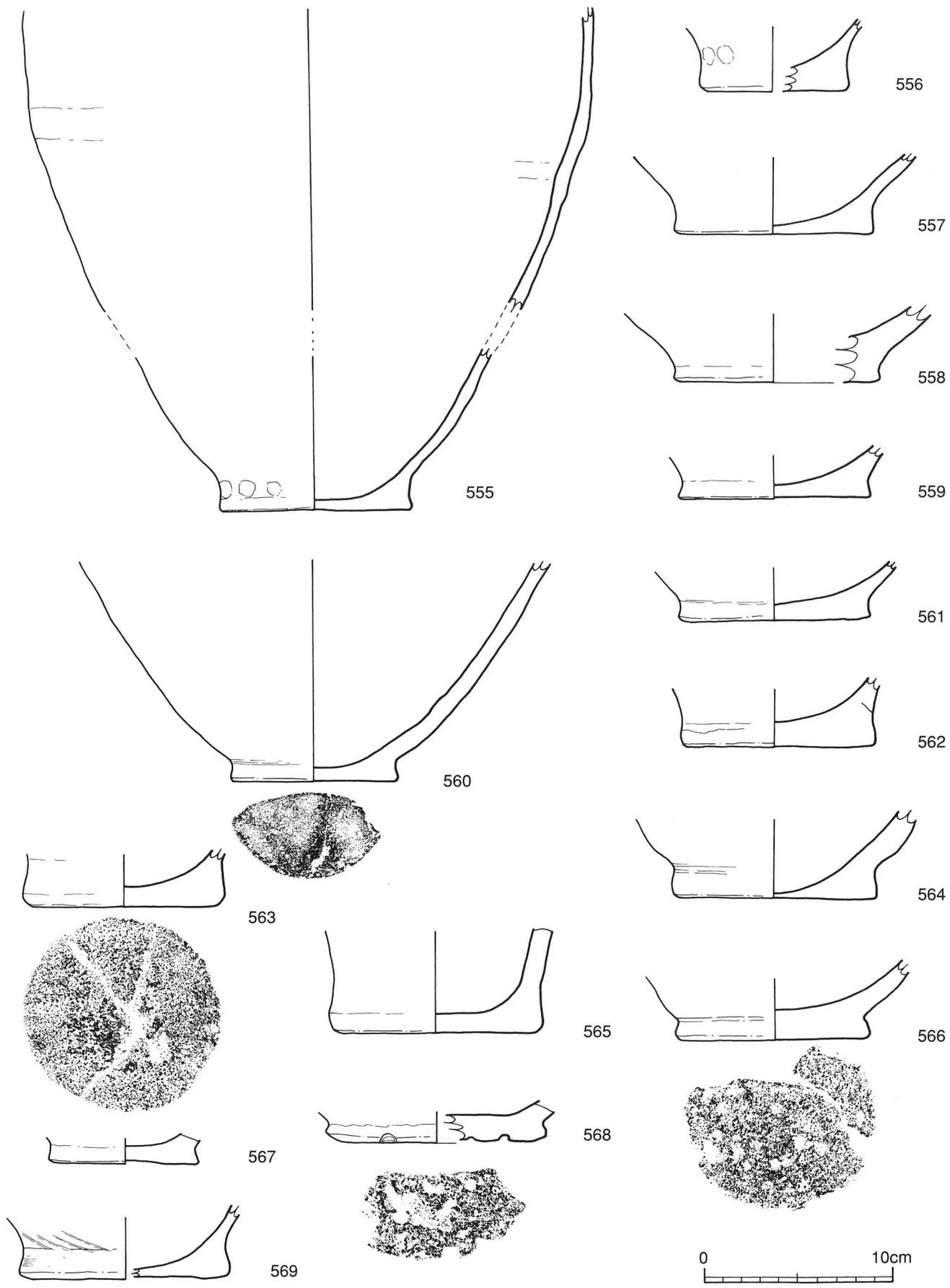
赤色顔料(459)の成分と拡大写真



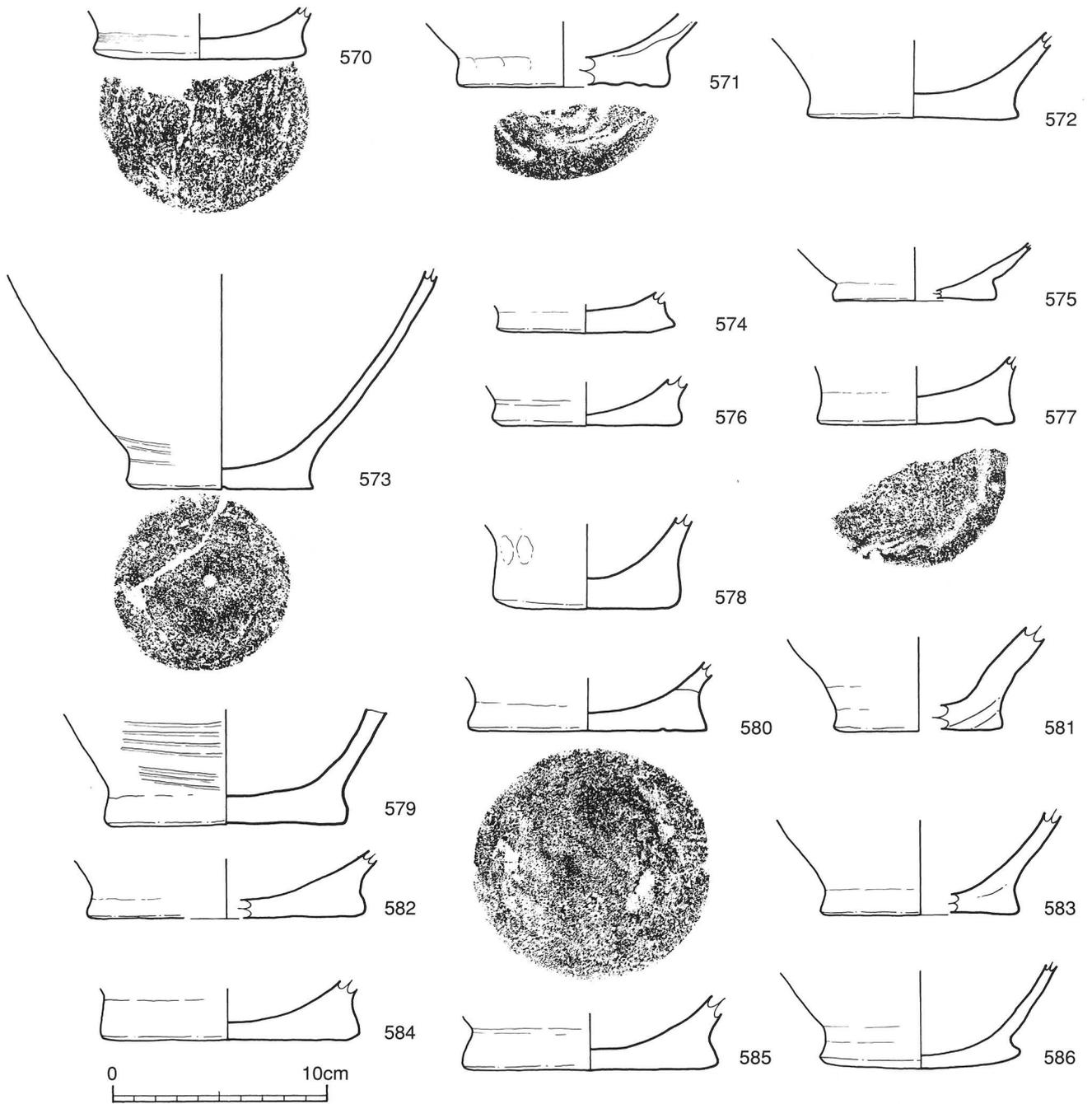
第183図 出土遺物 縄文土器(54)



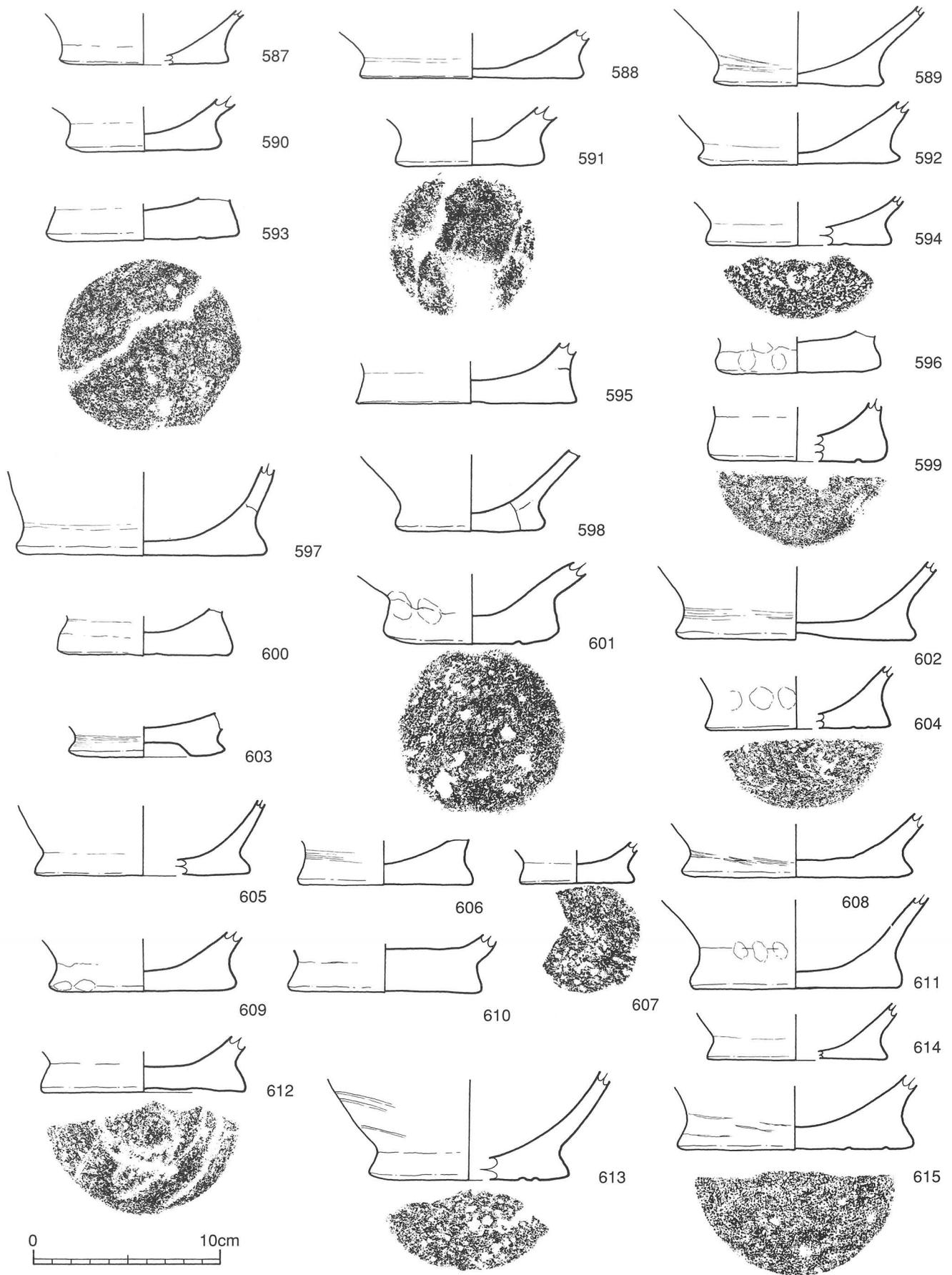
第184図 出土遺物 縄文土器(55)



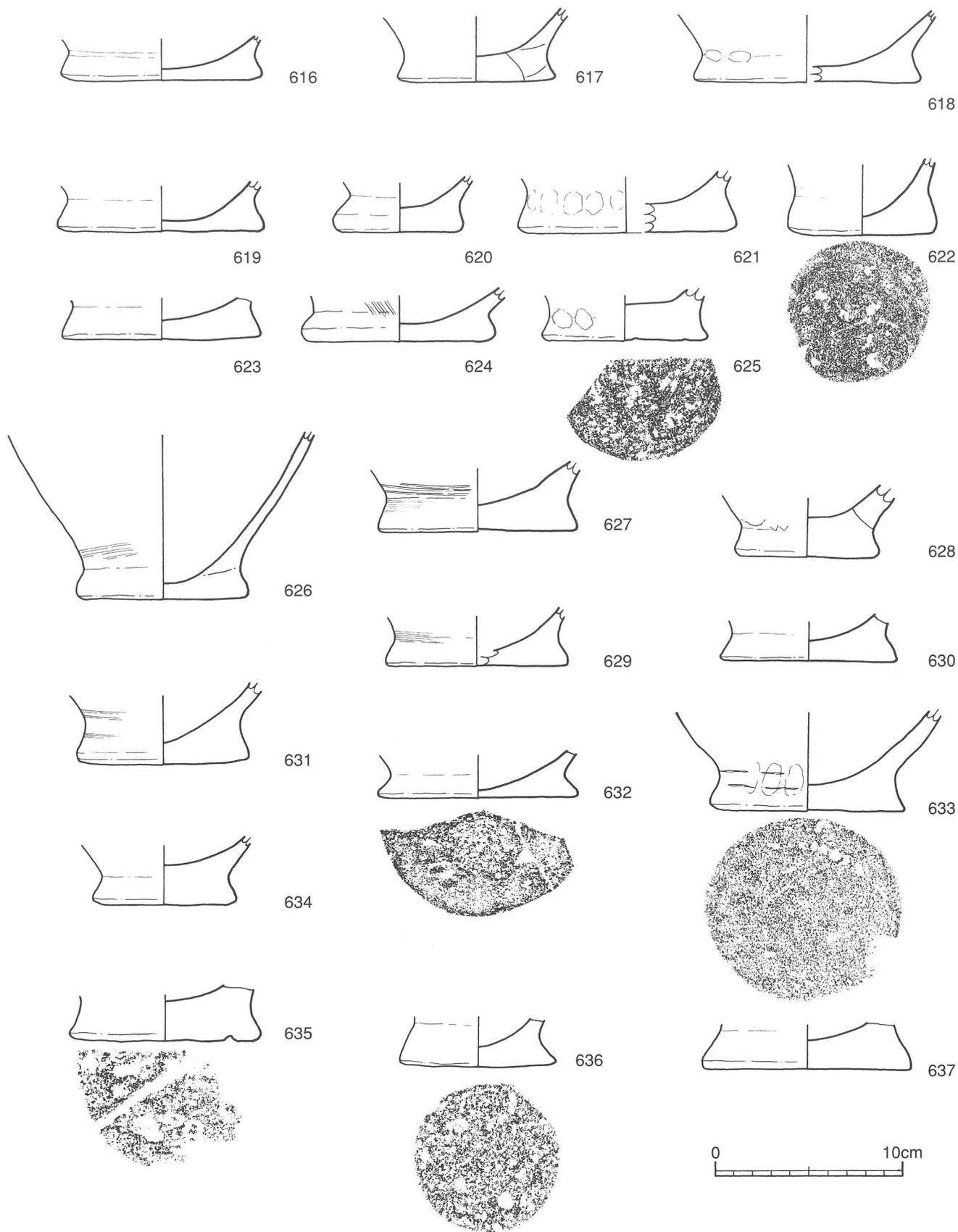
第185図 出土遺物 縄文土器(56)



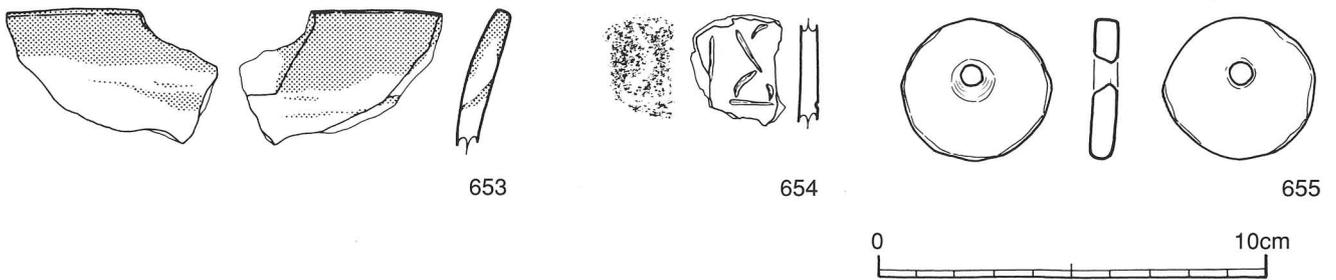
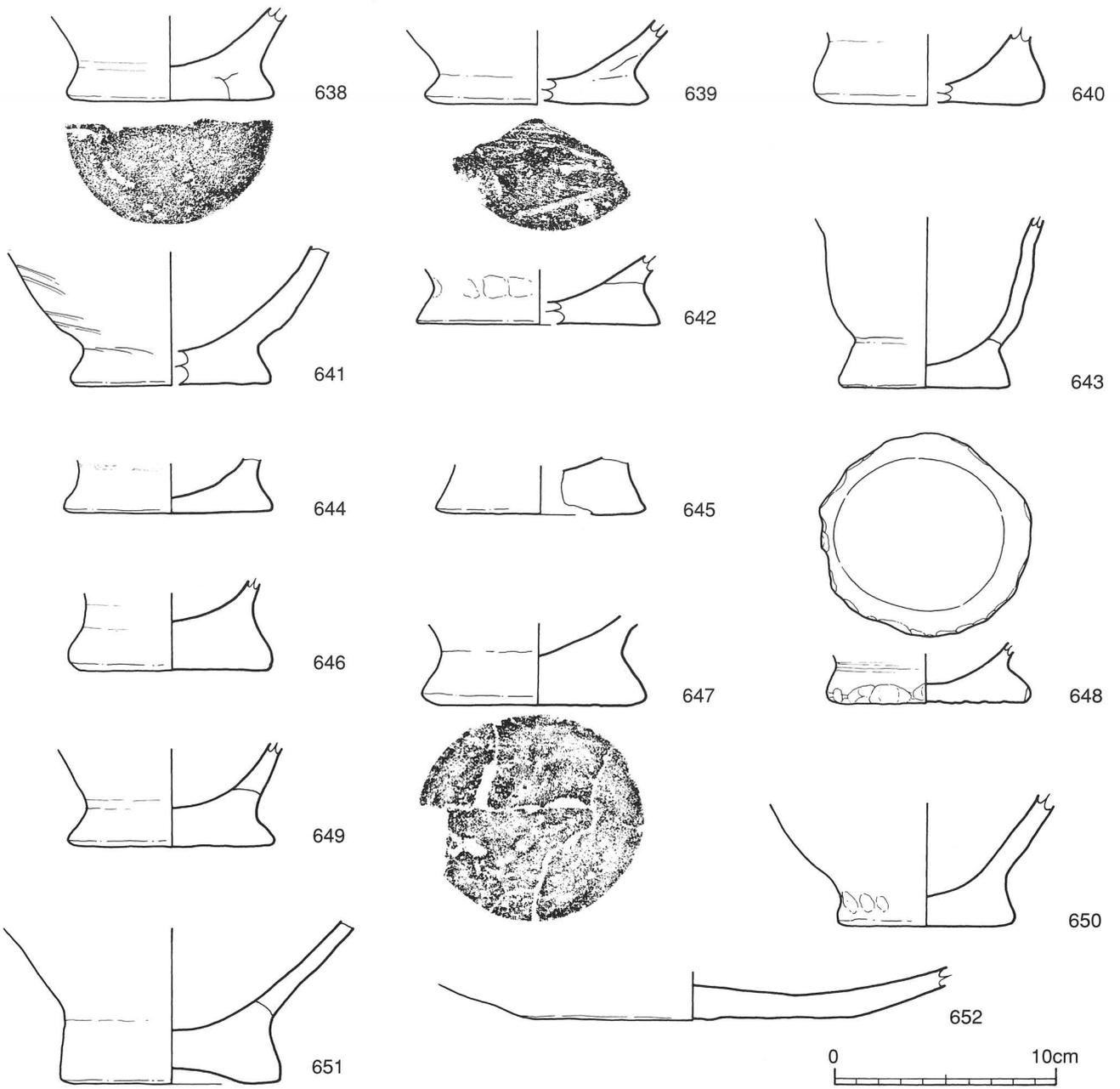
第186図 出土遺物 縄文土器(57)



第187図 出土遺物 縄文土器 (58)



第188図 出土遺物 縄文土器(59)



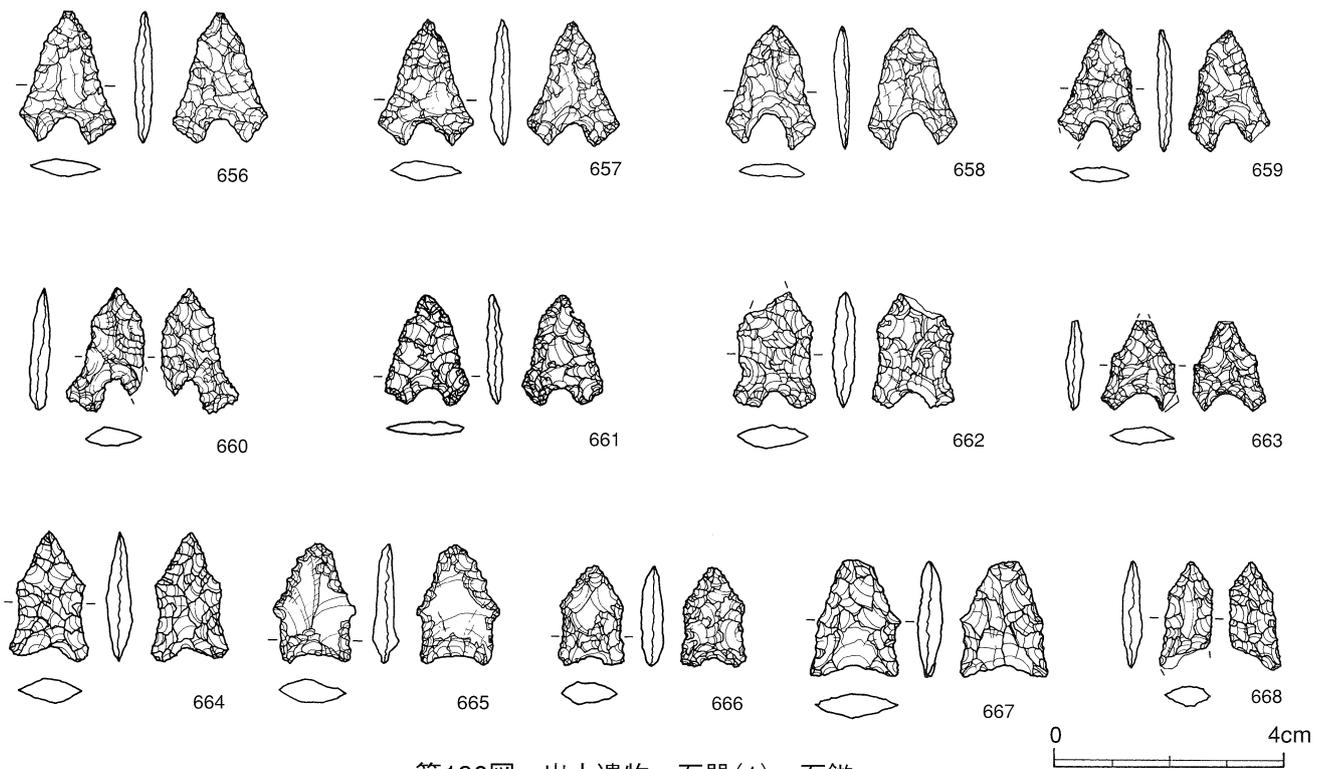
第189図 出土遺物 縄文土器(60)

表21 縄文土器観察表 12

図案号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他備考	写真図説	
								外面	内面					
第182図	494	C-24		Ⅲ	鉢形土器	口縁部	-	灰・丁寧なナデ	黒・丁寧なナデ	10633	8.44	-	-	
	495				鉢形土器	口縁部	-	褐灰・ミガキ	褐灰・ミガキ	大坪	-	-	軽石	
	496	C-14		Ⅲ	鉢形土器	口縁部	-	褐灰・磨耗	褐灰・磨耗	976	8.16	-	-	
	497	D-14		Ⅲ	鉢形土器	口縁部	-	橙・ナデ	にぶい橙・ナデ	1112	8.19	-	-	
	498	B-24		Ⅲ	鉢形土器	口縁部	-	明褐灰・磨耗	灰黄褐・磨耗	15954	8.93	-	-	
	499	A-25		Ⅳ	鉢形土器	口縁部	-	灰黄褐・ミガキ	褐・ミガキ	16579	9.86	-	-	
	500	B-6	SK71		鉢形土器	口縁部	-	暗赤褐・ミガキ	明赤褐・ミガキ	大坪	-	-	-	
	501	B-14		Ⅲ	鉢形土器	口縁部	-	にぶい褐・ミガキ	黄褐・ミガキ	9753	8.36	-	-	
	502	C-23		Ⅲ	鉢形土器	-	-	黒	黒	-	-	-	半透明の石英	
	503	D-12		Ⅲ	鉢形土器	口縁部	-	褐灰・条痕	明赤褐・ミガキ	456	8.11	-	-	
第183図	504	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤	明赤褐	14277	8.18	-	軽石	
	505				深鉢形土器	底部	-	赤褐	黒	大坪	-	-	角閃石	
	506	C-18			深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい橙	大坪	-	-	軽石	
	507	C-18			深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	褐灰	大坪	-	-	-	
	508	C-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	褐灰・丁寧なナデ	褐灰・丁寧なナデ	9831	8.50	-	金雲母	
	509	B-14	SK77		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい橙	13705	8.23	-	金雲母
	510	D-18			Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい橙	大坪	-	-	2mm大の石英
	511	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	橙	8576	7.23	-	軽石	
	512	B-18		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤	赤灰	8531	-	-	角閃石	
	513	C-16		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい橙	1879	7.96	-	金雲母	
	514			Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明褐・	赤褐・	-	-	-	金雲母	
	515	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐・ミガキ	赤褐・ナデ	8361	8.30	-	角閃石・種子圧痕	
	516	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	橙	大坪	-	-	金雲母	
	517	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・磨耗	黒褐・磨耗	9629	8.34	-	2mm大の石英	
	518	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	黒褐・ミガキ	大坪	-	-	金雲母	
	519	B-35		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	褐灰・ナデ	灰褐・磨耗	5271	7.94	-	金雲母	
	520	C-17		Ⅱb	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・ナデ	褐灰・ナデ	8563	7.32	-	2mm大の石英・圧痕	
	521	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・磨耗	黒・磨耗	95	8.17	-	2mm大の石英	
	522	C-17		Ⅱb	深鉢形土器	底部	-	にぶい黄橙	黄橙・磨耗	8563	7.32	-	金雲母・小石	
	523	C-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・ナデ	黒褐・磨耗	11243	8.54	-	金雲母	
	524	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・ナデ	黒褐・ミガキ	14293	8.06	-	金雲母	
	525	D-16		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・ナデ	赤黒	5051	8.17	-	軽石・圧痕	
	526	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・ナデ	黒・ナデ	14008	8.11	-	金雲母	
	527	D-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	淡赤橙・ナデ	褐灰・	5577	8.95	-	-	
	528	D-25		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・ナデ	明赤褐・磨耗	11339	8.59	-	金雲母・小石・圧痕	
	529	B-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐・ナデ	黒褐	13935	8.27	-	13848・13890・金雲母	
	530					深鉢形土器	底部	-	橙・ナデ	黒褐・ナデ	大坪	-	-	軽石・角閃石
	531	C-18				深鉢形土器	底部	-	灰白・ナデ	褐灰	-	-	-	金雲母・凝灰岩・圧痕
	532	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・ナデ	にぶい赤褐・ナデ	8341	8.31	-	小石・金雲母	
	第184図	533	C-24	SX		深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい橙	-	-	-	2mm大の石英・金雲母
534		B-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	2967	8.36	-	2mm大の石英・圧痕	
535		D-12		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	11	8.15	-	2mm大の石英	
536		B-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	にぶい赤褐	15264	8.72	-	小石・金雲母	
537		D-12		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい橙	4	8.17	-	2mm大の石英	
538						深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい橙	注記ナシ	-	-	角閃石
539						深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	褐灰	? 217	0.00	-	2mm大の石英・圧痕
540		D-23		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい褐	10648	8.84	-	金雲母	
541		D-21		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	褐灰	10620	8.43	-	金雲母・軽石	
542		C-18				深鉢形土器	底部	-	明赤褐・ナデ	褐灰・丁寧なナデ	大坪	-	-	3mm大の石英(白)
543						深鉢形土器	底部	-	赤褐	黒褐	見入来	-	-	2mm大の石英・種子圧痕
544		B-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい黄橙	13661	8.28	-	角閃石	
545						深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい橙	注記ナシ	-	-	金雲母
546		D-13		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	758	8.34	-	小石・金雲母	
547		B-22	SD43		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	褐灰	褐灰	12803	8.94	-	2mm大の石英・種子圧痕
548		C-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	11241	8.56	-	小石・金雲母・突起	
549		D-21		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	10049	8.43	-	金雲母	
550		C-24		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい黄橙	黒褐	12923	8.88	-	-	
551		D-20		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	暗赤褐	7583	8.46	-	金雲母・縁刃刻目	
552		C-24	SX		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	-	-	-	軽石
553	C-24		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	黄橙	褐灰	12888	8.45	-	金雲母・編物圧痕		
554	B-16		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	橙	12681	8.34	-	5mm大の石英(白)・糸粒		
第185図	555				深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	大坪	-	-	2mm大の石英	
	556	C-24	SX		深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	-	-	-	2mm大の石英	
	557	B-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	黒褐	13749	8.27	-	2mm大の石英	
	558	C-22	SD43		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	黒褐	12788	8.50	-	金雲母
	559	C-24	SX		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	-	-	-	角閃石
	560	C-24	SX		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤	にぶい橙	-	-	-	金雲母
	561					深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	注記ナシ	-	-	金雲母・小石
	562	C-24		Ⅳ	深鉢形土器	底部	-	黄橙	黄橙	12247	8.25	-	金雲母・小石	
	563	D-13		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	暗赤褐	876	8.09	-	2mm大の石英・種子圧痕	
	564	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	13096	8.77	-	2mm大の石英・圧痕	
	565	D-13		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	845	8.04	-	石英・圧痕	
	566	C-24	SX		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい橙	大坪	-	-	金雲母・小石・種子圧痕
	567	D-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	黒	10243	8.59	-	角閃石	
	568	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	11321	8.87	-	金雲母・種子圧痕	
	569	B-23	SFK133		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい橙	大坪	-	-	軽石・2mm大の石英
第186図	570	C-24	SX		深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい橙	824	8.28	-	2mm大の石英・圧痕	
	571	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい橙	8409	8.28	-	2mm大の石英・編物圧痕	
	572	C-24		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	暗赤褐	12891	8.51	-	角閃石	
	573					深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	大坪	-	-	凝灰岩・軽石・2mm大の石英
	574	D-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	10330	8.59	-	小石・金雲母	
	575	C-24	SX		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい橙	-	-	-	凝灰岩
	576	A-35				深鉢形土器	底部	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	大坪	-	-	凝灰岩・角閃石

表22 縄文土器観察表 13

図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取上げ番号	レベル (m)	特徴・胎土・焼成・ その他 備考	写真図録	
								外面	内面					
第186 図	577	B-24		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	褐灰	明赤褐	15957	8.93	2mm大の石英・角閃石	-	
	578	B-36		Ⅱc	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	褐灰	2467	9.57	2mm大の石英・軽石	-	
	579	B-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐・条痕	にぶい明赤褐	13927	8.23	13861・13890, 小石	-	
	580	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい橙	16480	9.60	2mm大の石英・圧痕	-	
	581	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	13702	8.24	軽石	-	
	582					深鉢形土器	底部	-	明赤褐	褐灰	大坪	-	小石・金雲母・圧痕	-
	583	B-14		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい赤褐	にぶい橙	13878	8.18	2mm大の石英	-	
	584	C-23	SD68		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	黄橙	明褐灰	13017	8.79	3mm大の石英(白)・角閃石・圧痕	-
	585	C-24	SX			深鉢形土器	底部	-	にぶい黄橙	褐灰	大坪	-	金雲母・軽石・圧痕	-
	586	A-21	SD43			深鉢形土器	底部	-	暗赤褐	暗赤褐	1116?	0.00	金雲母・圧痕	-
第187 図	587	A-32		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	にぶい橙	17054	9.55	2mm大の石英	-	
	588	C-12		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい橙	877	8.08	金雲母	-	
	589					深鉢形土器	底部	-	褐・条痕	黒褐	注記ナシ	-	軽石・2mm大の石英	-
	590	D-25		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	暗赤褐	11366	8.77	-	-	
	591	C-24		Ⅳ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	12260	8.51	小石	-	
	592	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい褐	316	8.16	角閃石	-	
	593	A-33		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	16486	9.56	2mm大の石英・種子圧痕	-	
	594	B-24				深鉢形土器	底部	-	橙	橙	15963	8.88	金雲母	-
	595	D-13		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	643	8.22	金雲母	-	
	596	D-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	10632	8.40	角閃石	-	
	597	C-24	SX			深鉢形土器	底部	-	橙	橙	-	-	金雲母	-
	598					深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	見入来	-	金雲母	-
	599	B-35		Ⅱc	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	褐灰	2343	9.53	2mm大の石英・種子圧痕	-	
	600	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	にぶい赤褐	164	8.15	2mm大の石英・軽石・種子圧痕	-	
	601	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい橙	10861	8.73	角閃石・種子圧痕	-	
	602	C-24		Ⅳ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	褐灰	12326	8.30	金雲母	-	
	603	D-18		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	黒褐	3649	8.41	金雲母・脚台状	-	
	604	大坪				深鉢形土器	底部	-	橙	橙	大坪	-	金雲母・圧痕	-
	605	C-24	SX			深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい褐	大坪	-	金雲母・種子圧痕	-
	606	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	14904	8.93	5mm大の石英(白)・角閃石	-	
第188 図	607				深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	注記なし	-	小石・圧痕	-	
	608	D-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい橙	6758	8.15	小石	-	
	609	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	にぶい赤褐	13485	8.76	金雲母・圧痕	-	
	610	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい褐	16399	9.54	2mm大の石英・軽石	-	
	611					深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい赤褐	見入来	-	2mm大の石英・圧痕	-
	612	C-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	8354	8.27	2mm大の石英・織物圧痕	-	
	613	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	淡赤橙	淡赤橙	549	8.10	2mm大の石英・種子圧痕	-	
	614	C-24	SX			深鉢形土器	底部	-	赤褐	にぶい赤褐	-	-	2mm大の石英・金雲母	-
	615	C-24		Ⅳ	深鉢形土器	底部	-	黄橙	黄橙	12312	8.29	小石・金雲母	-	
	616	D-21		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	淡黄橙	浅黄橙	10002	8.58	金雲母	-	
	617	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	にぶい橙	15732	8.92	-	-	
	618	C-24		Ⅳ	深鉢形土器	底部	-	-	-	12324	8.27	-	-	
	619	D-21		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	暗赤灰	9970	8.43	凝灰岩・圧痕	-	
	620	B-16		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	11746	8.90	凝灰岩	-	
	621	D-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	黒褐	1260	8.23	2mm大の石英	-	
	622	D-23		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	褐灰	9889	8.64	軽石・圧痕	-	
	623	D-15		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	1283	8.17	圧痕	-	
	624	A-35				深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	大坪	-	圧痕	-
	625	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	にぶい赤褐	13481	8.98	小石・圧痕	-	
	626	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	浅黄橙	11460	8.67	2mm大の石英・圧痕	-	
第189 図	627	C-14	SX75		深鉢形土器	底部	-	明赤褐	赤黒	14335	8.18	小石・角閃石・圧痕	-	
	628	A-35	SD144		深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	16781	9.66	小石・金雲母・圧痕	-	
	629	A-35	SF193			深鉢形土器	底部	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	大坪	-	小石・圧痕	-
	630	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	16514	9.49	2mm大の石英	-	
	631	D-12		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい赤褐	暗赤褐	283	8.11	2mm大の石英・圧痕	-	
	632	D-18				深鉢形土器	底部	-	灰白	浅黄橙	大坪	-	角閃石・圧痕	-
	633	B-34				深鉢形土器	底部	-	明赤褐	浅黄橙	大坪	-	2mm大の石英・圧痕	-
	634	C-22	SD43			深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	12165	8.53	2mm大の石英	-
	635	A-32	SD			深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい橙	17046	9.58	軽石・種子圧痕	-
	636	C-34		Ⅱb	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	1843	8.50	金雲母・種子圧痕	-	
	637			Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	灰白	灰白	見入来	-	軽石・2mm大の石英	-	
	638	D-17		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	暗赤褐	暗赤褐	7419	8.33	2mm大の石英・圧痕	-	
	639	B-22		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	明赤褐	14739	8.86	小石・圧痕	-	
	640	D-21		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	黒褐	10161	8.65	小石・圧痕	-	
	641	B-21		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	暗赤褐	暗赤褐	15161	8.76	金雲母	-	
	642	B-14				深鉢形土器	底部	-	にぶい橙	にぶい橙	大坪	-	角閃石・凝灰岩	-
	643	C-23		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	橙	12603	8.78	-	-	
	644	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	16546	9.54	2mm大の石英	-	
	645	A-32		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	17080	9.32	小石	-	
	646	D-11		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	黒褐	424	8.09	2mm大の石英	-	
647	D-24		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	にぶい橙	10882	8.99	1686, 金雲母・圧痕	-		
648	A-34		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	16803	9.43	凝灰岩・圧痕	-		
649	C-16		Ⅱb	深鉢形土器	底部	-	赤褐	黒褐	8729	8.33	凝灰岩	-		
650	D-26		Ⅳ	深鉢形土器	底部	-	明赤褐	にぶい赤褐	11254	8.66	小石・圧痕	-		
651	B-32		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	橙	赤灰	17061	9.48	軽石・脚台状	-		
652	B-29		Ⅲ	深鉢形土器	底部	-	赤褐	赤褐	16071	9.28	2mm大の石英・軽石・圧痕	-		
653	D-13		Ⅲ	縄文土製品	-	-	暗赤褐	明赤褐	大坪	-	-	-		
654	B-17				縄文土製品	-	-	極暗赤褐	暗赤褐	-	-	-		
655					縄文土製品	-	-	明赤褐	にぶい赤褐	-	-	滑石粒	-	



第190図 出土遺物 石器(1) 石鏃

(2) 縄文石器

①石鏃 (第190~209図 656~1166)

石鏃と判断できたものについては細片も図示してあるので、調査によって得られた実数に近いものとする。加工して当初目的とした形状のものと未製品とに分け、さらに形状のわかるものについては形の特徴により細分した。石鏃は狩猟用の弓矢として矢の先端に取り付ける道具であり、対象動物に命中した際確実に突き刺さることが求められる。そのため、先端が鋭く尖っていなければならない。また、突き刺さった矢が暴れまわる動物から簡単にはずれない様にするために、基部の逆刺の形状も重要となる。さらに、矢先への装着方法が紐でしばって固定する場合、側縁の形状にも意味がある。大きさ・厚さ・重さについても、対象動物が兔や鳥などの小動物と鹿や猪の大型獣とで違いがあったのかもしれないが、一定の数値におさまるようである。矢に毒が塗られていた可能性が想定される所以である。

欠損した箇所を除き、このような条件を満たさないものを未製品として扱い、それ以外を形態ごとに分類した。基部が抉れるものと平坦になるものに大きく分類し、その後側辺及び逆刺部分の形状からⅠ類~Ⅸ類に分類した。

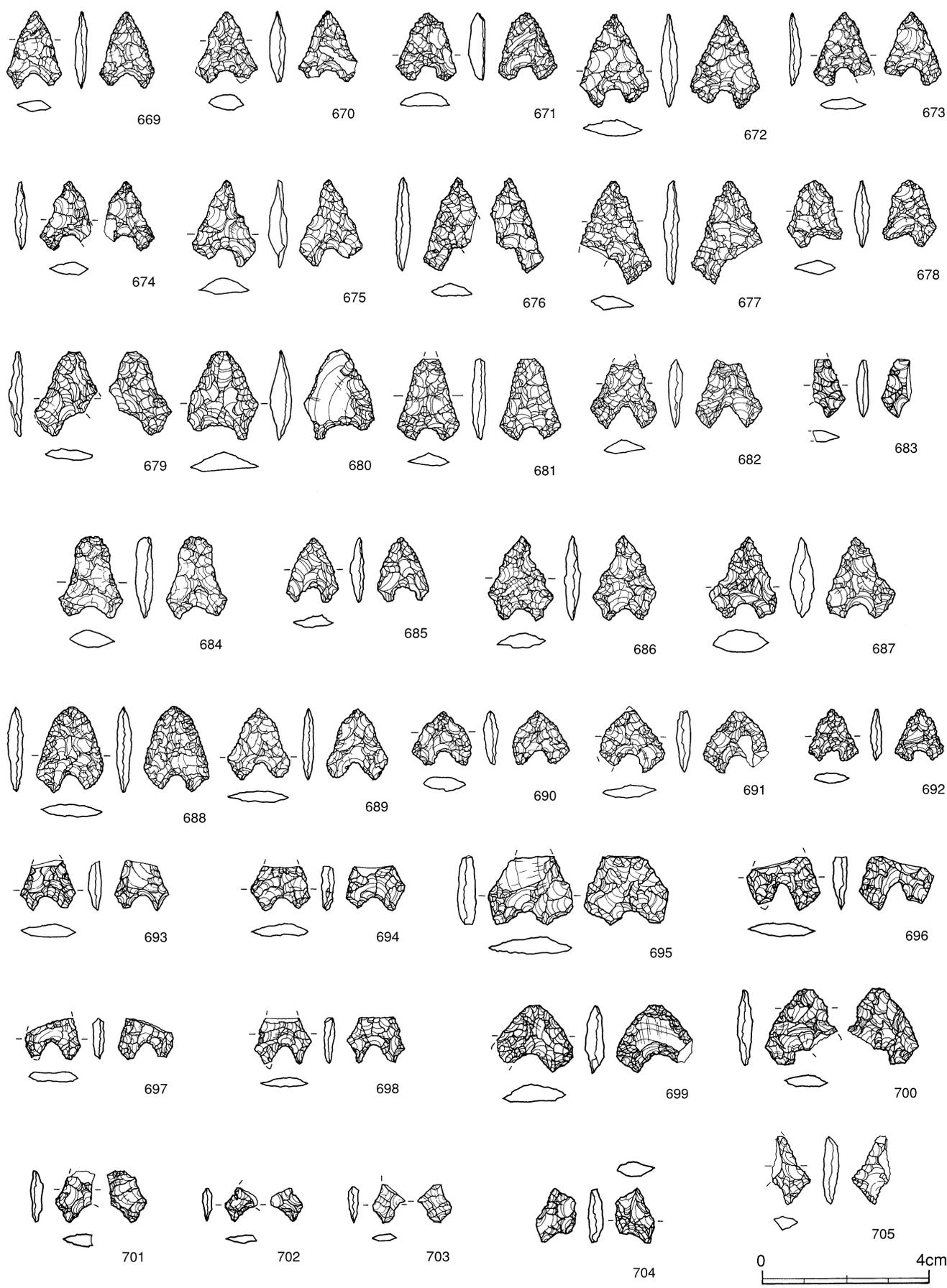
Ⅰ類 (第190図 656~668)

凹基式の長身で、側縁が直線的でなくいわゆる肩部をもつタイプである。さらに、いわゆる腰部から基部の形態によりⅠa~Ⅰc類に分けた。Ⅰa類 (656

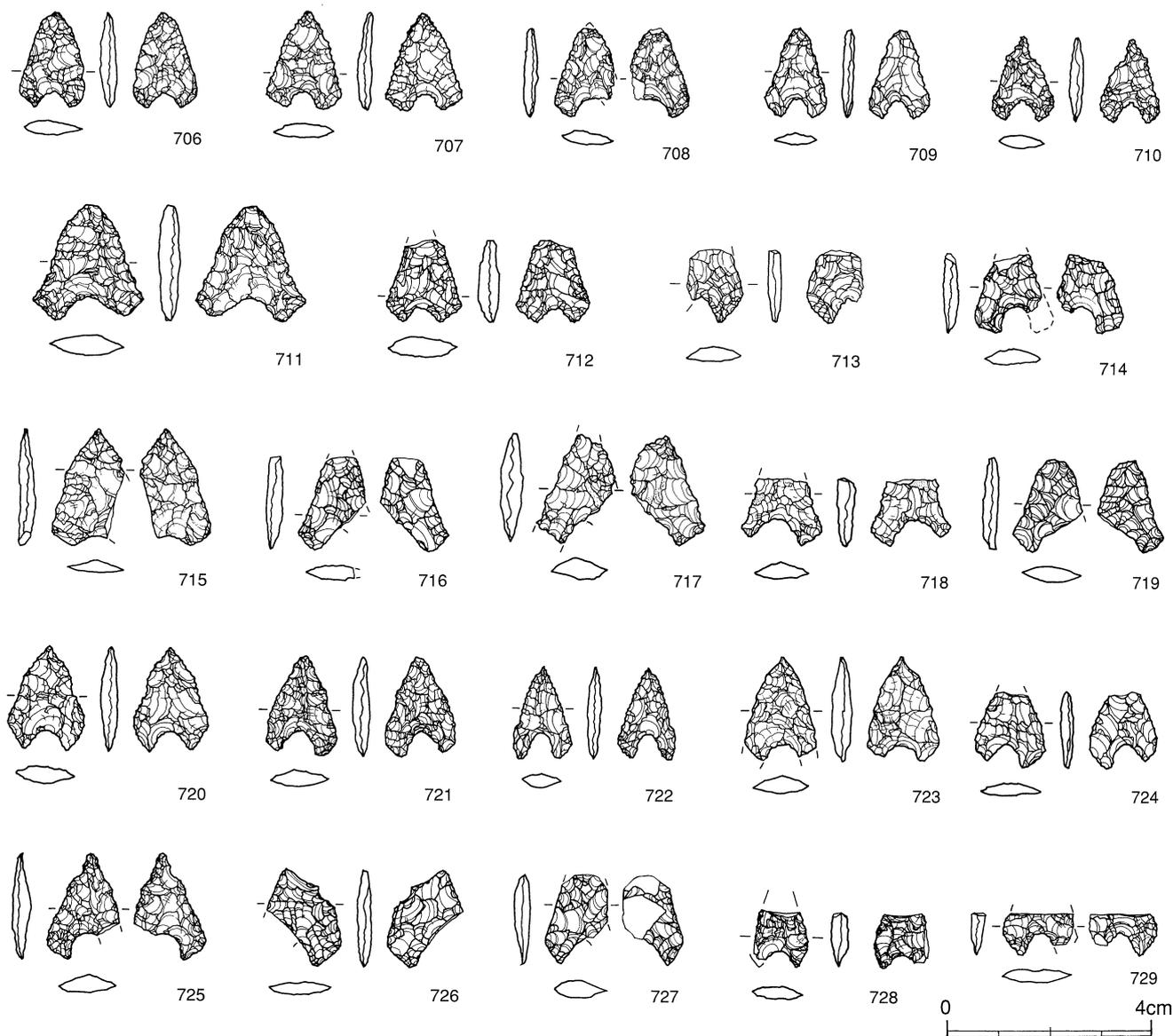
~660) は腰部がやや上位にあり、脚部先端が尖るものである。Ⅰb類 (661~663・668) は肩部と腰部がやや下がった位置にあり、脚部が長方形となるものである。Ⅰc類 (664~667) は腰の部分がなく、いわゆる五角形鏃と呼ばれるものである。

Ⅱ類 (第191・192・196図 669~729・805~837)

Ⅱ類としたものは、凹基式で側縁が直線的でない点はⅠ類と同じであるが、縦横の長さの差がそれほど大きくないものであり、腰部以下の形状からⅡa~Ⅱc類に細分した。Ⅱa類 (669~705) は腰部がやや上位にあり、脚端部が尖るものである。Ⅱb類 (706~719・805~818) は腰部がやや下がり、脚部が長方形となるものである。Ⅱc類 (720~729・819~837) としたものは、Ⅱa類に近い形であるが、腰部の角がなく丸みを帯びるタイプである。



第191図 出土遺物 石器(2) 石鏃



第192図 出土遺物 石器(3) 石鏃

**Ⅲ類** (第195図 772~804)

Ⅲ類は凹基式で側縁が丸みを帯びたタイプであり、脚部端の形状によってⅢa~Ⅲc類に細分した。Ⅲa類(772~783)は脚部端が水平になるものであり、基部は凹部を小さくつくり出している。Ⅲb類(785~789・791・792・794)は脚部端が丸みを帯びるものである。Ⅲc類(784・790・793・795~804)は脚部端が尖り、基部全体が大きく湾曲するタイプである。

**Ⅳ類** (第197~199図 838~905)

Ⅳ類は凹部があまり意識されないタイプである。2つに分類した。Ⅳa類(838~876)は基部全体がわずかに窪むタイプであり、全体の形状はⅥ類の二等辺三角形を呈する。Ⅳb類(877~905)は基部の中央部分を小さく窪ませる。全体の形状はⅢ類に近い。

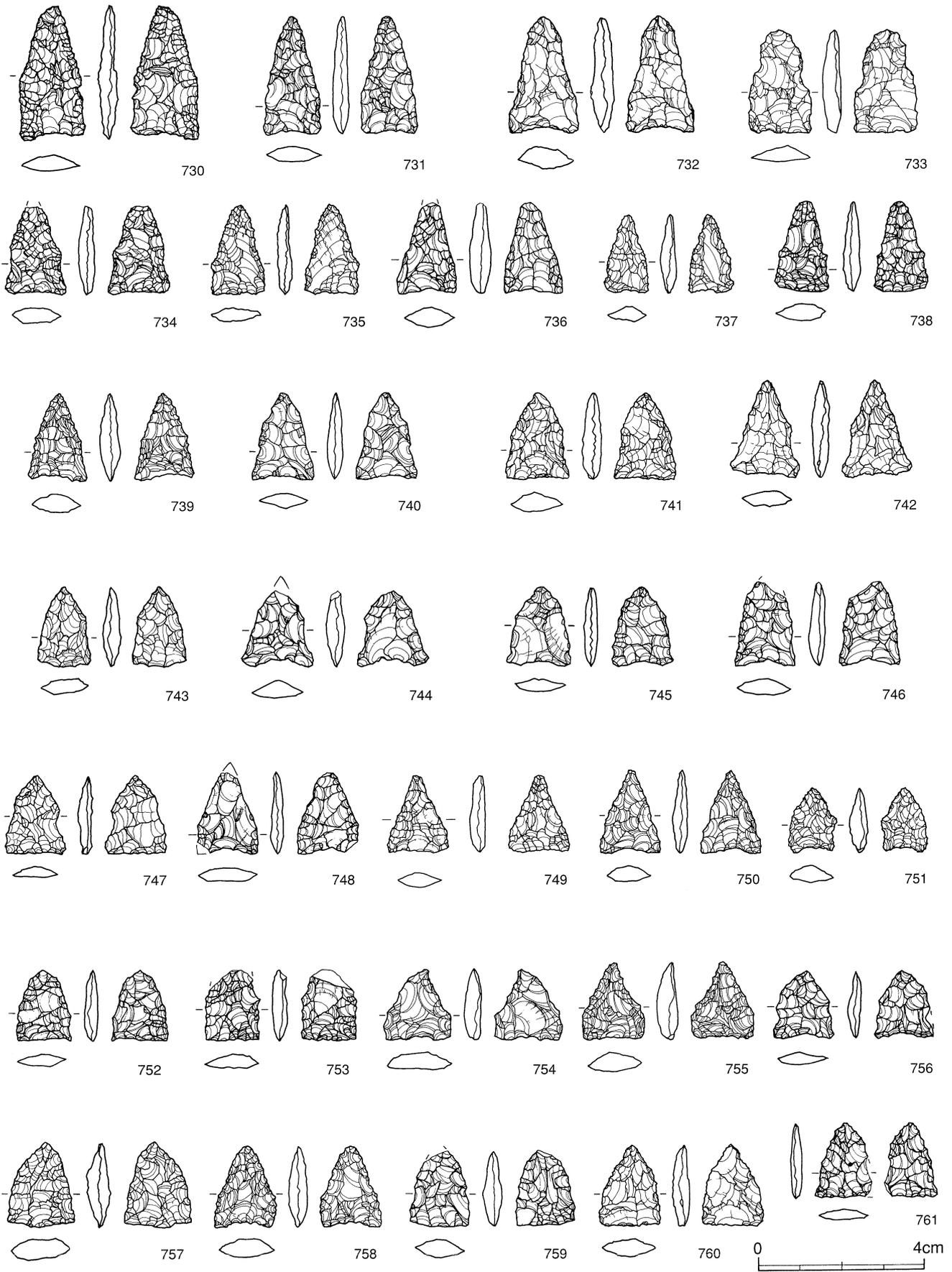
**V類** (第193・194図 730~771)

V類は平基式であり、側縁が直線的でなく角をもつ

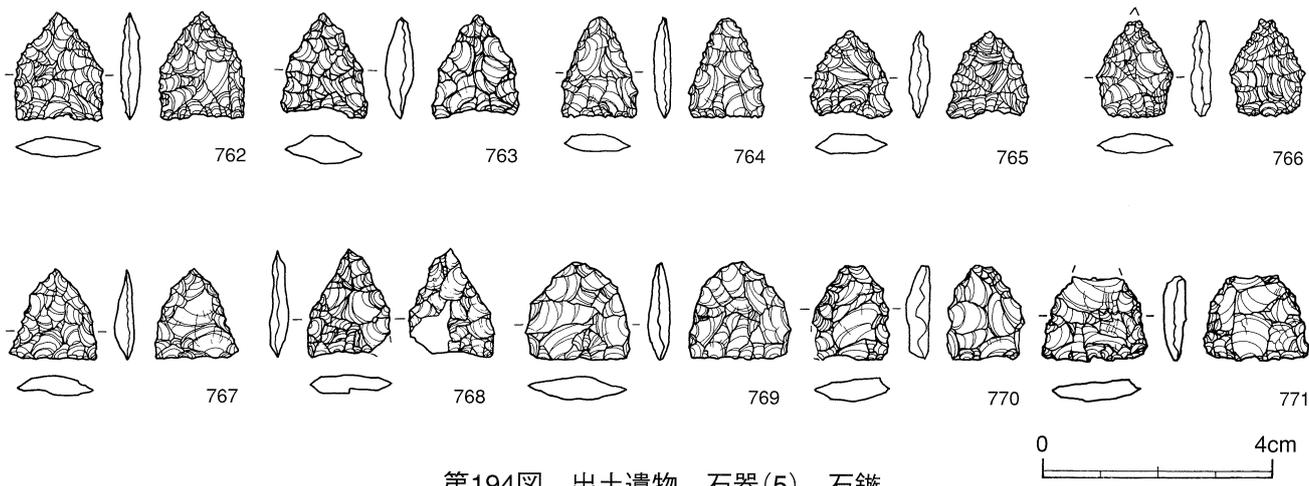
タイプで五角形鏃と呼ばれるものである。角の位置によってVa~Vc類に分類した。Va類(730~738)は側縁の角がやや下の方に位置するもので、長身ではあるが重心が低い。Vb類(739~761)は側縁の角が中央付近にあるもので、Va類とVc類の中間的な形態である。Vc類(762~771)は側縁の角が上位にあるタイプであり、長さが短くホームベース形に近い。

**Ⅵ類** (第201図 942~974)

Ⅵ類は平基式で側縁も直線的であり、いわゆる三角形鏃と呼ばれるものである。縦横の長さの差で3つに細分した。Ⅵa類(959~974)は長身の二等辺三角形となるものである。Ⅵb類(942~950)はⅥa類とⅥc類のちょうど中間的なものを取り上げた。Ⅵc類(951~958)は縦横の長さの差が小さく、正三角形に近い形を呈するものである。



第193図 出土遺物 石器(4) 石鏃



第194図 出土遺物 石器(5) 石鏃

**VII類** (第202・203図 975~1011)

975~1011は、基部が凸するか、ふくらむタイプである。基部の形状により二分した。VIIa類(975~986)が凸するタイプであり、982や986などは特に強調している。VIIb類(987~1011)は基部がふくらむタイプである。VII類の中にも988や997などの様に、五角形を意識したものもみられる。

**VIII類** (第204図 1038~1050)

1038~1050は、両面もしくは片面に剥離面を大きく残すタイプである。打面と対極にある薄い部分を先端とし、簡単な加工を行っている状況が見受けられる。

**IX類** (第200・203・205図 906~941・1012~1037・1051~1087)

IX類としたものは、欠損して判断できないものやI~VIII類にあてはまらないものを一括して含めた。

906~941は、基部が欠損しており、どこに分類して良いか判断がつかないものである。資料提示だけはし

ておきたい。

1012~1037は、上記の分類に入れられそうであるが、欠損しているために、どの類に入れられるか判断がつかないものである。資料提示だけはしておきたい。

1051~1087は、欠損したり、形状が単独のものであったりして、分類にあてはめることができなかったものである。資料提示だけはしておきたい。

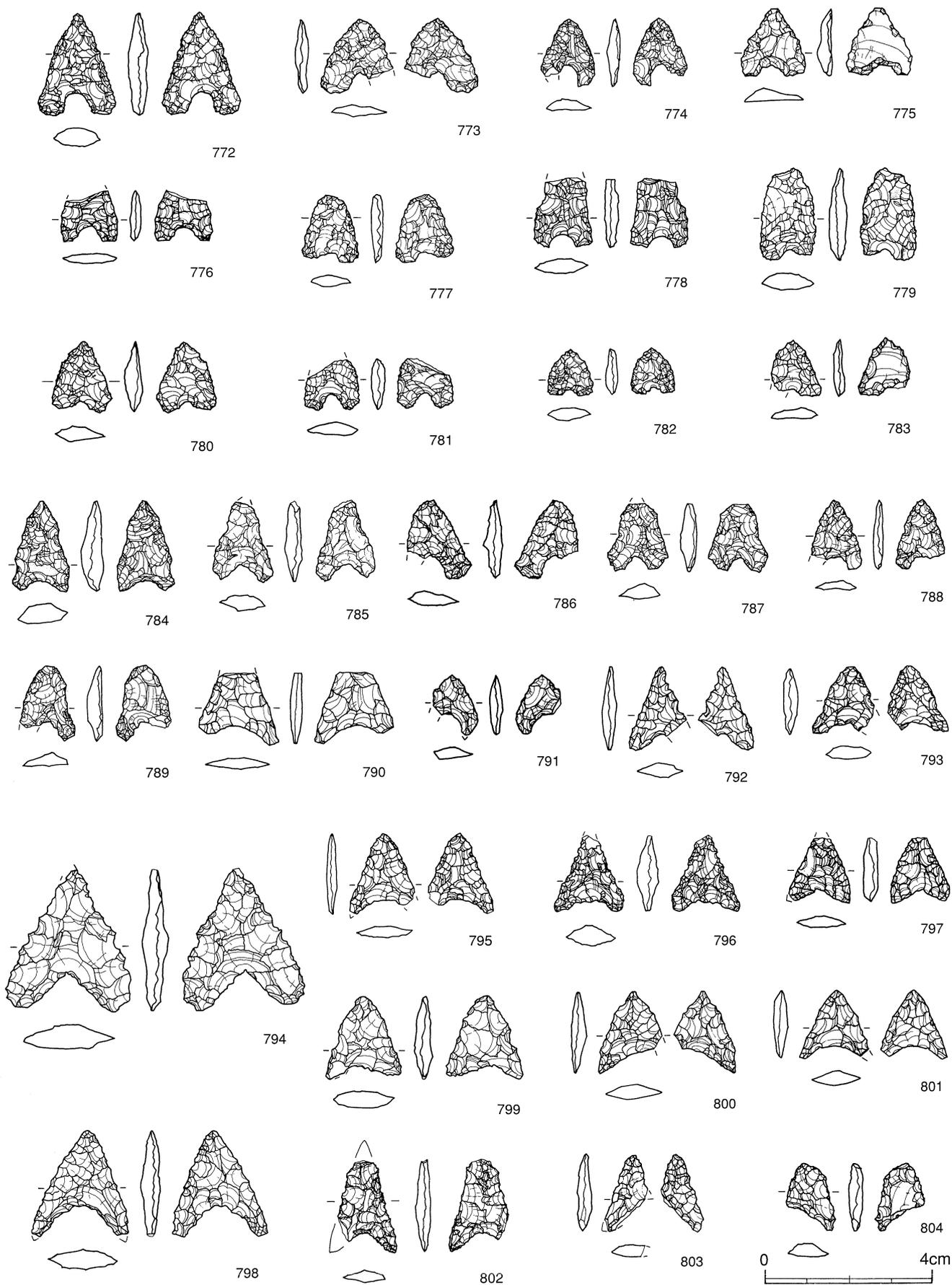
**未製品** (第206~209図 1088~1166)

1088~1166は、両面からの剥離がなされるものの定まった形はなく、しかも厚みをもつものであり、加工途中のものであると考えられる。石鏃を製作する途中の未製品と考えられる。

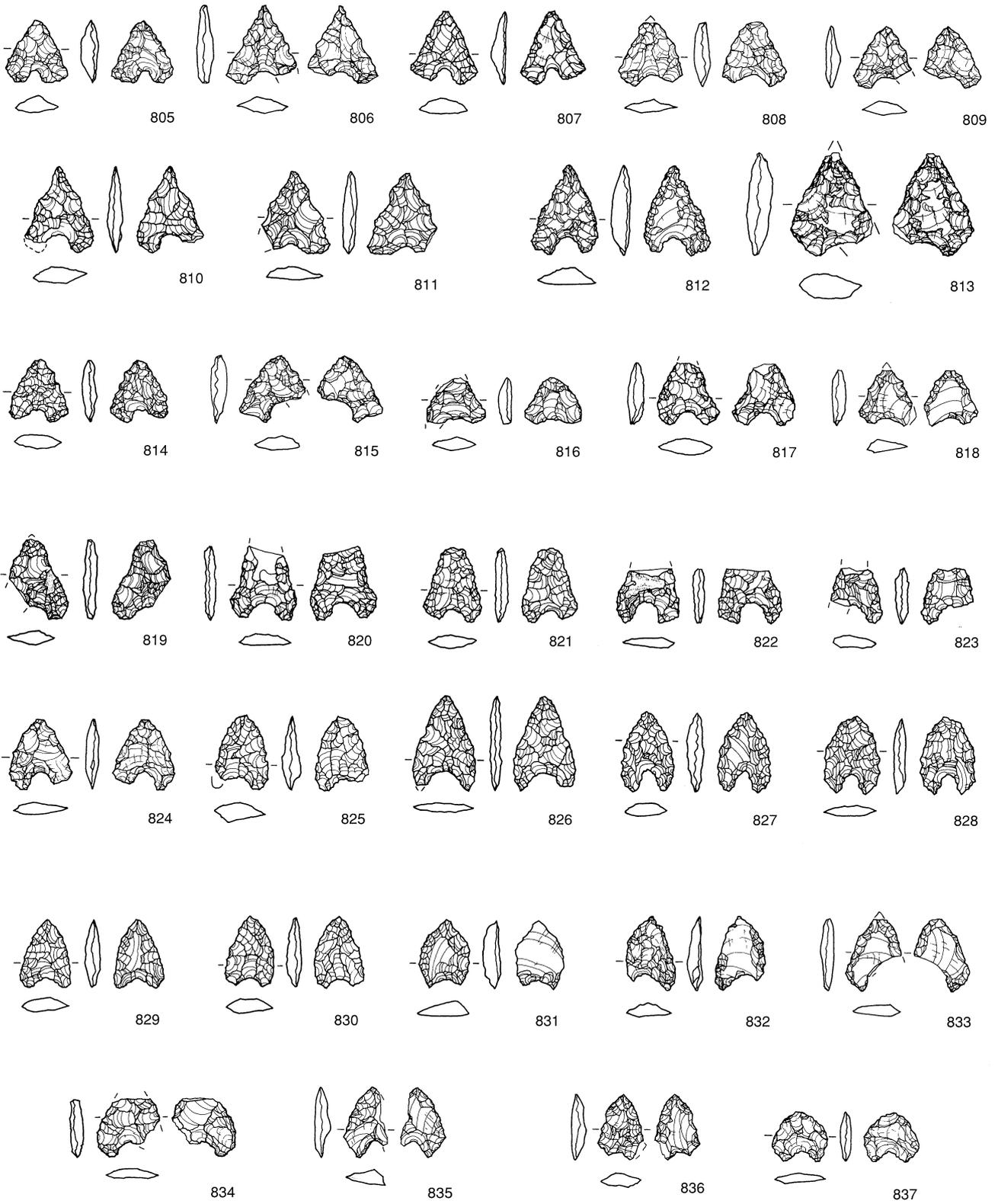
以上、大坪遺跡出土の石鏃を分類してはみたものの、相互の関係について言及することはできなかった。少なくともこれまで言われてきた様に、縄文時代後期後半~晩期にかけて五角形に近い形の石鏃が多いことは追認できた。

表23 石器観察表1

図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	分類	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上げ番号	レベル	写真図録	
								(mm)	(mm)	(mm)	(g)				
第190 図	656	C-23		Ⅲ	石鏃	I a類	安山岩(サヌカイト)	23.20	16.70	3.20	0.84	12846	8.92	40	
	657	C-24		Ⅲ	石鏃	I a類	チャート	22.20	15.90	3.40	0.77	12643	9.065	40	
	658	D-18		Ⅲ	石鏃	I a類	安山岩	21.80	15.50	2.80	0.61	7113	8.27	40	
	659	D-22		Ⅲ	石鏃	I a類	黒曜石(腰岳系)	21.70	14.50	2.60	0.49	10241	8.36	40	
	660	B-34				石鏃	I a類	黒曜石(腰岳系)	21.75	19.10	3.35	0.59	-	-	-
	661	C-24				石鏃	I b類	黒曜石(腰岳系)	19.80	13.80	2.70	0.53	-	-	-
	662	C-22	SD43			石鏃	I b類	黒曜石(腰岳系)	20.70	14.10	4.00	0.99	-	-	-
	663	C-22	SD44			石鏃	I b類	黒曜石(腰岳系)	16.10	13.00	3.20	0.43	11152	8.585	-
	664	C-18		Ⅲ		石鏃	I c類	チャート	23.00	13.70	4.30	1.06	8654	7.36	40
	665	B-31	SD44			石鏃	I c類	黒曜石(腰岳系)	20.90	14.10	4.10	0.85	16644	9.455	40
	666	C-22	SD43			石鏃	I c類	黒曜石(腰岳系)	17.90	11.00	3.80	0.72	-	-	40
	667	B-22	SD43			石鏃	I c類	安山岩(サヌカイト)	20.80	15.00	4.35	1.15	14727	8.555	-
	668	B-19	SD16			石鏃	I b類	黒曜石(腰岳系)	19.60	9.00	3.80	0.51	-	-	-
	第191 図	669	D-17		Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	安山岩(サヌカイト)	19.10	13.00	2.90	0.49	6503	8.145	40
670		D-16	SK		Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	17.40	14.00	3.80	0.66	6076	8.025	40
671		C-24		Ⅳ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	16.70	14.10	3.80	0.60	12322	8.405	-	
672		D-23		Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	23.00	16.50	4.15	0.96	10672	8.765	40	
673		D-23		Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	18.20	14.10	2.70	0.43	10662	8.75	-	
674		D-12		Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	17.00	11.60	2.90	0.35	334	8.115	-	
675		D-22	SD43			石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	21.45	15.15	4.50	0.84	9830	8.575	-
676		D-17		Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	23.00	15.40	3.65	0.60	10364	8.565	-	
677		C-16		Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	24.90	17.30	3.70	0.82	9482	8.245	-	
678		C-15		Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	安山岩(サヌカイト)	16.30	12.90	3.70	0.47	8208	8.24	-	
679						石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	20.50	14.30	3.20	0.56	-	-	-

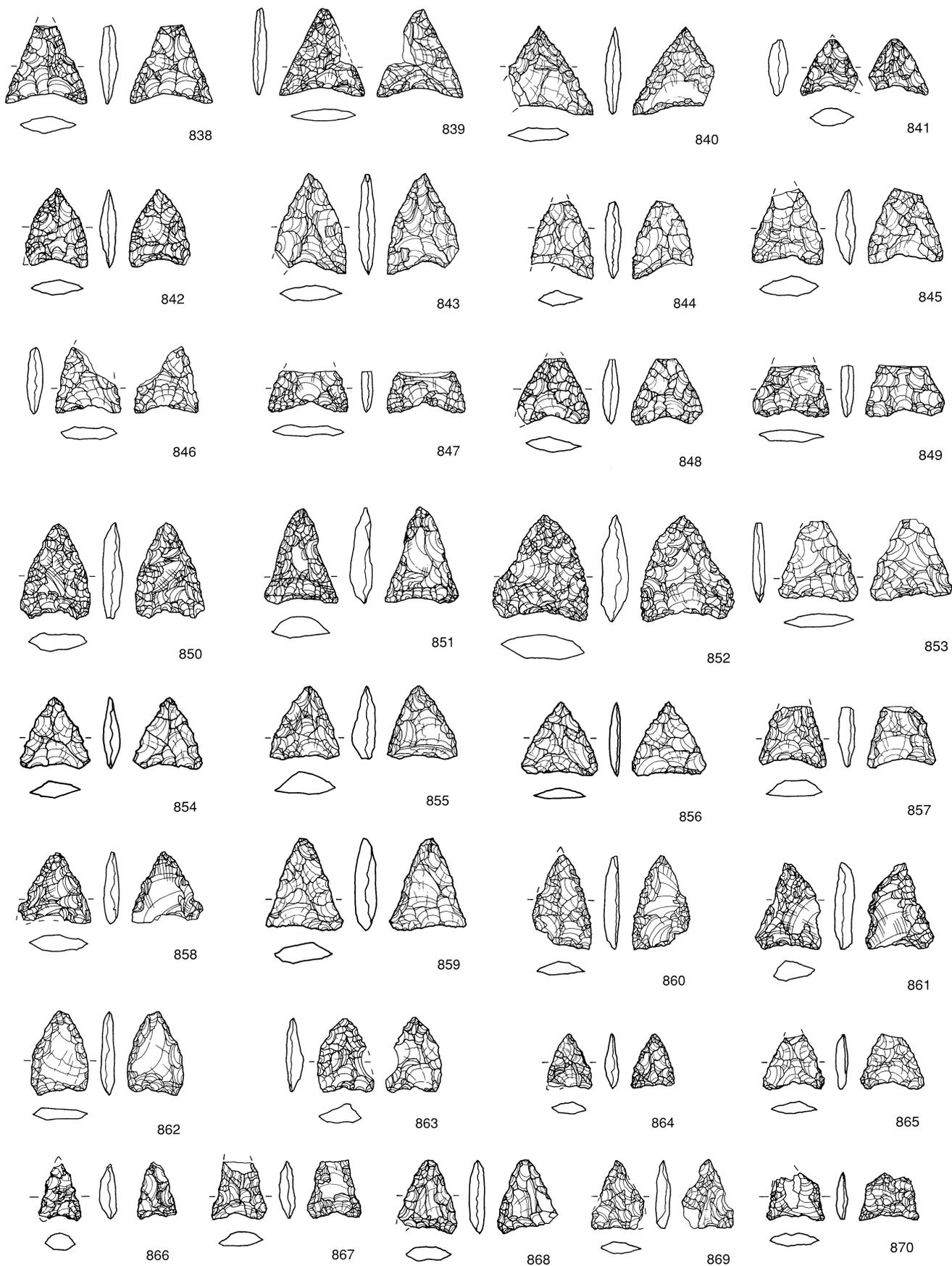


第195図 出土遺物 石器(6) 石鏃



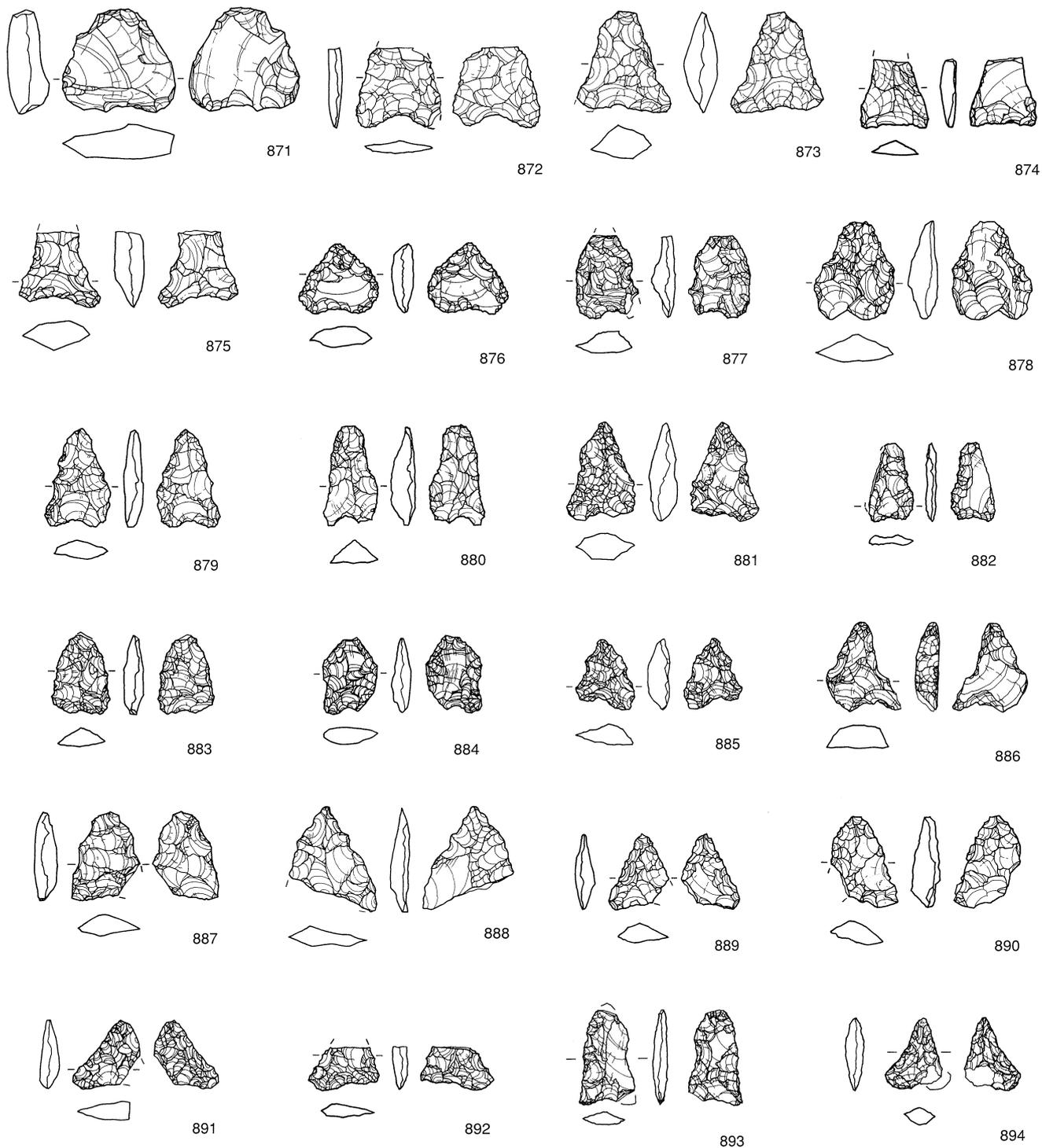
0 4cm

第196図 出土遺物 石器(7) 石鏃

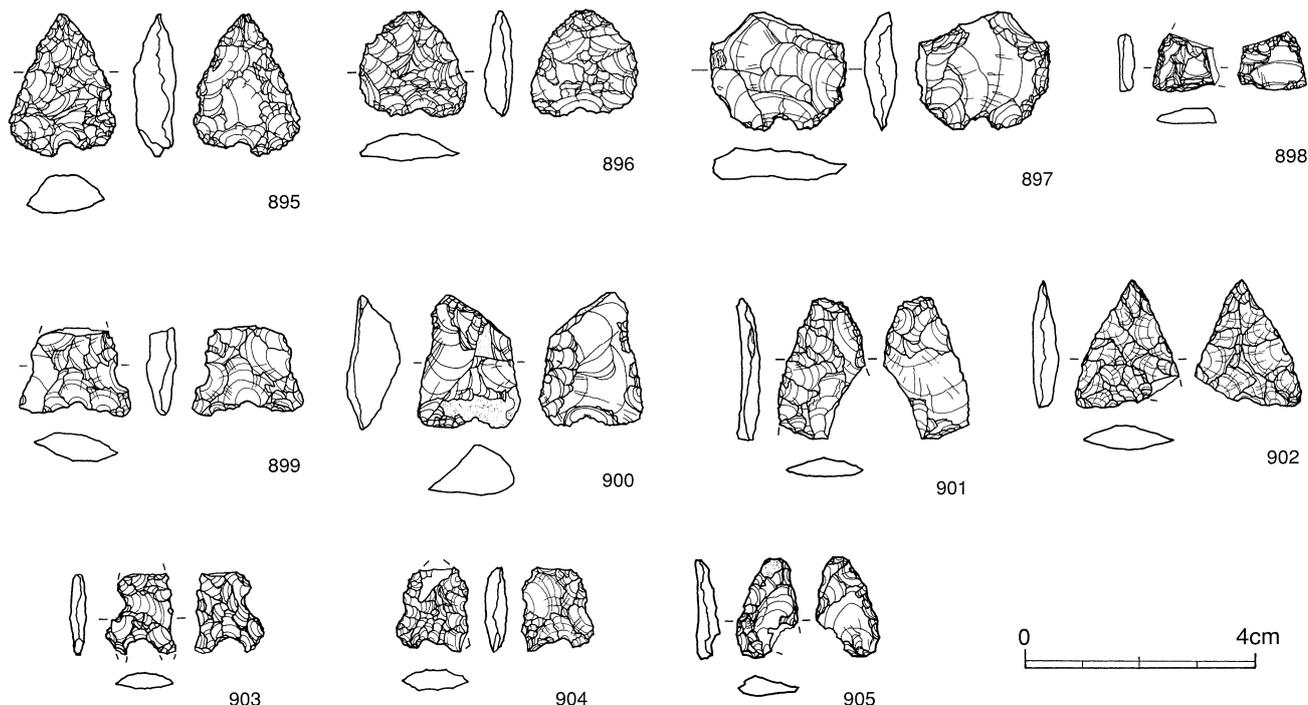


0 4cm

第197図 出土遺物 石器(8) 石鏃



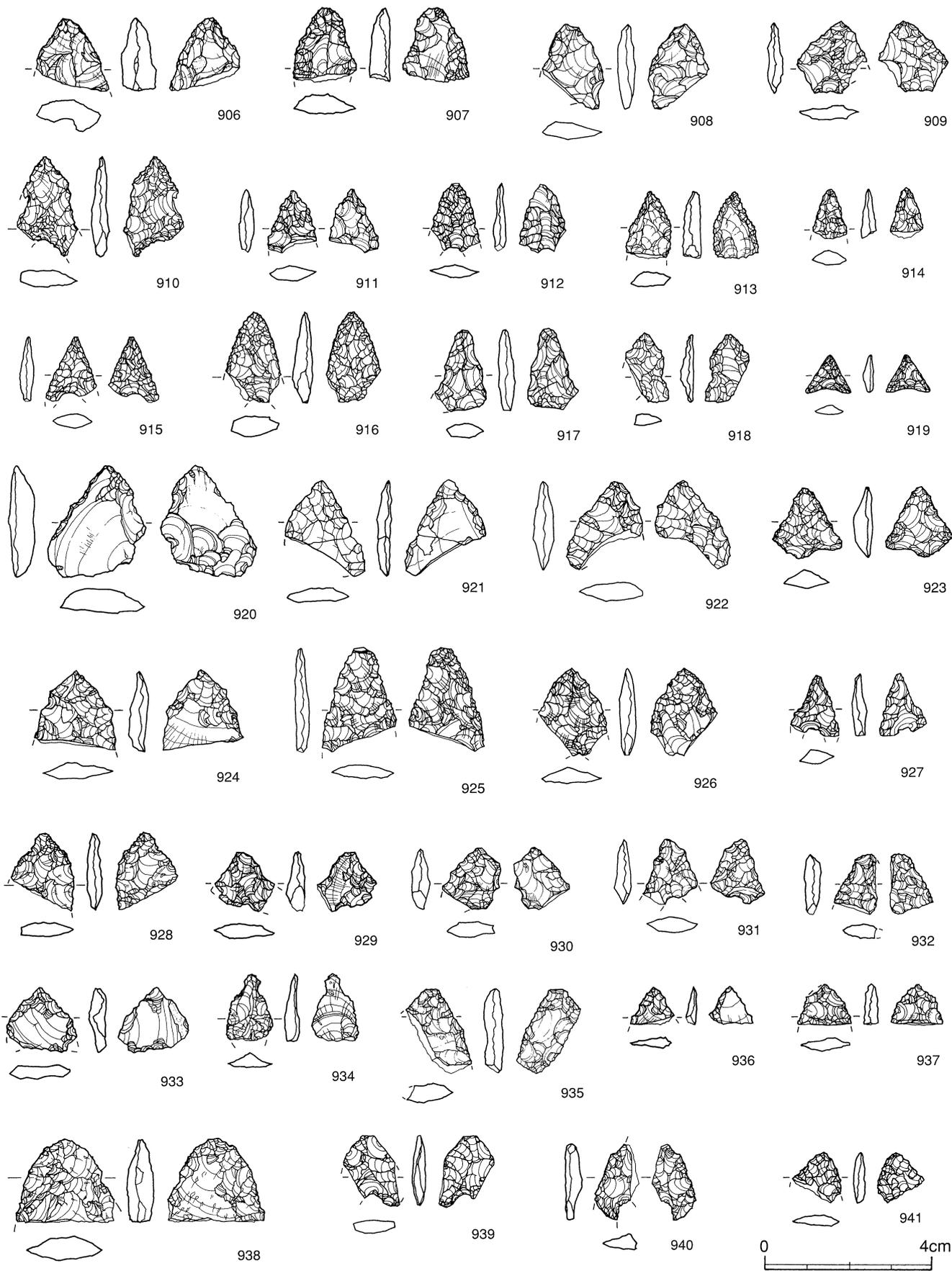
第198図 出土遺物 石器(9) 石鏃



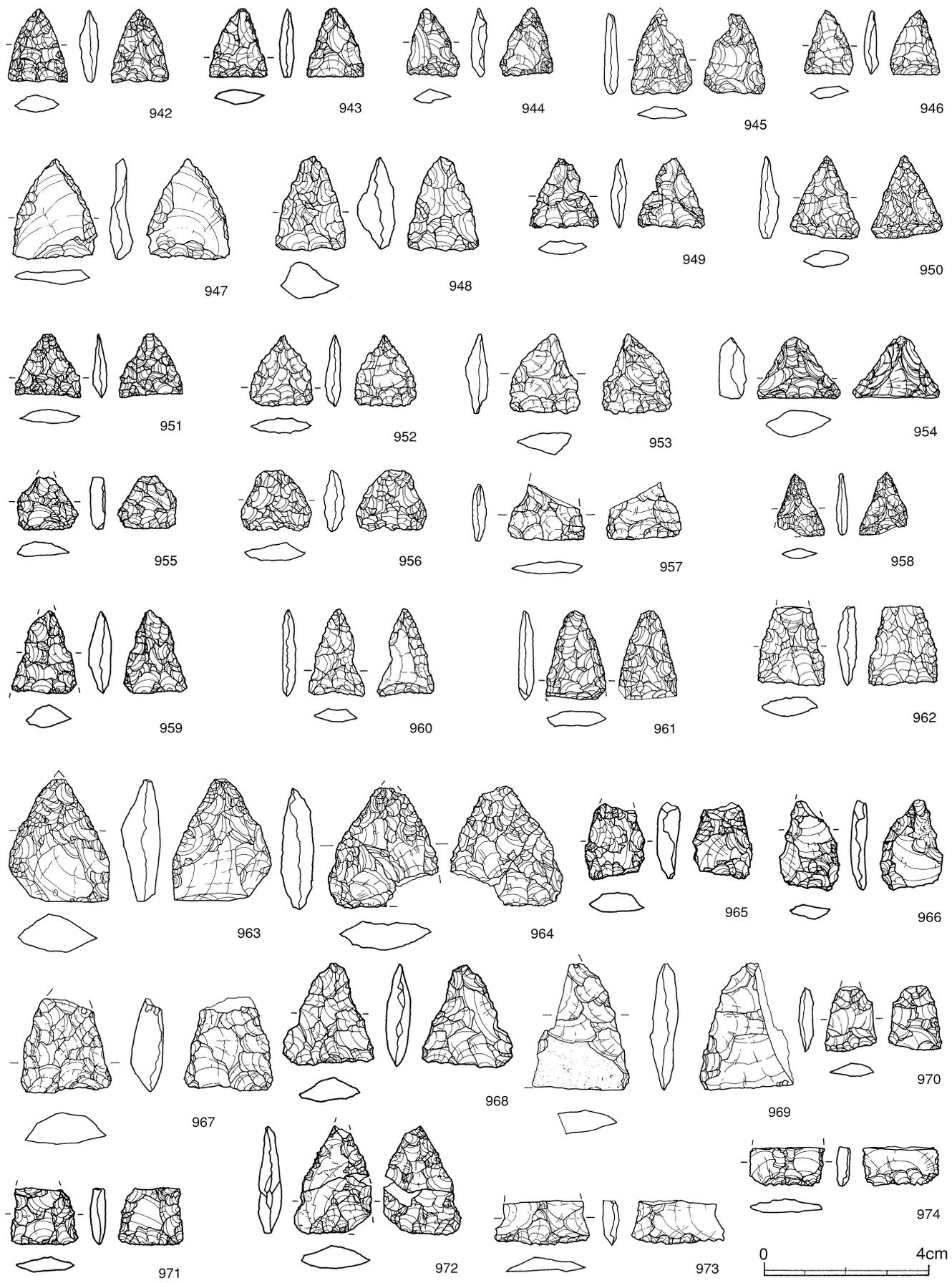
第199図 出土遺物 石器(10) 石鏃

表24 石器観察表 2

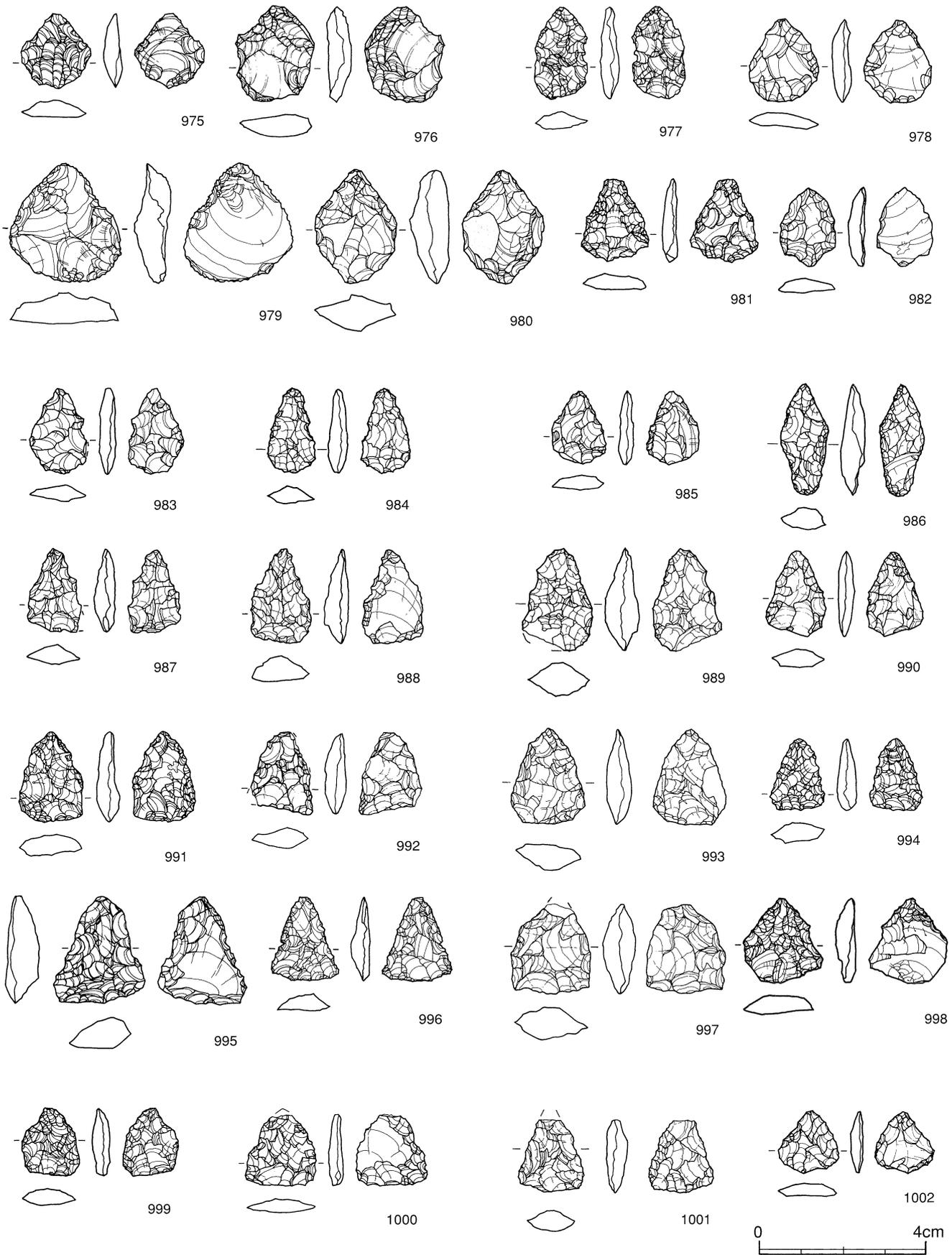
図番号	遺物番号	出土区	遺構	層位	器種	分類	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上げ番号	レベル (m)	写真図版	
								(mm)	(mm)	(mm)	(g)				
第191 図	680				石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	21.80	16.90	4.60	1.15	—	—	—	
	681 C-19				石鏃	Ⅱ a類	タンバク石	20.30	15.30	3.40	0.78	—	—	—	
	682 B-19	SD16			石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	16.10	15.60	3.60	0.53	—	—	—	
	683 D-17			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	タンバク石	14.50	7.80	2.80	0.23	6779	8.115	—	
	684 D-16			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	安山岩(サヌカイト)	19.80	15.20	4.20	0.91	3950	8.27	—	
	685 C-19			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	チャート	15.75	12.35	3.00	0.41	7650	8.55	—	
	686 C-16			Ⅱ b	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(日東系)	20.40	15.20	3.80	0.81	8499	8.38	40	
	687 C-24			Ⅳ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	20.10	16.60	5.30	1.05	12310	8.255	40	
	688					石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	21.10	15.70	3.50	0.91	—	—	40
	689 B-21	SK				石鏃	Ⅱ a類	安山岩(サヌカイト)	17.70	14.90	2.80	0.51	—	—	40
	690 D-21			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	12.70	13.50	3.35	0.41	10004	8.315	40	
	691 D-24					石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	14.30	15.35	3.45	0.54	—	—	—
	692 C-22					石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	12.60	11.60	2.60	0.24	—	—	40
	693 C-24			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	チャート	12.50	12.40	2.40	0.33	12980	8.355	—	
	694 D-16			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	11.20	14.00	3.00	0.44	6049	8.06	—	
	695 D-16			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	19.50	20.60	4.20	1.34	3798	8.265	—	
	696 D-23			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	13.40	17.90	3.45	0.53	10688	8.74	—	
	697 A-22					石鏃	Ⅱ a類	タンバク石	10.15	12.85	2.50	0.27	—	—	—
	698 B-14			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	11.35	13.75	2.50	0.32	14274	8.15	—	
	699					石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	16.30	18.20	4.50	1.00	—	—	—
	700 D-22					石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	18.50	16.30	3.80	0.78	—	—	—
	701 D-16			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	12.35	8.35	4.00	0.25	3782	8.275	—	
	702 D-20			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	7.50	5.70	2.30	0.13	4254	8.605	—	
	703 C-15			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	7.60	6.40	2.60	0.47	8109	8.065	—	
	704 C-16			Ⅲ	石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	13.95	9.90	3.30	0.55	9491	8.2	—	
	705					石鏃	Ⅱ a類	黒曜石(腰岳系)	16.60	9.90	3.65	0.62	—	—	—
	第192 図	706				石鏃	Ⅱ b類	チャート	18.90	12.00	3.00	0.55	—	—	40
		707 C-15		Ⅲ	石鏃	Ⅱ b類	安山岩(サヌカイト)	19.30	14.70	2.80	0.56	8205	8.195	40	
708 B-22					石鏃	Ⅱ b類	黒曜石(腰岳系)	17.80	11.50	3.00	0.44	—	—	—	
709 C-15			Ⅲ	石鏃	Ⅱ b類	安山岩(サヌカイト)	18.00	12.90	2.50	0.37	9008	8.195	40		
710 D-16			Ⅲ	石鏃	Ⅱ b類	黒曜石(腰岳系)	16.80	11.80	2.70	0.34	4954	8.195	40		
711 B-22			Ⅲ	石鏃	Ⅱ b類	チャート	23.50	21.50	4.20	1.51	14996	8.62	40		
712 D-22			Ⅲ	石鏃	Ⅱ b類	チャート	16.30	14.80	3.80	0.80	10321	8.605	—		
713 C-22						石鏃	Ⅱ b類	鉄石英	14.50	11.50	0.27	0.45	—	—	—
714 D-13			Ⅱ	石鏃	Ⅱ b類	黒曜石(腰岳系)	17.00	11.50	3.10	0.52	822	8.25	—		
715 D-15			Ⅲ	石鏃	Ⅱ b類	チャート	23.30	11.10	2.70	0.81	5751	7.875	—		
716 C-15			Ⅲ	石鏃	Ⅱ b類	黒曜石(腰岳系)	20.10	10.90	3.30	0.65	8219	8.14	—		
717 B-25						石鏃	Ⅱ b類	黒曜石(腰岳系)	20.30	11.10	4.20	0.88	—	—	—



第200図 出土遺物 石器(11) 石鏃



第201図 出土遺物 石器(12) 石鏃



第202図 出土遺物 石器(13) 石鏃